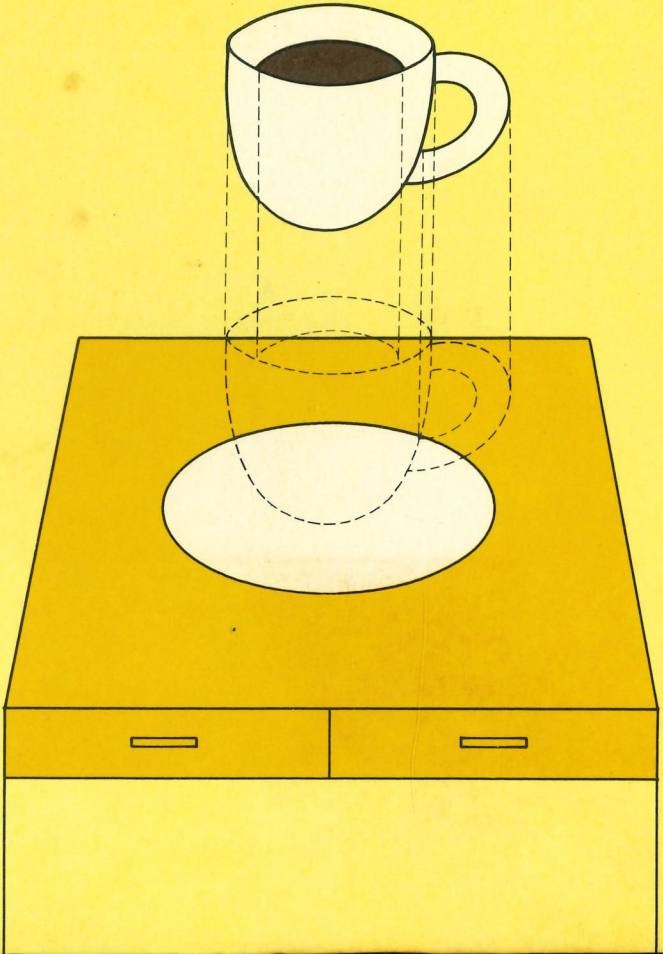
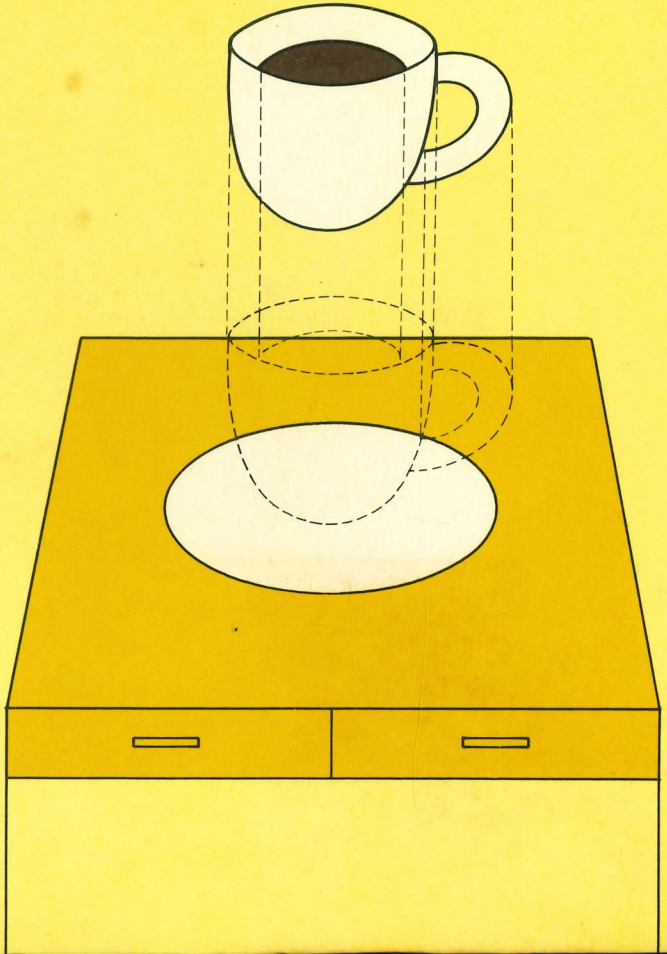
怨霊の国

小松左京

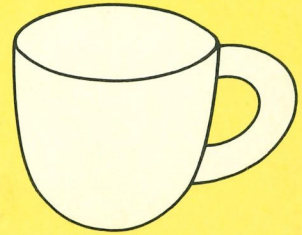


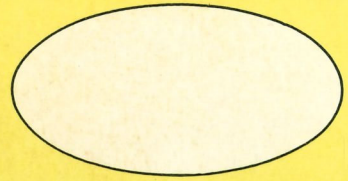
怨霊の国
小松左京



怨霊の国
小松左京

角川書店





定価　790円
0093-872114-0946(1)

新しい怪奇小説の誕生！

北　杜夫

興味の尽きることのない怪奇小説集である。怪奇といっても、まことに多彩で、夢幻のように妖しい作品もあれば、本格的に背筋に戦慄を覚えさせるものもあれば、卓抜な皮肉と風刺に思わず哄笑させられるものもある。その多くが不思議なリアリティを持っているのは、一篇々々が単なるお話にとどまらず、その背後に現実に地球上で起った神秘現象を踏まえているからだ。小松氏の知性と造形力のなせるわざで、一夜を夢中にさせられた。

最新作品集

角川書店

角川書店　定価790円　0093-872114-0946(1)

怨霊の国

小松左京

角川書店

目次

装幀　岡本信治郎

霧が晴れた時　七
保護鳥　一三
安置所の碁打ち　一五
怨霊の国　一六
写真の女　一三
女の手　一四
失神時代　一七
大混線　一九

笹の花　二〇
靴屋の小人　二三
かつがれ屋　二三
人の波　二五
幸福にも不幸にもならない手紙　二七
知恵の木の実　二八

怨霊の国

――小松左京作品集――

霧が晴れた時

連休だったが、その前に仕事がつまりすぎて疲れていたので、泊りがけの旅行はしない事にした。どうせ大勢の人たちが出かけるし、どこへ行っても満員なのは眼に見えている。

そのかわり、夏には、つみたてをしておいて、家族ぐるみどこか安く行ける地域へ、海外旅行へつれて行ってやる、という事で、子供たちは納得した。

といって、折角の青葉の季節を、家でごろごろしてばかりいるのも芸がないので、日がえりで近郊の山へハイキングに行く事にした。ここなら連休でも人がおしかけるようなこともあるまい、と見当をつけられるような穴場を知っていたのである。——そして、出かけてみると、果して私の予想はあたっていた。郊外電車で都心からはなれ、途中駅で支線にのりかえると、電車はがらあきで、最近のやたらに大型化したレジャーに殺到する人々は、こんなささやかなハイキングコースには、眼もくれないようだった。

電車はやがて、新緑に包まれた山峡へはいりこみ、そのまま乗りつづければ、終点の、あまりパッとしない温泉街につくはずだった。古くからの近郷の保養地だが、都会からあまり近すぎて

かえってとりのこされてしまっている。最近では熱泉も出なくなってしまい、いよいよさびれて、秋の紅葉と、冬の猪鍋ぐらいがようやく客をひきつけている。その街へつく、二つ手前の駅でおりて、私たちは駅のすぐ前にそびえ立つ山肌を見上げた。

「峠をこえて十五キロだね」

と、中学二年になる息子が、地図を見ながらいった。

「いい空気だこと！」と、妻は若やいだ声でいって胸をふくらませた。「若葉のにおいがするわ」

「道はけわしいの？」と小学校六年の娘がきいた。「やっぱり古い靴にすればよかったな。靴ずれができたらやだな」

「でも、あっちの運動靴は底が破れかかってたわよ」と妻。

「ゆっくり行くさ」私はいった。「鳥の声でもききながらね」

女子供をまじえて、五時間半から六時間と私はふんでいた。私自身、山歩きはひさしぶりだったから、のぼりは時間をかけるつもりだった。峠まで、小休止をふくめて二時間ちょっと、できれば峠をこえて尾根に出た所で昼食にしたい。尾根づたいに少し行った鞍部に、気持のいい草原の斜面があったはずだ。あそこで休めば、見晴らしもいい。兎や山鳥の姿も見られるだろう。

休日のせいか、それでも駅前はわりと人通りがあった。晴着を着た、このあたりの若い男女や家族連れが、これは私たちと違い、電車にのって都市へ出かけて行くのだ。山へはいって行くの

は、この駅の手前の方から、キャンプでもするのか、本格的な山支度の若者が二、三人、山歩きになれた足どりでやってきて、私たちをさっさと追いこして行った。だが、私たちはのんびりと、立ちどまって道端の草花をつんだり、お互いの姿を写真にとったりしながら、山道をたどって行った。

駅前からしばらく小さな渓流沿いにたどり、そこからつづら折れの急坂になった。稲妻形に急斜面をのぼって行く山道の曲り角ごとに、下方に見はらしがひらけてきた。

「しずかね」と、妻はあたりを見まわしながらいった。「空気がおいしいわ」

途中、ちょっと天気がくずれるかな、と思わせるような雲行きになった。杉木立が急に深まるあたりで、空が暗くなり、坂の上の方からうすく霧が吐き出されてきた。

「やっぱり冷えるわね」妻は肱にかけていたカーディガンを肩に羽おりながらつぶやいた。

「今日一日、いい天気だって、予報で言っていたのに」

その週は変な天気がつづいた。日中やたらに暑くなったかと思うと、朝晩、霜でも降りそうなほど冷えこみ、一日晴れたかと思うと、翌日一日中どしゃ降りになったりした。北の方では、雪さえ降った、という事だった。

中腹にまでのぼる間、小型トラックが一台おりてくるのに出あっただけで、誰にもすれちがわなかった。曲り角に、手ごろな岩が二つ三つころがっている所で、私たちを追いこして行った若者たちが一服していたが、私たちの姿を見かけると、勢いよく腰をあげて、また歩き出した。そ

のころはもう、谷と斜面から吐き出される霧は、彼らの姿をたちまちかくしてしまうほど濃くなっていた。

「少し休もう」と、私は岩の所でいった。「晴れていれば、ここからの見晴らしはとてもいいんだけどね」

「靖子、竜彦、これを着なさい」妻はボストンの中からスウェーターをとり出して子供たちにわたした。「降り出さないかしら。いやね」

霧はもう岩をうっすらとぬらすほど濃くなっており、谷底からさらに濃い、一寸先も見えないほどの灰色の巨大な塊がゆっくりせり上りつつあった。眼前を、こまかい水滴がくるくる舞いながら、層をつくって流れて行く。

「あと一キロちょっとで峠だよ」と、竜彦はハイキング地図を見ながらいった。「茶屋があるって書いてあるよ」

「行きましょうよ」と妻はいった。「こんな所で、濡れたりしたらいやだわ」

「まあお待ち」私は煙草を吸いながらいった。「せめて一服吸わせてくれ。急には降り出しゃしないさ」

降りはしなかったが、再び歩き出した時は、霧の水滴は眼鏡をくもらすほど大きくなり、朦朧と立ちならぶ杉木立の幹はくろぐろとぬれ、葉先には水滴がたまってしたたるほどになっていた。——この低い山で、こんな濃い霧に出あったのは、はじめての事だった。学生時分から何度もの

ぼり、ほとんどあらゆる季節を知っているつもりだったが。

ぬれた岩角をふみしめて、三十分ほどのぼると、前方の霧の底から、ぼんやりと人家の軒の形があらわれた。近づくにつれ、古風な「お休み処」の旗が、軒先からぐっしょりぬれて、たれさがっているのが見えた。茶屋は私の学生時分のままだった。もちろん代はかわったろうが、草葺きの屋根や、横手の崖から清水を導く筧の有様など、昔のままだった。氷の小旗はまだ出ていなかったが、かわりに色あせたラムネ、サイダーの小旗が軒下にさがり、カタン糸や焼酎の琺瑯びきの小看板など、もう二十年以上そのままだった。

「やれやれ……」妻は肩で息をしながら茶屋の軒先へたたずんだ。「降らなかったけど、服がぐしょぐしょだわ」

「なにか飲みたい」と靖子がはしゃいだ声でいった。「ここでお弁当？」

「霧がはれたら、この先に景色のいい所がある」と私は時計を見ながらいった。「様子を見て、そちらへ行ってみよう。まだ早いから」

思ったより早くついて、まだ正午すこし前だった。——私たちは、軒下の縁台に荷物をおき、あけっぱなしのガラス戸から奥をのぞきこんだ。

「ごめんください」と妻は声をかけた。「こんにちは」

「かまどがあるぞ」と竜彦は叫んで奥へとびこんで行った。「あったまろう」

「これ、竜彦」と私はいった。「ごめんください」

「留守みたいね」と妻はいった。

「どこか近所へ出かけて行ったんだろう」と私はこたえた。「すぐかえってくるさ」

はいった所の土間に、粗末な椅子とテーブルが三組ばかりならび、奥は台所を経て裏へつきぬけていた。昔とちがった所は、テーブルをおいた場所の一隅に、白木のカウンターらしきものができ、キャラメルやガムのほかに、おでんの鍋がおかれ、ぐつぐつ湯気をたてている所だった。昔はほんとうに、お茶と飲み物ぐらいしかなかったのだ。

「おでん、おいしそうね」と妻は鼻をひくつかせた。「一ついただこうかしら?」

「店の人がかえってくるまでお待ち」と私はいった。「どこへ行ったのかな」

土間のつづきが上り框になって、障子があきっぱなしになっており、奥の間が見わたせた。囲炉裏が切ってあって自在鉤に鉄瓶がさがり、火が燃えている。煤けた繭玉や藁苞に入れたむかごらしいものが、まっ黒な天井からさがり、古ぼけた八角時計が、かったり、かったりと時を刻んでいる。囲炉裏端には、色さめた座布団がおかれ、盆の上に漬物と箸、大ぶりのひびだらけの湯呑みから、ゆっくり湯気が上っている。主はついほんの四、五分前、囲炉裏端を立ったらしい。

「ママ、こっちへ来て服をかわかさない?」

と靖子はいった。

「あら!」と妻は、鼻をひくつかせた。「何だか焦げくさい」

何かが吹きこぼれる音がするのと、子供たちが叫びを上げるのと同時だった。妻は、女の反射

でかまどの所にとんで行き、かかっていた煮豆の鍋の蓋を切った。子供たちはとびちった灰にまみれて、ペッペッと唾をはいていた。

「雑巾雑巾!」と妻は叫んだ。「鍋をおろさなくっちゃ……」

大さわぎして鍋を火からはずしているうちに、今度は囲炉裏の鉄瓶がふきこぼれた。妻は靴をはいたまま、膝でにじって座敷に上りこみ、鉄瓶の蓋をずらせた。

「ほんとに田舎の人ってのんきね」妻は汗のにじんだ顔を手の甲でぬぐって息をついた。

「煮物を火にかけたまま、どこへ行っちまったのかしら」

私たちは、それからテーブルの所へかえって来て腰をおろし、なおしばらく休んだ。二十分ちかくも休んだろうか。——しかし、店の人はかえってこなかった。

「変ねえ」と妻は、ぐつぐつ煮えるおでんを横目で見ながらいった。「ずいぶん長い事お店をほったらかしたまま、るすにするのね」

「〝マリー・セレスト〟みたいだね」と竜彦はいった。「ねえ、パパ」

「なに、それ?」と妻は頬杖をついたまま聞きかえした。「女優の名前?」

「ちがうよ」私は苦笑した。「有名な、海洋事件に出てくる船の名さ」

「どんな事件?」と靖子はきいた。「怪談?」

「似たようなものだな。——マリー・セレスト号は、一八七二年、ポルトガル沖で、帆をまき上げたまま漂流しているのを発見された。見つけた船の船員がのりこんでみると、積荷にも異常

ないし、乱闘のあともないのに、船長と、その妻と、小さな娘と、七人の乗組員の姿が船内から消えうせていた。航海日誌もそのまま、子供用ベッドはつい今まで子供がねかされていたようであり、士官室では、食事の支度ができていて、コーヒー茶碗からまだ湯気がたちのぼっていた。——船長はじめ乗組員は、たった今、大急ぎで、何も彼もやりかけのまま、船を立ち去ったように見えた」

「それで？」と靖子はきいた。「その人たち見つかったの？」

「見つからなかった。——なぜそんなにあわただしく船を退去したか、その理由もとうとうわからないままだった。百年たった今でも、未だに謎とされている」

「気持悪い話……」妻は眉をしかめて、店の中を見わたした。「その話、本当？」

「ああ、本当だ。似たような話は、まだいくらでもある。〝シーバード号事件〟とか〝ジェームス・チェスター号事件〟とか……一九三〇年には、カナダのエスキモー部落の住民三十人が、墓の下の先祖の遺体もろとも、理由もなしに消え失せた事がある……」

「霧が晴れかかってきたよ」と竜彦がいった。「出かける？」

「あたし、やっぱりおでんが欲しいわ」と妻は鍋の方に首をのばした。「お店の人がいなくても、お金をおいとけばいいでしょう」

「私も食べる」と靖子はいった。

「食いしん坊め」私は立ち上りながら笑った。「先へ行って、いい場所を見つけてくる。ほら、

霧の切れ目にスロープが見えるだろう。——あの中の岩のある所かどこかで、弁当にしよう」

妻はつんであった皿をとりあげて、おでんの鍋へむかった。私と竜彦は先に店を出た。出しなに私は、土間の隅、上り框の横に、ナップザックが二つおかれているのを見つけた。明らかに、さっき、一足先にのぼっていった学生たちのものだった。すると、学生たちは私たちより先にその茶店に立ちより、荷物をおろし、そのまま恐らく店の主と一しょにどこかへ行ってしまったのだ。しかし、私はその事を妻子にいわなかった。なぜいわなかったのか、自分でも理由はわからない。

茶店の眼と鼻の先にひろがっているスロープに足をふみ入れたとたん、霧は急速にはれわたった。まったくあっという間に、ぬぐったように消え失せ、青空がひろがり、日がうらうらと当り、鳥が鳴き出した。

「よかった！」と竜彦ははずんだ声でいった。「うそみたいだね」

「そこの岩の所にしよう」と私はいった。

私は息子と岩に腰をおろし、山腹をかけのぼってくるさわやかな空気を吸い、水筒の茶をのんだ。空は、わずかな白雲をのこして、すばらしい快晴になった。

「いい気持だ。こうこなくっちゃ」と私はいった。「腹がへったな。母さんたちをよんでおいで。おでんはいいかげんにしろって」

竜彦は草原を茶屋の方にかけのぼって行った。霧が晴れると、茶屋はほんの四、五百メートル

の所に見えていた。息子の姿が茶屋の方に小さくなって行くのを横目で見ながら、私はゆっくり煙草を吸った。

丁度一本吸いおわったころ、茶屋から人影が出てくるのが見えた。竜彦一人だった。彼は切迫した様子でかけよってくると、青い顔をして、息を切らせて私の前にたった。

「いない」と竜彦はかすれた声でいった。「母さんも靖子も……いなくなっちまっている」

「なに？」

そんな馬鹿な！　という言葉をのみこんで、私も茶屋にとってかえした。茶屋から岩の所へ来て、まだ十分そこそこしかたっていない。その間、霧が晴れたので、茶屋はずっと眼の隅に見えていた。茶屋から誰か出てくれば、かならず視野にはいるはずだ。

だが、茶屋の中には、竜彦のいった通り、妻と娘の姿はなかった。鉄瓶はたぎり、おでんはぐつぐつたぎっていたが、しんとして人の気配はない。テーブルの上におでんの皿が二つ、一つには大根が、もう一つには竹輪とかじりかけの卵がのこっている。靖子の赤い登山帽と妻のカーディガン、それに弁当を入れたボストンバッグが、私たちが出た時の位置のままおかれてある。

「おーい！」私はよんだ。「啓子！　靖子！　どこにいるんだ？」

返事はなかった。裏へぬけて見ると、すぐ崖だった。しかしふみすべらせたあともない。

「どうする？」竜彦が青い顔できいた。「どこへ行っちまったんだろう？」

「少し待とう」と私はいった。「トイレかも知れない」

十分待ち、二十分待ち、三十分待った。——まわりをうろうろ歩いてみた。しかし、誰もあらわれなかった。妻も娘も、学生も、店の主も……。

「警察にたのもう」とうとう私はいった。

奥の間に古ぼけた手まわし式の電話があった。ハンドルをやけにまわし、待ちつづけたが、誰も出なかった。古ぼけた柱時計はかったり、かったり時をきざみ、長針は茶屋についてからもう一まわりしていた。

「どうする？」と竜彦はまたきいた。

私たちは山道をかけおりた。二時間かかった道を四、五十分でくだったろう。途中、民家があったので、電話がないかとたちよったが、からっぽだった。来しなにたしかに餌をついばんでいた鶏の姿もない。

麓の駅前町へおりるころから、またうすく霧がたちこめはじめた。霧の中からあらわれた街並みは、ひっそりとして、全然人の気配がなかった。休日でみんなどこかへ……あるいは近所へ、出かけてしまったのだ、と私は思いこみたかった。店や民家に首をつっこみ、大声をかけたが誰も出てこなかった。電話のダイヤルをまわしても発信音をくりかえすばかりで返事はなく、駐在所にとびこんで、警察電話をガチャガチャやっても本署が出ない。

駅の前に、ライトバンが一台とまって、エンジンがかけっぱなし、ウインカーがつきっぱなしになっていた。私はその傍にたって、腹の底から冷えきって行くのを感じながら、途方にくれて

あたりを見まわした。

「父さん……」別の方へ走って行った竜彦がまっさおな顔でかえってきた。「この先の線路の途中に、電車がとまってる。駅でもないのに……鉄橋へ半分かかったままとまってるんだ。ドアがあいて、中には誰もいない。運転手も、車掌も、お客も……」

「街には誰もいないか？」

「誰も……」竜彦は額の冷汗をぐいとぬぐって唇をふるわせた。「犬も猫も牛も……鶏小屋さえからっぽなんだよ。二、三軒はいってみたんだけど、テレビがつけっぱなしだった。——何もうつってないんだ」

「車にのれ」私はライトバンのドアをあけながらいった。「とにかく、街へ出てみるんだ」

「ねえ、父さん……」竜彦は思いつめたようにいった。「ぼく、思うんだけど……」

私はあわただしくドアをしめると、ギアをガリガリいわせながら車を発進させた。——あわてて、ハンドブレーキをかけたまま走らせてしまい、セカンドにいれるとエンストした。免許証は半年前切れたまま更新しておらず、ハンドルはもう一年以上にぎった事がなかった。

「ねえ、父さん……」竜彦は、車を走らせている私の顔をのぞきこむようにしていった。

「ひょっとしたら……ぼく、考えるんだけど……」

「何を考えてるんだ？」私は突慳貪（つっけんどん）にききかえした。

「うん、あのね……突飛な考えかも知れないけど……ひょっとしたら……ぼくらをのこして、

街全体が、マリー・セレストになったんじゃないかな……。マリー・セレストは、乗っていたわずかな人間が消えただけでしょう。だけど、ああいう事が小人数でも起るんなら、うんと大勢の人間に対しても起る可能性があるわけでしょう？」

「馬鹿をいうな！」私はどなった。「お前は、SFだの、変な読み物だのの読みすぎだ」

だが、私の中に、恐ろしい想像が——まったく突拍子もない想像が、ゆっくり頭をもたげはじめるのは、どうしようもない事だった。もし——そんな馬鹿な話はありっこないにせよ、もし……私たち親子をのこして、地球全体が、マリー・セレスト号のようになってしまったとしたら……。

車をやみ雲に走らせながら、私はカー・ラジオのボタンをおした。波のような雑音だけで、ダイヤルをいくらまわしても、音楽もニュースもはいってこなかった。霧はまた濃くなりはじめ、その中から、対行車の姿があらわれてこないか、と、眼を皿のようにしながら、私は車を走らせつづけた。この霧が晴れたら……と私は思った。……もう少しあたりの様子がはっきりするだろう。しかし、私にとって、霧が晴れるのが恐ろしかった。霧が晴れわたって、眼前に遠く、街の姿がうかび上る時が、どうしようもなく、たとえようもなく恐ろしかった。霧は果てしなくたちこめ、私は汗にまみれながら、アクセルをふみこみつづけた。

保護鳥

1

「ジャパン？」

フロントの、頭に毛の一本もない、灰色の頬ひげをはやした老人が、宿帳のサインを見て、おどろいたように声をはりあげた。

「日本から来られたんですか？」

「ジャパン」という言葉が、せまいロビーにひびきわたったとたんに、そこに居あわせたいくつかの顔が、いっせいにこちらをむいた。——古ぼけた椅子にすわって、雑談しながら地酒をのんでいた、村人たちだった。

日本？——日本から——というささやきが、さざなみのように人々の間をわたって行き、彼はやや狼狽して、あいまいな微笑をうかべた。

古びた木の椅子をぎしぎし鳴らしながら、天井につかえそうな巨漢が立ち上り、ゆっくり近づ

いてくると、カイゼル髭に縁なし眼鏡をかけた顔をほころばせ、毛むくじゃらの大きな手を、ぐっとつき出した。

「日本からようこそ！」

巨漢は満面に笑みをうかべて、吼えるようにいった。——ひどい訛りのある、それだけに日本人にはききとりやすい英語だった。

「村長のヴィクトルです。——遠い日本から、よくこの村へお出でくださった。ニッポンはいかがですかな？」

「ええ、まあ……あいかわらずです」思いもかけぬ大仰な歓迎の身ぶりにとまどって、彼は手をさし出すのも忘れて微笑した。「私、中橋といいます」

「ワシリーです」と村長の横から、小さな顔がつき出されていった。

「ユロです……」

「ジョルジオです」

次から次へと顔がつき出され、手がさし出され、彼はざらざらしたのや、しめっぽいのや、冷たいのや、あついのや、さまざまの感触を掌に感じ、指の骨にするどい痛みを感じた。——彼のまわりをとりかこんだいくつもの顔は、一様に好意のあふれる笑いをうかべ、そして熱心な調子で口々に同じ問いをくりかえした。

「ニッポンはどうです？——ニッポンはどうなってますか？」

こんな外国の寒村で——それもこの土地にくるまでは名も知らなかった村で、これほど故国の事に関心をもたれているとは想像もしていなかったので、どう応対していいのか咄嗟には測りかね、まあまあです、とか、ええ、なんとかやってます、とか、あたりさわりのない事を、あたりさわりのない表現でくりかえしているうちに、額にじっとり汗がにじんできた。

「そういえば……」と、ワシリーと名のった小柄な人物は、心配そうな口調で体をのり出した。「この間、何かで読んだら、最近あなたのお国は、公害がひどいそうですが……ニッポンは大丈夫ですか？」

「ええ——まだ……大丈夫です」彼は「公害日本」の名が、こんな異国の僻村にまでひびいているのか、と思って苦笑した。

「で——どうなんでしょう？　数はへっていませんか？」

「何の数ですか？」

「もちろん、ニッポンの……」

彼は少し面くらったが、口ごもりながらこたえた。

「ええ、別に……公害で滅るところまでは行っていません。ふえ方はとまったようですが……」

おお！——というような嘆声が、彼をとりかこんだ人々の間からもれた。ワシリーはますます熱心に、その浅黒い、ひからびたような顔をつき出した。

「で……今、どのくらいいます、ニッポンは……」

「そうですね……」なんとなく、話の調子がおかしい事を感じながら、彼は外国語の数詞の位取りを急いで頭の中で反芻しつつつぶやいた。「一億……をちょっとこえたぐらいでしょうか？」

ワシリーのうすい茶色の眼が大きく見ひらかれ、ついで寄り目をつくるようにせばめられた。それから助けを求めるように、仲間の方を困惑した表情で見かえった。

たちまち彼にわからない土地言葉で、はげしい、せわしないやりとりがはじまった。手をふりまわし、肩をすくめ、眉をしかめて首をふり——要するに、信じられない、という事と、何かのまちがいだ、という事と、ワシリーのきき方が悪い、という意味の言葉が、くりかえし話され、確認されているらしかった。

そして、そのうち、村長と名のる男が何か決定的な事を、断定的な口調でいい、男たちは、ああなるほど、とか、そうだそうだ、とかいった表情で首をふった。

「ノー、日本の方、わしたちのおたずねしているのは、人口（ポピュレーション）ではありません」と村長のヴィクトルは、彼の方をふりむいていった。「わしたちがおききしたいのは——ニッポンの数です」

「ニッポンの数？」

彼は、村長が〝ナンバー・オブ・ニッポンズ〟と、複数をつかったのに気がついたものの、まだ質問の意味をつかみかねて、首をひねっていた。「あなた、日本の方なんでしょう？」ユロという老人は、たまりかねたように彼の鼻先に指をつき出した。「本当に日本の方なんですかな？——それだったら、ニッポンの事を……」

まあまあ、というように村長はユロの体を押しもどした。

「わしたちは、鳥のニッポンの事をおたずねしているのです」と、村長は辛抱づよい調子でいった。「タキ鳥の事です」

タキ鳥？——彼はますますめんくらった。七面鳥（ターキー）の事か？

「日本にしかいない鳥……日本の国の名が、正式の学名になっている鳥——ほら、あれです。ニッポニア・ニッポン……」

村長がフロントの後ろを指さした。

——あ、と彼は思った。

キーボックスの横手に、大きなカラー写真が額にいれてかけてあった。青空を背景に、白い、奇妙な鳥が松の枝にとまっていた。一瞥すると鷺（さぎ）のように見えるが、長い嘴（くちばし）がゆるく曲っており、眼から口へかけて、鮮やかな朱色に染まっている。

「朱鷺（とき）ですね」と、彼はやっと合点がいってつぶやいた。

「そう、そのトキ鳥（バード）です！」ジョルジオという肥った男が、うれしそうに叫んだ。「ニッポン鷺（ロン）です。私たち、とてもあの鳥に関心もっています。とりわけ、日本の人々が、あの絶滅しかけた美しい鳥を、まもっているやり方に興味をもっています。何しろ、国際保護鳥ですからね。そのニッポンは……トキは、今何羽いますか？」

「さあ……最近はどのくらいになっているでしょう？」

腋の下に冷や汗がにじむのを感じながら、彼は口ごもった。

「私たちの所にはいっている最新情報では、現在、佐渡島に野生のものが九羽、フライングケージに二羽が飼育されているそうです」とユロがいった。「で——どうなんでしょう？　人工飼育の二羽は、雌雄らしいという事ですが……受精卵をうんだでしょうか？」

「野生の九羽は、その後数がへりませんか？——雛がうまれた形跡はありませんか？」とワシリー。

「さあさあ、みんな質問はあとにして、——客人は、疲れてるから、一度お部屋へお通ししなきゃ……」と、フロントの老人が見かねたように口をはさんだ。

「これは失礼しました」と村長のヴィクトルが、羽根飾りのついたチロリアンハットをとって、頭をさげた。「わしたちは、日本のトキ鳥とその保護に、特別に関心をもっているので……というのも、実はこの村でも、アルプ鳥という、絶滅しかけている種類を、村ぐるみ保護しているからです。日本のトキの保護は、わしたちに非常に参考になります……」

2

部屋にはいると、あらためて汗がどっとふき出して、全身がぐっしょりぬれた。

日本の事を、日本人より外国人の方がよく知っているケースは、時々ある。が——人口千にみたぬ、こんな山間の僻村で、日本の絶滅しかかっている渉禽の一種が、これほどよく知られ、こ

れほど強く関心をもたれているとは、予想もしなかった。

朱鷺が珍鳥である事ぐらいは、さすがに知っていた。——が、それも時たま、新聞で見流す程度の知識であって、この鳥に、「ニッポン」という正式学名がついている事など、全然知らなかった。特別天然記念物である事は、うろおぼえにおぼえたが、「国際保護鳥」に指定されている事など、まるで知らなかった。まして、それがどこに住んでいて、現在何羽のこっているかという事など——ふつうの日本人なぞ、知りもしないだろう。日本文化の特質は「自然との親和」にある、といわれながら、およそ現代日本人ほど、「自然鑑賞」や「自然保護」について関心のうすい先進国民はすくない。自国の山野にすむ動植物のうち、珍しいもの、保護指定や天然記念物指定をうけているものを、きちんと知っている人間が、果して一億国民の中にどれくらいいるか。いや「文化人」といわれる人の中にどのくらいいるか。「都市」という、自然と断絶された人工砂漠にすむ現代日本人は、そんなものの存在に関心さえ持たなくなりつつある……。

そういった事を、異国の寒村で、中橋はつくづく思い知らされた。日本からやって来ながら、その日本にすむ世界的珍鳥について——しかも、その保護が、国際的に注目されている「特別天然記念物」について、彼はほとんど知る事がなかったのだ。いや、この寒村へたまたまやってくるまで、そういった自国内の世界的に貴重な存在について、関心をもった事さえなかった。にもかかわらず、日本を数万キロはなれた異国の、それも山間僻地の住民が、日本人よりよほど強い関心をもち、日本人よりよほどくわしく現状を知っている——。

その事を思うと、また体が火照ってきて、独り居の照れかくしのように、ベッドサイドの本に手がのびた。——表紙などは簡素な、パンフレット程度のもので、どうやら私製と思われたが、題は「世界の珍鳥、珍獣」とでも訳すのだろうか。内容は英語で、各国文献の複写や、タイプライターでうたれたものを、そのまま写真版にしたようなのもある。朱鷺の項をさがすと、中ほどに写真や図版もいれてかなりの分量を占めていた。

Nipponia Nippon——鶴鷺目トキ科、一属一種。ウスリー、中国東北、朝鮮、中国北部、日本に分布し、日本には江戸時代各地に分布していたが、明治維新以後、幕府大名の御狩場の解禁と、猟銃の普及とともに急速に数を減じ、昭和九年に天然記念物に指定されたが密猟があとをたたず、特に第二次大戦後は、松林の伐採、食糧不足による捕食、さらに農薬使用による水田小動物類の汚染、死滅により激減、昭和二十七年「特別天然記念物」に指定され、昭和三十五年に「国際保護鳥」に指定されたが、そのころは石川県能登において滅亡寸前に達し、佐渡もわずか四羽になってしまった。その後、昭和四十二年、本州のトキはついに絶滅（最後の一羽はとらえられ、佐渡へうつされた）、佐渡ではその後何とか数がふえ、二羽が人工飼育、九羽が両津市の黒滝国有林を中心に棲息している……。

日本のトキは、こんなに貴重な鳥だったのか——彼はパンフレットをふせ、天井を見つめながら思った。——その貴重な鳥が、こんなに数がすくなくなってしまったのか……たった十一羽とは！

それにしても、どうしてこんな事を、日本人である自分が今まで知らなかったのだろう？——日本人が、自国のこんな大切な事を、外国の辺境で、外国人から教えられるなんて、いい恥さらしだ。ずっと昔、映画で見たトキの美しい姿を思い出そうとして、彼は眼をつぶった。——だが、もともとあまり関心のなかった事でもあるし、ほとんど記憶にのこっていなかった。ただ、ひろげた羽の、美しい淡紅色と、その色が「とき色」という言葉の語源になっている、という解説だけが思い出された。眼をもう一度ひらくと、足の方向の壁に、写真入りの額がさがっているのが眼についた。夕暮れらしく、ひどく光線の状態が悪い上に、ひどい機械でとった素人写真らしく、雲やら山やら森やらわからない黒々としたものが画面の下半分を占め、そこから何か大きな、鳥らしい形のものがとび立とうとしているのだが、ぶれてもいるし、逆光でもあり、ディテイルなどまるでわからなかった。かろうじて、それが鳥らしいという事がわかったのは、下に英語とドイツ語とフランス語で、大きな文字がはいっていたからだった。

アルプ鳥を守ろう！

彼はベッドの上に起き上り、眼をこらしてその写真をもう一度見た。——よくみると、鋭い、まがった嘴のようなものも見え、丸い、頭らしいものも見えた。だが、そう思って見るから、そう見えるだけで、近づいてみると、いよいよバックの黒い雲と見わけがつかなくなってしまう。

ひどい写真だな——と、彼は額の前に立って、鼻の頭にしわを寄せた。引き伸ばし技術もめちゃくちゃで、粒子荒れもひどい。

それにしても、アルプ鳥って、きいた事がないが、いったいどんな鳥なんだろう、と思って、ベッドの上からもう一度パンフレットをひろい上げ、ページをめくってみたが、その鳥についての記載はのっていなかった。

3

翌日眼がさめると、陽はすでに高くのぼっていた。——そろそろ旅疲れが出てきたのか、全身が妙に倦怠るい。時刻は十時をすぎているのに、ひどい寝不足のように、目蓋がはれぼったく、頭に膜がかかっているみたいだった。

ベッドの上に上半身を起し、ぼんやりしていると、昨夜、妙に寝苦しく、夜中にうとうとしては何回も眼がさめた事が思い出された。旅慣れてはいるし、部屋がかわったぐらいで寝つかれないという事はない。

夕食の時、村人に顔をあわすのは、すこし照れくさいと思っていたが、台所のような食堂へおりて行ってみると、村人はみんなかえってしまい、泊り客も彼以外一人もなく、フロントにいた主と、啞かと思うぐらい口をきかない初老の女性の、たった三人だった。主は食事をすませたのか、小さなテーブルのむこうの隅にすわってパイプをふかすばかりで、しわだらけの、口もとの

凹んだ頑丈一点ばりの女性——どう見ても、細君ではなかった——は、口をへの字にむすんだまま、だまって皿とフォークナイフをおき、台所からごった煮の鍋をはこんできて、油じみたスプーンで二すくいほど皿につぎ、黒パンの塊をすりきれたテーブルクロスの上にじかにおき、ラベルのはってない、ワインの壜をおき、そのあとぷいと台所へすっこんだまま、最後まで出てこなかった。——彼はだまって食い、だまって飲み、宿の主もだまったまま、パイプをふかしつづけた。食物をかむのをやめると、老人が、すばりと音をたてて煙を吸いこむ音と、火皿がじいじい鳴る音がきこえた。そして、まっくらな外では、夜の底をごうごうと風がわたって行くのがきこえた。風が強いというのでもない、半開きの小窓のわきの吊りランプの火も、まるでまたたかないのだが、耳をすますと、空のずっと上の方で、ごうごうと風が鳴っており、森の梢がたえ間なくざわざわと音をたてつづけているのだった。どこかで谷川でも鳴っているのか、と、食事の手を休め、じっときき入ってみたが、やはり鳴っているのは空だった。

みばが悪いのに、ごった煮はすてきにうまかったが、そのおかえしのように、赤葡萄酒が滅法ひどかった。重くて、ドロドロで、ケチャップでものんでいるみたいだったが、それでも彼はとうとう一壜あけてしまった。——その葡萄酒がよくなかったのかも知れない。酔いが重苦しく、顔がはれたみたいで、のみおわるころにはこめかみがびんびんいたんだ。彼がよろよろと立ち上ると、主人はかすれた声で、

「おやすみ（グッド・ナイト）」

といった。dをいやにはっきり発音し、あとでわかったのだが、主人は十五年前に流れてきて、土地言葉はいまだに不自由で、村人ともほとんど英語で話す事が多いのだった。

部屋にかえると、いたむ頭をおさえて、すぐベッドにひっくりかえったが、重苦しい眠りがすぐ頭の鉢をしめつけてきたのに、すぐ眼がさめ、枕もとのエビアン水をのみ、また横になり、意識がうすれ、また眼がさめた。酔いはすぐおさまって行ったのに、ごうごう鳴る風の音、森のざわめきが耳について、眠りは浅かった。——夜半、突然寒気を感じて、ぶるっとふるえながら起き上り、やっとズボンをぬいで毛布をひっかぶったが、今度は変に眼が冴えた。

何の気なしに首筋へ手をやると、なぜか鳥肌だっていた。

毛布をしっかり体にまといつけ、蝦のように体をまるめたが、全身をおそう戦慄はやまなかった。——風邪をひいたか、という考えがふと頭をかすめたが、そのあとすぐ、ふるえが体内の熱のせいでもなく、室内の寒気のせいでもない事に気がついた。

ごうごうと夜空をゆする風音の底に、何かの叫びがまじっていた。

きき耳をたてると、かえって消えてしまう。——だが眼を閉じ、眠ろうとすると、またきこえてくる。怪鳥の叫びとも、野獣の遠吠えとも、また気の狂った女の叫びともとれるような、かんだかい、笛のような声が吹きあれる風の音にまじって、かすかに、とぎれとぎれにわたってくる。どこかずっと遠くから……。森と丘の彼方から……。思わず身をかたくすると、その声は、この世のものでない怒りに狂い、何かを呪い、のど笛を吹ききらんばかりに風に叫びたてている声だ、

という事が、はっきりわかるような気がした。

たまりかねて、彼はとび起き、窓にかけよった。外へむかって押しあけると、一つまみほどの風が吹きこんで、小さくしたランプの火をふっと吹き消した。早い速度で動いて行く雲が、月の姿をかくし、またあらわした。空は風音にみち、眼下ではまっ黒な森が狂ったように梢をふりみだしながら、どうどうと鳴っていたが、宿のあたりは不思議におだやかで、空気もほとんど動かず、寒くもなかった。そしてあの声はもういくら耳をすましてもきこえなかった。

階段をおりて行こうとすると、ロビーの方から英語の話し声がきこえた。——その中に、「あの日本人」という言葉がはさまるのをきいて、一段目にかけた足が思わずとまった。

「……おかしいじゃないか……」とワシリーの声がいった。「あれほどの世界的珍鳥を……自分の国の名が、属名と種名両方についている鳥の事を知らない日本人がいるなんて——。日本という国は、国民にそういう教育をしないんだろうか？　政府はどういうつもりだろう？」「知らせない、というのが、かえって保護に役にたつのかも知れん」と、宿の主がつぶやくようにいった。「考えてごらん、ワシリー、どんなものでも——それが珍しければ珍しいほど——人間に知られたらおしまいだ。そっとしておかないとほろびる、といっても、物見高い観光客はおしかける。テレビや新聞がいれかわりたちかわり取材にくる……。マスコミの連中なんて、本当に何かをまもろうという気のある人間なんて、数えるほどしかいないんだからな。とにかく、がなりたてて、名を売ればいいんだから……。〝ほろび行く名鳥！〟なんて記事の写真をとるために、生物をお

びやかす。〝何とかをまもれ！〟とわめきたてて、〝世論〟とやらを捲き起して、かえって無責任な弥次馬を動員する。そして、あげくの果て、ほろんでしまったら、〝政府が悪い、社会が悪い〟さ。——自分たちの、慎重さを欠いたキャンペーンが、かえって事態を悪化させた事については何の反省もない。連中は常に正義の味方で、そのわめきは常に正しい。これをこういう具合に報道したらどうなるか、という事に対する反省や責任感はまるでないんだから……」

「カルロスの新聞ぎらいは少し病的だよ」とユロの声がした。「そりゃ、お前さんが前にひどい目にあった事はわかるよ。しかしだね……」

「だが、そっとしておいて、あまりひろく知らせない、というのは、いい考えかも知れない……」とジョルジオの、訛りの強い英語がわりこんだ。「世界的に珍しいという事が、パッとひろまったら、かならず大勢の客がおしかける。物見高い弥次馬に、本当の値打ちがわかっているわけはない。それに大勢こられると、とても取締りきれるものじゃない。珍しくて、絶滅しかかっている、とわかれば、その稀少価値目当てに、こっそりつかまえようとする奴が出てくる……」

彼は階段の二段目に足をおろした。ロビーの顔がいっせいにふり仰いだ。

「お早う、日本の方……」ワシリーが愛想よく声をかけた。「よく眠れましたか？」

「風の音が耳について……」彼はあいさつしながら、すみのテーブルに腰をおろした。「それに——夜中に森の方で、何か不思議な声がしたような気がして……」

「あちらの森ですかな？」と主人は戸口の方をさした。「それじゃ——それがアルプですよ」

「わしもきいたよ」とユロがいった。

「アルプは、風の吹く晩には、よく夜鳴きするんです。それに繁殖期だから……」とジョルジオがいった。「なんだか気味の悪い声でしょう？」

昨夜の口をきかない女が、台所からあらわれて、だまってコーヒーとパンをおいていった。

「狼の遠吠えか、人の叫びみたいにきこえました」彼はコーヒーにたっぷりクリームをつぎながらうなずいた。「あまりいい気持じゃなかった」

「昔は、悪魔の叫びだと思われたそうです」

ジョルジオは不意に声をおとしていった。

「それで……昔の連中は、あの鳥を眼の仇のように殺して——鉄砲をつかうようになってから、それこそみるみるうちに……」

「ジョルジオ！」とワシリーが口をはさんだ。「その話はよせ！」

「アルプ鳥は、あんな声で鳴くんですか？」彼はクロワッサンをコーヒーにひたしながらきいた。「いったい、どんな鳥ですか？」

村人たちが、すばやくお互いに視線をかわしたのを、彼は雰囲気で感じとっていた。——宿の主人は、だまってキーボックスの横手を指した。

朱鷺の写真と反対側の壁に、黒ずんだ写真がかかっていた。黒い、森らしいものが一面にひろがっている中に、変にもやもやした、鳥らしいものの姿が二つ見えた。

「よくわかりませんね」彼は眉をしかめた。「部屋にもそれらしい写真がありましたけど——あれもはっきりうつっていなかった」

「朱鷺と同じで、ひどく人間をこわがるんです……」とワシリーは弁解するようにいった。「とくに、カメラをいやがります。シャッターの音なんて、百メートルも先からききつけて……」

「本当に、一昔前までは、やたらに殺したんです。——害鳥だと思われて……」ジョルジオはテーブルを見つめて、低くつぶやいた。

「本当は——大した害じゃなかったのです。こちらから、挑発をしたり、彼らのすみかへ近づかなければ、人間にだって害をくわえなかった。それを……誰いうとなく、害鳥だといい出して……」

突然、ジョルジオはすすり泣きはじめた。——中橋は、おどろいて食事の手をとめた。まるまっちい手で、顔をおおってしゃくり上げるジョルジオを、村人たちは、いたましげな、深刻な目つきでながめていた。

「人間というものは、残忍な、罪深いものです……」とユロは首をふりながらつぶやいた。「自分たちが絶対強いという優越感をもつと、その優越感を確認するためという理由だけで、弱い生き物を殺し、何かの理由で相手に恐怖や嫌悪を抱くと、自分で自分の憎しみをかきたてて殺し……」

「その鳥は、今、何羽ぐらいのこっているんですか?」と中橋はきいた。

「二番だが……」と宿の主は、仲間の方を妙に気にしながらいった。「雛がうまれればいいんだがね」

「見られますか?」

「そうだね……」ワシリーも他の連中を気にするようにまわりを見まわした。「棲息地へ行ってみなさるかね?」

4

景色がすばらしくいい、ときいて来たのだが、低い丘陵と、森がつづいているだけの、陰鬱な地方にすぎなかった。旅籠はこのあたりで一番高い丘の頂にあったので、見はらしはよかった。——だが、そこから眺める景色は、赤茶けた丘と、黝ずんだ森が、灰色の地平まで、はてしなく起伏しながらつづいているだけだった。

その起伏の間に、一塊り、二塊りと人家がかたまり、その壁の白と瓦の赤が、かろうじて暗鬱な光景に彩りをそえていた。——村は灰色の重苦しい雲の下にしずまりかえり、子供の声や家畜の鳴き声もきこえない。おさえつけるような陰気な空の下には、鳥一羽とばず、ながめていると、おのずと眉がひそみ、頭痛でも催してきそうなうっとうしい風景だった。

丘をおりて行くと、谷風が耳もとで鳴りはじめた。肌寒い湿気がそこここの窪地からたちこめ、

植物はいじけて地にしがみつくか、うそうそしく傲岸に、人間を拒否するようにそびえたつか、その二つの種類だけで中間がない。丘をおり、また別の丘を上り、谷間の道をうねうねとたどり、冷たく、まっ暗な森をぬけると、平たい丘の頂に出た。——そこから先は、同じぐらいの高さで起伏がつづき、その果てに森を背景にして窪地が見えた。窪地には丈高い葦がはえ、沼がにぶく水銀色に光っていた。

丘の下に小さい川がながれ、灌木と草むらが流れにそってのび、柵と、粗末な木の入口があらわれた。入口の脇に、「立入禁止、鳥獣保護特別地域」の看板が立ち、別の板に「アルプ鳥棲息地域」と書かれてあった。

柵のむこうの灌木の影から、毛皮の胴衣をつけた鬚だらけの巨漢が音もたてずにあらわれた。肩に猟銃をつるしていた。

「やあ、ヨハンネス……」とワシリーは声をかけた。

二人は中橋にわからない土地の言葉で話しはじめた。話しながら、二人は度々ずっとむこうの窪地の方をふりかえった。——やがて巨漢はまた音もなく灌木のむこうへ消えた。

「今日は、一番しか見かけんそうです」とワシリーは、柵にもたれて小手をかざした。「もう一組が、巣についているといいのだが……。どこかへ行ってしまうような事はないと思うが……」

「あのあたりが棲息地ですか？」彼は二キロ以上はなれている窪地の方に瞳をこらした。

「あの近くまで行けますか？」

「いや、だめです。今繁殖期ですから……」ワシリーは強く首をふった。「あの沼の後ろの森が営巣地になっています。アルプはとても神経質ですから……。日本のトキと同じで、おびえさすと、すぐ巣を放棄してしまいます」

「国が保護しているんですか？」

「国？」ワシリーは唇を歪めた。「国は関係ありません。——これは私たちの仕事です」

「じゃ、この村が？」彼は少しおどろいて、ワシリーの顔を見た。「村の予算でやっているんですか？」

「アルプを絶滅においこんだのは、私たちの祖父や父、そしてかつての私たちですから……」ワシリーは、腰の革ケースから大きな双眼鏡をとり出しながらいった。「アルプを保護するのは私たちの負い目です……。あなたたちの国のトキと同じで、アルプはもうおそらく、世界中でここだけにしかのこっていません。昔はあちこちにいたらしいですが……今、この村からアルプが消えたら、全世界からアルプは消えてしまうのです」

「見えますか？」中橋は双眼鏡をのぞいているワシリーにきいた。「アルプはいますか？」

ワシリーは答えず、双眼鏡をじっと窪地へむけていた。——その態度には、「聖なるもの」を仰ぎ見るような敬虔さがあった。

「アルプは……貴重な存在です」ワシリーは双眼鏡を眼におしあてたまま、一種恍惚とした口調で溜息をつくようにつぶやいた。「もうここにしかいない。アルプは、この村のほこりであり、

——良心の呵責です。あの鳥を保護し、ふやす事は、私たちの〝希望〟でもあり、〝祈り〟でもあります。ほんとに……今度こそうまくふえてくれたら……」

「アルプは繁殖力が弱いんですか？」

「繁殖期には、特別の餌がいるんです。それがこのごろめっきりすくなくなって……」

「アルプって……どんな鳥なんですか？」

ワシリーの体が、ふとこわばった。

「大きな鳥です……」ワシリーの声は妙にかすれた。「大きくて……黒くて……実に不思議な……」

「私は博物学は全然知らないんですが——鶴や鷺の類ですか？　それとも……」

「私もよく知らないのです——」ワシリーはかすかに震える声でいった。「私も……実は、近くで見た事はないのです。村の連中でも、実物を見たものはほとんどいません……ヨハンネスは、一度近くで見たといいますが……」

それほど珍しい鳥なのか、と彼はあらためて、アルプの餌場らしい沼の方に眼をこらした。——右手は反射的にジャンパーのポケットから、いつももち歩いているハーフサイズのカメラをとり出していた。

おし殺したような鋭い叫びと、遊底（スライド）がガチャリと鳴る音がまぢかでしたのは、ファインダーをのぞくのと同時だった。ワシリーの、痩（や）せた、冷たい手が手首をおさえていた。

「撮影はいけません」とワシリーは強い調子でいった。

「そんな……」いつの間にかかえってきて眼の前にライフルをつきつけているヨハンネスを見ながら、彼は呆れたようにつぶやいた。「別にアルプをとるわけじゃありません。まわりの景色をとるだけです。それに……第一、こんなカメラで、ここからじゃ……」

「だめです」ワシリーは冷やかにいった。「繁殖期間中は、一切の撮影は禁止です。たとえこのまわりでも……」

5

三日目の午後、彼はさりげない顔つきで、ナップザックを肩に、アルプ保護区域とははずれた方向へむかって歩いて行った。——二日の間に、大体見当をつけておいた丘にのぼると、はたしてあの保護区域の沼地が遠くに見おろせた。距離にして、四キロ以上はなれているから、監視も気がつくまい、と彼は思った。あえて禁止をおかす気はなかったのだが、風景撮影と自分にいいきかせながら、やはり、あわよくば、という気持だった。ナップザックから三脚をとり出してくみたて、一眼レフをすえると、一応まわりを見まわして五百ミリ望遠レンズをとりつけ、沼の方をのぞいた。

陰気な草と、立ち枯れの木の白骨のような幹と、背後の黒い森、にぶく光る水以外、何も見えなかった。しかし、辛抱強くのぞいていると、草むらの一角がはげしく動いているのが眼につい

た。彼は緊張して、レリーズボタンに拇指の腹をあてた。——何かが草をわけて動いていた。黒い頭が見えかくれした。アルプだ！　と彼は心の中で叫んだ。いや……ひょっとすると、ヨハンネスという監視人かも知れない。しかし、いかに慣れていても、警戒心がつよいというアルプの餌場の、あんな近くまで近よるだろうか？

そのうち、草の間から、大きな翼のようなものがちらと見えた。彼は夢中でシャッターを押しつづけた。そのうちとび上るかも知れない、という期待を抱きながら……。

やがてフィルムが切れた。装塡しなおそうと、裏蓋をはずした時、ふと傍の草むらの中からつき出ている、小さな顔と、光る眼に気がついた。——どきっとして、ほほえみかけると、子供の顔はすぐ草むらの中に消えた。

すぐ片づけた方がいいかと思ったが、ファインダーをのぞいてみると、まだ黒いものが動いているので、思いきって度胸をすえた。あいかわらずの、泣き出しそうな天気へもってきて、陽がかたむきかけたので、彼はトライXをさがして装塡した。——まったくこの村の連中はかわっている、と再びレンズをのぞきこみながら彼は思った。彼のあうかぎりの村民は、誰も彼も、アルプという鳥の事に夢中だった。夢中といっても、「熱狂的」というわけではない、ちょっと見ただけではわからないが、それは外部の連中には理解できない、この村の内部だけの、特別な「信仰」の対象になっているようだった。その「信仰」には、どこか秘密めかした、ほの暗いところがあって、「よそ者」の視線は、どうしてもその暗がりまでとどかない。きいていると、村民た

ちの会話の中で、アルプ鳥の事は、あきずくりかえされる重要なテーマになっており、彼が旅行者だとわかると、誰も彼もがアルプというこの村だけにいる鳥の事を知っているかとたずねる。にもかかわらず、その鳥の写真は碌なものはないし、資料もない、その鳥がどんな鳥か、という事については、一切外部の人間に知らせたがらない。——この村には、世界に類例のない、こんな珍しい鳥がいるぞ、という事をほこりに思い外部の人間にむかって誇示したがりながら、その鳥の「実態」については、外部の者にはなんだかんだといって教えない。それは村の「内面性」を形づくる、この村だけの「秘密」なのだった。

アルプは、この村「だけ」のものであり、その珍奇さ、すばらしさは、この村の人間だけが知っておいて胸に秘め、ひそかに讃嘆すべきものであり、その保護を熱くなってお互いの胸にちかいあうものなのだった。この、まったく「何もない」——あきれるほどに単調で何の特徴もない村に、「アルプがいる」という事のすばらしさの核心に、外部の人間を立ち入らせてはならないのだ。「アルプがいる」事のすばらしさは誇示し、喧伝しなければならないが、アルプそのものに近づく権利は、よそ者にあたえてはならない。それはこの村の人間だけが、——アルプと歴史的にからみあい、今、全村あげてその保護を誓った村民だけが、保有している「特権」なのだ……。「アルプ」——この名をきいた事もない、正体不明の鳥は、すでにこの村の「聖物」だった。アルプの名を、口にする時、そして、アルプの「具合」を声をひそめて語りあう時に、彼らの顔にあらわれる敬虔さ、あんなすばらしい鳥、珍しい鳥は、世界のどこをさがしたっているもん

か！　と熱くなって語る時の熱烈さ、そしてその熱心な、讃美の言葉をきいている人々の眼差しにあらわれる恍惚の表情……アルプが、あのままほろびてしまったらどうしよう、と語りあう時の、はげしい不安の表情……そういったものは、アルプという奇妙な鳥が、この村の人々にとって、いかに重大な存在か、という事を如実にものがたっていた。

ただ、その会話が、まるで具体性を欠いているのが、外部の人間には何とも奇妙な感じだった。きいていると「鳥」の話をしているのではなくて、何か「超越的存在」についてあきず信仰告白をくりかえしているようにきこえるのだった。——よそ者の彼が、その鳥は、どんな姿で、どんな特徴をもっているか、とか、どんな餌を食べるか、とか、即物的な事をきくと、きまってはぐらかされるか、冷たい回答拒否に出あうのだった。そのくりかえされる抽象的な讃美の下に、何かしらおかしなものがかくされているようだった。——奇妙といえば、これほどアルプの事に夢中になっていながら、実際にその姿を見た連中が、ほとんどいないという事も妙な話だった……。

そんな事を考えながら、ファインダーをのぞいているうちに、彼の背後には、いつの間にか、足音をしのばせて宿屋の常連がそろっていた。声をかけられるまで気がつかなかった彼は、文字通りとび上った。

「ナカハシさん……」村長のヴィクトルは、重苦しい声でいった。「この間、ワシリーが申し上げたでしょう。保護地の撮影は禁止になっています……」

「しかし……ここは保護地から、四キロ以上はなれているんですよ」彼はしどろもどろになって弁解した。「いくらアルプが敏感だからといって——ここから撮るぶんには……」

「何キロはなれていようと同じです。それをいいだせば、ここまでなら大丈夫だろう、こうすれば大丈夫だろう、という事になります。その上あの鳥は——のぞかれているという事を何キロも先から感づくのです。本当にアルプを大事にする気があるなら、——あの鳥の存在の貴重さを、本当に敬虔な気持で認めるなら、そっと遠くから見守るだけで満足するはずです。あなたは、トキを守っている国の方だから、と思って大目に見ていましたが、あなたもやっぱり、野卑な、尚いものが本当にわかっていない、俗な弥次馬にすぎなかったのは残念です……」

「しかし……私は……」

「景色をとっていたといわれるのですか？　五百ミリ望遠で？——日本のカメラとレンズは優秀ですね。レンズは沼をむいています。フィルムは全部没収します。それがこの村の規則ですから……」

「悪いが、あの部屋を今夜あけてくれませんかね？」と宿の主人が、空を見ながらいった。「今夜から満員になっちまうんでね」

「そんな——契約は明日までのはずだ」

「でも、今夜から大事な会合で、全部つかうんだ」と主人は空をむいたままいった。

ジョルジオ、ユロ、ワシリー——みんな最初あった時とはうってかわった冷やかな顔つきで彼を見つめていた。よそ者、出て行け、とその顔はいっているようだった。

友人から借りたボロ車で宿を出る時は、もう日が暮れかかっていた。宿へかえるまで、敵意にみちた村人にぞろぞろつきまとわれ、宿へかえりつくと、もう荷物は全部車にほうりこまれている、という手まわしのよさだった。——その理不尽さに腹もたったが、まわりの視線にいたたまれなくなって、彼はそのまま部屋にもどらず、車を発進させ、白い、冷やかな視線の中を夢中で車を走らせた。一番近い街まで四十キロの夜道をとばすのには、もう少し慎重であるべきだったのだが……。

村を出はずれて、谷川をわたる橋の所に柵が立ち「工事中、迂回」の標示が出ていた。矢印の方向に迂回路をとると、道は森の中にはいりこんだ。その時はもう、日はとっぷりくれていた。——十五キロも走った所で、どういうわけか、ガソリンがきれた。まだタンクに半分以上のこっているはずだったのに……。

しばらく途方にくれていたが、すぐ近くにあった道標を見て、懐中電燈をたよりに村へひきかえす事にした。森の中はまっ暗で、夜にはいるといつも吹き出す風が、梢をざわざわと鳴らしはじめた。——次の曲り角の道標をあやうく見すごすところだったので、彼は懐中電燈を注意して照らした。

それにしても、どうしてあんなに神経質なのだろう——と、彼は歩きながら考えた。——少し異常すぎはしないか？　規則はわかるが、四キロもはなれた所からの撮影が、鳥をおびやかすとも思えない。それに、規則を破ったぐらいで、実害はないのに、どうして急にむりやり村を追い出さなくてはならないんだ？　何かあの村には——あのアルプというきいた事もない鳥については、腑におちないところがある。ひょっとしたら……彼は、ふとその事に気がついて愕然とした。ひょっとしたら……もうあのアルプという鳥は、絶滅してしまったのではないか？　自分たちの乱獲で、絶滅させてしまってから、「良心の呵責」にたえかねて、まるでまだ鳥が残存しているごとく、一切の「儀式」をつくり上げ、消滅した鳥を「神格化」しているのではないか？　だから外部の者は絶対あの保護区域内に近づけず、写真をとられるのを極度に警戒しているのではないか？

それは、ある部分にはぴたりとはまる考え方だった。——彼はその考えに興奮しながら歩きつづけたが、しかし、考えているうちにそれだけでは腑におちないところもある事に気がつきはじめた。その考えがまちがっている、という事を決定的にさとらされたのは、ごくまぢかに、あの叫びを——この村にとまった三日間、夜毎空に鳴る風の音にまじってはこばれてきた、あのものすごい叫びをきいた時だった。

彼はぎょっとして、思わず懐中電燈をとりおとしかけた。——ふと気がつくと、眼前ににぶく沼の水面が光っていた。地形から見て、彼はあの保護区域の真中、アルプのすむ窪地の中央に立っている事は明らかだった。まわりに丈余の葦がおいしげり、正面に黒々と森がそびえていた。

恐ろしい叫びは、前よりもっとまぢかに、長々とひびいた。——それは鳥の声というよりも、

この世に存在しない、地獄の野獣の、あるいは、この世のものでない恐ろしい呪詛に妖鬼に変ってしまった女の、気もくるわんばかりの怒りの叫びのようだった。その声をきくと、足がすくんで、膝ががくがくふるえた。そして——その時になって、突然、何も彼もが一べんにむすびついた。橋の工事、「迂回路」、切れるはずがないのになくなったガソリン、おあつらえむきのようにあった道標の、奇妙な新しさ……。

なぜ、自分をわざわざ、こんなやり方で、「立入禁止」区域の中心部へさそいこんだのか、という疑問に対して、すぐおそろしい記憶がはねかえってきた。……アルプは、住みかに近づかなければ害はくわえない、とジョルジオはいった。という事は——「繁殖期には、特殊な餌がいる」とユロはいった。「その餌が、このごろへったので、繁殖しない」とも……。

まさか！——そんなひどい事が！……彼は全身が縮み上るような思いを味わいながら、心の中で叫んだ。——思いすごしだ。そうにきまってる……とにかくここを出なきゃ……。

もときた道をひきかえそうと懐中電燈をふった時、彼は又もや、心臓の凍るようなショックをうけた。すぐ背後の闇の中に、光芒が一瞬、白い女の顔をうかび上らせた。顔だけで、あとは闇の中にとけこんでいた。そして次の瞬間、バサッ、とはげしい羽音がして、懐中電燈は手からはねとばされ、沼の方に水音がして、あたりは完全な闇になった。そのたった一瞬の間に、女の顔は、彼の眼底に灼きついた。朱をさしたように血走った眼、鉛色の皮膚、両端が反り上った紫色の唇から、ニュッとむき出した鋭い二本の犬歯……気が狂ったような笑いをうかべて、女の顔は

彼のすぐ背後、ほんの二、三メートルの所にうかび、すぐ消えた。

どうしてこんな所に、女が——ひょっとすると狂人か……そう思って立ちすくんでいると、またあの叫びがきこえた。顔に吹きつけるほどの近さ、たった今、女の顔のうういていたあたりから、なまぐさい、血と唾と腸の一部がとびちるような、恐ろしい叫びが……。相かわらず、狂ったような呪詛の調子はこめられていたものの、今度はそこに、毒々しい歓喜の色がこめられていた。なにか、いいものを見つけた、という歓喜が……そして牙がガチガチふれあうような、あからさまな飢餓が……。つづいて彼の背後から、もう一つ別の叫びがあがり、前面の叫びとよびあった。バサッ、バサッ、という大きな羽ばたきの音と、草をかきわける、ガサリ、ガサリ、という音が近づいてきた。

今度こそ、彼は何も彼も理解できた。——それこそ信じられない事だが、アルプという鳥の存在を信じないわけには行かなかった。魂が宙にとぶ恐怖の中で、ずっと昔よんだ、西欧の伝説の事が思い出され、それが今、前後からせまりつつある恐ろしい存在とむすびついた。アルプ……アルピ……ハアピ……まさか！　こんなものが、実際に存在するなんて……信じられない！

だが、バサッ、バサッ、という羽音と、ガサリ、ガサリと草をふむ音は、もうすぐ彼の背後にせまり、眼前の闇にいるそれは、またもやあの不吉な、狂ったような叫びを上げ、それにこたえるように、もう二つの叫びが、今度は森の奥からひびいてきた。

安置所の碁打ち

眼がさめた時、なんとなくいやな感じだった。——気分が悪い。胸がやけるような、頭がしめつけられるような、のどがひりつくような、なんとも形容のできない不快な気持だ。妙に体が冷えているみたいで、といって別に寒けがするわけでもない。

寝床の上に起き上ってみても、いやな気分は消えなかった。体がふわっと浮いているような感じで、変に現実感がない。夢遊病にでもかかったような、なんともいえずおかしな感じなのである。

日頃心臓があまりよくない上に、この所、深酒と不摂生がつづいている。前夜もむしあつさにめいる気分をひきたてるつもりで、行きつけのバーで、常日頃になく熱燗(あつかん)などに手を出したのが、気のめいるのはなおらずに、盃ばかりが進んでしまい、へべれけになって車に押しこまれたのはおぼえているが、どこをどうまわったか、御帰館は午前様で、再び意識をとりもどした時は、政所(まんどころ)の文句を背にききながら、門口でしたたか吐いていた。それからどうやって服をぬいだものやら、寝床にはいこんだものやら、夜中にやけるようにのどがかわいて、おい、水！　とどなった

のはおぼえているが、飲んだかどうか、皆目記憶にない。——だから、頭もあがらぬ重症の宿酔、というのならまだ話がわかる。だが、気分だけはそれに似ているものの、じっとすわっていても、頭が痛むわけでもなければ、胸がむかつくわけでもない。ただ、朦朧として、なんとなくいやな感じがする、としかいいようのない状態だった。

枕をながめてすわってばかりいても仕方がないので、起き上って階下へおりた。壁や天井が遠くにあるみたいで、階段をふんでもふみごたえがない。おれは起きているな、起き上って、今、階段をゆっくりゆっくりおりているんだ、といちいち自分にいいきかせないと、やっている事がわからないほど、まわりのすべてに手ごたえがない感じだった。

子供二人を送り出して、妻は茶の間でアイロンかけをやっていた。——茶の間の入口にぼんやりつったって、彼は長い間、女房の腕の往復をながめていた。アイロンの吐き出す蒸気が溜息のようにきこえ、うつむいた肩がうすくなって、髪に少し白いものがまじりかけている。知らない間にずいぶんふけたな、と思いながら、単調な動作を見るとはなしに見ていると、妻はやっと彼の姿に気がついて顔をあげた。

「あら、お起きになったんですか？」

「うむ……」と、彼は気のない返事をした。

「さっきからずっと、そこに立っていらしたの？」

「まあな……」

「いやですよ。声ぐらいかけてくだされればいいのに……」

妻はアイロンを消して、つみあげた洗濯物をかたづけはじめた。

「今、何時ごろだ？」

「もうじき十時ですよ——どうせ今日は、お休みになるんでしょう？　ゆうべのあの酔い方じゃ、今朝はとてもお頭が上らないだろうと思って……」

「いつもの時間におこしたのか？」

「一応はね——でも、死んだように眠ってらしって、とてもお起きになりそうにないので……」

そういって妻は、まだ部屋の入口につったっている彼を、呆れたように見上げた。

「いつまでも立っていらっしゃらないで、おすわりになったら？——まあ！　なんてひどい顔色……。土気色ですよ。鏡を見てごらんなさい」

いわれるままに彼は横をふりかえった。廊下のつき当りに洗面所があり、電燈がついていた。洗面台の上にある鏡のはずれに、青黒いともなんともいえない、気味悪い色の顔がうつっていた。どろんと膜がかかったような生気のない眼が、青粘土のような顔の中からのぞいている。

「まったくひどい……」と彼はつぶやいた。

いつの間に茶の間にふみこんで、いつの間に食台の前に坐ったのかわからなかった。——気がついた時は、いつもの席にすわって、ぼんやり庭をながめていた。小糠雨がじとじとふりそそぎ、植えこみの霧島や青木が、あざやかな緑色に光っていた。それをながめていても、どうしても心

わるい、現実離脱感がつきまといつづけた。

「お茶を上りますか？」

と妻が台所からきいた。

「うむ……」

「御気分は？」

「よくもないが……悪くもない……」

「御飯、あがれますか？——宿酔でしょう？」

「食べてみよう」

「本当に？——またもどしても知りませんよ」

「食べてみる」

「水屋にあるお薬、召し上ったら？」

「いや……いらん」

「本当にもう、お年なんですからね。あんな無茶飲みなさったら、体がもちませんよ」

熱い番茶が来た。——彼の好きな、達磨を一筆描きした厚手の楽焼の湯呑みにたっぷりつがれた茶の湯気を、ふかぶかと吸いこんでみた。が、たしかにいれたての番茶の香りはするのに、その香りをかぐ感動がちっとも起らない。一口ふくんでみる。——熱いのだが、熱い！　というあの感じがしない。冷たいのも同然で、その中に少し、刺すような刺戟があるだけだ。やけどしそ

うにあつい湯呑みを持つ手が、冷え冷えとした感じだ。

小鍋につくりなおした三ツ葉とおとし卵の味噌汁、納豆にのり、かまぼこの朝食を食べても、それぞれの食物はその味がたしかにするのに、ただそれだけで、歯ごたえのない雲を食べているような気持だった。——彼の好きな、針生姜をたっぷりちらし、よく冷やした古漬けのかくやが出たので、いれなおした焙じ茶で茶漬けをしてみたが、これも何の感激もなかった。

「よくあがったわね……」と妻が感心したように膳の上を見まわした。「御気分は？　大丈夫？」

「うむ、まあ……」と彼はぼそっとつぶやいた。「あんまりよくもないが……さりとて悪くもない」

「お薬はあがりましたか？」

「欲しくない。それより……」彼は庭をながめながら、ちょっと考えた。「風呂をわかしてくれ。いつもより、うんと熱いめに……」

「お風呂ですって？」妻は眼をまるくした。「体に悪いわ！——少し横におなりになったら？」

「いいからわかせ」彼は朝刊をひろげながらいった。「今朝、会社に休むと電話したか？」

「しておきました……」妻は立ちながらいった。「本当に、もう少し体を大事になさらないと……」

朝刊をひろげても、灰色の虫が一面にはっているように見えるだけだった。アメリカがどうかし、中国がどうかして、イギリスで何か大した事でない事件が起って、内閣がどうで、株価がど

うで、輸出がどうで、交通事故が何とかして、梅雨時のお惣菜には何がよくて、駅員の無礼さはヒューマニズムに反するとかいう。——それがどうした、と、彼は半透明の幕のかかった頭の隅で、別にいらだつでもなく、ぼんやりと思う。そして、視線は再びじとじとと庭先に降りそそぐ淫雨にもどってしまう。

風呂がわいたので、はいってみたが、どうにもおかしな感じだった。——湯はあつくて、皮膚はぴりぴりしたが、熱さを感じている皮膚と彼自身との間に、どうにも理由のわからない齟齬感がある——湯から上っても、体の中は冷え冷えとしていた。バスタオルをもってきて、背中にかけた妻が、びっくりしたように叫んだ。

「まあいやだ！——こんな冷たい体をして！　中にはいらなかったんですか？」

「体温計をもっといで……」彼は湯気に半分くもった鏡にうつる、土気色の顔をのぞきながらいった。

「やっぱり！——熱があるんでしょう？」

「——体温計じゃ感じない。寒暖計だ……」

そういった時には、もう彼は何が起ったかわかっていた。——裸のまま寒暖計を腋にはさみ、しばらくして妻に見せた。

「二十七度……」妻はあきれたように彼の顔を見た。「ちゃんとはさんでいなかったのね？　もう一度はかりなおさなきゃ……」

彼は首をふった。——もうその時には、何が起ったかはっきりわかっていた。

「はかりなおしても同じ事だ……」と、彼はぼそぼそつぶやいた。「心臓がとまった……」

「心臓が？」妻はぎょっとしたように上体をそらした。「まさか……そんな事が……」

「ほんとうだ。——さわってみろ」彼は手首を指先でふれながらいった。「胸に耳をあててごらん」

妻は、うすく肋のういた彼の左胸に照れくさそうに耳をつけ、しばらくきいていた。

「ほんとだ。——とまってるわ」女房はつぶやいた。「どうしましょう。すぐ病院へ行かなきゃ」

「行ってもむだだろう」彼は浴衣をはおりながら首をふった。「考えてみたら、起きた時からずうっととまってたんだ」

「それじゃ——あなた死んでるの？」

妻は気味悪そうに体をひいた。「でも——どうして生きてるの？」

「わからん——とにかく、こうやって意識はしゃんとしているんだから、一一〇番へ電話するような、みっともない事はやめてくれ」

「渡辺先生に電話します」と妻は茶の間の方へ行きながらいった。「とにかくどういう事なのか、はっきり見ていただかなけりゃ……」

妻が電話をかけている間、彼はまた茶の間にすわって、雨にぬれる庭をながめていた。——隣のぶち猫が、青木の下をゆっくり横切り、紫陽花の葉にまっさおな雨蛙がいて、白いのどをひくひくさせており、やがてびっくりするような声で鳴きはじめた。柘植や黒松は、そろそろまた剪定をやらなければならないな、それに少し下ばえをぬかなければ、などと思いながら、一向に「意欲」というものが湧いてこない。所在なさにまた新聞をひらき、囲碁欄に眼を通し、それから部屋の隅の碁盤をもち出した。いつも簡単に動かせる碁盤がいやに重く、そうだ、心臓がとまってるんだから、無理をしてはいかん、と自分にいいきかせ、畳の上をひっぱるように縁先に持ち出し、棋譜をみながら石をならべた。その時になって、爪の色がかわりはじめている事に気がついた。

「先生、すぐいらっしゃいます」と背後で妻がいった。「そんな事してないで、病人らしく寝ていらしたら？」

「寝たくない……」彼は石をおきながらいった。「それに、おれは病人じゃない。いうなれば死人だ」

間もなく童顔の渡辺医師が、庭先からあらわれた。——もう二十年来の付合いで、彼の碁敵だ。

「おや、やってますな」白髪にとりまかれた色つやのいい顔をほころばせて、渡辺医師は碁盤のそばにあがりこんだ。「奥さんが大変心配しておられたが、元気そうじゃないですか。また宿酔でしょう。よくきく注射を一本、うってあげましょう」

「でも先生、心臓が……」と妻がいった。

「おかしいですか？——どれどれ」

医師はなれた手つきで手首をとった。かたい指先が手首の皮膚をあちこちまさぐり、それからちょっと首をひねって、聴診器をとり出し、浴衣の胸をひろげて筒先をあてがった。

「とまってますな」と医師は不思議そうにつぶやいた。「いつからです？」

「はっきりしませんが、起きるちょっと前からららしいです」と彼は答えた。「二時間ぐらい前からじゃないでしょうか」

「先生——宅は助からないんでしょうか？」

「助からないって、奥さん、二時間も前に心臓がとまったんじゃ、もう手のほどこしようがありません。お宅の御主人は、もう医学的にはちゃんと死んでるんです」

そういってから、医師は妙な顔をして彼を見つめた。

「心臓がとまって——なぜ、そんなに起きたり、口をきいたりしていられるんです？」

「知りません。心臓がとまったって、別に死なないきゃならない、という義理はないでしょう」

「そういう病人——いや、死人は困るんだなあ……」渡辺医師は首をふりながら聴診器をはずし、もう一度彼の手をとって、甲の方をながめた。「ほら、もうチアノーゼが起りはじめている。——ちょっとあーんして……」

医師は彼の舌の奥をのぞきこみ、それからまぶたをひっくりかえしてライトをあて、また首を

ひねった。

「瞳孔反射だってほとんどない……。どうしたものかな」

「もういいじゃありませんか」と、彼はいって碁盤をさした。「それよりひさしぶりにどうです。一番かこみますか？」

「入院させた方がいいでしょうか？」妻がおろおろ声でいった。

「そうですね。最近は死亡確認がなかなかうるさいから、脳波検査をやった方がいいかも知れません」医師は、カバンから注射器をとり出した。「とりあえず、強心剤をうっておきましょう。また動き出すかも知れない。体温ははかりましたか？」

「さっき二十七度でした」と妻はいった。

「死人の体温ですな」と医師はうなずいた。

「とまった心臓に、強心剤がききますか？」と彼はきいた。

「さあ、どうだか——。いざとなれば、電気刺戟や、心臓マッサージという手がありますが……一つ手術をうけてみますか？」

「麻酔がきかないと思いますよ」と彼はいった。「それに、全身麻酔というやつは、心電図を見ながらかけるんでしょう。心臓がとまっている場合、どうするんです」

医師は返事をせず、やや乱暴に彼の腕に針をつきさした。ずっと遠い所で、チクリとしただけで、彼はあいかわらず朦朧としていた。

「薬がきいてくる間、どうです、一番……」

彼は碁盤をひきよせた。

「一番だけですよ。——午後から往診がありますから……」と医師は碁笥を膝前においた。

「あの、先生、入院の支度をした方がよろしいでしょうか？」と妻がきいた。

「そうですな——体の方はもう手のほどこしようもないが、意識はこの通りしっかりしておられるんだから……とにかくもう少し様子を見ましょう」

渡辺医師とは互先で、どちらも五、六級という所だった。にぎって医師が先になり、二人はうちはじめた。——灰色の空から、雨はしとしとと庭先に降りそそぎ、軒からおちる雨だれの音、樋を走る水音にまじって、碁石をおく音がしずかにひびいた。——妻が茶菓をはこんできたが、彼は手をつけなかった。

「食欲はありますか？」と医師は盤面を見ながらきいた。

「あまりありませんな……」と、彼は石をおきながらいった。「今朝は納豆と味噌汁で、飯を三杯ほど食べましたが……」

「そりゃ相当なものだ……」医師は腕を組んだ。「あなた、その石は死んでますよ」

「いや、まだわかりませんぞ」彼は白石をおいた。「ほら、こうしたらどうなります」

隅で、もう二、三手進んだ時、医師はぴしゃりと膝をたたいた。

「なるほど、持か……」

「でしょう」と彼はいった。

それで碁は細かくなった。——しかし、医師に電話がかかって、盤面をつくらず、そのままかえっていった。何か容態の変化があったらすぐ知らせてください、と、彼にも妻にもいいおいていったが、彼はそんな医師の言葉を遠くにききながら、盤面を見つめてぼんやりしていた。

そのまま何となく日がすぎていった。——体の死後変化も、その後めだった進行はなく、ただ四肢末端が少し異臭をたてはじめただけだった。彼は会社に辞表を出した。会社に行って働くなどという意欲がまるで起らなかったからである。会社から上役も来たが、彼と話しながら、彼が実際上「死んで」いるのだという事をどうしても納得してもらえず、退職金だけで、弔慰金は出なかった。

その事が、高校、大学の二人の子供をかかえた妻を心細がらせた。——彼にはかなりの額の保険がかけてあったので、何とか医者に死亡診断書を書かせようとし、彼自身も妻にせっつかれてたのんでみたが、たしかに体は死んでいるものの、本人の意識がはっきりしているうちは、さすがに長年のつきあいの医師でも書きにくいらしく、もうちょっと様子を見てから、をくりかえした。

二人の子供は、大きくなってからのち、お互いあまり口をきかなかったから、父親が死んでるような生きているような、妙な状態になっても、別に大したショックをうけたようにも見えなか

った。時々、ぼんやりすわってる彼の所へ来て、気分はどうか、とか、今度はどこそこへ旅行してみたいが、小遣を余分にくれ、とかいった。——そんな子供たちを、彼は、肉親の情というものの一つも動かない、遠くはなれた存在として見ていた。どちらも自分に似て、生意気な事はいっても、大した人間になれない事が、その顔つきや言葉づかい、動作から、ありありと見てとれた。「身びいき」というものをはずして見ると、いろんなものが、ずいぶんかわった具合に見えるものだな、と、にきびっ面の下の息子や、脂切った長髪に無精ひげをはやしている長男をながめながら、彼は思った。——といって、物事が新鮮に見える、というほどの感激もない。そのうち息子たちは夏休みが来て、どこかへ行ってしまった。

彼はあいかわらず、ぼんやりすわって、庭先に季節のうつりかわりをながめていた。夜になると、妻とのつきあいで何の感激もないテレビを見、時間がくると寝床にはいるのだが、横になっても、眠っているのだか起きているのだか曖昧であり、起きていても、同じような気分だった。——食事も、あの朝は別にして、ほとんどとらなくなった。あの朝は、まだ自分が生きていると錯覚していたから、あんなに食えたんだな、と彼は思い、人生というものは、生きている本人の、身びいきや錯覚を通して、はじめて当人にとって意味をもつものだ、といった言葉を思い出したりした。ただ水はのめた。「末期の水」というくらいだから、当然だろうと思いながら、こう毎日々々、末期の水ばかりのみつづけて、いったいいつまでのめばいいのだろう、とふといぶかった。

「あなた、ご気分は？」

と妻は時折たずねた。——そして彼の返事はいつもきまっていた。……別によくも悪くもない……。

「いいかげんに、生きかえるかはっきり死ぬか、どっちかにきめてくださったらどうなんです」と、夏の終りに妻は時たま起す、更年期ヒステリーの症状をしめしながらいった。

「家の中に、病人——いえ、死人がずっといると、気ぶっせいでしようがありません」

「そういらいらする事もあるまい」と彼はいった。「別に今までとかわらんじゃないか。そりゃ働きには行かないが、そのかわり飯も食わん。定年退職したと思えばいい……」

まったくこうなってみると、「生きていた」時も、現在のように「死んでいる」時とあまりかわらない生活をしていたような気がする。子供たちとはあまり顔をあわさない。妻ともあまり口をきかない。休みの日には、碁盤とにらめくらしている。時折庭を見て、手入れをしなくちゃ、と思う……。ただ、勤めていた時のように、追いたてられるような感じや、あくせくした不安な気分はまったくなくなり、朝から晩までぼんやりすわって庭をながめくらしていると、今のようなくらしこそ、「人間らしい」くらし方ではないか、という気がするのだが、——人間らしいといっても、彼は「死人」なのであり、そういうくらしに対する感動も詠嘆も、なにも感じられなくなってしまっているのだった。——人生というものは、どうもうまく行かないものだな、と、彼は思った。生きている時は、人間らしいくらしをするゆとりがなく、死んでからは、ゆとりは

やたらにあるのだが、今度は人間らしい気分が味わえない。

妻が本当に「決着」をつけてもらいたがっているのだ、という事がはっきりしたのは、秋も大分深まってからだった。——ある日、坊主上りの妙な拝み屋をつれてきて、彼にひきあわせた。

「ははあ、ちょいちょいある事です」と、衣をまとった大男はしたり顔にいった。「肉体が死んでいるのに、魂がまよっていてぬけ切れない。こういうのを、おさめる所へおさめるのが、私たちの仕事ですから……」

拝み屋は香を焚いたり経文をとなえたり、最後に数珠を持った手を彼の鼻先につき出して、びっくりするような声で、喝！　とどなったが、彼の上には何の変化も起らなかった。そいつの顔をじろじろ見ていると、大丈夫、二、三日うちにちゃんと死にます、といって、そそくさとかえって行った。

妻はそのあと仏壇を新調し、彼にはあまり口をきかず、そちらばかり拝むようになった。中には表にまだ戒名の書いていない白木の位牌があった。いつまでもこんな事をしていてもしかたがないから、あちこちに知らせて本式に葬式をやりたい、と相談を持ちかけられたが、彼は首をふった。

「葬儀をやるなら、正式に死亡届を出すんだろう」と彼はいった。「そのあと、法律にしたがって火葬されるんだろう。そいつはどうも、いい感じじゃない」

「じゃせめて、お墓だけでも一緒に見にいってよ」と妻はいった。

自分の墓石を見たてに行くのも妙な感じだったが、妻が決していやがらせをやっているわけでなく、本当にあつかいに困っているのがわかったから、一緒に行って、ごく平凡な、磨き御影石の墓石をえらんだ。——そのあと、まだ生きたままの形で、遺産相続もすっかりすませてしまった。とたんに、気でもゆるんだのか、妻が脳溢血でぽっくり死んだ。便所の中でたおれて、そのまま逝ってしまったのだが、彼は救急車もよばず、ふところ手して、長男が下宿先からかえってくるのを二日も待った。妻が死んだら、魂は彼の所へ来てくれるかと思ったが、あちらは一足先に遠くに行ってしまったらしく、何の気配もなかった。

妻の葬式の時、彼は喪主になるのをこばんだ。——おれは死んでるんだから、と彼は長男にいった。——お前がやれ。

「御焼香はどうするんです」と長男は困った顔をしていった。「親類には、父さんが死んだという通知は行ってないし——当日は変な事になりますよ」

「おれは知らん……」と彼は碁石をならべながら冷淡にいった。「そういう心配は、生きている連中の方でやるべきものだろう」

葬式の日、彼は茶の間の縁側で、碁譜を見ながら碁石をおいていた。親類の連中や参会者は妙な顔をし、あとで一騒動持ち上りかけたが、妻の死亡診断書を書いてくれた例の医者が説明して、みんなは納得の行くような行かないような顔をして帰っていった。妻の兄は義絶すると息まいたが、死人である彼にとってはどうでもいい事だった。

四十九日がすむと、長男が家を売ってマンションにひっこすといい出した。次男は高校を出て浪人し、年上の女と同棲しかけていた。——好きなようにするがいい、と彼はいった。もうお前たちの財産だから、どう処分しようと勝手だ。

「お父さんはどうするんです?」と長男はきいた。「お墓はちゃんとできているんだけど……死体の置き場がない」

「私の所へくるかね?」と知合いの医者はいった。「病院には安置所もあるが——まあそこへはいる事もなかろう。去年死んだ祖母さんの隠居用の離屋があいているが……」

そこへうつって、彼は毎日碁石をならべてくらした。医者は時々相手をしに来てくれて、その度にたずねた。

「どうだね? まだはっきりせんかね?」

「このごろ思うんだが……」と彼は打ちかけの盤面の一隅をさしていった。「今の私の状態は、この持みたいなもんじゃないかな。死んでいるわけではない。生きているわけだろうが働きはできず、この相手の石を〝死〟とすると、生の側からも死の側からもどちらも手を入れられない。ほかの盤面が全部かたづいてから、ようやくその得失がはっきりする」

「妙な事になってしまったものだな」と医者は、まだあいている大場へうちこみながらいった。

「いつまでそんな事がつづくんだ」

「わからん。第一この場合、ほかの盤面がどれだけ広いか見当もつかないからな……」

そのうち、その医者も死んだ。——次の院長になった医者の長男は、離屋を人に貸すからあけてくれ、といった。それでも先代が遺言でもしてくれたと見えて、病院から追い出す事はせず、かわりに死体安置所にいれてくれた。彼にとっては、まことにふさわしい場所だったが、といって、彼自身にとりわけ居心地がいいというわけでもなかった。

彼はあたらしい住処に碁盤と定石・変化集を持ちこみ、死体用のベッドに寝起きし、せまい窓から外の景色のうつりかわりをながめ、毎日一人で、パチリ、パチリと碁石をおいてくらした。時たま、この病院で息をひきとった患者の死体が、安置室にはこびこまれてきたが、別にうらやましいとも、恐ろしいとも思わず、一夜おかれ、またはこび出されて行く仏を、無関心な、膜のかかったような眼で見おくるだけだった。髭も髪ものび、衣服もぼろぼろになり、半分屍蠟化しかけた指で碁石をつまんでは、朝から晩まで、パチリ、パチリと石をおきつづけた。どれだけの歳月がたったか知らないが、そんな事はもう彼にとってどうでもいい事だった。定石・変化集はあらかたやりつくしてしまったろうに、その病院のずっと奥の、ほの暗い、しめっぽい廊下を、死体安置所の前まで行くと、中からパチリ、パチリという石の音がきこえ、看護婦や従業員たちは、代がかわっては、また慣れっこになって行った。

二代目院長が年をとり、代診が実権をにぎるようになっても、まだ碁石の音はたえず、死んだまま生きている男は、相かわらず死体安置所で一人碁をうちつづけていた。

今でもうちつづけていると思う。

怨霊の国

1

明日、いよいよ判決という日の午後、私は拘置所に田村をたずねた。——正直いうと、田村にあいたくはなかった。彼にたのまれた事をやる決心がどうしてもつかなかったからである。

「持ってきてくれたか?」

と田村は面会所で声をひそめてきいた。

私は首をふった。

田村は絶望的な暗い眼つきになってつぶやいた。

「君にはわかってもらえると思ったのに……」

「わかっているつもりだ……」と私はつらい思いを味わいながらいった。「だが——ぼんやりとはわかっても、君のやろうとしている事をたすける気には、どうしてもなれない」

「君に迷惑は絶対にかけないつもりだ……」と田村はいった。「それに——ぼくの指定した薬

品なら、死因は絶対わからない。よほど厳密な検査をやらないかぎりは、心臓麻痺ですんでしまうだろう。ぼくには心臓冠動脈に欠陥もあるし……」

「迷惑なんて考えていない。——だが、やっぱり、友人の自殺を助ける気にはどうしてもなれないんだ」私は看守の眼を気にしながら、力をこめてささやいた。「思いとどまらないか、田村。——どうしても君が死ななきゃならないのか？」

「ゆうべも、きみ子が来た……」田村はうつむいたままつぶやいた。

「午前二時ごろだ——彼女はまだ完全に冥界へはいりこんでいるわけではない。だが、彼女が生前交信していた悪霊たちに、早くも苦しめられている。ぼくが行ってやらなければ……どうしてもぼくが行ってやらなければ、彼女は修羅の世界にひきこまれ、彼女自身が、すさまじい悪霊になって、今度はぼくなり君なりにとりつくだろう——いや、ぼくや君だったらまだいい。彼女が何ものであるか、何をやらせようとしているか、わかっているからね。だが、もし何も知らない奴にとりついたら……」

面会室のガラス窓がガタガタ鳴っていた。

看守は、風のせいだろうぐらいに思っているのか、気にもとめない様子だったが、私にはわかっていた。——その日はあたたかい四月の午後で、微風さえなかったのだ。

「現に、きみ子は、ある男にとりつこうとしている。——彼女だけの意思じゃない事は、君にもわかっているね。肉体を失ったいま、彼女の霊は、ほかの霊に、もっと滲透されやすくなって

いる。それをやっとつなぎとめているのは、ぼくの愛情だけだ。——彼女が、半分は自分の意思じゃなくて、とりつこうとしている男は、日本人じゃない。若い……ある外国の陋巷で、屈辱と貧困にまみれ、はげしい挫折感とうらみにもえて世界を見わたしている男だ。その男にとりついて、何をさせようとしているか——ぼくにはうすうすわかる……。もし成功すれば、おそろしい事が起る。世界中に……」

私のとなりにある、誰もすわっていない椅子が、突然ゆっくり一方へかたむいた。それから急に床の上にガタンとおちた。——椅子はそれから二度、同じ方向にかたむき、二度とも床をガタンといわせた。

看守が、のび上ってこちらを見た。

「ぼくたちは——見はられているんだ。わかるだろう？」と田村はささやいた。「だが、ぼくは平気だ。自信がある。——むこう側へ行きさえすれば……彼女を説得し、彼女を導き、うまく……おさめて見せる」

「君にたのまれたあの坊さん……たずねてみたが、もう老いぼれて、死にかかっているんだ。本人にあう事もできなかった。ほかに誰か知らないか？」

「あの人がだめならだめだろう」田村は予期していたような、暗い眼つきになった。「ほとんどの宗教家は——だめだな。——みんな現世宗教、開明宗教になってしまって……現世の背後に蠢く、まがまがしいものの存在を、見る事もできなければ、信じてもいない」

椅子の動きがおさまると、今度は田村が肘をついているテーブルの下が、トン、トン、トン、と鳴りはじめた。——テーブル叩きという、降霊術ではごくありきたりの現象の異様さは、それを実際に眼前で見たものでないとわからない。

「君が——それをやれないのか？　生きたまま……」私は、体をのり出した。「それなら、ぼくも助けられる。判決は、おそらく何年かの懲役だろう。だが、刑務所にいても……」

眼に見えない指先が、机の裏側から板をたたく音は、次第にはげしく、高くなり、田村がもたれたまま、机の一方の脚が、ぐーっと持ち上りかけた。

「何をしとる！　面会中は静かにせんか！」

看守が音をききつけてどなった。——テーブル・ラッピングはぴたりとやんだ。

「それはだめだ……」立ち上りながら、田村は、苦しそうな微笑をうかべた。「だめな事は、はじめからわかっているんだ。——ぼくが、彼女の傍に行ってやらない事には、絶対にうまく行かない。彼女には、ぼくが必要なんだ」

「どうするつもりだ？」私も腰をうかしながら、せきこんだ声でたずねた。「あれがなかったら——どうやって……」

「自分で何とかするさ」田村はわびしげに首をたれた。「いろいろありがとう。明日の判決申しわたしに来てくれるかね？」

2

私が天野きみ子とはじめてあったのは、田村が開いている神経科の医院でだった。郊外の小都市に開業してから五、六年だが、最近の世相では神経をいためる人間が多いと見えてけっこう繁昌しており、最近では、優秀な代診もいて、評判はよかった。

私と田村は、大学時代いっしょに同人雑誌をやっていた仲であり、卒業してからも、ちょいちょい音楽会で顔をあわせたりしていたが、田村が私のすむ小都市で開業してからは、時折り釣りだのゴルフだのにさそいあわせるようになった。

その日は土曜日で半休であり、私は翌日の釣りの打ちあわせがてら、チェスか碁でもやろうと思って、会社のかえりにまっすぐ医院をたずねた。

午後三時の閉院まぎわで、ふけだらけの長髪に詰め襟服姿の、顔色の悪い高校生が、入れちがいに出て行ったあと、待合室には誰もおらず、四十前でまだ独身の田村に、ファンじみたのぼせ方をしている愛くるしい受付の小娘が、私を見つけて、ニコッと笑い、

「どうぞ——先生は診察室にいらっしゃいます」

といった。

代診も看護婦の姿も見えない診察室で、田村はぼんやりとパイプをふかしながら、テーブルの上のカルテをながめていた。——田村のアイデアと趣味で、診察室の中の面接室は、豪奢な応接

間のようなつくりだった。診療機具類は、どっしりしたカーテンでくぎられたむこう側にあり、そこもおちついたカラーコンディショニングで、ステレオBGMの設備もあり、患者の神経を刺戟しないようになっている。

「やあ……」

私がはいって行くと、田村は、色白の顔をあげて、ぽつりといい、またカルテの上に眼をおとした。——それにつられて私の視線もテーブルの上にむかい、カルテの上に「天野きみ子」の名を見たのだった。

「明日の釣りのうちあわせにきた」

と、私は帽子を壁にかけながらいった。

「うん、それが……」田村は海泡石のパイプをやけにふかしながら、うかない顔でいった。「ある人から……行かない方がいいっていわれたんでね」

「誰に？」

私はちょっと気分を損じてききかえした。——その磯釣りは、だいぶ前から二人で計画をねっていたものだった。あと、のこっているうちあわせは、出発時刻と、どちらの車をつかうか、という事ぐらいだった。

「彼女に……」と、田村はつぶやいて、カルテを指の関節でこつこつたたいた。

「患者にか？」私はつったったまま、あらためてカルテを見おろした。「その患者は何だ？

拝み屋か？」

「別にそういうわけでもないが……」

田村は屈託顔で立ち上った。「君もあってみるか？　とにかくかわった女だ」

「ここにいるのかい？」

「さっきアミタール・インタヴューをやって、奥の治療室でやすんでいる」

「あまりぞっとしないね……」と私は眉をしかめた。「拝み屋とか、女予言者とかいったたぐいは、好きじゃないんだ」

「とにかく、個人的に紹介するから、あって見てくれ。——自分でどんなにかわった女性か見てほしいんだ」

治療室は、湯沸し場をはさんで、診察室の隣にあった。——廊下を歩く短い時間に、田村は、その患者が、三日ほど前、田村の医院からつい二十メートルほどはなれた路上で、癲癇様の発作をおこし、かつぎこまれてきた事を語った。

「癲癇持ちか？」私は首をすくめた。「ますますいやだね」

「癲癇じゃない。どちらかといえば、ヒステリーの症状に近いんだが……よくわからないところがある」

治療室のドアをあけると、右手に更衣室があり、奥は二枚のカーテンに区ぎられていた。その一方をあけると、くすんだオレンジ色の絨毯をしいた中に、草色の羽根蒲団をかけたベッドがあ

り、ほっそりとした女性が眠っていた。

一見したところ、ごく平凡な顔だちの娘だった。すき通るような青白い肌に、まっ黒な髪や、みごとに形よくはえそろった眉が、ややうるさい感じで、古風な瓜実顔は、やや顴骨が高く、細い鼻梁と、うすい、形のいい唇が何か病的な感じだった。

年頃は、どう見ても二十二、三にしか見えなかったが、さっきのぞいたカルテには、たしか二十八と書いてあった。

女は、まるで息をしていないように見えた。かけ蒲団も動かず、鼻息もきこえない。——その時になって、私は、治療室にはいってからずっときこえている、奇妙な音に気づいた。最初は、どこかで水道の蛇口から水滴がしたたっているのかと思い、カーテンの奥にはいってからは、窓ガラスに、花虻か何かがぶつかっているのかと思った。そんな、かるい、断続的な音だった。

しかし、洗面台の蛇口はしっかりしまり、窓ガラスの外には、明るい陽の下に、青々とした梧桐の葉がそよぐばかりで、虫の姿は見えなかった。

その時、誰かが治療室のドアをノックしたように思った。——私は田村に眼くばせした。しかし、田村は思いに沈むような眼つきで、寝入っている女性を見つめて動こうとしなかった。

やや間をおいて、今度ははっきり、コン、コン、とドアが鳴るような音がした。——私はカーテンをおしのけてドアの所へ行き、

「はい、どうぞ」

といって、ドアをあけた。

外には誰もいなかった。

廊下の左右を見まわしても、人影は全然見えない。

妙な気分で、またベッドの傍へかえってくると、田村はさっきと同じ姿勢で女の顔を見つめていた。——今のをきかなかったか、と、声をかけようとすると、今度ははっきり、室内で音がきこえはじめた。

ベッドの横に、椅子と丸テーブルがおいてある。——そのテーブルの下側を、指先でかるく、トン、トン、とたたくような音がきこえはじめ、それがだんだん早くなり、ふっと消えると、ほんの一瞬おいて、今度は何本も指が、バラバラとリズムをつけて、テーブルの板をたたくような音がきこえはじめた。

私は棒のようにつったって、そのテーブルを見つめた。テーブルと私は、一メートルもはなれていなかった。テーブルクロスもかかっていない、ニスぬりの板が、裏から、また表から、眼に見えない無数の指で、はげしくたたかれ、小太鼓の連打のような音をたてている。それが幻聴でも何でもない事は、何ものかにたたかれる度に、テーブルの上の灰皿の縁にのった煙草の吸いさしが震動でとび上り、ころげおち、紙マッチがとび上るのを見てもわかった。

口の中は、シュッと音をたてるようにかわき、唇はからからになった。頭の血が足の方へむかって急激にさがって行くのがわかり、合オーバーのポケットにつっこんだ手を、どうしても出す

事ができなくなった。トントン、バラバラとテーブルをたたく音は、ますます強く、はげしくなり、それに窓ガラスをガタガタゆさぶる音、壁を握りこぶしで力いっぱいたたくような、ドン、ドンという音がくわわり、治療室全体が、家鳴り震動をはじめたみたいだった。

窓ぎわの、うすいカーテンが、窓がしまっているのに、風に吹かれたようにフワーッと持ち上り、宙でとまった。——まるで透明人間が、カーテンをもっているような恰好だった。そのうち音はさらにはげしくなり、まず椅子が、つづいてテーブルが、二本の脚を床につけ、のこり二本の脚をぐうっともち上げてかしいだ。三十度以上かたむいているのに、テーブルの上の灰皿も紙マッチも、もとの位置にぴたりとはりついたまま、すべりおちもしなかった。

そのうち突然、クリスタルガラスの小さな灰皿が、テーブルの表面をはなれて、私の顔めがけて、びゅっととんできた。私は思わず両肘をあげて顔をかばった。灰皿は私の頭上、約二十センチの所でぴたりととまった。それから、宙にういたまま、ゆっくりとさかさになった。当然灰や吸い殻がおちてくるものと思って、私は反射的に体をよけた。しかし、完全にさかさになったのに、中にはいっている吸い殻やマッチの軸も、灰の一ひらさえおちてこなかった。

うろたえている私を笑うように、テーブルや、床や、天井や壁をたたく音はいよいよはげしくなり、波のように、ザッ、ザッ、というリズムをもちはじめた。

私は救いをもとめるように田村を見た。——田村も顔色を失って、なすこともなく部屋の中を見まわしていた。

「さっきよりも、だいぶはげしい……」

と田村はかすれた声でつぶやいた。

「さっきより、というと……」私は頭の上にとまった灰皿が、またすうっと動き出すのを警戒しながらいった。「さっきもこんな事が……」

「ほら！　気をつけろ！」と田村は私の腕をとった。

テーブルの上から、いつの間にか紙マッチがうき上り、床の上二十センチばかりをまっすぐに動いてきた。——眼に見えない「手」がゆっくりと紙マッチの蓋をひらき、妙にぎごちない調子でマッチを一本むしりとり、シュッとこすって火をつけた。火のついたマッチは、ひょいと動いて、私の合オーバーのすぐ裾の所にきた。かなり早い動きなのに、焔は全然ゆらがなかった。合オーバーの裾をこがされそうになって、私はあわててとびのいた。火のついたマッチはそのままじっと動かず、軸の最後まで燃えつきるまで宙にういており、それから一本の灰になって、床にくずれおちた。——同時に背後でガチャンという音がきこえた。宙にういていた灰皿が、床におち、灰をちらして粉々にくだけた。

「先生……田村先生……」地の底からひびくような、陰々と低い、しわがれた声がベッドの方からひびいてきた。「明日……山本さんと……釣りにいらっしゃっては、いけません……よくない事が……よくない事が……起り……ます……」

患者の顔はさっきよりもっとひどい土気色になっていた。眼のまわりや、頬にくまができ、そ

の顔は老婆のようになっていた。うすく開いた口の奥の、深く、暗い穴の底から、唇を少しも動かさずに声がひびいてきた。

「釣りに……行っては……いけません……」

ふいに騒音が消えはじめ、かたむいていたテーブルや椅子が、ゆっくりもとへもどった。壁をドンドンたたく音も、窓をガタガタゆさぶる音も、ぴたりとやんだ。——カーテンがふわりともとにもどると、あとは嘘のような静けさがやってきた。

梧桐の葉のそよぎをもれてくる西日がゆらゆらと壁にゆれ、その時になってようやく、外でかしましくさわぐ雀の声や、遠くであそんでいる子供たちの、かん高い叫びがきこえてきた。呆然と立ちつくす私の耳に、カサリ、というかすかな音がきこえた。

最後まで、宙に浮いていた紙マッチが、床の上におちてころがった音だった。

「最初からああだったのか？」

診察室へかえって、椅子へ体をなげ出すと、私は大息を一つついてたずねた。

田村はうなずいた。

「最初の時は、テーブル叩き（ラッピング）と、椅子がかたむいただけだ」彼は冷えた海泡石のパイプをケースにしまうと、紙巻きを出して火をつけた。「明日の釣りはどうする？」

私は肩をすくめた。

「様子を見よう……」自分でも煙草をとり出して火をつけようとしたが、両手が食いちがうように大きくふるえた。「かわった患者だな。——ただのヒステリーじゃなさそうだ。職業は何だ？　霊媒か？」

「やってるとしても職業的なものじゃない」田村はデスクの上に手をのばして、カセットテープをとりあげた。「職業上の秘密で、きかすわけには行かんが……アミタール・インタヴューの結果は、奇々怪々なものだよ。もし、彼女のいう通りだとすれば、彼女は——あの連中と、かなり長く深いつきあいがあるらしい」

「あの連中？」

「ああ——あの〝ガタガタ野郎〟どもさ」

「あの〝お化け〟とか？」

「君は降霊術の実験にたちあった事があるか？」田村はデスクの抽き出しをあけて、テープをほうりこみ、その下の抽き出しから封筒をとり出して私の前に投げ出した。「八〇パーセントは、素人でも見やぶれるインチキだ。さっききいた、テーブル叩き（ラッピング）、机の傾斜、物体浮遊、空中にうかび上ったメガフォンからきこえる声など、おきまりコースはいろいろあるが、部屋を暗くしてやるし、大ていは一種の黒奇術（ブラック・マジック）だ。——だが、あのさわぎは、明るい部屋の中でおこるし、タイプからいえば、ポルターガイスト現象に属するだろうな」

「ポルターガイストって？」

「〝騒霊〟というんだ。――その封筒の中の資料をよんでみるか？」

私が封筒に手をのばした時、すっと冷たい風が部屋の中にふきこんできた。

ふりかえると、ドアがあいて、天野きみ子が立っていた。――寝ている時は、平凡に見えたが、起き上ってみると、大きな瞳がびっくりするほど美しく、初々しい感じだった。その細い体、朦たけた顔には、ひきずりこまれるような、神秘的な魅力があった。

「先生……」きみ子は、心にしみこむような、ややかすれた声でいった。「眼がさめました。――もうかえってよろしいですか？」

3

田村から貸してもらった資料を、私は夢中になって読んだ。――きみ子の「予言」をきいた翌日、私たちが行く予定だった海辺地方が突然突風におそわれ、磯釣りの人たちが大勢波にのまれた、というニュースをきいたから、よけいにきみ子に対する関心が強まった。

封筒の中の資料は、何かの本から複写したもので、ほとんどが最近の文明地帯に起った「ポルターガイスト」に関するものだった。――「ポルターガイスト」は、「騒霊」と記されている。文字通り、「さわがしい霊」であって、いろんないたずらをする。きわめて古くから、世界各地で知られていたらしく、この伝説は世界のあらゆる地域にちらばっている。たとえば、日本の「座敷ぼうこ」、「天狗」、「豆狸のいたずら」「かまいたち」それに有名な茂林寺の「文福茶釜」

の伝説なども、この現象で説明されるかも知れない。

のみならず、この現象は、現在でも――この文明の進んだ二十世紀の、それもかなりの先進地帯で、わりと頻繁に起っている現象なのだ。現象の原因は、まだ科学者にもわかっていない。しかし、それが起る事は、まぎれもない事実であって、大勢の警察官、新聞記者、科学者の眼前で起っている。

田村の資料から、いくつかの例をあげると、次のようなものである。

一九六二年九月六日、アメリカヴァージニア州ポーツマス市フロリダ通り九四九のチャールズ・ドートリィ家で、午後四時ごろ、ベッドの蒲団がひとりでにとび出し、鏡台がたおれ、居間の花びんが三メートルも横にとんで窓ガラスをつきやぶって外へとび、台所の戸棚がひらいて、中のビン類がとび出した。ドートリィ家の悲鳴をきいてかけつけた隣人たちの前で、椅子が空中にとび上ってすわっていた少年をほうり出し、パイプが台所からとんできた。午後七時、警官と新聞記者がつめかけたが、その前でも怪異はつづき、警察犬も「いたずら」の犯人を見つけ出せなかった。――怪異は午後九時にぴたりとやんだが、翌日も午後四時になるとまたはじまり、今度はデューク大学の超心理学研究所の科学者の眼前で食器の戸棚がひとりでに動き、花びんがとび上って壁にぶちあたった。怪異は六日間つづき、ドートリィ夫妻が知人の家に逃げ出すとやんだ。

同じく一九六二年三月十一日、インディアナ州インディアナポリス北デラウアのレネート・ベ

ック夫人の家で午後十時半すぎ、寝室の本棚の上にあったカットグラスがとび上って床におち、こわれた。つづいて重い灰皿がテーブルからとび上って壁にぶつかり、別のカットグラスがわれた。女ばかり三人の家族はホテルに避難したが、翌日の午後、家にかえると、また家中のガラスがわれはじめた。

翌日、とうとう知人が警官をよんだが、その前で壁かけランプがおち、台所の抽き出しからナイフが三本とび出し、床に十字をつくっておちた。警官が帽子の下にかくしたコップ三つのうち、二つが部屋をとび出し、一つは警官のレイ・パットンの背中にあたってこわれた。さらに、三人の女性が、眼に見えない歯によって何度もかまれ、三角形の歯形をつけられた。この怪現象は十六日間つづいた。

そのほか、田村の資料には一九五八年二月六日、ロングアイランド州シーフォード、一九五九年一月六日、マサチューセッツ州スプリングフィールドなどの事件があげられている。いずれもよばれた警官の眼前で起り、中には警官を投げとばしたり、火のついた薪がひとりでにとんで放火しようとしたりした例もある。

日本でもある。一九五七年一月二十八日、青森県北津軽郡中里村大沢内部落のU・Tさん（当時56歳）方で、夜十一時ごろ、突然一家のねているふとんの裾が宙にうき、いくらおさえてもういてしまい、一晩中何かにベタベタ頭をたたかれた。翌晩から元気な青年たちがいれかわり泊りこんだが毎晩十一時になると、彼らの眼前で自在鉤でつった鉄瓶がゆれ出し、囲炉裡の灰がポカ

ポカ宙に舞い上り、台所から庖丁がとんできて、ふとんをきりさいたりした。異変は八日つづいてやんだ。

歴史小説の第一人者といわれるR・S氏も終戦後、京都市北郊雲ヶ畑の某寺で、夜中に「天狗」が寺院の屋根をかけめぐり障子をゆさぶるのを体験しておられる。この怪異は、雲ヶ畑に電燈がつくとやんだ。

日本の伝説にいう「かまいたち」のような型のポルターガイスト現象もある。一九五一年五月十日の夜、フィリピンのマニラ市の孤児クラリタ・ヴィラノヴァ嬢（当時18歳）は、突然「見えない牙」に全身をかみつかれはじめた。マニラ市警に保護されたが、警察署長、監察医、よばれた市長、大司教の眼前で、全身に「歯形」が食いこみ、あとは青あざになり、はれ上った。ラクソン市長が腕をおさえた、その掌の下でさえ、歯形は少女の腕にくいこんだ。——また一九六〇年、南ア共和国ホワイトリバーのダテーン農場にガラス鉢がとびまわったり、棚の食器がおちたりしはじめ、警察署長と三人の部下がかけつけると、その眼前で同農のジミー・ドブリューン（20歳）のむき出しの両脚に、突然長さ五センチの切り傷がパックリロをあけ、血が流れ出した。翌日も二人の警官のいる前で、シャツの下の青年の胸、背中に深い切り傷が八ヵ所もあらわれ、署長の発言によると、どれもカミソリでずばりと切ったような鋭い傷だったという。

そのほか、何にもない空中から、突然石がバラバラとふってくるシリル・ペニー事件（一九五七・三・七）（これと似た現象は富山県にもあった）、乾いた壁の何ヵ所もから水がふき出す事件

（一九六三・九・二九）さらに火の気のない所に、突然怪火がもえはじめる事件にいたっては、枚挙にいとまがないくらいである。

（注、以上の資料は、南山宏著『超自然の世界』大陸書房刊、及びフランク・エドワーズ著『しかもそれは起った』早川書房刊、より）

読みおわったあと、私はすっかり考えこんでしまった。――怪異など、信じない質の私も、このポルターガイスト現象だけは、その実在を信ずる気になった。原因はわからない。だが、警官、ジャーナリスト、科学者たちの眼前で起り、しかも、明るい所で、いくらでも起るとなると、理由はわからないにせよ、その現象の実在はうたがいようもないと思われる。

そしてまた、過去においては、こんな現象が、もっとひろく、ごく日常的に起ったと仮定すると、いままで「迷信」とか「錯覚」とかでかたづけられていた事が、かなり説明がついてくる。現に私自身、幼時、都市の中の住居で、また祖母のすむ田舎で、年寄りたちが「豆狸のいたずら」とよぶ、原因不明の家鳴り震動を経験している。先ほどあげた「文福茶釜」の伝説や古い道具類を供養しないでほうっておくととりついて動き出すという「付喪神」や「かまいたち」現象も説明がつくし、かつて文化の光に未だ照らされなかった日本の国土が、昼は、「五月蠅なす荒ぶる神々」夜は「螢火の神々」が跳梁し、「草木物言う」国であった、という古伝の表現も、また別のイメージで考えなおせそうだ。ヨーロッパにおいて、三世紀間に約百万の犠牲を出した「魔女狩り」も、発端はこんな現象かも知れない。かつて――「文明」の光が照らさなかったころ、山や野や、森や谷に、もっとスケールの大きい「何ものか」がもっと高密度に実在し、先史時代の土着人は、こういった「何ものか」のあらわす、今でいう「超自然現象」を、あたり前の事としてうけいれ、その「何ものか」とコミュニケートする方法も知っていたのではあるまいか？

平野農耕によってはじまる「文明化」の光が、これらの「何ものか」を駆逐しはじめた。R・S氏のいう雲ヶ畑の「天狗」が、電燈がつくとともにどこかへ行ってしまったように……。だが、「ポルターガイスト」だけは、その中に頑強に生きのこった。日本においては、きつねやたぬきという具合に「擬獣化」されながら、江戸期を生きぬき、二十世紀後半の先進地帯、場合によっては、大都会のビジネス街のオフィスにさえ出現する。

（一九六四・六・十五、加州オークランドの弁護士ジョージ・ボイラー事務所の例。前出『超自然の世界』所載）

だが、この現象と、天野きみ子との関係はどうなるのだろう？――ポルターガイスト現象をしらべた学者の中には、この現象の起る家に、思春期の少年少女がいるケースが多い事から、思春期の抑圧された心理が「超能力」的に働いてこういった現象を起すのではないか、という説をたてる人もいる。天野きみ子と、この現象は、いったいどんな関係をもっているのだろう？　ふつう、ポルターガイスト現象は、別に霊媒などいなくても起るものだ。しかし、霊媒をつかった、降霊現象において、これに似た事が起る場合もすくなくないという。――私は、天野きみ子の事が猛烈に気になり出した。と同時に、田村がアミタール・インタヴューで採録したという、彼女の半覚醒状態における告白というのを、ぜひ――もし、田村が拒否したら、盗んでもききたい、

とまで思いつめはじめた。

4

幸いにして、私のつとめている会社は、社会調査関係の仕事をしていたので、天野きみ子の素性は、「職業的無関心さ」で、私自身が手をくださずにすぐしらべる事ができた。——部下の手もとからまわってきた、関係書類の一番上にあった戸籍謄本の最初に、彼女の本名を見た時、私はショックをうけた。彼女の名が「卑見子」と書かれてあったように見えたからである。それは例の「鬼道につかえよく人心を惑し」た、耶馬台国の女王の事を思い出させた。

だが、それはコピーの不良のせいで、よく見ると「鬼見子」と書かれてある。——どっちにしても「鬼を見る」とは異様な名だ。独身の女性が、いやがって平仮名で書くのも無理はない。

彼女の戸籍をしらべて行くと、両親は早く死に、彼女は母方の伯母の養女になっている。伯母も未亡人で、かなりな年であり、調査書類を見ると、眼も悪く、体も不自由らしいが、亡夫から不動産をはじめ、かなりな財産をうけついでおり、生活に不自由はないらしい。彼女の伯父の職業は「運命鑑定」と出ていた。——そのほかの彼女の係累にも、宗教関係者がたくさんいた。彼女の両親は、ある地方の山間部の寺の住職であった。しかも、彼女の父は養子だった。母方の祖母は、関西地方のある神社の長女だったが、なぜか義絶され、一度行商人の妻になり、のちその寺院の先代住職の後添いになっている。その義絶された神社というのは、私もよく知っていた。

その神社の大宮司は、常に女性であり夫は権宮司として「寄神者」——つまり、妻を巫女として、妻の体に神霊をつけ、その神霊の名をたずね、神託をきく役目をつとめる、という、古神道の形を、いまだにまもっている神社である。

それだけで充分だった。彼女が霊能者、あるいは霊媒とよばれるものの血筋をひいている事はたしかだった。彼女の伯母も、夫の「運命鑑定」に対して、霊媒の役をひきうけていた形跡があった。

——もう一つ気になる事は、最近彼女の身辺に、得体の知れない人物の影がさしはじめている事だった。ある宗教団体と関係のある女子大の国文科を出て、五年もの間ぶらぶらしている彼女に、縁談をもちかけているらしいのだが、そのもちかけている人物の背後にいる存在が、どうも気になるのである。もし私のカンがあたっているなら、縁談をもちこんでいる、伯父生存時代の常連客という、海運関係の事業をやっている男の背後には、さる政界の黒幕の大ものがひかえているはずだった。名のみ知られているが、実際は何をやっているかまったくわからない、という無気味な人物である。そして、縁談の相手は、軍人あがりの政治家の孫で、今はある宗教法人の職員だが、行く行くは、祖父のあとをついで政界へ出るのではないかと思われた。

これだけの事をつきとめて、また一度田村にあって、例のテープについて何とかたのみこみ、だめだったら、アウトラインでもきかせてもらおうと思って、会社を出た。前の土曜日から、ちょうど一週間たっていた。

会社を出たとたんに、当のきみ子にばったりあった。——彼女は、その日は和服姿だった。つややかな髪をあげ、江戸小紋をすっきりと着こなしたその夜は、この前あった時よりずっとおとなびて、人妻のように見えた。

「あら……」と、彼女はにっこりと笑いかけた。「山本さん……でいらっしゃいましたわね」

「この間は……」と、私は狼狽しながら頭をさげた。「そうそう、あなたの御注意のおかげで、ぼくも田村も命びろいしました」

「田村先生の所へいらっしゃるんでしょ？」彼女は、すき通るような微笑をうかべて首をかしげた。「私のテープ、おききになりたいのね……」

「いや……そんな……」

私はますます周章して否定したが、ふと、彼女には何をかくしてもむだだ、という気がした。何しろ彼女は、ふつうの人間にはない能力をもっている。

「どうぞ……お医者って、患者のプライバシイをまもらなきゃいけないっていいますけど、本人がいいといえば、かまわないんでしょ？」彼女は、さらりといった。「私もいまからききに参りますの。ごいっしょいたしましょう」

私はすっかり毒気をぬかれてしまって、ただ口の中でもごもごいうばかりだった。

タクシーで、と私がいうのを、電車で、と彼女はいいはった。あつすぎずさむすぎず、いい気候で、ほんとうにぶらぶら歩くのにいい天気だった。

「私の事、いろいろしらべていらっしゃるんでしょう？　わかりますわ……」

ならんで歩きながら、彼女はポツンといった。——私は返事もできないで、恐縮していた。しかし、彼女には、責めている調子は全然なかった。ただ、うつむいた、細い、恰好のいい襟足と、薄い眉が、ちょっとわびしげな表情をしただけだった。

「巫女筋なんて——ほんとはいやなんです。ずいぶんおかしなものが見えたり……いやなものといっぱいつきあわなければなりません」

「お祖母さまは、なぜ、義絶をおうけになったんですか？」

彼女の、いかにもさりげない様子にひきこまれて、私は思わず無遠慮な事をきいてしまい、青くなった。

「つよい禍津神と親しんだからです」彼女はなんでもないようにいった。「曾祖母さまがなんとかひきはなそうとなさったんですが、どうしても離れなかったので、しかたなしに〝神やらい〟にやられました……」

最初の夫との駈けおちか何かを、比喩的にいっているともとれたが、彼女の口調は、あくまですなおだった。

「あら……」と、彼女は何を見つけたのか、ふいに町並みの間をふりかえった。「すみません。すこしお待ちくださいましね」

小走りに少しひきかえすので、何か店にでもはいるのかと思うと、ちょうどビルとビルとの間

の細い谷間に、とりのこされたような小さな祠があり、雑踏の眼もかまわず、膝をおってしゃがみこむと、手をあわせた。柏手うってそろえたしなやかな指先が絵に書いたように美しく、なにがしかを懐紙に包んで賽銭箱にいれ、帯の間に紙入れをもどしたその手のそりのあでやかさが残像にのこった。つややかな髪、白いうなじから桜色の耳たぶへかけての美しさが、小紋の濃紫地にはえて——ミニ、マキシ、パンタロンに鍔広帽子、それに長髪天神ひげ、トンボ眼鏡と、土曜の午後の雑踏は、当節はやりの服装をした若い人たちの姿も多かったが、その中で、彼女の姿はそこだけきりとったようにあざやかに、くっきりとぬけ出ていた。——しおらしい……といって、水商売の女たちのそれではない。裾もみだれず、しゃがみこんだその立居、手にした荷物のさばきまでが、すべて絵に描いたようにさまになり、眼をとじ、頭をさげたその後姿には、短い間ながらお座なりでない「祈るもの」の凛とした気品がたちこめ……私は眼を洗われたような思いで、その後姿を見つめていた。そこには、日本のかつての女性の誰もがどこかに持っていたような、そして、今の女の社会から急速に消え失せつつあるような、「女の〝祈り〟の真摯さ」が、女だけがとれる「形」をとってあらわれているような気がした。

その姿が、瞳につきささったような気がして、いつのまに彼女が傍にかえってきたか気づかなかった。——うながされて歩き出しても、まだ私はぼっとしていた。

「ここらでは珍しいお稲荷さまですのよ。稲荷の大もとの、オオゲツヒメノカミをまつっています。荼枳尼天と本跡をむすぶ前のお稲荷さま」

「そう書いてありましたか？」

「いいえ——見ればわかりますもの……」

私たちは、それから電車にのり、駅におりるまで、あまり話をしなかった。——彼女は田村医院へ行くのが、これで五回目だといって私をおどろかせた。

「それじゃ、先週の土曜日から二回も行ったんですか？——治療をうけているんですか？」

「いいえ——アミタール面接を……」と彼女は眼を伏せていった。「私……私の接触している世界の事を、自分で見つめてみたいんです。ふだんでも見えてはいますけど……私は、半分むこうの世界の住人です。こちら側——といったらおかしいでしょうけど、あなたたち、ふつうの方たちがごらんになっている世界とは、また全然ちがった世界です。そんな世界の住人である私を、こちら側の自分の眼からながめてみたいんです」

今日はインタヴューをやらないのだ、と彼女はいった。——第一回はのぞいて、三回分のテープを田村が整理し、それをききに行くだけだと……。彼女の声は、低かったがどこか華やいだところがあった。

「ひょっとしたら——」と私はいった。「あなた、田村が好きになったんじゃありませんか？」

返事はなかったが、彼女の襟足が、ぽっと染った。

小都市の駅でおりて、田村医院まで歩いて行く途中、二十メートルほど手前まで来て、彼女は急に妙な事をやった。眉をしかめ、首をそらせて、フッ、フッとまわりのほこりをふきとばすよ

うに息を吹いたのだ。

「おかしいわね。ここには、へんなものがいっぱいいます」と彼女はいった。「この前、それでこの場所でたおれたんですわ。あまり息苦しくって……」

私はすぐ横のビルを見上げた。比較的最近、そこにあった墓場をたちのかせて、バイパスを通しビルをたてたのだ。——そして、交通事故が頻発する場所だった。

田村は、受付の少女もかえしてしまって、たった一人で待合室にいた。——一週間のうちに、ひどく憔悴したように見えた。私の顔を見ても、無感動にうなずいただけだった。

「ゆうべ、テープを編集している間中、やつらが邪魔しに来ていました……」田村は、受付の所の、ガラスの割れ目をさした。「今日もはじめると出てくるんじゃないかと思いますが……連中は、ここにいますか？」

「います……」と、きみ子は言下にいった。

「はらいますわ。——洗面器に、お水をいただけません？」

テープを準備した診察室へ、田村は洗面器へ水をくんでもってきた。——きみ子は着物の袂を帯にはさみ、テーブルの上の洗面器の傍に両手をそろえてついて、じっと心気をこらすように水面をながめていたが、突然水の中に手をつっこむと、ぬれた手の雫を、まるで手刀を切るように、ピッ、ピッ、と四方にとばした。二度目は、神官が榊の枝ではらうように、私たちの頭上に雫をとばした。

そうやられて、はじめてわかったのだが、私たちの頭上から、何かが去って行った。

「もう大丈夫ですわ」彼女は袂をもどしながらいった。「おはじめになってください」

5

ききようによっては断末魔の悲鳴ともきこえ、またある意味では、性の快感の絶頂へとのぼりつめて行く女の叫びともきこえる、長い長い、継続するきみ子の絶叫からはじまるそのテープこそ、まことに異様なものであり、また、田村の運命を大きく変え、私のものの見方を変えてしまうものだった。

何ものかに押しつぶされるような苦しげなうめきから、恐怖と苦痛にみちたすさまじい叫び声にかわる時、私は何度もびくっとして、思わず腰をうかした。千万の、眼に見えぬまがまがしい牙や爪が、横たわっているきみ子の体をひっかき、ひきさき、奈落へひきずりこもうとしていた。まわるテープのむこうに、私はその気配をはっきり感じとる事ができて、思わず全身が総毛だち、顔を掌でおおった。

彼女をおそう千万の闇の悪鬼どもは、ただ肉体を傷つけ、苦しめるだけではなかった。やつらは、彼女のやわらかく、繊細な肉体の秘所を、冷たい、汚らわしい指で責めつけ、快感と苦痛を交互にもたらす事によって、彼女自身を狂わせ、この世から闇の世界へむかって「解脱」させて、彼らのすむ奈落へひきずりこもうとしていた。顔をおおってきいていると、今、やつらが彼女の

乳房をさわった。清純な下腹をなめ、かみついた。彼女の大理石のような内腿に爪をたてた。あたたかい秘所の奥のひだひだに指をもぐりこませ、もっとも鋭い快感のボタンをもてあそんでいる、といった情景が、手にとるようにわかるのだった。——根の国に去って、闇の洞穴の奥に、猥らな裸体で雷(いかずち)とともに横たわるイザナミノミコトのように、彼女の唇、両の乳房、下腹、両脚、陰所(ほと)に、いまわしい小鬼どもがうずくまり、それぞれの個所を責めているのだった。——こうした苦痛と、はげしい快感の交替は、彼女から次第にあの清楚な気品をはぎとり、彼女を混乱させ、惑溺させ、どろどろした塊にかえ、醜怪で、猥らな、怨念とあさましい欲望にみちた、「鬼」と「野獣」の中間存在のようなものに変貌していくようだった。今や「闇への解脱」——光明にむかっての解脱ではなくて——は達成されようとしていた。ききいる私が汗をかき、手をもみしぼり、息を荒らげているうちに、突然最後の何かがはずれた。長い長い、切り裂くような絶叫が、スピーカーからきこえてきた。叫びは長い尾をひいて、はるかに深い奈落の底へと落ちていった。私は思わず眼をつぶり、耳をおおった。田村は治療室でこの録音をとったはずであり、きみ子はベッドの上に横たわったままこの叫びを上げたはずなのに、その発声には、まるで彼女が実際に深い谷へ落下して行くような、おどろくべき立体感があらわれていた。

絶叫が奈落の底に消えたあと、テープは沈黙をつづけた。キャプスタンがかすかにきしむ音と、スピーカーからの、さやさやというノイズ以外何もきこえない。——私はそっと傍の田村ときみ子をふりかえった。きみ子の蒼白の顔は、つくりつけの蠟人形のように動かず、田村はといえば、

腰の上に拳をにぎりしめ、唇をかみ、その閉じた瞼の間から涙が一筋頬をつたっておちていた。

やがて、地底をひきずるような、低く、しわがれた、別人のようなきみ子の声が、ふたたびスピーカーからきこえはじめた。——彼女が語りはじめた瞬間から、そこにはまったく「別の世界」が展開しはじめた。あのすさまじい、闇へむかっての「肉体からの解脱」の苦痛を通りすぎたあと、彼女はもはや獣でも鬼でもなく、その世界における位の高い存在だった。そして、その「もう一つの世界」は、暗黒でもなければ、地獄の業火や腐臭にみちた世界でもなかった。はるか彼方まで見通しのきく、透き通った、しかし灰色の薄明におおわれた世界だった。

その世界には、「こちら側」の世界では見えない存在が住み、「こちら側」の世界とちがった秩序が支配していた。——しかも、その世界は、「こちら側」の世界とかさなりあっているのである。こちら側の世界で、「ポルターガイスト」とよばれる現象を起す異様なものたちも、たくさんむらがって住み、私たちの世界をのぞきこみ、時折、人をおどろかすいたずらをやったりした。

その世界を通して、私たちの世界を見ると、その風景はまるでちがったものに見えるのだった。——たとえば、大都会のビルの谷間や、繁華な街にも、私たちの眼には見えない「その世界の存在」が住んでいた。もともと彼らこそ、文明が押しよせ、大都会が出現する以前からの、その土地の住民だったのだ。ローマ以前、そしてキリスト教以前のアルプス以北ヨーロッパにひろがっていた「ケルト的世界」あるいは「北方ゲルマン的世界」の野や山や石に住み、ゲーテを頂点とするドイツ浪曼派の人々がその存在を感ずる事のできた「精霊たち」のような存在——日本でい

うなら農耕以前の、古代繩文人たちが、生きる上に、その日常の中にごく当然の存在として、見、聞き、感じる事のできた存在……いや、「農耕以前」の繩文人たちは、むしろ、こういった野や山や、草や木や、動物の精霊たちと同じ仲間であり、同じ世界の住民の一部として、これらの精霊たちといっしょに、その世界を形づくっていたからだ。

やがてこの世界に「外から」はいってくる弥生農耕文化が定着してからも、初期の農耕人たちは、「先住者」たちと「共存」し、「交歓」していた。なぜなら「さばえなす神」「螢火の如き神」が住み「草木物いう」弥生以前の日本列島において、彼らはまだまだ「少数者」にすぎなかったからだ。彼らの中の多くのおとなたちは、山野の中に「霊気」を感じ、精霊の存在を見わけ、言葉なくして「語りあう」事を知っていた。道行く時も、精霊にあいさつし、小用をたす時は声をかけてそこをどいてもらい、場所をつかわしてもらったら、立ち去る時に礼をいい、また時には田畑の稔りを、土地を貸してくれた「先住者」にささげる事を知っていた。——天地を遊行する偉大な精霊のめぐってくる時は、おとなたちが威儀を正してこれをむかえ、それらの偉大な存在を、まだ「感じる」事のできない子供たちを遠ざけ、深夜対座して天地の事、よその土地の事、また歴史のめぐり行くめでたさを語らい、のち、酒食をささげて神人ともに饗宴し、技芸をささげて旅情をなぐさめた。

だが、さらにたけだけしい、みずからの「神」をもち、「精霊」の存在がわからず、それと語らう事を知らない人々が来るにおよんで、すべてはかわりはじめた。彼らはすべてを慴伏させる

精霊をもつといい、また時には自らがその精霊であると称して、「先住者」たちの存在も、そのわけあってすんでいる「領域」も見ようともつとめなければ、みとめもしなかった。——彼らはそこを、あたかも万物「無住」の土地のごとく、土足でふみこみ、かってにきりひらき、彼らの勝手な秩序を、そのつよい、たけだけしい力をもってうちたてはじめた。

当然そこに衝突が起った。——だが、それまでに、相互に精妙な「秩序」を形づくっていた精霊たちの抵抗は、その「秩序」が外部からこわされ出すと、もろいものだった。精霊たちのすみ家である大木は切られ、野は焼かれ、蛇、猿、鹿、猪、狐、狸、鳥、なべて年経る獣をかりた精霊たちは、次々に「英雄」や「豪傑」たちによって「退治」されて行った。——こうして、ついに勢力の交替が起った。精霊たちは「開発」の手ののびぬ深山の中へ、そしてまた「影の国」へとかくれはじめた……。「影の国」——それは、夜の闇の世界だけではない。現実のすぐ裏側に、それと密着し、かさなりあってひろがっている「光のあたらぬ側」の、薄明の世界である。この世界の一方に、常闇の無明の世界がひろがり、そこには何か、得体の知れぬ、恐ろしいものが住んでいる。歴史にはげしい怨みを抱く怨霊たちもまたそこにいる。歴史の犠牲となって惨殺された無辜の民の、尨大な数の死霊もまた、この国にいる。首のない、また胸に穴をあけられ、腹をさかれ、腕をもがれた人たち……戦争や、飢饉や、疫病、天災、犯罪、そして事故で死んだ人たちの、おびただしい霊が、この薄明の国をさまよい、私たちの世界のすぐ傍で、「地上」を追いはらわれた精霊たちとともにじっと私たちの日常を見つめているのだ。

都会の路地、団地の公園、往還はげしい道路、またあなたたちの家の前の下水に、道ばたの草むらに、精霊たちは今もいる。——開化の波が全土をおおい、もはや自然の中に彼らのすむ所がどこもなくなってしまった現代では、すべての精霊が、現代とかさなりあう「影の国」——つまり、私たちのすぐ傍の、私たちからは見えない世界にすまざるを得なくなってしまったのだ。

それはまた、私たちの世界とは、全然ちがう「秩序」をもった、世界なのだ。私たちの世界の「理屈」は、この世界には通用しない。しかし、この世界としては、ちゃんと首尾一貫しているのだ。数年前、羽田沖での国内線の墜落という大惨事につづいて、わずか数日の間に、羽田空港国際線の着陸失敗、富士山附近における外国旅客機の墜落と、たてつづけに大惨事が起った事を御記憶であろう。——あれも、私たちの眼から見れば、不幸な偶然の重なりとしか見えないが、「影の国」から見れば、それにはすべてちゃんと関連があり、一貫した理由のあるでき事だったのである。最近の著名作家の自殺も、私たちの世界とまったくちがった、「原因」があったことが「影の国」では見えるのだった。そこには、われわれの日常の理解をこえた、「怨念の秩序」ともいうべきものがあった。人がまるで理屈にあわないきっかけから、他人や、世の中や、あるいは自分自身にさえ、「いわれのない怨恨」を抱いてしまう。怨恨は理屈ではとけない。そしていったん怨恨の核（コア）がまかれてしまえば、そこには思いがけないものが、非合理な秩序でむすびつき、はげしい「怨恨の体系」をつくりあげる。すべてはあいつが悪く、あいつの陰謀である、そういえばあれも、これも、あの時もあれも——といった具合に……。

「影の国」の秩序も、これに似た秩序をもっていた。——そしてまた、そこには、歴史の「結果」や、現在生きているものの繁栄や幸福、あるいは私たちの世界の仕組みでは、ときほぐす事も解決する事もできない、「かつてしいたげられて死んだもの」の怨恨が、灰色の陽炎（かげろう）となってゆらめいているのだった。

きみ子は、この「影の国」で、「——姫」とよばれて、位の高い、由緒の正しい存在らしかった。——そして、いま、彼女をめぐって「影の国」で何かが起ろうとしていた。彼女のまわりに、私にはわからない「何か」が急速に集りつつあった。さまざまの「怨念」が、彼女を核にしてむすびつき、もつれあい、そこにいまや、まがまがしくも巨大な「邪悪」の意志がはっきりと形をとりはじめていた。それは彼女の意志とかかわりなく、次第に凝集し、密度をあげ、ふくれ上り、うねりながら、さらに巨大なものとむすびつこうとしていた。むすびつく事によって、より一層強力になり、やがてわれわれの住む「現世」にむかって、ほとばしろうとしているのだった。

——テープが終るのと、彼女が椅子からくずれおちるのとほとんど同時だった。まっさおな顔に、冷や汗をいっぱいうかべた田村がゆっくり立ち上ると、紫紺の花のように床にくずれた彼女の体をぎごちなく抱きあげた。

診察室を出て行く田村に声をかける事もできず、私は呆然と椅子にすわっていた。——静まりかえった部屋の中で、テープをまききったレコーダーがまわりつづける、カサッ、カサッ、という音がいやに高くひびいていた。

6

田村からきみ子と結婚する、という意思をうちあけられたのは、それから十日もたたないうちだった。

「ちょっと待て……」私は、何となく胸をつかれて思わず、彼の腕をおさえた。「すこし——すこし考えたらどうだ？　彼女はたしかにチャーミングだ。今時あんな女らしい女性はいない。しかし——彼女は、ふつうの女性じゃないし、それに、いろいろ複雑な事情があるらしい……」

「わかっている……」田村は色白の頬をひきしめてうなずいた。「わかっているから……結婚する気になったんだ。ぼくはあの人を愛しているし、あの人もぼくを愛している。そして——あの事について、彼女をまきこまれつつある事態からすくい出せるのは、ぼくをおいていないと思う」

「彼女の縁談の事を知っているか？」と私は慎重にきいた。

「話はきいてるが、別にきまったわけじゃないだろう？」田村は気にもとめないようにいった。「彼女の伯母さんという人にも、きのう話した。縁談の事は、むこうから一言もいわなかったが、彼女も別に気が進んでいたわけじゃなかったらしい」

「気をつけろ……」私はいった。「慎重にやるんだ……」

「大丈夫だ。あんな連中に負けやしない」田村は微笑した。「あの連中の事は、ぼくにもだいぶわかってきた。むしろ——いまは、あの事について、理解者だと思っている。だが……彼女をまきこみ、彼女をかついで、彼女まで邪悪な存在にかえてしまおうとするのはほうっておけない」

田村は私の忠告を、「あの世界」の因縁の事とうけとったようだが、私はもう一つの事が気にかかっていた。——私の方のその後の調査によると、ここ四、五日の間に、彼女の縁談は急速に動きはじめていた。彼女がそれを田村に話したかどうか知らないが、四日ほど前に当の相手と、別に見合いという事ではなく、さる所であっており、相手は彼女が気に入って、話が急に具体化しはじめる形勢にあった。

そしてその背景に、何か大きな「構想」が動いているらしい事が、私にもうすうす感じられてきた。むろんはっきりとわかるはずはない。私の妄想——下司のかんぐりかも知れない。しかし、彼女の縁談の背後で、誰かが——私などのたしかめる事もできない大きな存在が、彼女の縁談の相手がつとめている「宗教法人」をねらっている、という事はありそうな事だった。

宗教団体をねらってどうするのか、という事までは、私にはわからない。——うかんでくる顔ぶれからみて、何か政治的なねらいがあるのだろう。そして、天野きみ子の霊媒としての能力が、その縁戚関係が、その構想のどこかに必要とされているのだろう。どう利用しようとしているのか、これから先どんな筋書きが準備されているのか、そんな事は私の類推の埒外だった。

五日ほどたって田村は、きちがいのようになって社へ電話してきた。

「彼女がいなくなった！」彼は電話口で叫んだ。「彼女の伯母もだ。何かわからないか？」
「おちつけ……」と私はいった。「二人で旅行にでも出かけたのかも知れん」
「そんな事はない！　三日前、デートにこなかったんで電話してみたんだが誰も出ない。毎日家へいってみたがずっとしまっている。そうしたら、きのう妙な電話がかかってきた。男の声で、彼女の事をあきらめろっていうんだ。今日しらべてみたら、あの家はもう不動産屋にわたっている」
「その電話の忠告にしたがった方がいいと思うな……」と、私はいった。「田村――あきらめて手をひいた方がいいかも知れん。これはどうも……どちらにしても厄介な事なんだ」
「彼女の縁談の相手の事を、何も彼も、洗いざらい教えてくれ！　たのむ！　どうせその連中がかんでいるにきまっている」
「田村、気をしずめてよくきいてくれ……」私はちょっと唇をしめした。「今が潮時だ。この件はもうこれ以上、深入りしない方がいい。この世界の事にも、あちら側の事にも」
電話がはげしい音をたてて切れた。私は溜息をついて受話器をおいた。――私は仕事の関係上、「現実のこわさ」について少しは知っていたが、学究肌で坊ちゃん育ちの彼は、ある意味で世間知らずであり、その性格として、何かを追究し出すと夢中になる所があった。彼がこの件について私を責めても、私は資料をわたさないつもりだった……そこまで考えてきて、私はハッとした。最初の調査書類を、封筒に入れたまま、彼の家においてきた事を忘れていたのである。あわてて

医院の方に電話を入れたが、先生は御旅行に出られました、という返事がかえってきた。
田村からの、最後の電話がかかってきたのは真夜中だった。私が家にかえりついて靴をぬいだとたん、ベルが鳴った。
「すぐ来てくれないか？」
田村の声は妙に沈んでいた。
「今、どこだ？」と、私は腕時計を見ながらきいた。
田村は、私の家から、車で二時間ほどで行ける、山間のホテルの名を告げた。
「ちょっと心配したぞ……」私は帽子をかぶりなおしながらいった。「彼女の事は、あきらめたか？」
「今、ここにいる……」と、田村はいった。
「えっ？――どうやって見つけた」
「彼女が、ぼくを呼んだんだ……」と田村はいった。「軟禁されていたのを……何とか……」
私は寝ぼけ眼で出てきた妻に、一言二言つげると、急いで家をとび出した。山間の宿へタクシーをとばす間、実体のはっきりしない胸さわぎが、絶えずこみ上げてきて、私はいらいらしつづけだった。彼女が霊能者だという事を、私はうっかり忘れていた。もっと強く、田村をとめるべきだったかも知れない。
ホテルについた時、ずっ下の方の町から近づいてくるパトカーのサイレンをきいたような気が

した。ホテルの中は妙にざわつき、客や従業員が廊下をうろうろしていた。田村の部屋をきくと、フロントは急に顔をこわばらせた。

「だめです。百二十五号室は、ただいまちょっと事件があって、はいれません」

とめるのもきかず、私は廊下を走った。奥へ行くほど人間の数が多く、百二十五号室の前では、興奮した女客が、まわりの客や従業員に声高にしゃべっていた。

「いえね、隣の部屋で、何かがガチャンガチャンこわれる音や、壁に何かぶつかる音がするでしょう。それで喧嘩かと思って、ボーイさんに電話したら……」

「あ、お客さん困ります。はいらないでください」とボーイが私を押しとどめた。

「どけ！——おれは呼ばれたんだ」

私はボーイをつきのけ、ドアをあけてとびこんだ。マネージャーとボーイ頭らしい男が私をとめようとしたが、私はかまわずベッドの方に進んだ。——床の上には灰皿やコップの破片が散乱し、椅子がひっくりかえり、スタンドがとんでもない所にとび、あいつらがまたこの部屋であばれた、という事が一眼でわかった。

きみ子は、ホテルの浴衣一枚まとっただけで、ベッドの上にたおれていた。傷一つない、すき透るように白い裸身は神々しいようだった。顔にかぶせたタオルをとっても、苦しんだあとはちっとも見えず、ほほえんでいるようにさえ見え、それが細いのどの、二つの指の痕と異様な対比を見せていた。

田村はベッド脇の椅子にすわって、涙を流していた。顔色は青ざめていたが、もう動揺していないようだった。額の所に、とんできた灰皿か何かで切ったらしい傷があり、そこから頬へ流れおちた血がかたまりかけていた。「彼女が……殺してくれ、といったんだ……」と、田村は私を見ずに、静かな声でいった。「彼女は……苦しんでいた。こちら側でも、あちら側でも、……みんな彼女の存在を、彼女の意志に関係なく、自分たちの事にまきこもうとし……彼女は死ぬ苦しみを味わっていた。その上彼女は……あちら側の事とこちら側のでき事とを、自分でむすびつける役になるのがいやだった。彼女は君に電話する前にも、ぼくに殺してくれ、とたのんでいた。そうしたら——せめて、こちら側の悪縁だけでもたちきれる、と……」

「やつら……来たんだな？」私は、室内を見まわしながらいった。「彼女を——連れて行ってしまったか？」

「やつらは……ぼくと彼女が愛しはじめると、はげしく邪魔をしにくるんだ……」田村は唇をつよくかんだ。「やつらは、彼女をぼくからひきはなし、彼女をむこうの世界にひきずりこもうとして……セックスがたかまって行くに連れて、彼女は死ぬ苦しみを味わわされるんだ。こんな……こんな事が、たえられるか！　愛している女と……愛されている女と……愛しあおうとする行為が……相手もそれをもとめている行為が……相手に最大の苦痛をあたえるなんて……」

田村ははげしく嗚咽しはじめた。

「それで君は——彼女をやつらにくれてやったのか？」私は壁にもたれて腕を組んだ。

「君の愛も——君たちの愛も……やつらから彼女をもぎはなす事はできなかったのか？」

「癌にかかった恋人を持つ男が、その苦しむ愛人から、安楽死をもとめられらどうする……」

田村は顔をまわしたままいった。「これは……おれには……おれの力では、どうする事もできない事だった。せめて……彼女が求めたように……一方の苦しみからだけでも、ときはなってやる事が……何度も求められ、何度も拒否したが、彼女の苦しみを見かねて、とうとう……」

その時、刑事たちがどかどかと部屋にはいりこんできて、彼の言葉は中断された。

「嘱託殺人」の立証は困難だった。私も何度も証言台にたち、例のテープも一応提出されたが、弁護士は、かえって心証を悪くしたかも知れない、といった。

検事側は、情痴殺人の線で論証をすすめて行った。——医師が患者に邪な心を抱き、強引に交情をせまった。被害者に縁談がもち上っているのを知って、保護者の伯母に結婚を強要し、見幕をおそれた伯母と被害者が姿をかくすと、狂気のようになって探し出し、山間のホテルで結婚をせまったが、被害者が抵抗したのでカッとなってしめ殺した。——ありふれた筋書きだが、あのホテルの部屋の有様を見たら、誰でも二人の間に、はげしい争いがあったと思うだろう。ポルターガイスト現象など、現物を見たものでなければ信じられないだろうし、たとえ外国の例を持ち出しても、そんなものは傍証にもならない。そして、検事側の告発の筋をささえているのは、彼女の伯母の証言だった。

殺人の「動機」にいたっては、彼が話せば話すほど、頭がおかしいか、それとも誰も信じないような大ぼらを強弁し、法廷を侮辱すると思われるしかなかった。精神鑑定の結果は「正常」だったから、のこる見方は後者しなかった。弁護側の証言に立った私までが、社会的信用が危くなる始末だった。しかし、田村も私も、検事側の論告の線は、最後まで肯定しなかった。

判決の日、私も法廷へ出かけた。裁判長は、判決の前に、被告に何かいう事はないか、といった。

「あります、裁判長……」と田村は、意外にしっかりした声でいった。「私としましては、この世のルールでは、どうしてもわり切れぬ事が実在する、という事を、くりかえしのべてきたつもりですが、それが誰にも理解されなかった事は残念です。が、しかたがありません、——この上は、たった一つのおねがいがあります。どうか私を死刑にしてください……」

裁判長は苦い顔をし、弁護士は頭をかかえ、検事は冷笑をうかべ、傍聴席はざわめいた。

判決は、検事の論告を全面的にうけいれ、懲役十二年だった。

判決をうけて退廷する田村に、私は声をかけようとした。が、田村は、もういいんだ、というような微笑をちらとなげかけただけで、足早に出て行った。——その微笑を見た時、私は彼が上告をしないつもりだな、という事がわかった。

そのあと社にもどる気にもならず、電話だけいれて、街をぶらぶらし、夕刻になって家路についた。——彼女の所へ行きたがっていた彼に、彼の指定した薬品をこっそりさし入れる度胸がな

かった事が悔まれたが、獄中の友人の自殺幇助を犯す気にはどうしてもなれなかった。

郊外電車の駅からわが家まで、とぼとぼ歩いてかえる途中、いつも行きかえりに見るもとの村社の森に異変が起っている事に気づいた。——きのうまでその森にいた何ものかが、今日はどこかへとび去ってしまい、森は蟬のぬけ殻のように虚ろになっていた。よく見ると、新しくできる造成宅地の一部に売りはらわれた森の一廓に、最初の斧がはいり、樹木が五、六本きりたおされていた。彼女と彼につきあううち、いつの間にか私もそういう事が感じられるようになっていた。だから、夕闇の中に自宅の屋根が見えた時、何かが来ているな、という事はすぐわかった。——ちかづいてみると、庭のテラスの窓の所に、黒い小さなものがむらがってとんでいるのが見えた。蝙蝠かと思ったら、大小の無数の蝶だった。私は異様な感じがした。蛾のとびはじめる時刻には、蝶は休みにつくはずだのに……。

門燈はまだついておらず、鍵もかかっていなかった。奥に声をかけ、玄関のすぐ横の応接間にはいって、とにかく電燈をつけた。——つけたとたんに、はげしい家鳴り震動がはじまった。地震でない事は、ガラス戸や窓がはずれそうにはげしく鳴るのに、床がちっともゆれない事でわかった。

三十秒ほどで震動がやむと、電燈がふうっと暗くなり、背筋にぞくっと悪寒が走るとすぐ傍に天野きみ子が立っていた。

「田村さんを……こちらにこさせてあげてください……」

きみ子は、低い、地の底からひびくような声でいった。——私はだまって、ミディのスカートをはいたきみ子を見つめていた。

「おねがいします……私のまわりにあつまってきている怨念の糸をときほぐすには、どうしても、あの人の力がいるのです……こちらを……私たちが力をあわせて……しずめなければ……」

「あなたにできないんですか？」と、私はかすれる声でいった。「あなたの力ならきっと」

「でも……私は……私は……私は……」

突然彼女は苦しそうにのどをかきむしり、長椅子の上にどっとくずれおちた、——電燈がもとの明るさをとりもどし、私は長椅子の上にたおれたきみ子の体に手をふれた。

「あら、あなただったの？　おかえりなさい」もとの顔にもどった女房は眼をこすりながら大きな欠伸をして長椅子の上に起き上った。「うたたねしちゃったわ、ごめんなさい……」

田村は、控訴せず、刑務所へうつされる前の晩、拘置所の独房の中で死んだ。——死因は心臓麻痺だった。

田村ときみ子の事件はそれで終りだった。大した週刊誌種にもならなかった事だし、すぐ人々の記憶から消え失せてしまった。事件の異常さに気づいた人もすくない。神経科医が神経症になって、頭が変になった、というくだらないジョークが言いかわされたくらいだ。

だが、それ以後、私の上に奇妙な変化が起った。——それまで全然見えなかったのに、時折、

「影の国」に属するものの姿が見えるようになったのだ。道を歩いていても、ふと小さな露地にそれがうずくまっているのが感じられ、雑踏の中で、むこうからくる人の肩に、それがのっているのが見える事がある。新しくついた切り通しに、何か猛烈な、精霊のようなものがわだかまっている気配が感じられ、そういった所は奇妙に事故が多い。

時折、頭がおかしくなったのかと思う事があるが、半分は「影の国」の存在を信じる気になっている。——いずれにせよ、われわれのものの見方はかたよりすぎ、不完全なのだ。とりわけ「歴史」に対してそうだ。精霊や、妖精、怨霊や、悪縁や、——かつてまじめに論じられ、現代では一笑に付せられているこういったものの存在を、ある、あるいは、あったと仮定して世界を見なおすと、今まで見えなかった部分が見えてくる、という事がたくさんあるのではないか？ばかばかしいと思うかも知れないが、それなら、この未曾有の文明がさかえる現代に、衆人環視の中で起るあの「ポルターガイスト現象」はどう説明するのか？

田村ときみ子は、しばらくたって、深夜、時折、私を訪ねてくれるようになった。あまりありがたい訪問ではないが、しかし「あちら側」の話をいろいろきく事ができる。その後二人はうまく行っているらしいのは何よりだ。——最近来た時、二人はうれしそうに、私が彼らの仲間にくわわる日が近い事を告げた。体の内部のなおりにくい所に、悪性の癌が発生しているというのだ。あちら側に、有力な知り合いがいるのだから、別段行くのはそれほどいやではないが、しかし、念のため、現在内科と精神科に、週二度ずつ、自宅通院している。

写真の女

1

雨に濡れた坂道を上って行く途中でそれを見つけた。

山裾をまわって行く旧道のぬかるみからそれて、だらだら坂がゆるく折れまがりながら山の中へはいって行く。左手が杉木立におおわれた斜面、右手に生垣をめぐらした藁屋や瓦屋がとびとびにつづき、ひっそりと雨にうたれていた。いつもなら、かすかに音をたてて澄んだ山水を流している道わきの小溝も、きのう今日、倍ほどに量のふえた流れが黄色く濁り、どうどうと鳴っている。せまい坂道は、降りつづく雨に洗われて、岩角や石が顔を出し、雨水が小さな流れを幾筋もうがっていた。

岩角にすべらないように、流れにふみこまないように、九十九折れになって行く坂道を、あちらにとび、こちらによけながらのぼって行くうち、とある角をまがる時に、ぬれた赤土をふんで少しよろけ、かがむように片膝を折った。——その時、路傍のぬれた草むらの上に白いものが眼

についた。

何の気なしに拾い上げ、裏がえしてみると、例の露骨な写真だった。数秒ながめ、もとの草むらの上に投げすてて、また坂をのぼり出した。そんなものを見つけて大もうけをしたような気分になるほどの年頃でも、も早やない。とりわけこの二、三日、長雨のせいか気が滅入り、そういったなまぐさい事には顔をそむけたいほどの気持ちだった。

だが、二、三歩行きかけて、ふと、いま見た写真に、心がのこるのを感じた。——劣情からではなく、写真の中の顔だちに、ひかれるものがあったのである。

ふりかえると、さっき裏むけにおちていた写真が、今は表を灰色の空にむけて雨にうたれていた。——裸の女が、むき出しで雨にぬれている……そう思うと、それが写真であっても、何となくいたましく、坂を二、三歩さがって、もう一度草むらに手をのばした。ひろうつもりはなく、ただ裏がえしてやるだけのつもりだったが、写真に眼が行くと、結局ひろいあげてしまった。ついでに傍に咲いていた、可憐なムラサキツユクサの花を一輪、摘みとった。

一丁ほど坂をのぼって、借りている農家の離屋（はなれ）にかえりつくと、ツユクサの花を机の上のコップにさし、その横へ、滴をぬぐって写真をおいた。キャビネよりやや小ぶりの印画紙に焼きつけた画面は、かなり変色している。——原板がかなり古いものであろう事は、こちらをむいている女の髪型が、古めかしい「耳かくし」である事で知れた。鴨居にかけられた額は、観兵式か何かの写真で、部屋のたたずまいも、大正末か昭和初めを思わせた。部屋の隅の衣桁に、黒っぽい地に飛び矢絣（やがすり）の単衣らしい着物がひっそりとかかっている。

女は素裸で、こちらをむいて男の上にまたがっていた。——年ごろ二十三、四だろうか。鼻筋が通り、眉が形よく弧を描いて、ひっそりと伏せた睫毛の影が濃く、そのおとなしげな眼鼻だちが、ふっくらした下ぶくれの顔によくうつった。平凡な、しかしやさしげな体つきをしている。撫で肩で、丸い乳房はそれほど大きくはなく、垂れてもいない。下腹から腰、太腿へと流れる線が、なんともいえぬ女らしい丸みをおび、恥毛のはえ方さえおとなしやかだった。顔をすこしうつむけ、ぼってりした唇をややひらいていたが、その顔は画面の下に切れている男の顔にほほえんでいるようにも見え、眉をかすかによせて身もだえているようにも、また、そんな姿をカメラにさらしている事を恥じらっているようにも見えた。上体は力なく片方へかしぎ、一方の手は男にとられ、のこる手は畳の上について、そのほそい指先に、わきにまるめられた麻の葉模様の夏蒲団の布をひっそりとつまんでいた。

その指先を見つめているうちに、かすかな懊悩が湧き上ってくるのが感じられた。その写真がとられてから、長い歳月が流れた。その時、若く、やさしげな体つきをしていた女は、その後どうなっただろう？　こんな写真をとるぐらいだから、もとより幸せな身の上ではあるまい。きっと男にだまされだまされして……最後はいったいどうなっただろう？　それなりに安定した晩年をむかえただろうか？　そんな事はあるまい。恐らくだまされつづけながら老いさらばえ、そし

て……

それにしても、こんな写真をとられる女が、なぜこんなに、やさしげな顔をしていられるのだろう？　きっと、かしこくはないが、気のやさしい、男の言いなりになる女にちがいない。——じっと見ていると、その時の部屋の有様や画面のこちら側でカメラをのぞいている男の気配までが、うかび上ってきた。きっと、どす黒い生活のどぶ泥が骨の髄まで染みついたような男にちがいない。レンズをのぞきながら、女に、猥らな言葉づかいで、もっとこうしろ、ああしろと注文をつけていただろう。恥ずかしがる女を、毒々しい調子でどなりつけていたかも知れない。女ははじらいながら、着物をぬぎ、裸になり、相手の男の上にまたがり、いわれるままに体を開き、表情をつくり……だが、最後の恥じらいが指先にのこってしまったのだ。麻の葉模様をつまんでいる指先の表情、無意識のものにちがいない力のこめ方に、その事がはっきりと感じとられた。

この写真をとった時、女はまだ、そんな事に慣れていなかったにちがいない。ひょっとしたら、初めてだったかも知れない。——じっと見つめていると、女の息づかい、やわらかい肉のたゆたいまでが、なまなましく感じられてくるような気がした。彼は息苦しくなって、膝をかかえ、体をまるめた。

その時、女は若かった。若く、やさしく、いっそ初い初いしくさえある肉体をもって生きていた。そして、それから——恐らく半世紀に近い時が流れ、その肉の上に、むごたらしく歳月がきざまれて行った。だが、かつて若かった時の女の肉体の影は、今、ここに半世紀を経て、彼の傷

だらけの机の上にあり、あらわに、恥ずかしげに息づいている。猥らで、あからさまな姿態が、「生まの肉体」の匂いを事さらに強くつたえ、そののちその生ま身の上にきざみこまれて行った歳月のいたましさが、ひしひしとせまってくるようだった。

このあと、この女はどうなっただろう？　どんな人生を生きただろう？　——その事を想像しようとすると、突然頭の中で、思いがけない回想の扉の一つがひらき、昔、彼が若かったころ、金で買った女たちの事が思い出されてきた。紅燈のあふれる街で、姦しく客をよんでいた女たち……、あの当時は彼も若く、買った女たちも若かった。あの娘たちは、今、どうしているだろう？　金で買ったという事には、今ふりかえっても、何のやましさもなかった。なぜなら、彼も彼女たちと同じように——あるいは彼女たちよりももっと貧しく、みじめといえば、なまじ学生などという身分は、同じ年頃の工員たちよりもさらにみじめで、うす汚れていたからだ。女たちのあるものは陽気で、あるものはやさしく、一様に無知だった。だが、その時、彼女たちの肉体は一様に若く、数はたしかにこなしていたが、その言葉づかいや技巧は未熟なままに職業的に露骨になり、すぐ見えすく嘘のようなものになっていて、それだけに、ただただ肉の若さだけがむき出しにされているような感じだった。買った買われたの関係がまた、愛のモラルのといった、性行為にまといつくびらびらしたものをはぎとるのに役だっていた。商取引きのぎりぎりの露骨さが、お互いどうしようもなく「肉」である事をはっきりさせた。

ああいった、物悲しいまでにむき出しの「肉」の出あいを、今の若者たちは、おそらく味わう事

はあるまい。あの猥雑な三流の遊廓で、彼は人間が誰も「肉」であり、「肉」である人間を、「肉」であるが故にいとおしむ事を、肌身に学んだのだ。彼の抱いている女は、三十分前、ごつごつ筋くれだった刑務所帰りに抱かれていたかも知れない。値切られてふくれ面の女は、次の客を期待して彼をせかす。馴染みになっても、ほかの客をとらぬわけではない。ある女は、わざとらしくばかばかしく鼻を鳴らして見せ、ある女は抱かれながらあや取をしており、またある女は長々と自分の身の上を語ったが、その物語りは彼がその日床屋で待つ間に読んだ表紙のとれた通俗雑誌にのっていたものだった。ある女は、小学生のような口ぶりで、憧れのタイプの男性について——大抵その時売れっ子の流行歌手か野球選手になぞらえて語り、そういったタイプの男性と世帯を持つ事について語った。だが、彼女らは、愛などというものは厚ぼったいザラ紙製の大衆雑誌の中にだけしかないような、架空の世界のものである事をどこかではっきり知っており、結婚がまた、愛などというものと関係のない、生活の営みの上での協同である事も、よく知っていた。

そんな彼女たちを、いつしか彼は愛するようになっていた。愛するといっても、結婚するの、救うのといった行為を導くものではない。彼はただ、生身の「肉」として生きる彼女たち、「肉」であるような人間を、「肉」の彼方で、しょう事なしに人間であるような存在をいとおしむ事を知ったのである。獣の裔（すえ）である人間は、肉として母体の胎内に芽生え、泣きさけぶ肉塊として生れ、みずみずしく、たくましく育ち、やがて衰え、あるいは蝕ばまれ、醜怪に老い朽ち、滅んで行く。何十万年来、いやそれよりはるか遠い昔から、人間は一人々々がそういったものとして存

在しつづけてきた。「肉」の彼方に、文明や、正義や愛や救済といった壮大な虚構を築きはしたが、それがいかに壮大複雑であろうとも、太古より、個々の「肉」を貫いて流れ、個々の「肉」にうけつがれ、きざまれて行く盲目の「獣の刻（とき）」を押しとどめる事はできなかった。——世にある時の栄光も、後世にもてはやされる名声も、ほろび行く肉をとどめる事ができないならば、本人にとっては、畢竟、世にある上の「慰戯（デイヴェルティスマン）」にしかすぎまい。生れ、生き、老い、滅び行く「肉」の流れは、ついには人類全体の滅びにつながり、最後の「肉」がほろぶ時、人類のきずき上げた壮大めく、歴史や文明もまた、ほろぶのであれば、文明といい、精神といい、所詮「肉」の彼方にたちのぼる幻でしかないではないか。

その事をかつて、無知な娼婦たちから学び、同時に、「肉」としての人間を「肉」であるが故に愛する事を学んだ。——彼女たちの腹の上で、文明は消え失せ、人の歴史は、生れ、成長し、ほろんで行く、長い長い「肉」の列としてうかび上ってくる。固い、岩の星の表面にころがりちらばっている三十五億の肉塊（ミートボール）……娼婦たちは、なまぐさく、若い、雌の肉塊としての存在をむき出しにし、若い活気にみち、かまびすしく生きていた。彼女らの前には、美や、愛といったあやかしは、徹底的にその虚構性をあばかれ、もはや主役として「肉」の上に君臨する事なく、それ故に、夜店で売っている十円の指輪の、ルビーを模した赤いガラス玉のかがやきのように、一時的な慰戯たり得た。彼女たちは、文明などというものが築かれる以前、人間がまだ、獣のわかれとして、荒野をさすらっていた時と同じ存在として、そしてまた現在、未開の土地の奥に、文明

の眼にふれず、文明を知らずに生れ、生き、死んで行く女たちと同じ生を生きていた。麻薬の夢にすぎない「美の絶対性」や、衰亡し行く肉への恐怖の裏がえしにすぎない「精神の価値」や、こわもてする「人間性の尊厳」や——なべて「超越の虚構」とは無縁な所で、無邪気に、露骨に、猥褻に、きげんよく、それなりの喜びや悲しみ、怒りや苦しみや恐れを、生きていた。

そういった娼婦たちから学んだ事が、その写真の上に、肉の香りをかぎとらせ、そしてまた、その写真の古さが、ほろび行く「肉の時」を思い出させてしまった。——あの娼婦たち……彼が若い時に買った、あの三流遊廓の、若い、元気な女たちは、その後どうなったか？　赤線廃止後、どういう風に年をとって行ったか？　あの当時、彼女らは彼と同じぐらいの年恰好だった。だから、今は、彼が年をとったのと同じように年をとっているだろう。——陽気で、ころころした体つきで、何かといえばげらげら笑いころげたあの娘はどうしただろう？　二の腕に、小さな達磨の入れ墨をしていたうすのろの大女。——テンプラ大学生に惚れて、いつもめそめそしていた文学好きの娼婦、ヒロポン中毒でヒロポンが切れると大あばれした三白眼の娘……彼女たちは、その後どうしただろう？　あの当時、彼のよく通った遊廓だけで、何百人といった娼婦たちの一人一人は、その後どうなって行っただろう？　赤線廃止後、結婚して世帯を持ったものもいるだろうか？　あるいはもぐりで同じ商売をつづけたのだろうか？　つづけたにしろ、もう今は、体を売れるほど若くはあるまい。

彼女たちの上に、その後、どんな「時」が流れ、彼女たちの一人一人は今、どんな人生を眺めているのだろう？——しとしと絶え間なく降りそそぐ灰色の雨を庭先にながめながら、彼はその事を少しでも想像してみようとした。

だが、雨の音に押し流されて想像力は一向にはばたかず、視線はまた、机の上のあの写真にもどってしまうのだった。生ま乾きに波うちはじめた印画紙の上で、耳かくしの女は、股間に顔のうつっていない男のものを半ばさし入れながら、はずかしげに、そして幾分わびしげに、そのやさしい体をさらしていた。——このような若く、やさしい体の上に、半世紀もの刻がきざまれたとは、なんという無惨な事か！

だが、何ものもそれをとどめる事はできず、すでに時の爪は彼女を存分にひきさき、おし砕いた。この事はどうしようもない事だ。——それにしても、こざかしい人間は、それと知らず、何というむごたらしいものを発明してしまう事か……彼は写真を、ツユクサを入れたコップにたてかけながら思った。——なまじこんなものが発明されてから、人間の陰微な懊悩は倍加されたにちがいない。なまじ「時」にさからって、その生ま身の断面を切りとったりするから、「時」はすべてが失われてのち、失われたものをつきつけて復讐するのだ……。

写真の女は、その角度から見ると、ほほえんでいるように見え、その事が、彼に一層辛い感じをひき起した。机の前に、膝を固くかかえてうずくまり、かかえた膝の間に顎をうめながら、彼は写真をながめ、そのむこうに、たえ間なく降りしきる霖雨をながめた。——雨は軒をうち、荒れた庭をうち、紫陽花の葉をうち、槇や黄楊や柊の植えこみをうっていた。彼はじめつく畳の上

にちぢこまり、かすかに体をゆすりながら、その雨音の彼方に「獣の時」を——耳かくしを結った写真の女を押しながし、陽気な娼婦たちや若かった彼を押しながし、今、この地上にあるすべての人々を、ひとしなみに押し流して行く、生身の「肉」にきざまれる盲目の刻の足音を、身をかたくしてききいっていた……。

2

ところが——その「写真の女」に、翌日彼は会ったのである。それも、彼の下宿のすぐ近くで……。

夜も昼も、晴れ間もなしに降りつづく淫雨のうっとうしさに、街へ出て昼酒でも飲もうと思って、昼過ぎに離屋を出た。前日よりさらに水量を増した溝の水が、坂道を一丁ほどくだった最初の曲り角で、とうとう路面半分にあふれ出していた。それをよけようと、角の一番内側の草をふんで曲ったとたん、同じように水をよけて、一番内側を曲って来た蛇の目傘と、出あい頭にぶつかりそうになった。

「失礼！」

と叫んで、ぬれた草にすべりそうになった足をやっとふんばると、むこうも、「あら、ごめんなさい……」

といって、よろけた。路の真ン中の方へ泳いで行きそうになる先方の手を、反射的につかんで

ひっぱると、

「まあ、どうもすみません……」

おかしそうにくすりと笑って、腰をのばすと傘をあげた。とたんに、彼は眼の上を平手でひっぱたかれたような気がして、息をのんだ。

色白の、ふっくらした、おとなしやかな眼鼻だち、そして今どき珍しい耳かくし——を結った顔は、まぎれもなく、前日その場所でひろった、あの露骨な写真の上にながめたものだ。眼をこすって見なおしても、まちがいようがない。ちがっているといえば、左の眼の下に、これは写真にうつっていなかった小さな泣きぼくろが一つ——だが着ているものも、紺地に白赤の飛び矢絣のセルの単衣で、写真の背景にあった、衣桁にかかっていたものと同じである。

「どうなさったの？」

棒をのんだようになって、まじまじと見つめている彼を、女は下からおどろいたように見上げた。甘い、すこしかすれた、やさしげな声だった。

「私の顔に、何かついていて？」

「いや……」彼はにわかにどぎまぎして、かっと血が頭にのぼり、「あ、あなたはたしか……」

と、口走ってはならぬ事を口走りかけて、またさらに一層周章狼狽し、眼の前が赤くなって汗がどっとふき出すほど逆上してしまった。

「え？」

と、女は涼しげな眼を見張り、あたしがどうかして？　というように首をかしげて見せ、にわかに、

「あら……」と傘の下からのぞきこむように顔を近づけた。「そういえば、お兄さん、どこかで見た事があるわ。ねえ、もうちょっとよくお顔を見せて……」

赤黒くなるほど上気して、むしろ顔をそむけるようにする彼の腕をつかみ、顔のむく方にまわりこもうと一歩踏み出した。とたんにどこかでプツリと小さな音がして、

「あ、ツウ！……」

女の体はぐらりと片膝折ってつんのめりかけた。

「危い！」

と、蝙蝠傘を後ろざまに肩からおとして思わず両手で抱きとめたが、着物の下の、ぽってりとやわらかい肉の感触に、またカッと血がのぼりかけた。

「まあ、何度もすみません」女はおかしそうに、少し蓮っ葉に声をたてて笑った。「私って、足もとが悪くて、しょっ中ころんでばかりいるの。ころぶのは慣れているようなもんだけど、そう打身ばかりじゃ身がもたないよって、かあさんにしょっ中いわれてるのよ」

「鼻緒が切れたみたいだね」

と、彼はやっと動悸をおさめて、女の足もとを見た。

「あら、ほんとだ」

女は片方の足駄の爪革の中から、素足をぬいて眉をしかめた。ぽっちゃりした爪のきれいな足だった。——紐がないか、とつぶやきながら、あるはずのないポケットをさがして、よれよれのハンケチをとり出し、片隅を歯でくわえると、

「あら、いいのよ。そんな事なさらなくても」あわてたようにその腕を押え、「いいんです、ほんと。すぐそこですから、こうやって……」

と、裾を高くじんじんばしょりにすると、気前よくもう一方の足駄もぬいで、手に持った。

「そりゃだめだ。道が洗われてるから、瀬戸物のかけらか何かで、けがするといけない」

「いいの。子供の時、よくこうやったわ。——ああ、水が冷たくて、かえっていい気持ち」と、道にあふれた泥水を片足でちょっと鳴らして見せ、傘をとり上げた彼を、小首をかしげるように、しげしげとながめて、

「それより、たしかにお兄さん、どこかでお目にかかった事があるわ。——ねえ、ちょっと私の所へ寄っていらっしゃらない？　このすぐ上の、百姓家の離屋をかりてるの」

え？——と、またまた彼はびっくりさせられた。彼が離屋を借りている百姓家が、この坂の一番上の家で、そこから先は一里はいった奥の集落まで、人家はないと思ったが……しかし、今の離屋をかりて間もないことだし、そこから奥へのぼってみた事もない。

いかが？　と本気でさそっている眼つきでながめられて、彼はにわかに、後ろめたさときまり悪さのいりまじった気分におそわれた。——ひろった写真を、手前勝手に四、五十年も前にうつ

されたものと思いこみ、きのうの午後一ぱい、肉と時についての、わけのわからない煩悶を抱いてすごした。そのいい気な早のみこみぶりが、とうの昔に老いさらばえ、あるいは死んだと思っていた本人が、写真のままの若さ、写真のままの顔つきで眼前に立っているのを見ると、とんだあやまちを相手に対しておかしたような気がして、一刻も早く、その前から消えたくなってきた。

「いや……いや、結構……」

と、彼はへどもどしてまた顔を赤くした。

「ぼくは行くから……気、気をつけて行きたまえ……」

「あら、急ぐの？」

それじゃしかたがないわね、と冷たいのね、という言葉がまざりあったような表情で、妙になごり惜しそうに彼を見ると、

「じゃ、また折りがありましたら……」

蛇の目がうなずくのを眼の隅に見て、彼は蝙蝠傘で顔をかくすように、一、二歩ふみ出した。背後で見送る視線を感じながら、ふりかえりたい衝動を一息におさえこもうとすると、

「！」

女が小さな叫びをあげた。

ふりむくと、女は痛そうに顔をしかめ、鼻緒を切った方の足を爪先立ちにして、膝をかがめている。二歩、三歩かけ上ったのを意識せず、背後から女の肘のあたりをささえていた。

「足をぐねっちゃったわ……」

と、女は片頬をしかめながら、それでも笑いかけ、

「あッツ！」

と眉を寄せて、彼にもたれかかった。——彼は手早く蝙蝠をとじると、背中をむけた。

「さあ、それじゃ歩けない。いらっしゃい」

「でも、そんな……」

と、しゃがんだ彼の肩に手をつきながら、女はさすがにためらう様子だったが、

「いいから——これでも力はあるんだ。それより、早くおぶさって、傘をさしかけてください。ぬれちまう」

おぶさってくるのをまたず、後ろにまわした手で、強引にひかがみのあたりをすくいあげ、腰を切ってから、よいしょ、と一つゆすり上げた。

「すみません……」

にわかに消え入りそうにしおらしくなって、女は片手を彼の頸から前へそっとまわし、

「重いでしょう、ずいぶん……」

「それより、着物のお尻がまくれそうになったらいってください。下から上ってくる奴が見たら、眼の毒だ」

いやだわ、というように、女はクックッと笑って、肩にかけた手でぶつまねをした。足もとに

注意して坂道を上りながら、後ろに組んだ両腕にずしりとかかる女の臀の重さと、そのわりに、いやに軽々と運べる両脚の動きを、彼は変にちぐはぐな思いで感じていた。

3

女が、ここよ、と耳もとでくすぐったく言った時には、さすがに汗でむせかえるようになっていた。顔をぬらす雨が、汗といっしょになってぬるぬると流れ、眼にしみて、ひどく痛んだが、ぬぐう事もできず、後の三分の一ほどは、眼をしばたたきながら、半めくらで歩いた。痛む眼をしかめて、やっと前を見ると、彼の借りているのとよく似たかまえの農家が一軒、ひっそりと雨にうたれている。山側の木立ちの繁り方から見て、どうやら彼の下宿の、半丁ばかり上らしい。

道から石段を数段おり、小さな枝折り戸を通って裏手にまわる。

「あ、ちょっと待って……」と、女は彼の背中から、紫陽花の植えこみの方へ手をのばした。

「ごめんなさい、重かったでしょう——上ってってくださるわね」

「いや、ぼくは……」

離屋の縁先へ、そっと女をおろすと、彼は反射的に袖で顔をぬぐい、それでも縁に腰をおとして、ひと息ついた。

「だめだめ、いやなんていわさないわよ。さあ、服をぬいで。——私のおかげで、前がこんなにぬれちゃったわ」

あっというまもない。汗で痛む眼をしばしばさせているうちに、一種職業的な手早さでくるると上衣をぬがし、背後でしとしとと畳をふむ音が遠ざかった。

「上って、ズボンもぬいじゃってくださいな。裾がぐしょぐしょ……」と、女は奥へ行きながらいった。「まあ、この畳ったら、ほんとにじけじけと心悪い……足の裏にひっつきそう……」

彼の離屋と同じような、古びてがたびしした六畳間で、奥が台所と、もう一間二畳ぐらいの小間があり、そちらが玄関になっているらしい。そのつくりも、彼の離屋と同じだ。だが、彼の部屋の殺風景とちがって、さすがにこちらは女らしく、姫鏡台や水屋、赤い座布団などがあり、半畳の置き床に、華やかだが安っぽい汐汲みの人形が、ガラスケースにいれてかざってある。火箸の焼けこげのあとのある長火鉢で、赤銅の薬罐がチーンと音をたて、時折り溜息をつくように湯気をふき出す。

こまかく見まわす間もなく、女は盆と炭取りをもってあらわれた。

「ズボン、ぬいでくださいな。ほんとにお急ぎ?——そうじゃないんでしょう? 顔にかいてある」

盆を猫板の上におくと、むんずとバックルの所に手をのばしてきたので、彼はおどろいて立ち上った。いつの間にか後ろにまわって、タイをゆるめられ、カッターシャツをぬがされると、肩にかさこそと、くたびれはてて縞目も色あせているが、糊のきいた男もの浴衣が投げかけられた。

——もそもそやっているうちに、いつの間にか一人ぐらし用らしい、小さな茶餉台の脚がひろげ

られ、水屋から出した対の湯呑みに焙じ茶がつがれていた。

「おお、やだ。ほんとにひどい湿気……」

埋めておいた炭団をくずして炭をつぎながら、女は眉をひそめてフッフッと顔の前をはらい、長火鉢の小引き出しをあけて何やらとり出し、キリリキリリと音をたてはじめた桜炭の上においた。——たちまち青い煙がたって、熱い香りが部屋をみたす。

「かあさんが、湿気ばらいにいいっていって、よくやってたんで、少しもらってきたんだけど——何かしら、これ……」

「伽羅だよ」まだ度胸がきまらず、居心地悪そうに腰をつきながら彼は部屋にたちこめた香りを吸った。「湿気ばらいなら、お茶ッ葉でもいいんだ」

あらそう、へえ、といいながら女はやわらかく、しかし有無をいわさぬ調子で、彼の手をとった。

「そんな所じゃなくて、こちらへ来てちょうだい」と女は長火鉢のむこうに彼をひっぱった。

「何にもないけど、一本つけるわね。——お燗のつく間、私も失礼して着がえるわ」

銅壺の湯には、くろずんだ錫のちろりがさしこまれ、猫板の上には錫の猪口二つに、酒を入れた片口、手塩皿、小さな重ねの蓋もの、うどん屋の名を刷った袋にいれた杉箸……。何だか、妙な経緯にぼんやりしている耳に、しゅっと帯をとく音がきこえ、眼を上げると、破れ衝立てのむこうから腕がのびて、はげちょろの衣桁に飛び矢絣が投げかけられた。

それを見たとたん、にわかに部屋の中がぐうっとまわり出すような、妙な気分におそわれ出した。——眼の前も、銀色にもやがかかるような気がした。どうにも我慢できず、小間の方でする衣ずれの音をたよりに、つるされた背広の上衣に一足とびに近づき、内ポケットから写真をぬいた。長火鉢の前に、また一足とびにかえってすわったとたん、小間の方の襖があいて、白地に小幅なよろけ縞の浴衣に着かえた女が、磯の鵜の鳥ゃ日暮れに……、と口ずさみながら出てきて、そのまま台所の方へ行った。——写真をこっそりのぞく間もなく、女は台所から、やれほんにさ凪ぎるやら、とうたいながら出てきて、茶餉台に飯蛸か何かの煮つけをもった鉢をおくと、彼の横にぺたりとすわって、

「さ、お一つ——いけるんでしょう」

にっこり笑うと、片えくぼが小さくなって、眼が一層やさしくなる。ちろりをつまもうとしたが、把手に巻いた籐がはずれている所にさわって、ち、ち、と指を耳たぶにもって行き、注意してもちなおす。——足は？　ときくと、びっくりしたように眼をひらき、なおっちゃったみたい、とまた笑った。

「私もいただく」と、猪口をひっくりかえして、「本当に、こう毎日鬱陶しくっちゃ、気がくさくさしちまうわね。——ついでくださるの？　金の出てる所、気をつけて……」

彼が不器用につぐのを、両手に盃をもってうけながら、

「さっき、なに隠した？」

と、いたずらっぽい眼つきになる。

「え？」と彼はうろたえた。「なにも……」

「かくしたかくした。——あら、あわてないで、こぼれちゃう」

もり上りそうになるのを、口から先にもって行き、白い、やわらかそうなのどを見せて、一気にのみほして、ふっと息をついた。

「ああ、おいしい……じめつく時は、熱燗もいいわね」

蓋ものから、何かを小まめにとりわけるのを見ながら、彼は酒を口にふくんだ。——酒はまぎれもなく酒で、熱く喉を通って胃の腑にひろがって行くのがわかり、狐にだまされているわけでもなさそうだったが、部屋のぐるぐるまわる感じは、まだなおらない。——そのまま、だまってつがれるままにたてつづけに五、六杯のんだ。いい飲みっぷりね、とか、さっきはほんとに、とか、女は一人、明るくしゃべっていたが、声の性質なのか、小鳥がやわらかくさえずっているようで、ちっともうるさくない。かえって心地よく、いつの間にやら一本目をあけて、酔いがいつもよりかけ足でまわってくるようだった。

「でも、うれしいわ。ひょんな御縁でお酒のお相手ができて……。一人酒って、ほんとに気がめいるばかりですもの」女もほんのりと眼もとをそめ、簪をぬいて耳かくしをかいた。「いい気持ちになってきたわ。——お店、やすんじまおうかしら……」

お店？——と、彼が口にもって行きかけた手をとめると、女は、ほっとしたように彼の顔を見

た。

「そう、お兄さん、前に私のお店、来たことない？」

彼はだまって首をふった。

「でも——どうしても、どこかで見たみたい……。お兄さんだって、さっきぶつかりそうになった時、私のこと、穴のあくほど見てたでしょう？　私のこと、知ってたんでしょう？　ねえ、どこで？　教えて——私、頭が悪いんで、人のことすぐ忘れちゃう」

「一つ、きき たい事がある……」猪口をおいて、あぐらの両膝に手をついて肘を張った。首が泳いで、呂律がすこしあやしく、おや、いつになくまわったな、と心のどこかでつぶやくのがきこえた。「君の……その髪型ね。——そういうのが、またはやってるのかい？」

「またって——これ、いま流行よ。おかしい？　似あわないかしら？」

女は気にするように首をかしげて頭に手をやった。——袖から、なよなよした二の腕がちらりとこぼれ、彼は、眼が据わるのを感じた。

「なに、そんなに見てるの？」女は彼の表情を、ふと怯えたように見上げた。「私のこと、どこかで見て、知ってるんでしょう。ね、どこであったの？　お店へ来たの？　教えて……」

女は彼の膝に手をかけ、軽くゆさぶった。

「教えてやってもいいが……」彼は唇をなめていった。「絶対に怒らないか？」

「怒るもんですか！——どこなの？」

4

——残酷な事だった。思いもかけぬ急調子で酔っていなければ、とてもできなかったろう。さっきの出合い頭のショックと、一人合点の早のみこみに、きのういい年をした男が、半日膝をかかえて、無意味な懊悩にふけった、そのばつの悪さが、酔いの中で肩すかしを食った口惜しさにすりかわった。女の無邪気なやさしさがまた、ふと惨忍な思いをさそいもしたのだ。

「ああ、これ？」女は写真をとり上げると、何でもないようにいった。「まあいやだ。こんなのが道におちてたんですって？——これ、安さんがとったのよ」

「安さん？」

「そうよ。お店の近所の写真屋さん。お店の女の子の写真なんかとってたんだけど……。お金になるからっていわれて、だまされちゃった」

「もらえなかったのかい？」

女がけろりとしているのに突然かっと腹がたった。——何て馬鹿な！　とどなりたい気持ちにさえなったのは、おそらく酔いのせいだったろう。

「安さん、博奕で負けて、やくざにゆすられてたんですって。この写真で、結局あたし、警察へひっぱられて、前のお店にいられなくなっちゃって……」

結局、君ばかりが貧乏くじをひいたんだな——と、彼は手酌であおりながら思った。

——君はそういう女なんだ。人がいいといったって、ほどがある。おれが、こんな写真をつきつけたら、もう少し何とか……。

「それで——」と彼は猫板の上の写真に指をつきながらいった。「この相手の人は？——君の恋人？」

「ううん……」女は写真をとり上げて、もう一度ながめた。「知らない人——」

そんな馬鹿な！——と、彼は口にふくんだばかりの酒にむせかえりながら、のどで叫んでいた。

「あら、大丈夫？」と、女は手拭いを出して彼の顔にあて、ぽっちゃりした手で背中をたたきながら、心配そうにのぞきこんだ。「お兄さん、肺病の気はないの？」

その問いに、またむせかえりそうになって、彼はやっと顔をあげた。

「知らない人と——こんな写真をとるの？」

「だって、安さんが連れて来たんだもの」女は写真を見ながら、ぽつんといった。「でも、やさしくていい人だったわよ。私、好きになったわ」

そういうと、女はすっとたって姫鏡台の前に行った。——水を何度もくぐった縮緬の鏡かけを上げると、女はしんみりとした表情で鏡を見入った。べったりと芸者ずわりにすわっている白い足の裏と、まるい撫で肩を見てると、ふと、哀れさがこみ上げてきた。——女の傍に行こうと立ち上ると、体がぐらっとゆれ、日頃にくらべればわずかと思った酒の酔いが意外なほど深く、体の芯にこたえる。

「悪かった……」女の肩先によろりと手をついて、「あんな写真を……君につきつけたり……」
「あら、いいのよ。そんな事……私、平気よ。かえってなつかしいぐらい……」女はかすかにえくぼをよせて肩先の彼の手に掌を包むようにかさね、「それより、ねえ……この髪、私に似合わない？　ほんとの事いって」
「似あうよ」そういったとたん、意味もなく涙ぐむほど、めろめろになっていた。「似合うさ……似合うとも……。君の髪型は、それでなくっちゃ……」
立って動いた時から、どうしようもないほど酔いがまわってしまっていて、女の肩越しに、頭からもろにつっこみそうになった。それをやっとこらえて、むりやり腰をのばそうとすると、後ろへあおのけざまになりかけ、
「あら、あぶない！」
女があわててすがるようにしたが、もとより力が弱い女の腕で、大の男が酔ったのをささえきれるはずはなく、そのままもつれあってどうとたおれた。
気がついた時、やわらかい体は、すっぽりと彼の腕の中にあった。髪油のにおいが鼻先をくすぐり、左の胸乳の所に顔を伏せた女は、指先で彼の浴衣の襟をもてあそんでいた。
「ね、お兄さん——私にお床をつけてくれない？……ううん、嘘、五十銭や一円のお金なんかどうでもいいの……」と女はささやいた。
「お兄さんは、写真で私の事知ったんでしょうけど……私も、どこかでお兄さんを見た事ある

わ。私……とっても頭が悪いから……」
しと、しと、と、やむことのない雨音は、天地の間を押しつつんでいた。——その音をきいていると、自分が霖雨にこまかくうち砕かれ、とかされて、灰色に煙る霧となってただよいはじめるような気がした。……お床をつけて……五十銭や一円の金……霧となってただよいながら、その霧の中で、彼はぼんやりと、さっき女のいった言葉を思い出していた。そのうち霧が少しずつはれて行き、雨音の間に、トタン筒の雨樋を水の走るうつろなひびきや、小溝を流れる濁水の音がききわけられるようになってきた。——こう降りつづいては、今日明日のうちに出水があるかも知れないな、と彼は思った。
その時、女がかわいらしく、赤ン坊のような溜息を、彼の裸の胸の上でついた。
いつの間にか、体の下に蒲団が敷かれ、上には軽い夏蒲団がかかっていた。その夏蒲団の下で、二人は、あらわな肌と肌とをぴったりよせあっていた。
「やっぱり思った通り、お兄さんて、とってもやさしいのね……」と、女は彼の胸にそっと唇をつけてささやいた。「そりゃそうね——雨ン中を、私のこと、おぶってくれたんですもの……。好きになっちゃいそう……でも、お兄さん、まさか、主義者じゃないでしょうね……」
なぜ君のような女が……と、彼は女の肩を抱き、髪をなぜながら、胸のうちで呟いた。……なぜ？
「だって——私、このお商売、好きなんですもの……」と、口に出しもしない問いに、女は答

えた。「好きっていっても、別に助平な意味じゃないわよ。誤解しないで。そりゃもちろん、それもきらいじゃないけどさ……」

クスッと笑って、恥じらうように頬をぴったり彼の胸につけ、ひどく、しんとした生まじめな調子で、

「本当はね——男の人と寝たあと、その人に……どんな人であっても……とてもやさしい気持ちになれるのが好きなの……」

その言葉をきくと、彼は反射的に力一杯、女の裸を抱きしめ、唇を吸った。骨も折れよとばかり力をこめると、女のやわらかな肉は、腕の中に溶けてしまいそうだった。

「元気ね……」上気した顔をやっとはなして、女は煙るような眼つきで見上げて笑った。

「また、元気になってきたわ。でも、お酒飲みすぎてつかれるでしょう。今度は私が……」

夏蒲団がひらき、しみだらけの天井からさがった電燈の光が、二人の裸の上にもろにさしこんだ。——女は、ほほえみながら、彼の上にまたがり、体を沈めようとして、ちょっと重心をとりそこねた。胸の上につこうとした手を、彼は反射的ににぎりしめた。

「あまり、見ちゃいや……」と、女ははずかしげに、眼を伏せてささやいた。「だって……私、明治生れですもの……もうおばあちゃんよ……」

あ、と彼は心の中で叫んでいた。電燈をつけたせいか、さっきまで暗がりに沈んでいた長押の上に、色あせた観兵式の写真——雑誌か何かから切りとって額へいれたらしいもの——がかかっているのが、女の肩ごしに見えた。衣桁にかかる飛び矢絣の単衣、男の上に、今またがって、たてた裸身を電燈の光にさらし、片手は彼にとられ、畳の上にのべたもう一方の手の指先に、麻の葉模様の夏蒲団の布をそっとつまんだ光景は、何も彼も、あの写真の通りだった……。

5

「これが、その写真ですか？」

若い附添夫は、老人のふるえる手から、すっかり変色し、黄色い斑点だらけの、縁のよれよれになった印画紙をうけとり、明りがよくあたるように、上体をねじった。

「ぼんやりしてて、よくわからない……」

「つまり、この写真の女の人の事を、あまり思いつめて、夢を見たわけですの？」と看護婦はいった。「あるいは、雨の音をきいているうちに、自己催眠にかかった……」

「そうとばかりもいいきれない……」老人は、喉をごろごろならして眼を閉じた。「あとで……しらべてわかった事だが……私の借りていたその農家の離屋に、そのころから四十年以上前……つまり昭和の初めごろに、本当に、そういう女が……ごく下級の娼婦だが少し頭の弱い、気のやさしい……そんな女が、間借りしていた事を……ずいぶんしらべて、やっとつきつめた……」

「じゃ、それはつまり、怪談？」と、看護婦は面白そうに鼻の頭にしわをよせた。

「なるほど、怪談のパターンとしては、昔からよくある奴ですね。——あなたが、道におちて、

雨に濡れているこの写真を見つけた。すてて行こうとしたが、雨にうたれる写真の女が、何となく無惨なので、持ってかえって机にかざってやると、その女の幽霊が、お礼にあらわれた……」

「それで、その女の人、その後どうなったかわかりましたの？」と看護婦はきいた。

「三十そこそこで——精神病院で死んだそうだ。……梅毒に、脳をやられていて……」老人の声は、寝息みたいだった。「そんな事——しらべるのではなかった……」

「それで結局、何がおっしゃりたいんですか？」若い看護婦は、ずけずけといたわりのない調子できいた。「私たちに、怪談の思い出話をして、こわがらせたいために、呼んだんですか？」

「いや——そうではない……」老人は、肉がすっかりおち、薄膜のようになった眼蓋を開いて、色素のうすれた眼で、ほのぐらい天井を見た。「君たちを、呼んだのは……ここから、地球を見せてもらいたかったからだ」

なんだ、というように附添夫は眉をしかめ、看護は肩をすくめた。寝台の向きをかえ、スイッチを操作すると、壁のむこう側が音もなく開き、暗い星空にうかぶ、青い、半月状の地球が見えた。

「さあこれでいいですか？」

「ああ……」老人は、視力のほとんどなくなった眼を一心に窓にむけた。「そうして……あの写真の話をしたのは……なぜ、私が……やっと〝安死許可〟をもらって……月の上の病院で、死にたかったか、という事を説明したかったからだ……」

「なぜです？」と附添夫は、ちょっと興味をそそられたようにきいた。「写真の女の話と、どう関係するんですか？」

「ここから見る……地球は、青い……昔、写真で見たままだ……。だが、地球の上は……すっかりかわってしまった……人間がかえてしまったのだ……」老人の声はさらに弱々しくなった。「昔の地球の姿をふりかえり思いうかべるには……遠く離れて見るしかない……。わかるかね？——そう……つまり……こういう事だ。人間は……人間自身も……人間の文明も……あまりに巨大に……強く……あまりにかしこく……力を持ちすぎた。あまりに長生きしすぎた。それは、どういようもない事だし……やむを得ないなり行きだったろうし……ひょっとすると、いい事だったかも知れない。なにものにも——運命にさえ負けぬほど強くて、巨大で、その巨大さにふさわしいほどかしこい事は……人間にとって、ある意味で幸福な事だろう……。だが、——人間が……もっと弱くて……貧しくて……もっと無知だったころ——人間がもっと弱くやさしい動物だったころに味わえた……よろこびや幸せ……といったものは……失われてしまったのだ。——その事は……君たちの場合にだってあてはまる……考えてごらん……」

「なるほど——それで？」と附添夫はいった。

「それだけだ……」と老人は、溜息のようにいった。「もういう事はない……」

老人は、色あせた瞳を、じっと窓の方にむけていた。

三十六万キロはなれた地球の姿は、地上の巨大な変化が陸地の赤、植物の緑、大洋の青、雲の

白といった大まかなパターンに溶けこんでしまい、百年前とちっともかわらないように見えた。視力のほとんどない眼を通して、老人は、その遠い地球の姿の上に、百年前の地球の姿を思いうかべ、同時に、写真の女の、若く、やさしかったころの姿を思いうかべているのかも知れなかった。

「死んだ？」

ほとんど息をしなくなった老人をのぞきこんで、看護婦はきいた。

「まだ、心臓はかすかに動いているが……」附添夫は、計器類を見ながらいった。「もう時間の問題だな。——長くて、あと四、五分って所か……」

「じいさんの言ってた、〝獣の刻〟とかいうのがやっと終るわけね」看護婦は、腕をぼりぼりかきながらあくびした。

「それにしたって、長いよ。百六十歳だものな……」と附添夫はいった。「この写真も、棺桶に一緒にいれてやるか」

「ねえ……」テーブルの上の写真をぼんやりながめていた看護婦は、にわかに淫らな眼つきになっていった。「ねえ……しない？」

「君は、誰か死ぬと、欲情するんだな……」と附添夫は苦笑した。

「その写真のせいもあるわよ……」看護婦は鼻を鳴らしながらすりよってきた。「私たちも、その——〝獣の刻〟ってやつを持ちましょうよ」

「まだ完全に死んでないんだぜ——」附添夫は、老人と計器の方をちらと見てつぶやいた。

「いいから——さあ……」

看護婦はスカートをまくり上げた。——それでも気になるのか、老人の方を見てささやいた。

「あら——じいさん、今度は、こっちを見てるわ」

「大丈夫……もう何も見えやしないのさ」

老人は、眼を見開いたまま、首をことんと枕の外におとしていた。——附添夫はかまわずにはじめた。

君たちも——と、老人の動かぬ視線は、語っているようだった。——考えてみるべきだ。……弱く、貧しく、無知であったころの幸福を……。

その動かぬ視線に見つめられながら、知能も、体格も、作業力も、昔の数倍から十数倍ものレベルに、人為的にひき上げられた、「進化型チンパンジー」の附添夫と看護婦は、次第に傍若無人にもつれあいはじめた。

女の手

1

「するんでしょ？」

と女はいった。

上半身裸になった彼は、ギョッとして女の方をふりかえった。——水銀をのまされたカラスが、義太夫をうなったような、ものすごいガラガラ声だ。

「するの、しないの？」

女は、つっけんどんにくりかえした。

「蒸風呂は？」

「あんた風呂にはいんの？」

こういうのがいる、という話はきいてたが、めぐりあったのははじめてだった。——大ていは、箱風呂でむしあげ、マッサージ台に横になってからするしないをきくものだ。

「はいっちゃいけないかい？」
「あとにしなよ。——まだ早いから、蒸気がぬるいよ。先にやっちまって、あとで流した方がさっぱりするだろ？」
女は、バタンと蒸風呂の蓋をひらいた。冬の井戸水みたいな、情ない、ぬるそうな湯気がポワンとたちのぼる。
「流し湯の方は？」
と、彼はバンドをはずしたズボンを手でもったまま、おじけづいた声できく。
「どうだっていいじゃないか。あんたいったい何しにきたの？」
女は彼の裸の背中を、ピシャン！　とひっぱたいた。——ガリガリの体に似あわない、えらい力で、ひっぱたかれた拍子に、ズボンをもった手がはずれて、ずるずると脛の所にたまる。
「さあ、手間をかけないで——これから忙しくなるんだから……」
今度は背中をぐいとおされ、ズボンが足にからまってつんのめりかけた。上体が泳ぐそのいきおいで、ズボンをパッと後ろへけあげてしまうと、そいつを女は宙で片手でうけとめ、くしゃくしゃのまま、衣裳ロッカーへポイとほうりこむ。
「このごろはとりしまりがうるさいんだからね。ふりの客でもやってくれる女なんて、そういやしないよ。——あんたは運がいいよ」
そうだろうか？——冗談じゃない、さむざむとして、手荒くあつかわれて、お母アちゃんの所へかえりたいくらいだ。といって、女の態度は変に威たけだかで、やめてかえる勇気もでない。かえるといったら、どんなに口汚なくののしられるか知れない。それを思うと、気がくじける。——それとも、掌をかえしたように、かえらないでえ、とベタつかれるだろうか？　それを思うと、なおさら鳥肌がたちそうだ。
「さあ……」
女は、上衣をとってポイと投げつける。
「これを——着て、マッサージするのかい？」
「バカ！——お金だよ。シングル一枚、ダブルにするかい？　二枚だよ」
冗談じゃねえや、と彼は心の中で、泣きそうになりながら、しぶしぶ千円札を一枚ひっぱりだす。——シングルなら、まだ眼をつぶってがまんできるだろうが、こんなのとダブルをやった日にゃア、生涯インポになっちまうかも知れない。
女は、骨ばった手で千円札をひったくると、ガリガリの肋の見えた胸の、うす汚れたブラジャーの間にはさんだ。
「さ、ねて」
パンパンと、ひびだらけの、ビニールレザーのマッサージ台をたたく。——彼はおずおずとマッサージ台に横たわる。冷たい、ベトベトしたレザーが、汗ばんだ背中にひっついて気持ち悪い。
「パンツぐらい、自分でぬいだらどう？」

「このままでいいよ」彼は、ほんのちょっぴり客として抵抗する。
「ずらしてやってくれ」
フン！　と女は鼻をならした。
「汚れたって知らないよ」
彼はかたくなって、うす汚れた天井の、さむざむとした電燈を見上げる。——まるで、生体解剖をうけるみたいだ。畜生！　Nのやつ！——まったく三文作家なんてあてにならない。
「あらやだ。コールドクリームがなくなっちゃった」
と女は、鏡の前でブツブツいった。スイングドアをあけて、廊下へ顔をつき出し、ポンコツ自動車をプレスでおしつぶすような声で「ちょいと、さつきさん！——マリちゃあん！」
早いので誰もいないらしい。
「まあいいや。——なくたって、ちゃんとしたげるよ。あたしゃベテランだからね」
ペッ！——と両手のひらに唾をはきかけたのを見て、ひい、と、彼は心の中で悲鳴をあげた。むこうは、そんなこちらの表情には斟酌せず、パンパンとてのひらをたたくと、よいしょ、とばかりパンツをひきずりおろし、むずとつかんでグイと容赦なくひっぱり出した。

2

下から見上げると、女の顔は、いっそうものすごい御面相だった。頬骨がとび出し、口がとび

出し、エラがはって、そのかわりに眼がおちくぼんでいる。まなじりが、狐のようにつり上り、眼尻はもう、烏の足あとどころではない、クラゲの足あとぐらいの、ものすごいちりめんじわだった。鉛色の肌にこってりドーラン化粧しているのが、地肌との関係で、どすぐろい紫色に見え、そいつに寝不足の吹出ものが三つ四つうき上っている。その上はずかしげもなく、脂切ったアイシャドウをおき、マスカラをコテコテぬりたくり、あげくつけまつ毛がずれて、眼をとじると化物じみた顔になる。ピンクの口紅が、大きな唇からはみ出して、反歯にくっつき——畜生！　Nのやつめ！　と彼はまた心の中でうなった。
「通人つうもンはお前、トルコなんざ夜はいかへんもんやで」と、自称「現代の精神の荒廃と見すてられた魂の悲哀にせまる、未来のノーベル賞候補」作家のN——そして、実際は痔とか、インキンとか、水虫とか、汚ないものばかり題材にしているので、通称湿疹作家、または痔小説作家（そやけどお前——と、Nは、大まじめにいうのだ。——癩も結核も、梅毒も、不治の業病でなくなった今となっては、インキンや水虫のかゆみほど〝実存〟を感じさせるものはあらへんで）そのNが、とくとくとして、彼にといた。「トルコ行くんやったら、昼間やな。うん、午後の早い時に行けば、まだ口あけで、ナンバーワンもよりどり見どり、むこうはつかれてへんし、それに早く口あけにつけば、げんがええいうて——そこはお前、昔の遊廓と同じや。今も昔も、水商売の女の〝文化〟はかわらへん。赤線廃止も、売春防止も、この連綿と根づよい〝遊女文化〟を破壊することはできなかった。これは、やはり、庶民の文化は不滅であって……」

それ以上だまってきいてると、いいかげんな文化論をえんえんとやられるので、話のきりかえのために、そんな早くからやってる店はどこにあるんだ、ときいた。——Nはたちどころに二軒の名をあげ、その一軒がこの店だった。

何もはじめから、ここを目当てでくるつもりだったわけではない。この店の近所で、偶然時間があいてしまい、喫茶店では間がもちそうもないし、といってパチンコも気がきかず、なにか適当なひまつぶしは——と、街角で見まわした時、ふとこの店の看板が眼についた。Nの話が頭の隅にこびりついていて、前をとおってみると、なるほど店はたしかに開いている。

そこでちょっと立ちどまって、中を観察すべきだった。——だが、そこはやはり針小棒大、烏を鷺に、あばたをえくぼにいいかえるのはお手のものの、戯作家の弁舌にのせられて、われ知らず暗示にかけられていたらしい。何とはなしに美女がワッととりかこんでくるような気がして、ついふらふらと中にはいりこみ、——ガランとしたホールの中で、うす汚い袖なしをはおったちんちくりんの烏天狗みたいな大年増に、腕をとられている自分に気がついた時は、もうおそかった。話がちがうと、ひっぱられながら、ホールのあちらを見、こちらを見たが、ナンバーワンもナンバーツーも、その時いたのはその女だけで、そのまま押されるように二階に上り、——チクショウ、Nのヤローの大うそつきめ、とぼやいてみてもあとの祭だった。

「どしたんだよ。若いくせに元気がないね。まじめにやんなよ」

と、女はさっきから骨ばったガサガサの手で、クチャクチャやっていたものを、ピンと指ではじいた。——さすがの彼も、痛さにイーッととびあがり、まじめにやれとはどっちの事だ、とどなるつもりが、口の中でもぞもぞ。

「しようがないね。早くしてくれなきゃ、こっちも商売だからね。おっぱいしゃぶらせてやろうか？」

洗濯板に乾ぶどうじゃ、かえって逆効果だし、早くおわりたいのはこっちも同じだ。——しかたがないから、ギュッと眼をつぶって、今わが股間に繊手をのべているのは、清純派女優の誰それである、と必死に想像しようとする。早くしな、と邪慳にあつかわれたのが、ふと昔の赤線を値切って上った時を思い出させ、——と、ふしぎや、どうしようもなく首をすっこめてたのが、ゆるいめのおしぼり程度に形がととのってくる。

「よしきた、いっちょう腕によりかけて、早まくに仕上げるか！」

ガリガリのトルコ婆アは、またもやペッ！　と掌につばをはきかけ——これがよくない、折角のデンデン虫が、また角をひっこめかけるのを、やるまい、とばかりにムンズとさか手ににぎりしめ、

「まあ、まかしときなよ。こう見えても、私ゃこの道十四年、おスペだって草わけの姉さんだかンね」

「十四年とは長いね」

彼はこまかくゆさぶられながら、なんとかうまをあわせる。

「そうだよ、今まで何万人の男のやつをひっこぬいたか——どんなじさまのグニャだって、私が本気でかかりゃア、五分とかからず、ピンのシャンので埒をあかすよ」

ひっこぬくとはおだやかでないと思ったが、へんにさからって、ほんとにひっこぬかれちゃかなわないので、

「それじゃ、だいぶんためこんだろう」

と水をむけると、

「それが——畜生！——八年前の金で、何百万とためたのに、男にだまされて、さ。預金をそっくりもちにげされて……同じころにこの商売にはいった娘で、スナックはじめたり、マンションたてたのさえいるのに……」

声が急にすごみをおび、いったん泣きそうにうるみ、またいっそうすごみをおびて

「だけど、またためてやるよ。ああ、今度は千万、二千万ためてやるさ。——この手、この指、この掌一つで……、この女の手一つで、男からあれをしぼりとっちゃア金をしぼってやるのさ。この手一つで……すかんぴんにだましとられてから、もう何百万とためたんだよ、あんた……」

金のうらみか、男へのうらみか、声がすごむと同時に息づかいもあらぎ、掌の動きもやたら早くなって——うす眼をあけて、そっと顔をうかがうと、小鼻おっぴらいて、鼻の頭に汗をかき、くいしばった歯から、泡をふき、顔もあからみ、横額に青筋がふくれ上り、何やらすさまじい気配がたちこめる。南無三宝、昔のうらみ思い出されて、おのれ「男」め、とばかりに、それこそ

大事の一物ひっこぬかれてはかなわない。こちらもまた眼をつぶって——神仏の加護など、こんな時にねがってもしかたがないから、せめてサユリちゃん！　とか、マサコさん！　とか一心不乱に胸にとなえて、——これも、一種の「あてがき」だろうか、とにかく一刻も早く埒をあかそうと心をこらすうち……。

手の動きが、アクセルふみこんだみたいに早くなって、一物火をふきそうにあつくなり、女、何やらククッと、のどの奥で泣くような声をたてて、感情が激したか、思い出してのくやしまぎれか、突然こちらをくだけんばかりにギュッとにぎりしめ、それきり動かなくなった。

「おい……」と、彼はうす目をあけて、おずおずとささやいた。「もういいからはなしてくれ——。いたいよ」

つかっていない腕で、マッサージ台につっぱった形で、首うなだれている女のとがった肩を、かるくついて、手をはなさせようとすると、うなだれた首がぐらりとまわり、

「ヒェーッ！」

思わず知らず、のど笛が鳴った。歯をくいしばり、白眼をむいた、土気色の顔のものすごさに、心臓がチリチリとちぢみ上ると同時に、骨ばった指がくいこまんばかりに、エテものをにぎりしめたまま、床の上にくずれおち、体の重みでギューッとひっぱられるいたさに、

「ヒー！」

二度悲鳴をあげて腰をうかしたがまだおっつかず、せまいマッサージ台から、もつれるように

ドシンバタンところげおちた。

3

頭を床にぶっつけて、眼から火が出、一瞬気が遠くなったが、それより股間のひきつるような痛みに無我夢中でもがき、

「おい、いたい、よせよ、はなしてくれ。——おばはん！　気づいてくれよ。勤務中だぞ。おれは客だぞ！——千円かえせ！」

ガリガリの体が手脚にからまるのを、やみくもにじたばたやって、それでも痛みがとまらないので、やっと気づいて、腰をすこしにじらせ——ひっぱられるような痛みはとまったが、ギュッとにぎられた感じはまだそのままだった。

こりゃえらいのにひっかかった、と思う心も上の空、とにかくこちらをつかまえてる指をもぎはなそうと、うつむいてとりかかったが、おどろくべき馬鹿力でギリギリしめつけていて、いっかな離れそうにない。このごろとみにでっぱってきた下腹のため、長くうつむいているのがくるしく、おまけに、間ン悪く、いまどき温度が上ってきた蒸し風呂から、熱気がもうもうとたちこめて、汗がだらだらと眼にしみる。そいつが横なぐりにしたとたん、カッとのぼせてきて、にわかに胸がドキドキしはじめた。

うろうろとあたり見まわして、床にはねとんだスリッパ、ようよう見つけて、鬼の首でもとったように、これだこれだとつぶやきながら、女のチリチリの髪の上にのせたのは、相当上ずってしまった証拠で——その時までは、テンカンをおこしたのだとばかり信じていた。

だが、スリッパ一つのせても二つのせても、女はぴくりとも動かず、そのうち折れかさなっている肌が、妙にひいやりしはじめたのにやっと気づき、まさか！　と思って、うすべったい洗濯板に手をあててギックリ——手首の脈をとってみる、気味悪いのを我慢して、乾葡萄のへんに耳をあててみる。なに、そんな事をしてみなくたって、その顔にあらわれた、なんともいえず惨な表情を見ればわかったはずだが……。

「ウワッ！」

とわめくのと、ヒェッ！　とのどが鳴るのがごっちゃになって、

「死、死んでる！——死んじゃった！　助けてくれ！」

とあぐらの上にもたれかかる女の体、夢中でおっぽり出して、とび出そうとしたとたん——またもやグイと股間に走る激痛、いったんたえかねて、よろよろどたんとひっくりかえった眼の前に、恨めしげに、歯をくいしばった女の顔が、バー、という風にあらわれて、またヒー！　とのどが鳴り、ひざをついたまま、二、三度いざって、こわさの一念でまた立ち上り、今度は痛みも忘れて、つかまれたまま、ズルズル女の体をひきずって、戸口の間へ……。

「助けてくれ！　誰か来てくれ！——死んじゃった！　死人が出た！」

声かぎりわめいたが、あっけらかんと、高い日のさす廊下の方は、まだ誰も出てきていないと

見えて、ガランしいんとして、こたえる気配もない。ひっぱられる痛みこらえて、なお二歩三歩、ズルズル戸口の方へ行きながら、あまりの痛さに、反射的に手刀で、女の腕をハッシ！　とうったとたん、根元からひきぬかれそうな激痛に、ギャオ!!　ととび上った。

汗いっぱいかいて、また夢中でもぎはなそうとしても、女の一念ギュッとくいこんではなれず、またひっぱって歩いたが、なにしろ日ごろから、やわな一物、拳骨和尚じゃあるまいし、分銅かけたり、一升入りの薬罐をかけたりするほどきたえていない。まして痩せ女といえども四十四、五キロはあろうという体、それ一本でひきずって、長丁場がもつわけはなく——やっと気づいて、女の上体かかえ上げ、ドタバタと二、三歩走ったが、ぶらんぶらんする死骸の脚にからまって、ずでんどうとひっくりかえり、とたんにまたもや、腹の皮までひきつるほどの激痛に、とうとう涙が出た。——涙と汗を横なぐりにひっこすり、とにかく誰か助けをよびたい一心、今度は女の髪をひっつかんでひきずりながら、よろぼいよろぼい、

「だ、誰か来てくれ！　一大事だ！　みなの衆！　お長屋の衆！」

わめきながらこけつまろびつ、人気のない廊下を階段にむかって走り出した。

やっとさわぎに気がついて、ステテコ一つで部屋から出てきた、トルコ風呂のマネージャーもおどろいた。

よく、ぬけなくなったという話はきいていたが、はなさなくなった、というのは、長年この道

で食っているマネージャーにもはじめてで——最初、すっぱだかに汗まみれの男が、店の女の髪ひきずって、階段にドスン、ドスンと女の体をぶっつけながらおりてきた時は、てっきり客と女のもめ事と思い、チッと舌をならして、

「お客さん、女の子にどんな不行届きがあったか知りやせんが、店で乱暴なすっちゃ困りますね」

ドスをきかせた声でいって、指をポキンといわせたが——なに、実をいうとこのマネージャー、喧嘩の方はからっきしだめで、気が弱そうな客とみてのこけおどし——だが、その客は、おどしも気がつかないほどの逆上ぶりで、

「ら、乱暴なんかしないよ。死んでるんだ」

エッ、とマネージャーも、のけぞって、

「お、お客さんが殺ったんですかい？」

「冗談じゃないよ。例のやつやってもらってる最中、突然ポックリ……」

「ははあ、とみ子のあま、日ごろ働きすぎとやけ酒で、血圧が高かったからな——それにしたって、なんだって仏さまをそんなに乱暴に……」

「好きでやったんじゃない。これを——これを見てくれ！——はなさないんだ。いや、は、はなれないんだ！」

いわれてマネージャー、二度眼をむいて、

「ほんとですかい！　まさか！　いくら職業意識に徹するといったって、——この女、死んでるんでしょう？」

と、自分でも手をかけて、グイと指をひらかせようとしたが、死にぎわの執念のおそろしさ、万力みたいにしめつけて、節高の指がビクとも動かない。そんなバカな！　ともう一度試みると、

「イタイ、イタイ、イタイ！」彼が悲鳴をあげた。「やめてくれ！——あんた、毛をひっぱってる！」

そのうちさわぎをききつけて、ようやく出勤してきたトルコ娘たちが、ぞろぞろあつまってきて、

「どうしたの？」

「え？　とみ子さん、死んだんだって？」

キャーッ！　と悲鳴をあげるのもあれば、まあかわいそうに、信じられないわ、ほんとに死んでるの？　どれどれ、とのぞきこむのもいて、——中にさっそく、ブラジャーから数珠とり出して妙法蓮華経、お題目となえ出したのは、なんとかいう学会の娘か、

「だけど、このお客さん、何？　すっぱだかで……うちの店の品位にかかわるわよ」

「えッ？——おとみさんの手が……はなれないんだって？　ほんとう？」

キャーッ！　ワーッ！　エッチ！——ゲラゲラと笑いくずれたり、黄色い声をあげたり、

「でもさ、えらいじゃん。さすがは二万人ぬきのおとみさんだわ。死んでも、お客のあれをはなさないなんて、あっぱれトルコ娘のカガミだわよ、——まるでトルコのキグチコヘイだわ」

「あらやだ、キグチコヘイはシャクハチでしょう？」

「ばかだね、お前。尺八でこうなったら、お客さんただですむかよ。いまごろは、おとみさんのイレバにくいきられて……」

「やめてくれ！」彼はふるえ上った。「そんな事より、早くこれをどうかしてくれ！」

「まあ、お客さん、冷たいのね。——おとみさんの死に際に、やってもらったなんて、光栄だわよ。あなたの名前、トルコ史上にのこるわ。もうすこしにぎらせておいてやんなさいよ」

「ねえ、マネージャー、勤務中に死んだんだから、これ殉職だわね。うちの店から、トルコ葬を出してやりましょうよ」

「そうよ、棺桶のかわりに、あのスチームバスに死骸をつめて……」

「やめてくれ！」とうとう彼は泣き出した。

「なんとかしてくれ！　はやく、……はやく医者をよんできてくれ。はやく、一一〇番……いや、そいつはまずい。一一九番——これもだめだめ。とかく近所の医者を！」

なにしろ、こういう形のまんまじゃ、証拠があんまり歴然すぎて、店にとってヤバイので、その筋関係はさけて、とりあえず近くの医者をよんだ。医者もこれにはびっくりしたらしいが、そ

こは職業柄しかつめらしく、まず死亡診断にかかり、
「はあ——こんな死人もめずらしいですな、この人は、前からテンカン持ちだったでしょう？そうでしょう？　テンカンの発作と、脳溢血と、心臓麻痺を、いっしょに起している。おまけにひどい栄養失調だ」
「そんなことより先生、この手をなんとかしてください」
と彼は泣き声でたのむ。医者はしげしげと、その関係を見て、
「ふーむ！——腔痙攣で捕拿陰茎になるというのはチョクチョクあるが、オスベ痙攣というのは珍しい。これは学会に報告する価値があるかも知れない」
と、何やらメモをとりかかる。
「そんな悠長な事してないで、早く……」
「いやいや、心配ない。テンカンで死んだ人は手足がコチコチにつっぱってますがな、それでも死後硬直がとけると、自然にはなれます」
「そ、そんなの待ってられませんよ。私ゃこれから約束があるんだ」
「しかし、変ですな。いくらなんでも……」
と、腕をグイとひっぱって、彼にヒー！　と悲鳴をあげさせ、「なるほど、がっちりつかんでますな。ちょっとお待ちなさい」
死骸なんかにうって、きくのかきかないのか、青黒い女の下腹に注射をうち、三分、五分まって、

「もういいでしょう」
指をはなそうとしたが、これもだめ、
「はあ、よほどはげしい発作だったと見える。あなた、お急ぎで？——それじゃ、仏様にゃなんだが、指の腱を切りはなしてあげましょう。なに、すぐです」
眼鏡ずりあげて、メスをちかづけようとすると、
「イタイイタイイタイ！　たすけてくれ！　死んじゃうよ！」
「なんですあなた、男のくせに。それに切られるのは、あんたのものじゃありませんよ」
「そ、そうじゃないんだよ。メスがちかづくと、こ、この手がギリギリとしめつけて……こちらが死んじゃいそうだよ」
そんな……といいたそうな顔をしたが、彼が脂汗をうかべ、まっさおになっているのを見て、思わずマネージャーと顔を見あわせ、二人とも酢をのんだような顔つきになった。
「変ですな——とにかく、それじゃ……」
「ええ、先生、すんませんが、そうやっておくんなさい。何しろ、もうそろそろ客が来ますんで——店に変な噂でもたったら、あたしゃア首です。あんまりたてこまねえうち、とにかく病院の方へ……お客さん、とんだ災難でしたね」
と最後の方は、こちらこそいい迷惑といわんばかり。

まもなく担架がきた。——が、二人はのせられない、というので、戸板の上に、もうすっかり青黒く死相のあらわれた女の死骸といっしょにのせられ、白布をかけられて、はこび出されたが、

「どうなんだろ。——千人の人に見てもらうとはなれるって話をきいたけど」

「バカだよ、この人は。そいつは、ものがちがうよ」

「水ぶっかけたらどう？」

「アホらしい。犬のつながりじゃあるまいし」

「それでも、おとみさん、かわいそう……」とこれは泣き声で「死んでまで、あんないやらしい客とくっついてなきゃならないなんて。ほんとにしつこいお客ね。いいかげんにおとみさんをはなしてやればいいのに」

大がいにしてくれ！——と、女どものおしゃべりを、白布の下でききながら、彼はわめきたかった。ほんとにまあ、何という不運か！——男が闘牛をまたげば、七人の敵があるというが、それ以上にどんな災難にあうかわからない、つい二時間前まで、こんな浅ましい姿で、戸板にのせてはこばれるなんて夢にも思わなかった。それほどトルコ風呂が好きなわけじゃなし、俺という男はよくよくついてない、と思うと情ないやらつらいやらで白布の下で思わず不覚の涙が流れる。それにつけても、おのれ、ホラ吹きのNのやつ、この次あったら、絶対とっつかまえて、奴のエテ物、大一番、最強のスプリングをつけたドブネズミ用のネズミとりで、ぱちんとはさみつけてやるから、今に見ろ！

病院にいったが、これがまたえらい事で、ほかの医師も出てきて、さんざん注射したり、電気をかけたりしたが、いっこうにはなれない。下腹部を切開して、指につながる腱を切ったが、これでもだめ。そして、指関節を切りはなそうとメスを近づけると、

「イタイ、イタイ、や、やめてくれ！」というわけで……

「こりゃどうも……」と医師たちも青くなって顔を見あわせた。「ただ事じゃありませんな。現代の医学じゃ、とても説明できない。——死人の執念が、手にのこってるにしても……どうもあんた、えらいもんに見こまれなすったな」

「いったいどうなるんです？」と、彼はもうもう見得も外聞もなく、泣きながら、「こんなうすっきみ悪い仏さまに、ずっとにぎられっぱなしなんですか？　何とかしてくださいよ」

「いや、こちらも早く、診断書をつけて死亡届を出さにゃならんので、いつまでも、あんたにぶらさがったままにしとくわけにはいかんのですが……」

と、三、四人、こそこそ相談していたが、「じゃ、こうしましょう。手首は切開しても何ともなかったから、とりあえず死体の手首を切断します」

「そ、それで、手の方はどうなるんです？　こちらにぶらさがりっぱなしですか？」

「まあ、とにかく応急措置で——死骸全部を股倉にぶらさげとくよりはましでしょう。ただし、業務上とはいえ、一応死体損壊になりますので、警察にとどけないと——何しろ仏には身よりも

ないようなので……」

「えッ？　警察？」

と、青くなったが——いずれにしたって、もしこのままはなれなければ、そうするよりしかたがない。やけっぱちになって、股をひろげて眼をつぶったが、股間で医師たちが、ゴリゴリ鋸をつかって、骨を切断するのが、どうにも頭にひびいて、何だか自分のものが切断されているみたい……。

「あッ！——しずかにやってくださいよ。あ、ツウ！ひ、ひっぱらないで！」

5

やっと切断が終ったが、手首はまだしっかと彼のものをつかんではなさない。——それでもテンカン病みの烏天狗とはなれただけでも、すこしはほっとした。しかし、たち上ると、ブラブラとやっぱり異様に重たく、切断面に縫帯まいたそいつを、なるべく見ないようにパンツとズボンをはいたが、なんせ拳一つ分、むっくりふくれるのが気になって、そいつを股の間にはさみこもうとしたが、ヒヤリと冷たい感触にゾッとして、情ないがいじかり股でよちよち。

「まあ、そのうちくさって、自然にとれるでしょう。えらいのにかかわりあいましたな」

と医者はおざなりにいい、看護婦ともども、うすっ気味悪がって、早くかえってくれといわんばかりだった。

切断の前に、警察がきて、やけになった彼は、住所をいい、女房に連絡してもらった。——どうせ敏感な女房には、即座にばれることだし、妙なところをにぎっている手首について、うまく辻つまがあうような嘘も思いつきそうにない。

切断にかかっている所へ、女房がとびこんできて、その場の光景をひとめ見るなり、ヒステリーの発作をおこして眼をつり上げ、

「まあ！　ほんとに、いい年をしてなんて恥ッさらしな！——私、たったいまから、子供をつれて実家へかえらせてもらいます！」

と金切声で叫ぶやいなや、とび出していった。——こうなる事はわかっていたし、ずっとこのままなら、離婚沙汰にもなるだろうが、それもやむを得ない。

妻子のいない家へかえって、しばらくはショックで呆然としていた。——会社の方には、病欠とどけを出して、そのままなすこともなく三日たち、四日たち、あついころの事とて、にぎった手首の色がかわり、いやなにおいをたてはじめた。

それでも手首ははなれようとしない。

あまつさえ、時々思い出したようにぐいぐい動く。どうやるのか、ズボンの内側からボタンをはずしてしまい、彼のを外にひっぱり出すと、なんたる職業的執念のおそろしさ、指先でぐいぐいしごきにかかる。そいつが夜昼なしだから、わずか三、四日で、彼もげっそりやつれた。——そのかわり、小用の時は、何もしなくても、内側からボタンをはずしてくれ、ちゃんとささえて

くれるのは便利だが、このくらいの便利さじゃわりがあいっこない。

どこかの拝み屋か、名僧善知識に、この妄執をはらってもらう事も考えたが、とにかく歩いている時でも、電車の中でも、所きらわず突然ズボンの中からあけようとひっかき、あまつさえ、もそもそやり出すのだから気がくじけた。日に一度や二度なら、手汚さずのオナニーと思えばいっそラクチンだが、なにしろとみ子という女、最低日に十人の客は必ずこなしたというから、たまったものではない。おまけに大ベテランだから、ついには煙も出ない所まで、しぼりとられる。

「なあ、おとみさんとやら……」

このままじゃ死んじまうと思った彼は、やせこけた顔に必死の表情をうかべ、一夜自分の股間にむかって語りかけた。

「どんなうらみがあるか知らないが、どうもそいつあ、見当ちがいの執念ってモンじゃないか？——考えてもごらん。私ゃア縁もゆかりもない、ふりの客だよ。前の男に、金をとられて捨てられたにしたって、何も男全部を呪うこたアなかろう。男ン中にだって、あんたの味方がいるよ。いったい何がそんなにうらめしいんだ？　いってごらん、私でできる事なら、なんでもやったげるよ。りっぱな墓がほしいのかい？　ありがたい供養をやってほしいのかい？——やってほしい事があったら、なんでもしてあげるから、どうかそれで成仏して、離しておくれ。これ以上やられたら、身がもたないし、見なよ、頭ン所がすりむけて、ヒリヒリする」

そういって、出しっぱなしでうとうとした真夜中、——ふいに股間をグイとひっぱられて、彼

はギャッ、とうなって眼をさました。

だが、いつものやり方とちがう。手首はこすりたてるかわりに、グイグイとむこうへむこうへと、そいつをひっぱりたてる。

「なんだ、なんだ、おとみさん——ははアわかった」

どこかへこいとひっぱっているのだな、と思ったから、和服を着て外へ出る、——もう夜ふけで人通りがなかったからよかったものの、通行人が見たら変な姿だったろう。和服の前の所がつっぱって、グイ、グイ、と糸ででもひくようにしゃくられる。その度に、

「これ、あまり強くひっぱりなさんな。わかったよ、わかったよ、ああ、こっちだな」

と、その和服を着たやせた男が、ぶつぶついいながら、ふらふら歩いて行く。

やがて、どのくらい歩いたか、ごみごみした一廓の路地に面した、一眼でそれとわかる安アパートへ、手首は彼をひっぱりこんだ。二階へは外から上れる、その三つ目の戸口、鍵がかかっているようなのに、押すと中でガチャリとはずれてすうっとあいた。

中は、むうっと、黴の臭いと、昼の熱気のこもった四畳半、電気をつけると、乱雑な、一目でわかる女世帯で、畳も家具も、うっすら埃がたまっている。卓袱台の上の小皿にのこった夏蜜柑の皮に、もり上るほどのかびがはえ、どこやらで、何かが腐っている臭いがプンとする。

ははあ、ここが、女の部屋だな。死んでまだ、そのままか、とあたりを見まわすうちに、手首はまたグイグイひきたてて、ちゃちな箪笥の前へひきよせ、今度はグイと上へひっぱる。鏡に蠅

の糞のこってりついた、ちゃちな姫鏡台——どうやらそれらしいと、抽き出しをあけ、こまごましたものをとり出して、これかえ、これかえ、と股倉にきくが、手首は首を——手首というんだから、まあ、首みたいなものがついてるといっていいだろう——を横にふる。とうとう全部ひっぱり出したあと、抽き出しぬいてさかさにすると、奥板のむこう側に紙がはりつけてあって——これがどうやら、ヘタクソな地図らしい。よく見ると、この近所の岡のへんとわかり、その一箇所に印をつけて、小さな字で「四百万」と書いてある。

それでやっと読めた。——と同時に、前の男に銀行に預金しておいた金をもちさられて、銀行さえ信用する気にならず、こんな埋蔵金の地図のようなものを描いてかくしておいた、あのトルコ女丈夫の、あわれにいためつけられた、孤独と猜疑と妄執にみちた心が思いやられ、ゾッとすると同時に、ふと眼頭がジン、とした。

「わかったよ、おとみさん。——この金をとり出しゃいいんだね。それでお墓でもやすなり、りっぱな供養をすりゃいいんだね。——そしたらはなれて成仏してくれるね」

うん、うん、というように、手首が下へひっぱった。

さあしめた、あと一息、というので、とぶように夜の街を走った。常夜燈の所にくるたびに地図をすかし、あっちへまがって、こっちへ折れて、やっとその岡がくろぐろとそびえて見える所までくると、手首の方も、場所を思い出したのか、待ちかねたようにビンビンひっぱる。

「これ、いたいよ。もう眼の前じゃないか。印の所は、この岡のむこう側だ」

鼻緒がぷっつり切れた下駄を両手にもち、息せききって、岡のむこうにまわってみると——

何としたことか！

岡のむこう側は、つい最近はじまったらしいすぐ側をながれる河の拡張工事の最中、岡のむこう半分がごっそりけずりとられ、鉄矢板がうちこまれて、満々と黒い水がたたえられている。金を埋めた印のある所も、きれいさっぱりえぐりとられて、赤土の断崖が水際にそそりたつばかり……。

「アッ！　まって……おとみさん！……ま、まってくれ！——工事はおれの責任じゃない。金をとったのはおれじゃないよ。きいてくれ！　そ、そんなにひっぱらないでくれ！」

わめいても、妄執にとりつかれた手首にきこえるはずはなく、グイグイひっぱられる痛さに、悲鳴をあげ、半狂乱で身をよじりながら、あらがいがたい力にひっぱられて、彼はちょうど前に金の埋められていたあたり——黒く深い水の中にずぶずぶとひきこまれていった。

失神時代

1

「ポン！」

と下手の高村が上ずった声でさけんで、ライオンのようにあらい息をついた。肩が大きくあえぎ、小鼻がひくひくと動いている。

対門（トイメン）のミミも、聴牌（テンパイ）がちかい事がわかる。眼がうるみ、頬（ほお）が赤らみ、唇（くちびる）をなかばひらいて熱い息を吐き、腰をもじもじさせはじめた。九巡目、みんなそろそろ手がそろいかけるころだ。上手のマリだけが、まだ遠いのか、いらいらした表情で眉（まゆ）をしかめ、唇を歪（ゆが）めて、ぐいぐいと先自摸（づも）する。

私も一向聴（イーシャンテン）だった。だが、私はみんなとちがって、牌がそろってきたって何も感じない。ドラが三枚暗刻（アンコ）になって、相当大きな手なのだが、リーチをかけないとあがれないようなゴミ手なので、大した感激もない。それに——そもそも私は、みんなとちがって、まるきり感じないのだっ

た。

「ああ……」

とミミが溜息をもらして、身をよじらせた。——どうせ大した手ではないにきまっているのだが、ミミはやたらと感じやすいのだ。私としては、ミミが上ってくれる方がありがたい。ミミはなよなよとしているが、マリときたらやたらにはげしく、さわがしいのだ。十巡目、私はオタ風牌の引きぼり、高村はいれかえたがテンぱらない。ミミがひく。

「あッ！」

と摸牌のとたんにミミが眉をしかめてさけぶ。——白板だな、と私は思った。摸牌でミミがわかるのは、その牌だけだ。

「リ、リーチ……」

とミミはあえぎながら、かすれた声でいって牌をふせる。とたんに彼女はたえきれないように体をくずしてしまい、腕をうしろにつき、かすかな泣き声をたてはじめた。

高村にもマリにも、ミミの興奮がすぐ感染して、たちまち一座には、荒々しい息使いや、嘆声がみちはじめた。こうなったらみんな、自分の手づくりにばかり夢中になって、安全牌も危険牌も見やしない。第一、河の方にまるきり眼をやらないのだ。——私だけが仏頂面で、リーチ一発をさけて、安全牌からおろしはじめる。危険牌など一眼でわかる。筒子だ。どうせ大した待ちではあるまい。中はゴミ手だ。それもどうやら辺張か嵌張くさい。高村とマリが、歯をくいしばり、

はあはあいいながら牌をすてるたびに、ミミは、あッとか、ひいとか声をたて、身をよじり、髪をかきむしり、「もうちょっと！」とか、「もう少し！」とか、さけび声をあげる。そんな具合だから、冷静に見ていれば、上り牌はいっぺんにわかった。二筒だ。高村が筒子の山にのっており、しかも彼は万子の清一をねらってひきぼりしているから、きっと彼がうちこむだろうと思っていると——

はたして出た。見もしないで二筒をひきぼりし、とたんにミミは、

「それそれ！　そこよ！」

と叫んで、ひーと感激の声をあげてひっくりかえった。しばらくハンカチをかみ、うつぶせて肩をふるわせている。——失神まで行かないのも道理、白牌暗刻だけのとんだゴミだ。二筒嵌張の、あとはバラバラというやつである。うった高村も、眼をギラつかせ、ぜいぜいあえいでいる。マリは欲求不満の絶頂に達し、牌をガシャガシャにはねとばす。

「ああ、よかった……」ミミは、やっとのことで、あえぎながら、トロンとした眼をあげる。

「嵌張待ちが、スポッとはいってくれるぐらい、気持ちのいいことはないわね」

たしかに、女はみんな嵌張待ちが好きだ。——特にミミは好きだ。これが筒子じゃなくて、二索の嵌張だったら、失神していたかも知れない。

「なにさ、あんな手……」と、マリはやけになって洗牌し、さっさと壁をつむ。

親が高村にうつり、配牌がはじまる。——今度はマリの方に高い手が行った。見ているだけで

わかる。マリの眼がギラギラ光り、配牌が終っただけで、肩があえぎはじめた。マリの興奮状態からみると、彼女の好きな三元牌がたくさんはいったらしい。ためしに私は一巡目に紅中をほうってみた。マリは一枚目にすかさず食いついた。——これでこちらの方針はきまった。一枚ある緑発はおろせない。

ミミが、早くも鼻を鳴らしはじめる。——だが、彼女は、ちょっと牌がそろいはじめると、すぐ燃えはじめるのだから、大した事はない。高村も例によってふうふういいはじめたが、こいつは女たちにつられて興奮する性質だから、手はまだ遠いと見た。だが、不気味なのはマリだった。自摸もいいらしく、一枚も引きぼりしない。四巡目、五巡目となるにつれ、彼女は唇をだらりと開いて、舌を吐き、はっはと火のような熱い息をつきはじめた。眼がひきつり、身をもちかねるように、ドタドタ脚をくみかえる。私は役満聴牌とみて、マリを目標にベタおりをはじめた。

高村もミミも聴牌がちかづいたらしく、また自分の牌に夢中になりはじめた。ミミが白板をほうった時には、ビクッとした。——だがマリは眼をギラギラさせるばかりで食いつかない。私は中張牌の現物で逃げる。高村が自摸った牌をいれ、手の中から東をほうった。

「あー！　そこッ！」

とマリがすごい声で叫んで牌をたおし、ギャーッと叫んで、ドシンと後ろにひっくりかえった。

「おーッ！」とうなって、うちこんだ高村も白眼をむくと、卓にドタンとうつぶせになって、失神した。ミミも手を一眼みるとキャーッと叫んで失神した。

たしかにすごい手だった。大三元字一色、東西のシャンポンで、東は場風だ。ダブル役満である。

「おい……」と、私は声をかけた。

だが三人とも、失神して返事はなかった。——マリは、歯をギリギリと食いしばり、手をギュッとにぎりしめ、ドタンドタンと瀕死の鮪のように寝がえりをうつと、ぐーっと弓なりにそりかえってしまった。心配になった私は、冷たくなった茶を、彼女の顔にぶっかけた。茶滓が食いしばった歯の間にたまり、鼻の頭にチョコンと茶柱が立った。——それでやっと硬直がとけた。と見る間に、彼女は長いつけ睫毛をクルクルとふるわせ、「快楽の後産」をおこなった。（筆者注——何だかどこかで見たような描写だ）

「終りだよ」と、まだ失神してヒクヒクふるえている三人に声をかけて、立ち上った。

「ダブル役満打ち止めだ」

自分の支払い分だけ、そこにほうり出すと、私は煙草に火をつけ、外へ出た。——私は浮きっぱなしに浮いていたので、マリの大満貫が出ても、負けはわずかだった。

「あの人の麻雀、つよいばかりで、ちっともたのしみ方を知らないのね。——しびれることを知らない人って不幸だわ」

という、いつかきいた女どもの蔭口が、耳の中にひびいてくるようだった。

2

外へ出ると、私は自分のスポーツカーの所へ歩いて行った。——体の中を、つめたい夜の風が吹きぬけて行くような、索莫とした気分だった。背後の旅館の中では、まだ三人の男女が失神しているだろう。あれほどはげしい絶頂感を味わったあとだから、一たん気がついても、あの手を見たらまた失神するかも知れない。そうやって、一晩でもたのしむことだろう。

私は何となくさびしかった。——麻雀や勝負事で勝つ快感はわかる。私だって大きな手で上った時は、興奮する。だが私は、どういうわけだか、失神する所まで行かない。連中の事をオーバーだとも思う。しかし、一方では、みんなと同じように、失神するほどすさまじい快感を感じない自分の特異な神経や体質を、わびしく思う。

さびしさをまぎらわせるために、私は車をすっとばしたかった。——外国製の、おそろしくすかしたデザインのスポーツカーは、麻雀で勝った金で頭金をはらったのだが、その程度の金で買えたのも、このスポーツカーには、レーダー付き自動操縦装置がとりつけられていないからだった。車を運転する連中は、車の振動や、スピードの快感によって、運転中に度々「失神」した。そういう時代にあって、運転者がコントロールを失ったその瞬間から、運転をひきついでくれる装置がなかったら、事故はいくらでも起るだろう。だが、この装置は、まだ今の所かなり高価だったから、つけなければ、外国製スポーツカーでもぐっと安くなる。

つけないのは、無論違反なのだが、私の場合、医師の特別証明書がある。——「快感不感症」という、まことに不名誉な証明書が……。

エンジンをかけ、ギアをセカンドにほうりこんでぐいとひっぱり出すと、加速がシートをぐいと押した。——かすかな快さが、体の中を横切ったが、そんなもの、到底失神するほどのものではなかった。

車のすくない道路へ出て、いよいよ思いきってすっとばそうとした時、ヘッドライトの明りの中に、ふらふらと出てきて、酔っぱらったように手をふる女の影があった。私は急ブレーキをふんで、女のすこし手前でとまった。

「危ないじゃないか！」と、どなる前に、私は女が、酔っぱらっているらしいことに気がついた。

ミニスカートから、長い脚を出した、まだ若い娘だ。——眼がとけたみたいになり、ひらいた口からよだれをたらしている。

「のっけてェ……」と、娘は、そばへよってきて、呂律のまわらない舌でいった。——別に酒のにおいはしない。

「ラリってるな」と私はいった。「睡眠剤かLSDでものんだか？」

「そんなんじゃないわよウ」と娘はデレデレと車にしなだれかかりながら、うっとりとした眼つきでボディをなでた。

「私、カーキチなのよ。かっこいい車、ひと目見ただけで、ガクガクとしびれちまうの。とても抵抗できないのよウ……」

娘はボディに体をすりつけるようにして、夜空をあおぎ、深い溜息をついた。

「乗んな」と、私はいった。「だが、失神したら、した所でほうり出すぜ。それでいいね」

娘はきいていなかった。シートにすわっただけで、息がはずみ、酔っぱらったようにグニャグニャと体をゆらせ、ダッシュボードを、まるで愛撫するような手つきでなぜた。

「ヒャー！」

車をひき出したとたんに、娘は叫んだ。——スピードをぐいぐいあげて行くと、娘はシートの中で、テンカン病みのように手脚をつっぱらせ、ブルブルふるえながら、うわ言みたいに叫んだ。

「わー、たまンないわ！　しびれる、しびれるウ……」

私は、情けない思いで車をすっとばした。——この娘が他人の車からひき出せる「快楽」にくらべて、持ち主である私の味わえる「快楽」の、なんと貧弱で、つつましい事か！

とはいうものの、私個人の立場からいわせてもらえば、やっぱり今の世間の連中は、すこし気ちがいじみているような気がする。連中は何にでもむやみに快感を感じ、のべつしびれ、めったやたらに失神している。しかし、ものの本によれば、一時代昔の人間の大部分は、もう少しシャンとしていた。——あたかも、私のように……。快感を、感じるケースは、ごくかぎられており、ほとんどの場合、私のように、「醒めて」いた。

もっとも徴候はすでにあったらしい。若い連中が、睡眠薬やLSDやシンナーにしびれ、「行く行く」とかいうおかしなダンスを踊って忘我の状態になり、特に若い女の子は、触掏摸とかいう、巾着切り上りの歌手や、「甲虫」「虎」「牛」などという獣じみた集団歌うたいの歌をきいて、感激コーフンのあまりしびれちゃって失神したり、失禁したりしたという。つまり「虎テンカン」や「牛テンカン」である。

そのころの記録を読むと、当時の人たちがびっくりしたらしい事が書かれている。「牛」の歌をきいて、十三、四の女の子が、「イイワイイワ」とか、「ヤメテヤメテ」とか泣き叫んでバッタバッタとたおれた、ということが、当時の格調高い週刊誌にちゃんとのっている。私のしらべた所によると、今なら街頭でもどこでもきかれるこういったたぐいの言葉は、当時は成熟した女性が、男と二人きりで、人眼につかない所にいる時にもらす「恥ずかしい」言葉だったらしい。

いったい「牛」の歌で失神するなんて、どんな歌だったのか、きいてみたいような気もする。——きっと牛の鳴き声を基調にしたものだったのだろう。その証拠に、当時の失神した女の子が、「モウモウ、ヨクテヨクテ」といった、と書かれている。

それにしたって、当時はまだ、快感の叫びや表情を、公衆の前であらわすのは、恥ずかしい事だ、とする風潮が一般的だった。そういった風潮の一角をやぶって、いま述べたような人前で失神したりしびれたりするチンピラどもが出てきた。「失神女優」や「失神作家」も出てきて、さかんに「失神」のすばらしさを宣伝した。映画でもやたら失神場面や快楽場面がでてきた。それ

にあふられた女房族が、「失神」しないと生きている甲斐がないと思いこみ、やたら亭主を責めつけた。亭主どもは、最初、あまり女房どもに責めつけられて、肉体の酷使と恐怖のあまり失神したらしい。しかし、男連中は、やがて「泣く」事をおぼえた。そうなったら、「しびれる」のに紙一重だった。そのうち、人前で快感の叫びをもらしたり、失神したりするのが、当り前であり、むしろ「かっこいい」ことであるという風潮ができ上り——

いや、もうよそう。いくらいっても愚痴になる。——私は、自分が生理的にどうしようもなく古いタイプの人間だから、何だか人間が昔にくらべて、おそろしく、はしたなくなったように思える。しかし今の世間一般の人間にいわせれば、それは人間が「解放」されたのだ、というだろう。

車をすっとばしているうちに、前方に何かわあわあというさわぎが起っているのが見えた。——サーチライトが、白っぽいのと黒っぽいのと、二組の群衆がもつれあうのを照らし出した。私はスピードをゆるめた。近づくまでもなく、学生デモと機動隊の衝突だった。——集団的快感をもとめてなされる、一種の儀式だった。

白っぽいのは、伝統と由緒ある——丁度今は消えてしまったが、一時代前まであった江戸の「火消し」の装束のように——ヘルメットに白いマスクの学生だった。色とりどりの美しいヘルメットが「か組」や「し組」など、いろは四十八組の「諸流分派」をあらわしていた。学生の方のスタイルは、伝統を守っているのに、機動隊の服装は、最近になってかわった。ピカピカ光る、

踵の高い、拍車つきの長靴に、黒い乗馬ズボン、肩がぐっと張って、胴をギュッと幅広い皮のベルトでしめた、黒光りする皮ジャンパー、黒いピカピカのヘルメットに黒いゴーグル——そして、学生の方が、「伝統的な安っぽさ」を感じさせる角材をもっているのに、機動隊の方は、長い、黒い、牛皮の鞭をみんながもっている。

学生はわあわあいいながら、角材の先でもって、一糸乱れず、黒光りする隊列をつくる機動隊をちょいちょいとつっつく。むろん、機動隊の方がはるかに大きく、たくましく、学生の方は青白く、ひ弱で、どこか病的だ。役割ははじめからきまっていた。学生が角材でつつくのは、攻撃のためでなく、機動隊を挑発し、興奮させるための儀式だった。つつかれているうちに、見る見る機動隊の中に、たくましい、隆々たる力が湧き上り、ふくれ上ってきた。ライトの中に黒々と整列する機動隊の集団が、むくむくと何倍にもふくれ、脈うち出すように見えた。

「かかれーッ！」と号令がかかった。

機動隊はいっせいに鞭をふるって、黒い旋じ風のように学生の中に踊りかかった。鞭がひゅうひゅうぴしぴしと鳴り、学生はたちまちころげまわり、ヒイヒイ泣きながら逃げまどった。鞭の打撃でシャツをきりさかれた女子学生が、機動隊員の長靴にすがりながら、

「もっとぶって！　もっともっとぶって！」

と泣き叫んでいた。——学生のリーダーたちは、血を流しながら、殉教者の恍惚たる表情をうかべ、

「さあうて、もっとうて」

と叫んでは、失神していった。

「すごいですな、たまりませんな」と野次馬の一人が、息をはずませ、興奮に身をよじりながら私に話しかけた。「あなた……あなた、何とも感じませんか？　うわあすごい！　しびれるな」

「いいわ……すてきだわ……」と横のシートでカーキチの娘が、うわ言をいいながらふるえていた。「ああ、もう、私だめ……」

私は車を路傍にとめておりた。——当分通れそうもない。機動隊員の中にも、学生の中にも、とりまいて見ている野次馬の中にも、失神してバタバタたおれる連中がふえてくる。——私だけが醒めていた。

やり切れない気持ちで、酒でものもうかと思ってまわりを見まわすと、ふと派手なネオンが眼についた。

「失神クリニック」

——テレビでおなじみの**快感ドクター**　京都谷　昭、——24時間営業」

私はふらふらと、そのビルの入口にちかより、ドアを押した。

3

「やあ、いらっしゃい」と、京都谷ドクターは、上気した顔で、息を切らせながら出てきた。

「いま、テレビでボクシングタイトルマッチをやっていましてな。すごいスリルと快感ですな。ノックアウトされるまでに、私は三度も絶頂に達して、二度失神しましたよ。——所であなたは、どうですかな？　最近快感の度合がへりましたか？　老化現象じゃないですか？　何なら私どもの所の人間ドックにはいりますか？　私の特許の熱療法をやればたち所に恢復しますぞ。つまり、〝ホット・ドック〟というやつです」

「実は……」と、私は口ごもった。

「ははあ、さては、失神するまでの時間が長くかかるようになりましたか？——それとも絶頂に達しながら、やや微弱のため失神にいたらない？——それはあまり気にすることはありません。薬でも、食餌療法でも、すぐなおります。快感を感じはじめてから、一分以内で失神するのはソーローですが、五分以上かかるのはチローです。あなたは何分かかります？」

「実をいうと、感じないのです」と私はいった。「失神など、味わった事もないのです」

「なんですと？」京都谷医師は、ポカンと口をあけた。「そんなバカな……」

私は藁にもすがる気持ちでうちあけた。——きいているうちに医師の顔には、混乱と狼狽がうかんできた。

「機能的欠陥はない？」と医師は口をパクパクさせた。「それは病院で証明してもらったんですな？——それならば何も気にすることはない。人間はうまれつき、すばらしい快感を味わうことができるようになっているのです。こわがらずに、自信をもちなさい、自信を……」

「それがだめなんです——薬も、勝負事も、酒も、スポーツもやってみました。それぞれ若干の快感はあるんですが、とてもほかの人のようにしびれて、失神する所まで行かない……」

「おかしいですな。あなたの意識下には、何か快感を味わうことに対する、強い精神的障碍があるにちがいない。赤ちゃんの時、お尻は誰に拭いてもらいました？　前からですか？　後ろからですか？」

「たしかに、精神障碍はあるかも知れません」と、ぼくはいった。「ぼくには、人間は別に、そんなに何にでも、むやみやたらに快感を感じなくてもいいように思われます。一昔前の人は、快楽に対して、もっとずっとつつましやかでした」

「それそれ！　その考え方がいかんのだ」と医師は興奮して叫んだ。「昔より、今の方が、はるかに世の中が進み、人間の快楽追及は解放された、——その事がわかりませんか？　ほとんどの生産は機械がやってくれ、社会の秩序はコンピューターが保ってくれる。そして一方では、快美感の追及が、現在の社会をささえる大きな柱になっているのですぞ。昔は、人につかわれるサラリーマンは、若干マゾヒスティックにならざるを得なかった。今は逆に、マゾヒズムに快楽を感ずる人が、快楽をもとめて、サラリーマンになるのです。同様に、サディズムの傾向をもつ人は、リーダーになり、軍人になり、政治家になる。これだけ交通が便利になったのに、どうしてみんな、毎朝ギュウギュウづめの電車にのってかよってくるのか？　あのギュウギュウづめの状態の中に、集団的興奮と接触、圧迫、さわりあいによる快美感をもとめればこそではありません

か……音楽、演劇、映画——すばらしい芸術は何のためにあるか？　演ずる者、つくる者、それを見、聞く者、それぞれすばらしい恍惚と陶酔を味わうためではありませんか？　学者が真理をきわめる、探検家が未踏の領域におもむく、すべてその事を通じて〝しびれる〟ためではありませんか？」

「しかし、もともと現在のようなタイプの快美感や失神は、セックスにともなうもので、種族維持を誘導するための、蜜のようなものだったんじゃないでしょうか？」

「セックス？　種族維持？　ぷふい！——そんな原始的で野蛮な行為から得られる快楽なんて、現在われわれに解放されている広大な快感の広野にくらべれば、太陽の前の星のようなものです。しびれる事はほかにいっぱいあり、その豪華ケンランさにくらべれば、セックスなんて、面倒で、味のうすい、原始的な快楽にすぎません。火を発明する前は、人間は穀物をなまでかじったかも知れません。しかし、いったん穀粒を煮たきすることをおぼえたら——たちまち穀物火食は全人類に普及した。種族維持は、若い時、学校で採集された精子や卵子を冷凍し、完備したオートメ病院で、人工授精から人工子宮内での成育までやっています。人間は、科学技術によって〝生殖〟などという厄介な仕事から、完全に解放されたのです。解放されてみれば、〝危険な快楽〟であったセックスから得られる快感など、実にくだらんものであったという事がわかった。わかりますか？——人間に解放された、この快感の野の広大さを考えなさい！　快感追及こそ、現代社会をささえる、すばらしい人間の生き甲斐だという事を考えてごらんなさい。おお！——

すてき……人間は今やあらゆる事に快楽を見出せる時代になった！……おお、失神時代万歳……しびれちゃった、しびれちゃった！　しびれちゃったよ！」

次第に興奮してきた医師は、うん、というと赤い顔で眼をむいて失神した。アジ演説に自己陶酔の快感を感ずる、教祖型の人物らしかった。

私は落胆して外へ出た。——路上では、何百という学生たちがたおれ、うめき、失神していた。乱闘場面というより、乱交場面という感じだった。

車の所までかえると、さっきまでのっていたカーキチの娘の姿はなく、かわって背の高い、きちんとした服装の娘が、車の傍に腕組みして立っていた。——野次馬の一人かと思って、傍を通りすぎようとすると、ふと彼女が私と同じように「醒めた」表情をしていることに気がついた。冷静で、わびしげな顔つきで、すこしも興奮したり、陶酔したりしている様子はなかった。私は思わず、彼女の顔をまじまじと見つめた。むこうもこちらを見て、すぐ同じ事にきがついたらしく、かすかに驚きの表情をうかべた。

「あなたは……」と私は路上の光景をさしながらきいた。「何も感じませんか？　興奮しないんですか」

「いいえ……」と娘は口ごもりながらいった。「興奮するよりも何だか……浅ましい気がしますわ」

「じゃ、あなたも、不感症なんですか？」とぼくはせきこんで叫んだ。

娘はパッと顔を赤らめ、手で顔をおおった。——同類相憐れむというか、同じ「病気」を荷う身に、彼女のこれまでたえてきた劣等感と孤独が痛いほどに感じられた。

「おのりになりませんか？」と私は車のドアをあけていった。「実は——ぼくもそうなんです」

はじらっている彼女の背を、私はそっと押した。指先が、見事にもり上った乳房にわずかにふれた。とたんに——おお、何という奇蹟か！——私の中に、今までかつて感じた事のないはげしい興奮が、深い所から湧き上ってくるのが感じられたのである。

そして——何とも皮肉な事に——双方うろおぼえの知識と、二人の内部からはげしくほとばしる興奮にみちびかれて、やっと行なったセックスの中で、私はうまれてはじめて、はげしい、しびれるような快感を味わったのである。彼女もまた、同じだった。未知の快感の領域に、ふるえながらわけいって行った彼女は、三度目、四度目の行為の中に、ついに絶頂に達し、短い時間ながら「失神」したのである！

「私……私、失神したのね……」彼女は私にすがりつき、私の肩に顔をおしあててすすり泣きながらいった。「私でも……失神できるのね。……まるっきりの片輪じゃなかったのね」

だが——それが、私たちに許された、ただ一種類の「しびれるような快感」だったのである。しかし、その快楽を通じて、私たちは内面的に深く深くむすばれていった。

私たちはついに「結婚」した。——この古めかしい制度は、まだ役所の片隅にのこってはいた。

しかし、正式の届けを出した時、それが何十年ぶりかだったので、たちまちジャーナリズムの話題になった。

「不感症男女結婚！――あらゆる快感のうち、セックスだけにしか〝失神〟を味わえない奇妙な男女が夫婦になった」

「われ鍋にとじ蓋――おどろくべき変態男女の異常なカップル」

私たちは、一時代前の不具者同士――盲人や聾唖者同士のカップルのように見られているらしかった。街を歩けば、テレビや三文週刊誌で顔を知った連中が、あれごらんなさい、あの二人、有名な変態夫婦よ、とコソコソささやき、ゴシップに快感を感ずる連中の中では、私たちを見て、しびれ、失神するのだった。

しかし、私たち二人は幸せだった。

たしかに、私たちの味わえる快感は、現代――この「失神時代」に無限にあふれている多種多様の快楽にくらべれば、貧しく、みすぼらしかったろう。しかし、そのたった一種類しか味わえない快感を媒介として、二人の間にはいい知れぬほど味わい深く、大きな「内面的な喜び」が共有されていた。そして、それだけあれば、私たちにとって、充分だった。充分すぎるほどだった。

私たちは、「不感症」のかげ口のかわりに、「変態夫婦」のささやきをききながら生きはじめた。しかし、今度は、前の場合のように、堪えがたいほどわびしく悩ましいものではなかった。私たちはお互いにしっかりむすびつき、そのむすびつきから得られる喜びで、満足していた。私たち

は二人とも、もう、ほかの快感を味わえない事をうらやましいと思わなかった。「快感」をあれこれとあさり、むさぼることに、さしたる興味を感じなかった。私たちにとっては、快感そのものが、それほど追及するに値するものとも思えなかったのである。二人の間にある、たった一つのそれだけで、充分だった。――快感にみち、あるいはのべつ快感に渇え、いつもトロンとしたうるんだ眼つきをして、だらしなく唇をひらいている人間よりも、私たちには、人間としての威厳、つつましさ、平静さ、気丈さ、やさしさ、かげりのあるさびしさなどの見てとれる人間の方が、よほどりっぱに見えた。

たしか私たちは、前世紀の遺物的な人間であり、現代的なタイプ人間ではないかも知れない。私たちはひょっとしたら、ほろび行くタイプなのだろう。しかし、現代に適応できないにしろ、私たちが感ずる「りっぱさ」の価値はかわらないような気がする。「りっぱな人間」必ずしも、時代に適応できるとはかぎらない。

妻が妊娠した時、私たちは人里はなれた地に職をもとめた。そこで私たちによって育てられる私たちの子供もまた、ひょっとしたら、時代に適応できないかも知れない。しかし、私たちが「時代をこえる」と信ずる価値を、片隅につたえることも、意義のない事ではあるまい。――思えば私たち二人とも、そういう風に育てられたのである。

もっとも、私たちは、ひきこもりきりになったのではなく、時折り都会へ出た。――ある意味で、私たちはすでに、時代の影響をうけ、その毒に滲透されていた。何と、私たちは――街中へ

出、快楽を狂躁的に追いもとめる人たちから好奇と軽蔑の眼で見られ、衆人環視の中で「変態夫婦」と後ろ指をさされないと、二人とも強い興奮を感じないようになっていたのである！

大混線

「またお金を貸してほしいんですけどね」と、テレビ電話で〝動物ばあさん〟がいった。「今度はちょっと額が大きいのよ」

ばあさんは、画面の中で、意地悪そうに、長い附けまつ毛をつけた眼を光らせた。

「あんた、いま、いやな顔をしたわね……」

「とんでもない」と、彼はあわててうち消した。「私どもはいつでも、お客さまには笑顔でもって……」

「でも、たしかに、またかって顔をしたわよ」ばあさんは毒々しくルージュをぬった口をへの字にまげて、黒くふちどりした眼をほそめた。「何か気にいらない事でもあるの？　前に借りたお金を、まだ全部かえしていないから？——私の遺産と年金の中からきちんと……」

「はい、よく存じております」彼はせいいっぱい微笑をうかべた。「それでも、累積でかなりな額になりますので……」

「いやな顔をしたでしょう」ばあさんはなおも意地悪く、上眼づかいでねめつける。

「いえいえ、決して……きっとカメラの具合がよくないんでしょう」彼は電話の送線カメラをなおすふりをした。「それで今回は、いかほどでございますか？」

ばあさんは金額をいった。——ちょっとびっくりするほどの額だった。

「それは相当なものでございますね」と彼はうなずいた。「今度は何におつかいになるので……」

「私がほかの事につかうと思って！」ばあさんはわめいた。「ペットを買うんですよ。今までだって、ずっとそのために借りてきたのよ」

「ははあ……」彼は眼を白黒させながら、メモした申しこみ金額を見つめた。「こんな高いペットといいますと……何でしょうか？」

「シロナガスクジラよ」

「ええ？」彼は眼をむいた。「シロナガスクジラって——あの、海の……クジラですか？」

「そうよ。地球上最大の生物よ。まだやっと体長十メートルほどの子供だけどね。かわいいわよ。大きくなったら三十メートルで百トンにもなるわ」

「でも、そんな大きなものどうやって飼うんですか……」彼は呆然としてつぶやいた。「あいつはその——時々赤道から南極あたりまで、散歩させてやらなきゃなりませんよ」

「そのために、船を一隻買うのよ！」とばあさんはわめいた。「いいこと。ペットの飼い方にまで、いちいち銀行の指図はうけませんからね。湾を一つ買って、そこで私のクジラちゃんをだいじに飼うんだから……」

「とにかく……」彼はあわてて次席のマリに目くばせした。「ちょっとお待ちください。何分にも額が大きいので……」

「何よ！　今さら私の信用調査をやろうっていうの？　何年間のとりひきだと思ってるの」ばあさんはわめいた。「私の生命保険を担保にするわよ。私の入れ歯も担保にするわ。それでもまだ文句あるの？」

「早く本店の電子脳（ブレイン）をよびだせ」彼はマリの背中をつついた。「OKが出るかどうかむずかしい所だ。——保険担保といったって、あのばあさん、この先まだ何十年と生きそうだ」

「入れ歯はどうなの？」とマリは、よび出しキイをおしながらいった。「ひょっとすると、プラチナとダイアモンドかもよ」

「どうせサンプラだよ。担保価値なんかあるもんか」

「あら……」とマリはつぶやいた。「これ、何かしら？」

準備OKのランプがついて、マリは〝動物ばあさん〟のIDコードを送りこんだ。——だが、CRTディスプレイの画面にあらわれたのは、バナナとリンゴの画だった。左手にバナナが三本、右手にリンゴが三つうつっている。クリア・キイを押すと、その画は消えずに、どういうわけかチンパンジーが一匹あらわれた。——最近のCRT端末は、みんな、カラー画像もおくれるようになっているが、こんなものが出てきたのははじめてだった。

チンパンジーは、チョークをとると、バナナとリンゴを一つずつ、線でかこみはじめた。
「ばかにしてるわ！」マリはプッとふくれた。「これ、私、見たことがあるわ。チンパンジー用の教育番組よ」
「集合論の初歩だな」と彼はつぶやいた。「回線の故障かな……」
背後で唸り声がきこえ、彼はすっかりあわてて、つなぎっぱなしのテレビ電話の方へむきなおった。
「申しわけありません。もう少しお待ち……」
ください、の語尾をのみこんで、彼は眼をむいた。——テレビ電話にうつっているのは、〝動物ばあさん〟ではなくて、一匹のオランウータンだった。一瞬彼は、ばあさんが、あまり動物に夢中になりすぎたため、ついにオランウータンに変貌したのかと錯覚したが、そのとぼけた顔のオランウータンが、しきりに類人猿用に開発された「身ぶり言語（サイン・ランゲージ）」をくりかえしているのを見ると、これもやはり、類人猿用教育番組の閉回路放送が、とびこんできたのだとわかった。
「どうやら回線（ライン）の故障らしいな」
彼は肩をすくめた。
「どうしたんだろうな。——導波管（ガイド・チューブ）かメーザー回線が、どこかで接触でもしたんだろうか？」
そういいながら、彼は、テレビ電話の画像を消して、故障係よび出しの番号ボタンを押した。
「困るわね、ほんとに……」

マリは、眉をしかめてCRT端末の画面をにらみつけた。
「チンパンジーはまだやってるかい？」
と、彼はなかなか出ない故障係にいらいらしながら肩ごしに背後をふりかえった。
「ううん、もう一度クリア・キイを押したら、今度はお料理番組がうつりましたわ」
「何かうまそうなものができそうか？」彼は意地汚なく背後に気をひかれつづけた。「鯵のタタキか、おでんをやってたら見せてくれ。独身者（ひとりもの）は、料理してる所を見るだけでもうれしいんだ」
「おあいにくさま、中東風の焼肉料理（シシカバブ）よ」とマリはいった。「でも、こんな番組やったって意味ないわね。どうせ最後に今つくり方を説明した料理が一切、味までついた冷凍食品のコマーシャルが出て、〝ただ今のお料理、これを電子レンジにほうりこめば、三分間でできます〟とくるんだから……」
「畜生、故障係の奴、なかなか出ないな」
彼はいらいらして、もう一度コードを押しなおした。
「きっとあっちこっちからの電話で、線がふさがってるのよ」マリはふりむいた。「番号、まちがいなくおした？」
「おしたよ。こんな簡単な番号……」
そういいかけて、彼は、あっと思った。マリも同じ思いらしく、腰をうかした。

「テレビ電話の回線も混線してたんでしょ」とマリはいった。「本社とのラインと、同じ回線をつかっているはずよ。その上、電話局の自動交換機が故障でもしてたら……」

「そうだ。どこへつながったかわからんぞ……」

彼があわてて電話をきった時、ドアの外でごうっという音がきこえた。エアカーが、逆噴射装置（スラスト・リバー）をつかって急ブレーキをかけた音だ。——と思ったとたん……。

「手をあげろ！」

ドアがはげしく八文字にひらかれると、黒い帽子をかぶり、トレンチコートの襟をたてた四、五人の男が、拳銃をかまえてとびこんできた。

マリは悲鳴をあげた。

男たちは、きびしい顔つきでカウンターの所までくると、彼にぐいと拳銃をつきつけた。

「抵抗するな。おとなしくむこうをむいて、カウンターに手をつけ」

彼ががくがくふるえながらいわれた通りにすると、男たちは彼のポケットをさぐり、両手にガチャンと手錠をはめてしまった。

「よし。——さあ、早く本署へこい」

「本署へこいって……」彼は口をパクパクさせた。「あ、あなたたちは、銀行強盗じゃ……」

「何をいっとる。銀行強盗はお前だろう。われわれは警察のものだ。こんなに早く来たんでおそれいったか」

「冗談じゃない！　ぼくはここの銀行の支店長ですよ」

「支店長？」刑事たちは顔を見あわせた。「じゃ、銀行強盗はどこにいる？　この女の方か？」

「ばかにしないで！　私も彼の同僚よ。私は支店長次席よ」マリは叫んだ。

「おかしい——だまされるな」と警官の一人がいった。「たしかに、一一〇番へ緊急警報がはいったんだ。この銀行に強盗事件発生、犯人は二人組……」

「通信回路が故障して、いろんな通信が混線しちゃってるんですよ」彼は手錠をつき出していった。「自動交換機やコンピューター類も、連鎖反応でめちゃめちゃになってるんです。こっちは故障係をよび出したのに一一〇番につながっちゃった」

「本当に一一〇番はよばなかったか？」

「よんだわ」マリが青くなっていった。

「えッ？　いつ？——いつよんだんだ」

「たった今よ。警察の人がとびこんできた時、ピストル強盗とまちがえて、足で、警報用のフットバーを……」

一一〇番直通の警察用フットバーは、万一にそなえて机の下にあり、両手をあげても、爪先で上げれば警報が警察へとどくようになっていた。

「そりゃ大変だ！」と彼は叫んだ。「今度はどこへつながったか……」

いいおわらないうちに、ものすごい音をたててベルが鳴り出した。同時に天井にとりつけた、

いくつもの自動消火栓がひらいて、天井からざあッとしぶきがおそいかかった。

「アッチッチッチ！」

警官も彼も頭をおさえて逃げまわった。

「ここの自動消火栓は、何だって熱湯が出るようになっているんだ？」と警官はわめいた。

「切りかえバルブが操作をまちがえて……」彼はふりそそぐ熱湯からにげまわりながらさけんだ。「ボイラーの方につないじゃったんです。ここの火災検出装置も、消防署のコンピューターで、状況判断をやってもらい、配水バルブへフィードバックされるようになっていますから……」

けたたましいサイレンの音がきこえたと思ったら、ホースをもった消防手たちがドアからとびこんできた。

「火災発生箇所はどこだ？」と、隊長は叫んだ。「こりゃひどい！——すごい煙と熱気だ。ガスマスクをもってこい！　それからドライアイス噴霧器だ。ここの温度をさげろ。逃げおくれたものがいるぞ！」

消火栓からまきちらされる熱湯の濛々たる湯気にあわてた消防手たちは、ボンボンとドライアイスの霧をふりまき、化学消防液の泡をもくもくと行内に吹きこんだ。ドライアイスは熱湯にふれて、ますますものすごい湯気をたてはじめた。

「やめてくれ！」彼は泡と湯気との中をもがきながらわめいた。「専門家のくせに、煙と湯気

の区別もつかんのか！」

「ひどいやけどだァ」と隊長は赤くなった彼の顔を見ていった。「だが、もう大丈夫——早く避難しろ。爆発すると危険だ」

「爆発なんかするわけないだろ。ここは銀行だぜ」

「銀行？」と隊長はけげんな顔をした。「ここは化学工場じゃないのか？　警報はたしかに……」

「コンピューター回路の混線だ」彼は半ベソかきながら叫んだ。「火事じゃないんだ」

「おかしい。われわれの持ってきた温度検出装置は、百度をしめしている」

「熱湯がふき出してる下においてりゃそうなるさ」

やっとの事で建物の外へ逃げ出した彼は、いきなり胸ぐらをつかまれた。

「いったいどういうつもりなんです！」

〝動物ばあさん〟は入れ歯をはき出さんばかりにわめいた。「ちょっとお待ちください、なんていっておいて、葬儀屋のガイドを見せとくなんて、人をバカにするにもほどがあります！　さあ、今すぐお金を貸してくれるかくれないか、返事を頂戴。くれないと、あんたの事、頭取にいいつけてやるからね。お宅の銀行の頭取は、死んだおじいさんとは、保育所の同窓なんだから……」

「そんな事いったって……」彼はフラフラになって弁解した。「いま、電話も本店コンピュー

ターも、ラインが故障で……」

「そんなら、直接行ったらいいでしょ。さあ、今すぐ行きなさい。今すぐ！　私のクジラちゃんはペット屋で待ってるのよ」

「車はだめよ」マリが横から袖をひっぱった。「誘導道路（ガイドウェイ）へはいったら……どうせ交通管制コンピューターも混乱してるから、誘導操縦装置に、どこへつれて行かれるかわからないわ」

「車がだめだってのに……」彼は胸ぐらをとられたまま、首をねじまげてきいた。「このばあさん、どうやってきたんだ？」

「だって、ばあさんの家は銀行のななめむかいよ」とマリは呆れたようにいった。「家から自転車できたの」

「自転車？」彼は胸ぐらをつかんだ手をもぎはなすと、ばあさんの後ろへむかってとんだ。

「すみません。おかりします！」

「泥棒！　私の自転車を！」とばあさんは金切り声で叫んだ。「自転車泥棒！　銀行泥棒！　泥棒銀行！」

「自転車で本店まで行くつもり？」後ろにのったマリはきいた。「日が暮れちゃうわよ」

「隣の町にクラシックカーを持ってるやつがいるんだ」彼はあえぎあえぎ説明した。「誘導装置も、自動操縦装置もついていないから、一般道路は走れないけど、間道を通れば、本店まで行けるだろう」

「あなた、そんな車運転できるの？」

何とかなるさ、と叫んだが、その声は、背後からせまってくる猛烈な轟音にうち消された。——自転車はいつの間にか誘導道路に出ていた。交通管制システムによる誘導走行中だった車が、あちこちでダンゴ衝突したり、ガードレールにのり上げたりしており、中には逆立ちしたりしているものもあった。が、自動ブレーキがかかって、一台も動いていない。にもかかわらず背後からはものすごい轟音が刻々せまってくる。

「もっととばしてよ！」マリが悲鳴をあげた。「後からジャンボSTOL（ストール）（短距離離着陸機）がおりてくるわよ！」

「なんだって旅客機が自動車道路なんかにおりてくるんだ！」彼はわめいた。「交通違反だぞ！」

だが、六百人乗りの巨人機は、もう着陸してしまい、二人のすぐあとから滑走していた。

「おーい、危いぞ！　どいてくれ！」

と、操縦席の窓をあけてパイロットがさけんだ。

「何いってるんだ。ここは飛行場じゃないぞ！」と彼もどなりかえした。

「わかってるよ。だけど誘導操縦装置がここへおろしちまったんだ」と、パイロットは肩をすくめていった。「この道はどこへ行くんだ？　おれたちは市内へむかってるかね？」

「ああそうだよ。——そうだ。市内までつれてってくれないか。銀行の本店へ行くんだ」

「銀行？」と通信士が顔を出した。「どこの銀行だ？」
「第一六銀行だ」
「それじゃこっちへはいってこないか」と通信士はいった。「管制塔のコンピューターをよび出そうとしたんだが、どうしても、その銀行のコンピューターにつながっちまうんだ。こちらのCRTにコードが出ている」
「しめた！」彼は自転車の上から、ひらりとジャンボSTOLのサイド・ラダーにとびついた。「これで町まで行く必要はなくなったぞ！」
「私はどうなるのよ！」こぎ手のいなくなった自転車の後ろの荷台にのったまま、マリは悲鳴をあげた。「この自転車、誘導運転装置がついてないのよ」
「なくて幸いさ」と彼はジャンボSTOLの窓から体をいれながらさけんだ。「変な所へつれて行かれなくてすむよ。安心しろ」
通信室のCRT端末のキイをあわただしく押すと、うれしや本店のコンピューターはちゃんと答えてくれた。〝動物ばあさん〟への新規貸し付けは——NOだった。

突然の局地的地震によっておこった、網の目のような超超多重通信回線の混乱は、数日たってやっと回復した。各所にある大容量コンピューターそのものの被害はわずかだったが、それでもショートして一部の記憶が消えたり、妙な記憶を入れてしまったりしたので、修正するまでかなりの時日を要する、と発表があった。

「われわれの個人記録も、ちゃんとチェックしろとさ」と、彼はCRTの前にすわってぼやいた。「ほら、君のコードも押してみろよ」
「冗談じゃないわ！」コードを押したマリは、画面に出てきた記録を見て叫んだ。「あの記録見てよ。私、あなたと結婚している事になってるわ！」
「しようがないよ」と彼はマリの肩に手をおいた。「記録を修正しようと思ったら、おそろしく手間がかかるんだからね。社会に迷惑かけないために、結婚しようじゃないか」
「してもいいけど……」マリは彼の方をむいた。「コンピューターのまちがった記録に、人間の方があわせるの？　妙な気持ちだわ」
「ええと、お二人さん……」
突然背後から、声をかけられて接吻しかけていた二人は、あわててはなれた。
「おたのしみ中失礼——私は保険会社のものですが、実はお隣の老婦人が、一昨日、なんでも銀行からの融資をことわられたショックとかで、突然なくなられまして……」
「えッ？」と二人は叫んだ。
「まことに御愁傷な事で。それで、当方の記録では、あなた方御夫婦が生命保険の受取り人になっておりますが……」
「そんな……」といいかけたマリの口を、彼はあわててふさいだ。

「ね、見ろ。まちがいだって、たまにはいい事があるだろ」と彼はささやいた。「まちがいにあわせて結婚するんだ。これもやっぱりまちがいにあわせなきゃ……」

「それから、私どもの方が、あの御婦人の遺言執行の方もひきうけておりまして……ちょっと失礼」男はアタッシュケース型のコンピューター端末器をカウンターにおくと、コードのジャックを、通信線のソケットにさしこみ、キイをたたいた。「遺産は保険受取り人が相続する事になっておりますから、家邸ともどもこれだけになりますな。ただし、ペットもひきついで世話をする、という条件つきです……」

「よろこんで！」彼は息をはずませていった。「で、でも相続税が大変でしょうね」

「動物愛護法にもとづき、ペット相続をなさると控除があります。故人はずいぶん高価なペットをたくさん飼っておられますから、控除額も相当になって、ほとんどはらわなくてもいいようになりますな。キリン二頭、河馬二頭、ワニ一四、象一頭、ライオン三頭、ゴリラ二頭、ほかにナマケモノ、センザンコウ、ゾウガメ、カンガルー、ダチョウ……」

「まるで動物園だな……」彼は身ぶるいした。

「それから――シロナガスクジラ一頭……」

「クジラですって？」彼は眼をむいた。「そ、そんな……クジラはまだ購入してないはずですが……」

「でも、コンピューターの記録はそうなってますよ。つい最近購入されて、代金は未払いになってますが――」

「クジラはだめよ！」とマリはいった。「だって――考えてごらんなさい。あんなもの飼おうと思ったら、保険金をほとんどつぎこんじゃうわ」

「でも家邸はのこるよ」彼はつぶやいた。

「お言葉ですが――」と男はいった。「遺産に条件がついておりまして……もしペットを全部相続しないなら、ほかの相続権も、保険金受取りの権利も、全部失う事になります……」

「おお！」と彼はうめいた。

「クジラはいやよ。絶対に……」とマリは強調した。「クジラと私と、どっちが大事？」

「待ってくれ……」彼はふらふらとCRTの方へむきなおった。「混乱した。どっちが大事か……ちょっとコンピューターに、きいてみよう」

「やめて！」マリはとうとう金切り声で叫んだ。「今はコンピューターにきくのはやめてよ！――どんな答えが出てくるか、わかったもんじゃないわ！」

笹の花

ある朝——

郊外に、定年五年前になってやっと建てる事のできた新居から、出勤しようとしたサラリーマンが妙な顔をした。

ドアが何かにつかえてあかなかったのだ。

「おい！」

バスの時間におくれそうになっていた彼は、いらいらした声でどなった。

「どうしたんだ？　ドアがあかんぞ！」

「錠をはずしましたか？」と、細君は奥からいった。

「はずしてある——いったいこのドアは何だ！　下の所がつかえて、あかんじゃないか。新築して、まだ三ヵ月しかたたんのに、もうくるいが来るとは、いったい最近の建売業者は……」

「おかしいな。引き戸ならともかく、ふつうのドアが、そう簡単に狂うはずはねえだろ」と、大学へ行っている息子が顔を出していった。

「ちょっとどいてよ。親父さん。ぼくがやって見らあ」
アメリカンフットボールの選手をしているごつい息子は、腕力にものをいわせて、押しあけようとした。ドアの上の方がしない気味に隙があいたが、下の方が、たしかに何かにつかえている。
「もういい！」と父親は叫んだ。「無茶をするな。蝶番がとれてしまう。——まだ月賦がのこっているんだぞ」
「戸框にひっかかっているわけじゃないよ。むこう側から、何かが押えているんだ」と息子は下の方を指さしながらいった。「大きな荷物でも夜中に配送されて外においてあるんじゃないかな」
息子がぐっとドアを押すと、何か弾力のあるものが外からおさえているのがわかった。
——長女が、裏口から下駄をつっかけて出て行く足音がきこえた。下駄音が、表のドアの外側に近づくと、おどろいたような叫び声が上った。
「お父さんもお兄さんも、まあ、ちょっと来てごらんなさいな」
「来てごらんなさいたって、ドアがあかねえんだ」と長男はどなった。「いったい、何がおさえているんだ」
「だからさ、まあ、裏からまわってきてごらんなさい」
父と息子とそして母親も、裏口から出て表へまわった。
「ほら、これ！」

と長女は、ドアの外を指さした。
「こりゃおどろいた」と長男はいった。
「へーえ、こんな所に……」と母親。
一夜のうちに、筍が二本、ドアのすぐ外のコンクリートを破ってのび出しており、それにつかえてドアがあかなかったのだ。
「なんだ！　筍ぐらいで破れるほど、このコンクリートはうすいのか！」と父親はどなった。
「おい、母さん！　すぐ建築会社の奴をよんで文句をいえ。きっと手をぬいたにちがいない」
「そうでもないよ。このコンクリートは結構あついぜ」と長男はしゃがみながらいった。「それよりも、植物ののびる力ってすごいんだなあ。——コンクリートの下にゃ、割栗か何かしいてあるのに、その基礎をつきぬけて、一晩でコンクリートを下からつきやぶって……」
「ヒトヨタケって茸が、アスファルトを割って一晩でのびてきたって話もあるわよ」と長女はいった。「植物の根は、でかい岩でも割っちゃうのよ。豆が水を吸ってふくらむ力は、樫の樽だってこわしちゃうっていうわ」
「いいから、とにかく建築会社へ電話しろ」
父親はカッカとしながらいった。——定年ちかくまで働いて、やっと建てた自分の家を、小生意気な筍風情にこわされた事が、彼の自尊心を著しく傷つけたらしかった。
「それから、お前、その筍をぬいておけ。できたら根もひっこぬけ。いいな。わしは会社へ行

く」

「あなた……」母親があわてて声をかけた。

「足もとが……サンダルつっかけただけですよ」

「それにしても変な筍だな……」

長男はぶつぶついいながら、その直径五センチ、高さ十五センチばかりの、細い筍に見入った。

「ほんと、変な、まだらの模様があるわね。こんなのはじめて見たわ。ふつうの竹かしら？」

長女もかがみこみながらいった。

「あ、ツウ……」長男はのばした手をひっこめて、指先を口にもっていった。「きをつけろ。こいつ、トゲがあるぞ……」

「それにしても変な筍だな……」

と、役所の農林課の課員はいった。

「新種かな……」

「そうだ。——今までなかったタイプだな」と、研究員は、造成宅地の傍の、藪でおおわれた斜面を見上げながらいった。「いま、大学の方でしらべてもらっているが、こいつは厄介なしろものだぜ。どこからか持ちこまれたものか、それとも突然変異種か知らないが、おそろしく繁殖力旺盛だな。——あそこを見ろよ。今まで下生えになっていたチマキザサが、どんどんおきかわ

っている」

「どうも、上の方の松が、生気がないみたいだが……まさか、松までやられるんじゃないだろうな」

「わからんな。——とにかく、この斜面の植物相は、極相（クライマックス）をつくっていたんだが……この変てこな新種の出現で、安定がくずれはじめたみたいだ……」

「気をつけろ」と課員は足もとの赤土を指さした。「ほら、あんたの足もとに、あの笹の筍が出てきているぜ。——トゲはかぶれるそうだが、筍の尖端のトゲは、特に毒性がつよいって報告がはいっている。もう、何百人という入院患者が出ているんだぜ」

「おい、あちらへ行こう」研究員も、さすがに顔色をかえて、道路の方を指さした。「冗談じゃない。あちらにもこちらにも筍が出はじめたぞ」

まがまがしい新種の笹は、いつのまかに、全国のいたる所の山野ににじみ出すように出現したかと思うと、たちまち怒濤のような「進軍」を開始した。——その途方もない成長力は、一夜にして、けずったばかりの造成宅地の地下に、無数の地下茎をのばし、二日目にはいたる所に、毒棘をもった筍を出現せしめ、三日目には、ねじくれまがった葉で、地上をうすくおおってしまう、という有様だった。

それでなくとも、イネ科ササ属という植物は、生活力旺盛で、しぶとい性質をもっていた。日

本全国の山野をおおい、植物相が遷移して行った果ての極相における残存者となっている場合も多い。種類によっては、強酸性の悪質土壌でも平気で繁殖し、その地下茎の発達としぶとさは、開墾者泣かせである。——そして、突然出現した新種のササでは、筍にして一時間に三十センチから五十センチ、地下茎でも一時間十から二十センチという途方もない成長力をもち、しかも、その根は、地中から養分をとるばかりでなく、寄生木のように他の植物の根にからみついて養分をうばうこともでき、さらに、まるで動物の消化酵素のような、繊維質・蛋白分解酵素を出して、どんどん他の植物を「食い」はじめたのである。しかも、一方においては、葉、茎に、毒のある棘をもち、その枯葉が、粉末化したものを吸いこんでも、人間や動物がはげしいアレルギー症状を、ひどい時には重篤の中毒症状を起こすのだった。その上この毒は、免疫ができず、かえってクラゲの毒のように、一度中毒を起こすと、その次はもっとはげしくなる。いわゆる過敏症（アナフィラキシイ）を起こすという厄介きわまるものだった。

この新しいササの出現は、突如として植物が、ある種の動物のように、獰猛（どうもう）きわまる攻撃性をもったように見えた。そして一度地上に出現するや、まるで癌細胞のように、すさまじい勢いで、在来の植物を「食い」はじめた。いや、植物だけでなく、野生動物や人間も、毒棘や毒性のある枯葉でたおしては、茎でからめとり、根で分解し、文字通り、食いはじめたのである。

ハイカー、道路工事やダム、トンネル、宅地造成といった土木労働者、山林労働者、農民などが、次々にたおれはじめるにおよんで、政府もあわてて対策をたてようとしはじめた。——この

新種のササが、どうして出現したのか、その類縁系統の追求もはじめられた。ところが、採集された地域によって、報告がまちまちで、混乱が起こった。ある研究者は、チマキザサの変異種といい、別の学者はミヤコザサの系統と報告した。別の地域からはクマザサ系といい、ネマガリタケの新種と報告してきた所さえあった。混乱した報告を総合していた、大植物学者は、突然ある事に気づいて慄然とした。

「何という事だ！」と大学者は叫んだ。「やっとわかったぞ！　この恐ろしい変異は、ササのすべての種類に、同じように起こっているんだ。——ササ属全体が……属（ジーナス）の段階で、攻撃性を獲得したんだ！」

「そんな……」弟子は呆然としてつぶやいた。

「それは〝進化〟の常識に反するじゃありませんか……」

「ないとはいえん。古生代の魚類が、軟骨魚類から硬骨魚類にかわる等は属より一つ上の、科（ファミリイ）の段階で一せいに変異したという……」

「でも——原因は何でしょうか？」

「わからん。宇宙線の成分強度の変化かも知れん。あるいは……ササ属全部に蔓延した、ある種のウイルス性疾患のせいかも知れん。それに——この属に、日本全国いたる所で普遍的な影響をあたえた可能性のあるものといえば……農薬、殺虫剤、あるいは除草剤といった、薬物だろう」

「またもや原因は、環境汚染ですか……」弟子はうんざりしたような顔をした。「どうも、最

近は、やや安直にそいつに原因をもとめすぎるきらいがありませんか？」

「いずれにしても、異変の原因に、人間の営みが加わっていると考えるのは、無理な事ではあるまい……」と植物学者は首をふった。「人類は、自然をいじりまわし、自分本位に変えようとした。有用植物だけを大繁殖させ、その繁殖をさまたげる雑草や、害虫を絶滅させようと努力をつづけてきた。——だが、雑草や、害虫というのは、人間の実利本位から見ての雑草であり、害虫であって、自然は、そういった人間にとっては役に立たない存在をふくめて、バランスをとっている事に、長いあいだ気づかなかった……」

「それはよくわかりますが……」と弟子はいった。「それと、この獰猛なササの発生と関係がありますか？」

「直接の因果関係は証明できんだろうね——」と学者はいった。「だが、自然のバランスをくずし、単相化し、自然をいためつけていると、もっともまがまがしい、もっとも生活力旺盛なものばかりが勢力を得てくる。殺虫剤で、トンボや蝶はいなくなったが、蚊や蠅やゴキブリ、ウンカなどはかえって薬にタフになって生きのこった。野生動物は簡単に絶滅するが、ネズミは大繁殖する。内海では上等の魚は死滅するが、安物の、食べられもしない魚は生きのこる。これが人間の手前勝手がもたらした結果だ。それに……」

学者は、染色体をしらべていた顕微鏡のスイッチを切ってふっと溜息をついた。

「ひょっとすると……」

「ひょっとすると——何です？」

「人間の体の組織でも、たちの悪い刺戟をくわえつづけると、時に癌細胞がうまれるだろう」と学者は口の中でもごもごいった。「自然の中でも……そういった事が起こるかも知れんぞ……」

猛烈な勢いで繁殖しはじめた新種のササの名前を、何とつけるかで、学界やジャーナリズムは混乱した。ニホンドクザサという学名をT大学名誉教授といっしょになって推したのはA新聞であり、ドクトゲザサという名前を唱えたのはK大植物研究所とM新聞だった。そのほか、ドクトゲツルザサ（というのは、このササは蔓をもっていたので）、ヒトクイザサ、ガンザサ（癌のようだというので）など、実にいろいろな名前がジャーナリズムにいりみだれ、統一がとれない事は、かつてのブタクサと同様だった。中で傑作なのは、ヒトニザサという名前をとなえる向きがあった事で、これは、何もこのササの恰好が人間に似ているからというわけではなく、あっという間に自然を侵蝕してしまうその獰猛さが、生物としてのヒトにそっくりだ、という所からその名を提唱したのだという。

そうこうしているうちに、事態は容易ならぬ所へ発展しはじめた。全国の、あらゆる種類のササが、いっせいにドクザサにかわりはじめ、まわりの植物をどんどん枯死させながら蔓延しはじめた結果、まず放牧家畜が壊滅的な打撃をこうむった。つづいて、畑作物が、さらに水田が侵蝕をこうむり出した。奇妙な事に、イネがこのドクザサの攻撃をうけると、イネそのものが、葉や

花粉に毒性をもちはじめ、結実がすくなくなるかわりに、猛烈に地下茎を出してドクザサといっしょに繁殖しはじめる。ドクザサの出す何かの物質が、イネそのものの性質をかえてしまうらしいのだが、こういう「性格感染」は、細菌レベルではちょいちょい見られるものの、高等植物では珍しい事だった。ササが稲と同じ、イネ科の植物であるために、こういう事がおこったのかもしれない。

飛行機で日本の上空をとぶと、半年のうちに、日本全土の植物相（フローラ）の五〇パーセントが、ドクザサの見るもいやらしい、べっとりとした緑に侵蝕され、森林も草地も田畑も、どんどんこのドクザサにおおわれはじめているのがわかるのだった。——野生動物は、サルもイノシシも、シカもクマも、全滅にちかかったが、ただ新種の、体長一メートル以上もあるハタネズミと、ダニだけは、毒に対する免疫体質を獲得し、ドクザサの筍を食いながら、ドクザサと一緒に猛烈に繁殖しはじめていた。イソギンチャクとクマノミ、カツオノエボシとエボシウオのように、彼らはドクザサと共棲しているのだった。

勿論、人間も手をつかねて見ているわけではなかった。ドクザサをやきはらい、植物枯死剤をまき、ブルドーザーで根をほりかえした。——しかし、山野をやきはらったあと、他の植物のかわりにドクザサがいっせいに地下茎から芽をふき、植物枯死剤もほかの植物を枯らせるのに役にたったにすぎず、ブルドーザーの作業員が、ササの毒にやられて次々に死ぬので、組合が作業を拒否し、ササの蔓延を食いとめる効果的な手段がないまま、次々に土地を放棄しては、後退させられていた。——なみの手段では効果がないので、ついにある線にそって、大量のコバルト60をまく事が提案された。しかし、これもへたをすると、ササよりも人間に対する影響が大きいとされて、大反対にあった。

ドクザサは、ついに、都市部にむかっておそいかかりはじめた。ある都市の公園の芝生で寝ていたアベックが、地下からのびてきたドクザサの尖端に体をさされ、一夜にして大量死したのを皮切りに、ドクザサは都市に地下から侵入し、地下の電話線や水道管を破壊し、アスファルトを破って、ビルや高架にまといつきはじめた。素手や、軍手でとりあつかうと、たちまち毒にやられてしまうので、とりのぞき作業は、皮の衣装と酸素マスクをつけてやらねばならず、そんなものが急に大量に入手できるわけはなかった。ドクザサの枯葉の微粉末を吸いこむと肺炎様症状をおこし、眼や鼻の粘膜につくと、失明や糜爛（びらん）をおこし、皮膚についても炎症をおこすので、人々は大恐慌を起こした。筍のものすごい力は、郊外の家をひっくりかえし、ビルや高速道路によじのぼった蔓は、小さな隙間にもぐりこんで、橋脚や、道路や、建物のつぎ目を破壊しはじめた。

そして、ドクザサと一緒に侵入してきた凶暴なオオハタネズミは、都市の中で大挙して人間をおそいはじめ、ネコや犬や、幼児や、大人さえ食い殺しはじめた。ドクザサダニの卵は、風といっしょに人々をおそい、これも肺にすいこまれると中でかえってダニになったり、眼鼻やのどの粘膜に、はげしいアレルギー性の炎症をまき起こした。

もはや人々にとって、のがれる所は海上しかなかった。ありとあらゆる船舶、貨物船も、鉱石

運搬船も、マンモスタンカーも動員され、生きのこった人々は、あらそって海上へのがれた。——多くの人は、海外居住を希望したが、荷物や、体について、ドクザサの一部がもちこまれる事をおそれ、諸外国は、移住許可をためらっていた。小さな茎の一部でも、土におちれば、そこからドクザサが繁殖しはじめる事が知られていたからである。それに、一部では、ドクザサに花が咲いており、その種が持ちこまれるおそれもあったからである。

しかたなしに、多くの日本人は、船舶や海上構造物を居住地にし、日本列島の周辺で生活をはじめた。いくつかの離島は、ドクザサの侵入をまぬがれ、その島の上に政府をうつし、何とか「本土反抗」の対策をたてるべく、研究を開始した。海上からながめる本土は、今や、野も、山も、街も、すべて毒々しい緑でべっとりとおおわれつくしていた。たかがササぐらいに、地球上でもっとも知恵と力のある人間が、歴史のある土地から追い出された事は、何とも癪にさわる事だったが、相手は生命力が桁はずれに旺盛な上、おそろしい毒をもっており、迂闊に近づけないので、どうにもならなかった。

本土が無住になったのなら、いっそ核ミサイルをぶちこんだらどうだ、という意見がまたぞろ頭をもたげた。——しかし、全ドクザサをやっつけるためには、どのくらいの数をぶちこんだらいいかわからなかったし、コバルト60の場合と同じで、へたをすると残留放射線で、長い間住めなくなるおそれがある。

「それより、生物を制するには、生物兵器をつかった方がいい」という意見が有力になってきた。「ササは、ふつう地下茎でのびて行くが、何十年に一ぺん開花すると、枯れるという。それなら開花促進ホルモンを撒布し、枯れた所で本土に逆上陸して、地下茎を根だやしにしたらどうだろう」

それはいいかも知れない、というので、外国にたのんで、開花促進物質を大量に製造し、飛行機でもって本土の上にいっせいに撒布した。固唾をのんで、本土をのぞんでいる人々の前で、ある朝、気持ちの悪いべっとりした緑のカーペットの上に一せいに白い笹の花が咲いた。

花はたちまち全土をおおいつくし、ふくいくたる香りが海をこえてわたってきた。

「咲いた！」とみんなは叫んだ。「見ろ、咲いたぞ！」

皮肉な事に、あのまがまがしいドクザサの花は、純白にうすいピンクをまぜた、息のとまりそうな美しさだった。——みんなは、うっとりとして、本土の島山を一面におおう気品のある花に見とれた。

「あの花がおちると……間もなくササが枯れはじめるぞ」

間もなく花はいっせいに散りはじめた。——人々は、笹が全部枯れたら、本土に上陸しようと準備をはじめた。そろそろ梅雨になるので、枯れたあと、雨が毒のある枯葉の粉末をしめらせ、ある程度洗い流してからにしよう、と人々は語りあった。「本土上陸」の日どりも慎重にきめられ、人々はいそいそと、再び本土にかえる支度をはじめていた。

花がおちて、しばらくすると、緑のカーペットが、いっせいに色あせはじめた。白っぽい黄色

から茶色にかわり、その茶色は、かわいた感じでくずれはじめた。
今度雨が降ったら……と人々は語りあった。その時は、いよいよ上陸だ。枯れ笹をやきはらい、地下茎をほりおこし、徹底的に……。
じりじりして待つうちに、一週間、十日たち、ようやく待望の雨が本土をおおいはじめた。
「雨だ！　雨だ！」と人々はおどりあがった。
「さあ、いよいよ本土上陸だぞ」
雨があがると船がいっせいに本土にむかいはじめた。近づく本土を、望遠鏡や双眼鏡でながめていた人々の眼に、茶色の枯れ笹の色が、前よりもっと濃い茶色になり、一面にムクムク動いているのが眼にはいった。
「なんだ、あれは？」
人々は眼をこらして、本土を見つめた。
そのうち一人が海面に眼をうつしてまっさおになって叫んだ。
「ネズミだ！」
ドクザサに花が咲き、実をむすび、その栄養価の高い実を食べて、ふえに、ふえた、体長一メートル以上のオオハタネズミの大群が、ふえすぎて共食いをはじめる状態にまでなり、飢えにきちがいのようになった群れが、ちかづいてくる「餌」の気配を察して、いっせいに海にとびこみ、海面を焦げ茶色に染めながら、船と島にむかって泳ぎはじめたのだった。

靴屋の小人

1

目ざましが鳴った。
おやじは、眉をしかめて竹製のベッドの上から手をのばし、きちがいみたいにわめいているやかましい機械の虫をだまらせると、横っ腹をぼりぼり掻きながら、蚊屋の外へ出た。
外はまだまっ暗で、湿気のこもる田圃の中で蛙どもがあきもせず、グゲグゲ鳴いている。
——あいつらときたら、一晩中鳴いてやがるんだろうか？
おやじは窓の網戸を通して、くらい田圃の方をながめながら、大あくびをした。
——よくまあ、つづくもんだ。腹がへるこったろうに……。
ガタピシしたプレハブ住宅の裏手が、田圃一つへだててバラックだての小さな工場になっている。——裏口へ行く途中の通路の両側が、工員たちの寝泊りしている部屋になっていた。ドアをあけると、むっ、とすえたような、汗と、体臭と……それからおそらくは、誰かの精液の臭気が、

若く熱い体から発散する熱気と湿気に蒸し上げられ、くさりかけの粥のようにどろどろになって溢れ出してくる。

おやじは鼻の頭にぐっとしわを寄せ、ペッと唾を吐いてどなる。

「起きろ！　仕事をはじめるぞ！」

つづいて、そこにあった錫の洗面器をとりあげ、濁った水を土間にぶちまけると、蠅たたきの柄でやみくもにうちならす。

工員たちは眼を擦ってしぶしぶ起き出した。

「まだ暗いスよ……」

と、一人がぼそっという。

「わかっとるわい、そんな事！——お前たちが怠けとるから、こうなるんだ」おやじはあちこちの部屋の扉を、がたんぴしゃんとあけながら毒づく。「納期がぎりぎりいっぱいなんだぞ。今日の夕方までに、半分でもとどけないと、銭がもらえんのだぞ。銭がもらえんと、お前たちの給料もはらえんぞ。わしの工場がつぶれるぞ。わしの女房子供が、バザールいって乞食やらなきゃならんのだぞ！」

わかってますよ、とぶつぶついいながら工員たちはズボンをはき、サンダルをつっかけて起き出してきた。髪の毛にこてこて油をつけるやつ、外へ出てじゃあじゃあ小便するやつ……。台所の方から、粥のにおいが流れてくる。賄い婆さんは、耳が遠いくせに、おやじの枕もとの目ざまし

しのベルで、眼をさますという特技をもっているのだ。

「さっさと飯くって、工場の電気をいれろ」おやじは、洗面をしながらどなった。「重油炉をあったためとくんだぞ」

2

食堂兼台所へ行くと、工員たちは、もうがつがつ青菜入りの粥をすすっていた。声高に女の話をしているやつがいる。朝の五時前だというのに……。おやじは、果物を食べ、ちょっと粥をすすり、きのう街で買って来た新聞の読みのこしを読み、それから楊子で歯をせせりながら外へ出た。グゲグゲガアガアやかましい蛙の声を両側にききながら、田圃の中の道を通ってちっぽけな工場へ近づいて行くと、工員たちのさわぐ声がきこえた。

「どうしたんだ？」工場の中にはいって行きながらおやじはどなった。「早く作業をはじめんか！　この怠けものども！　今日の三時までに、せめて半分はしあげて、夕方までに先方にとどけないと……」

じろりと工場内を見わたすと、まだ焼鈍用の重油炉に火がはいっていない。——それどころか、キュービクルの錠前に鍵がかかったままで、動力用のメインスイッチがいれられてもいないのだ。

「何をぐずぐずしとるか！」おやじは金切り声をあげた。「メインスイッチもいれないで……仕事をやる気がないのか！　早くかからないと、とても三時までに半分は……」

「それがおやじさん……」工員の古手が口をもごもごさせていった。「もうできちまってるんで……」

「なに？」おやじは眼をむいた。「うそつけ！　できているはずがあるもんか！　ゆうべ、お前たちが疲れたの何のというんで残業を七時でうちきった時、まだ、仕上げにかかったものは一つもなかったんだ。おれはこの眼で見たんだから……」

「でも、あの……ほんとにできてるんです」

と、若い工員が、困惑したようにいった。

「ほら——あれを見てください」

おやじは眼をこすった。

下請加工をやっている何百個という、とりつけ部品は、すべてきれいに仕上り、仕上げ台の上にずらりと並べてあった。——昨夜七時までは、やっと四分の一ほどが、最後仕上げにかかる所まで来ていたのにすぎないのに、たった一晩のうちに、全部がきれいに仕上ってしまっている。

おやじは、こわいものでもさわるように、その一つをとり上げた。——見事な仕上りだ。おまけに、指定よりも一段上に仕上げてある。削りはなしの所はやすり仕上げのようだし、やすり仕上げ指定の所はバフ仕上げのようにピカピカしている。おやじは、半信半疑のように、作業台の隅に、きちんとおかれている図面をのぞきこみ、カリパスやゲージをとり上げて、寸法をはかりはじめた。きちんとならべられた中から、でたらめに次々とり上げ、ゲージをあてがうたびに、

おやじの口から讃嘆の溜息がきこえた。

「すごいもんだ……」とおやじはうなった。

「誰がやったんだか知らないが、いい腕だ。不合格品が一つもない」

ぼんやりと、いくぶん恐ろしそうに、おやじの手もとをのぞいている工員たちの方を、じろりとふりかえっておやじはいった。

「どうせお前たちがやったんじゃない事はわかってるよ。お前たちじゃ、とてもこうはいかない。大あまに見て、三つに一つはペケを出し、わしに大損をかけるのはいつものこった。検査の連中に鼻薬をかがせて、一つでも多く、パスさせるのに、大汗かくんだ……。誰かゆうべ、工場で働いてるやつを見なかったか？」

みんなだまって首をふった。

「そういえば……」一人が頭をごしごしかきながらつぶやいた。「夜中に小便におきた時、工場の方でモーターがうなってるような音をききましたが……なにしろねぼけてたんで、大して気にもせずに……」

「おやじさんにたたき起こされるちょっと前でしたか……」と、別の一人がいった。「たしか、工場の方から、車が遠ざかって行く音がしたみたいです」

「重油炉はまだ熱いです」と職長がいった。

「ついさっき、火をおとしたばかりですね」

「みんなよくしらべろ！」おやじはどなった。
「何もとられてないか？　工具も、材料も……」
「なンにも……」と職長は首をふった。「しらべましたよ。旋盤の削り屑まで、きちんと箱に仕わけていれてあります。——おまけに、重油炉のサーモスタットをなおして行きましたよ。——どこの誰だか知りませんがね」
「ふん……」おやじは不得要領の眼つきで考えこんだ。「とにかく——製品をトラックにつみこめ。それから……」
またちょっと考えこんで、
「品物をとどけたら、今日はあと休みだ」
わあ、と工員どもが喜びの声をあげ、現金にかけ声をかけてはたらきはじめた。

3

荷物を工場建設現場の倉庫におろし、納品書をもって事務所にはいって行くと、検査係は、口をもぐもぐさせながら出てくる所だった。——唇のまわりが油でねちゃねちゃ光り、顎の所に飯粒が一つくっついている。
「完納？」と検査係は、三白眼をむいて、じろりとおやじの顔を見た。「きのうの話では、午までに半分とかいっていたが……」

「それが、やはり大事なお得意の仕事というので、工員一同が大はりきりでやったので……」おやじはもみ手をしながら、そっと検査係に箱にいれた上等のネクタイピンをわたした。「いや、まったくうちの工員は、かわいいやつらで……優秀で、よく働きます」
「いつもとだいぶ話がちがうな」検査係は皮肉な調子でいった。「どいつもこいつも、怠けものできそこないじゃなかったか？——いっとくけどな。完納といったって、早いからいいってものじゃない。あんまり不良品が多いと、いくら私だって……」
「わかっております」おやじはにこにこ笑って手をふった。「まあ、うちの仕事ぶりを見てやってください」
倉庫の中の、品物がならべられている所へくると、検査係の顔が急にけわしくなった。顎をひきしめ、ずらりと見わたすと、一つだけとりあげ、おざなりに測定具をあてて、だまって納品書にサインした。
「いいんですか？」おやじは、ちょっとおどろいたように、品物の方にむかって手をさし出した。「全部、くわしくしらべてみてくださいよ。どれもこれも、あっというほど、すばらしい仕上りですよ。わしン所の仕事の見事さといったら……」
「わかったよ。見なくても、全部パスだ。わかってる……」納品伝票のコピーをかえしながら、検査係はそっけなくいった。——それから、おやじの顔をちらりと見て、声を低めてささやいた。
「お前の所にも、とうとうあれが来たんだな？」

「なんですって？」おやじはうろたえた。「あれって……なんです？」
「こっちへ来たまえ」
検査係は、先に立ってずんずん歩き出した。おやじは、あわててあとをついていった。
茫々とひろがる低湿地をうめたてて、大きな工場がたちかけていた。——クレーンが機械をつりさげ、足場を組んで作業員がのんびり働いている。もう着工してからずいぶんになるのに、あいかわらずの非能率でちっとも進まない。
四棟の工場の骨組が見わたせる所に立ちどまって、検査係は顎をしゃくった。
「わかるかね？」
「もうだいぶできましたね」と、おやじは汗をぬぐいながらいった。「この分なら、今年中にゃ、なんとか完成しそうですね」
「本当は、今年のはじめにできてなきゃいけなかったんだ……」検査係は肩をすくめた。「だが、まあ心配する事はない。あと三ヵ月ぐらいで完成するだろう」
「そんなに早く？」おやじはおどろいた。「とてもそうは見えませんね」
「あの右から二つ目の棟を見たまえ」と検査係は指さした。
その棟は、ほかの棟にくらべて、明らかに工事がずっと早く進捗していた。しかも、よく見ると、ほかの棟より、ずっと手ぎわよく仕事がすすめられているのがわかる。
「あそこはずいぶん進んでいますな」とおやじはつぶやいた。「もうじき完成だ」

「ゆうべから、隣の棟にかかり出した」と検査係は顎をなぜた。「夜中の……誰も知らないうちに……」
「それじゃあ！」おやじはポカンと口をあけた。
「ここでも、あの……誰かわからない連中が……」
「もう二ヵ月以上前からな……」検査係はうなずいた。「みんなが作業をやめてかえったあとで……おそろしく手ぎわよく……」
「実をいうと、うちの工場も、ゆうべ……」
「ほかにもあちこちでな……」検査係は煙草をくわえた。おやじがあわててライターをさし出す。「鉄道工事や、ビル工事、ダムやハイウェー……」
「いったい誰でしょうね」おやじは首をひねった。「どんな連中でしょう？　ずいぶんもの好きな……」
「わからん。——誰も見当がつかん」検査係は勿体ぶって腕を組んだ。「ただ、昔、ヨーロッパの……」
「ああ！　ヨーロッパの事、御存知なんですか？——係長はやっぱりインテリですな」とおやじは大仰に感心してみせる。
「まあいい——とにかく、むかしヨーロッパのあちこちに、夜中に出てきて、人の知らない間に、りっぱな靴をつくったり、いろんなすばらしい細工物をこしらえてくれる小人の伝説があっ

た……」

「ああ、そういえば、ここらへんでも、そんないいつたえがあったそうですよ。わたしはたしか、ばあさんからそのいいつたえをききました」そう勢いこんでいってから、おやじは急に不安そうな顔つきになった。「で、その——何ですかい？　うちの製品を知らない間に仕上げたり、あの工場の建設工事を、夜中にどんどんすすめるのは、その……小人たちだというんで？」

「まだわからない……」と上級学校出の検査係は、いかにも意味深長そうなポーズをとってみせた。「みんな、君のように、仕事の早さと手ぎわの良さを、自分の功績にしたがって、お互いの口をつぐんでいるし、積極的にしらべようとしないからな——しかし、私は一つ、この謎の働き手の正体を見つけてやろうと思うんだ。どうだ、つきあうか？」

「ヘッ？」とおやじはびっくりしたようにきょろきょろした。「そ、そりゃもちろん……お手つだいできる事でしたら……」

「よし、それじゃ、今夜……」といいすてて検査係はすたすた歩き出した。「日が暮れてから、事務所の方へきてくれ。——あの工事場を見はってみるんだ」

4

その夜は、雲がはれて、ぽっかりと月が出た。グゲゲゲコゲコと鳴きたてる蛙どもや、それに負けじと鳴く虫の声をききながら、おやじは湿地帯の中の工事現場にやってきた。ヘルメットから防蚊覆面をたらし、袖も紗の防蚊蔽いをかけ、作業手袋に棒をもったものものしいいでたちで、検査係は一眼見てふき出した。

「どういうつもりだ。〝謎の働き手〟と格闘でもする気かい？」

「でも、見つけられたら、かかってくるかも知れませんよ」とおやじは汗をかきながらいった。

「あなたは、蚊よけのマスクをつけんのですか？」

「私は蚊よけクリームをぬっている」検査係はテラテラ光る顔をつき出して見せた。「アメリカ製だ。よくきく」

やっぱり学校出はちがう、と感心しながらおやじは検査係のあとをついていった。

工期は大幅におくれているのだが、湿気の多いこの地方では、残業をする連中はほとんどいない。工事場は所々の安全燈を残してまっくらで、人気はなく、湯上りの裸女のようなぬれぬれとした月の光が、その外側を照すばかりだった。

材料のつまれた陰にはいって、二人は息を殺して待った。蛙の声、虫の声がやかましく、蚊がわんわん集ってくる。

「来ませんね」おやじはズボンを通して血を吸おうとする蚊をぴしゃりとたたきながら、ぶつぶついった。「酒をもってきてます。いっぱいやりますか？」

「しっ！」と検査係は耳をすませた。「来たらしいぞ！」

湿地のむこうに、車の爆音がちかづいてきた。——月明りをすかしてみると、ヘッドライトを

消したトラックがバウンドしながら現場へはいってくる。トラックは右から三番目の工場の前にとまると、中から大勢の男たちがばらばらととびおりた。

「小人じゃありませんよ！」おやじは思わずおどろきの声をあげた。「小さいけど……われわれによく似た人間だ……」

「しずかにしろ！」検査係はつよい声で制した。「気づかれちゃまずい」

不思議な男たちは、みんなヘルメットをまぶかにかぶり、顎ひもをきりりとしめて、小ざっぱりした服装だった。——昼間働いている連中の、のろのろした動きとはまったくちがったきびきびした動き方で、図面を手にした頭だった人物のまわりに集り、次々に命令をきくと、ばねじかけの人形のように、工事場へかけよって行く。

たちまち建設現場に煌煌と照明がつき、巨大な建設機械が動きはじめた。トランスのハンドルをあわせると、電気溶接機とマスクを持って、猿のように足場をかけのぼって行くものがある。クレインが鉄骨をつり上げてはこび、まるで卵をおくように、そうっと取り付け箇所におろす。たちまちボルトが通され、リベットがうたれ、電気溶接の青白い火花が燃え上る。

材料置場から、フォークリフトが、積み重ねたパネルをはこんでくる。——大変なスピードだ。

「ふえッ！」おやじは材料をつんだかげから首を出して眼をまるくした。「見てごらんなさい。連中はまるで、フォークリフトを、競争用自動車みたいに走らせてます」

「すごい能率だな……」検査係も息をのんだ。

「まるで火事場か戦争みたいだ……」

「やっぱり、ふつうの連中じゃありませんね……」おやじは首をふった。「わしたちの知っている範囲で、あんなきちがいじみた働き方をする連中なんていませんよ」

男たちは、何かわけのわからない言葉でさけびあっていた。——おやじにはさっぱりわからない言葉だ。

「どこの言葉でしょうね？」おやじは耳に手をあてた。「チンプンカンプンだ。——この国の人間じゃないようだ」

「待てよ——英語が少しまじっている」学校出の検査係は首をかしげた。「たしか……あの言葉は……」

〝謎の働き手〟たちは、つかれを知らぬように働きつづけた。昼間働いている連中の、五倍ちかい能率で、しかもおそろしく手ぎわよく、見事に……。そのてきぱきとした働きぶりを、たかってくる蚊を追いはらうのも忘れて、二人は見とれていた。

暁け方の一時間ほど前から、〝謎の働き手〟たちはあとかたづけをはじめた。これもあっという間の手ぎわよさだった。機械をかたづけ、掃除をすませ、材料をきちんとつみあげ……東の空がかすかに白むころ、連中はトラックにきびきびとのりこみ、どことも知れず走り去って行った。

「いったい……何でしょうね、あの連中は……」寝不足ではれぼったくなった顔をこすりながらおやじは呆然とつぶやいた。「何だって、あんな事をやるんでしょう？　まったくおかしな連

中だ……」

「大体わかったよ……」インテリの検査係は、もっともらしく首をふった。「あの連中は——やっぱり、靴屋の小人なのさ……」

「でも、小人にゃ見えませんでしたよ」おやじは不思議そうにいった。「小柄ではあったけど……いったいどうして連中が、その、ヨーロッパの伝説と関係があるんです……」

「まあ、それは物のたとえだが……」検査係はうーんと腰をのばして、事務所へむかって歩き出した。「連中は……いわば、働く事に呪われているんだな……」

「なるほど……」おやじはわかったようなわからないような顔でうなずいた。「そういえば、誰も働かない夜中に、あんなきちがいじみた働き方をするなんて——しかも無報酬で……」

「私は、学校に行っている時、古い記録で読んだ事があるんだが……」と検査係は歩きながらいった。「昔、ここからずっと北の方に、ああいう、むやみやたらに働くのが好きな、器用な連中が住んでいた、という事だ。その連中は一時、大層栄えて、このあたりにも進出してきて、むやみやたらにいろんなものをつくったらしい。——ほら、あの山奥のダムや、古い高速道路のあとを知っているだろう?」

「ああ!」おやじは大きくうなずいた。「そうですか。あれは、ああいった連中がつくったんですか!——で、その連中はどうなったんです?」

「むやみやたらに働きすぎ、むやみやたらにいろんなものをつくったので……とうとう、もの

をつくりすぎ、環境を汚しすぎて、連中の国はほろんでしまったらしい。それにどこへ行っても、」やたらに働きすぎるんで、まわりとペースがあわなくて、いたる所できらわれた……」

「へえ! まあ、かあいそうに……」とおやじは眉をひそめた。「働きすぎてきらわれるなんて……」

「それで——国がほろんだあと、世界中にちらばり、みんなもとの国籍をかくして、まじってくらした、という……」

「じゃ、この国にも……その連中の血筋をひくのがまじっているんですね」

「当然そうだろう。われわれには見わけがつかんがね。——だがおそらく、連中の血が、のんびりムードにそぐわないんだろう。こんなのろのろした、いいかげんな工事のやり方をするのを見ていると、いらいらするんだろうな。そこで、昼間は出身をかくして、みんなと同じペースで働き、夜になると、もとの一族がやってきて、突貫工事を……」

「あ、思い出しました。私もきいた事がある」とおやじは叫んだ。「その連中の名前は、たしか、ニツ……」

「それをいうな!」と検査係はとめた。「噂になって、狩り出されたりしたらかわいそうだからな——。〝靴屋の小人〟でいいとしておこうや」

かつがれ屋

1

格納庫（ハンガー）の中では、明日朝、一番に出発する巨大なジェット機が、冷たい光の中に、怪獣のような胴を光らせていた。——油圧、電気系統をはじめとする、膨大なチェックポイントを、リスト片手に、巨鯨にとりつくパイロットフィッシュのように点検をつづけていた整備員たちも、次々に報告をおわって、控室の方へひきあげていった。

がらんとした整備工場の中で、班長と副長だけがのこって、もう一度チェックリストをしらべていた。——油圧系統で、バルブ一つのレスポンスが、少しあまくなっているのをとりかえたのと、電気系統で一箇所修理があっただけで、あとは万事オーケーだ。エンジンも問題はない。あと十時間のフライトで、規定のオーバーホール時間に達するが、四基のターボファン・エンジンは、しごく順調で、このままずっと使えそうな感じだった。いずれにしても、明日がすめば、エンジンは交換される。

「問題はないようだな」
と班長はリストにサインしながらいった。
「ひきあげますか」
副長はリストをうけとりながら時計を見た。
「もうそろそろ四時ですな」
班長は、うーんとのびをすると、腰をポンポンとたたいた。
「さて——一寝入りしたら、釣りにでも出かけるか」
「この前のちぬはどうでした？」
「だめだめ。外道ばっかりで、坊主同然さ」
と班長は笑った。
「今度こそは、と思っているんだが——釣りでも馬でも、一度大ものをあてると、その味が忘れられなくて、ずるずると深みにはまるんだね」
「一貫五百のくえをあげた話はもうご勘弁ねがいますよ」
副長は笑った。
「若いものにまわしてください。私なんか、あまり何度もきかされたんで、自分が釣り上げたような気がするくらいです」
班長も声をたてて笑った。——とてつもなく大きな雨天体操場のようなハンガーの中に、二人

の足音が冷たく、かたくひびいた。二人をのぞいて、人影はなく、天井からぶらさがったホイストや、架台にのせられたエンジンポッドも、じっとうずくまって、夜明け前の眠りをむさぼっているようだった。
明り採りの窓の外が、ほんのわずか、濃藍色の夜から、うっすらとした群青にかわりかけていた。
「？」
その時、班長がふと足をとめ、副長の腕を強くつかんだ。
「何です？」
副長はおどろいて、班長の顔を見た。
「しッ！」
と班長はいった。
「あそこで、何かが動いた……」
班長は、いま整備が終わったばかりの旅客機の翼の方を顎でさした。二人はちょうど、尾翼（テール）のあたりにさしかかった所で、機胴の下から、大きく後退角のついた主翼後縁を眺める位置にいた。
——班長の眼は、左主翼からぶらさがった二つのエンジンポッドに吸いよせられていた。
「野良犬か何かがまぎれこんだんじゃないですか？」
と副長はのん気な声でいった。

「犬じゃない——人間みたいだった」
「整備員が、忘れものをとりに来たんじゃ……」
「それだったら、おれたちを見て、なぜかくれる……」
こい、というように班長は手をふって走り出した。——副長もあとにつづいた。
とたんに、左脚の大きな四つのタイヤの影から、黒いものがパッととび出した。そいつは、眼にもとまらぬ早さで、ハンガーの隅の通用口へむかって走った。まっ黒な、大きな犬とも見え、また黒ずくめの服を着た人間が、背をかがめて走っているとも見え、姿形さえはっきりしないまま、そいつはたくみにもの陰からもの陰へと走って、あっという間に通用口からとび出した。
「待て！」
と班長はあとを追いながら叫んだ。
「おい、誰だ！　とまれ！」
しめ忘れたのか、それとも今あけたのか、あけはなされた通用口からとび出した時は、そいつの姿は巨大なハンガーの陰にとけこんで、見えなくなっていた。かすかな足音が遠ざかるのが一瞬きこえたようだったが、それもずっとむこうで、エンジンの始動テストをやっているターボプロップ機の騒音にかき消されてしまった。
「足の速い奴だ……」
班長は肩で息をしながらつぶやいた。

「何でしょう？　あいつは……」
と副長はいった。
「こそ泥でしょうか？」
「わからん——ちらと見た時、二番エンジンの中をのぞきこんでいたようなのが気になる……」と班長はいった。
「まさかとは思うが——悪いけど、もう一度、班の連中を呼んで来てくれ。私はすぐ警備に電話する」
「いそがなくちゃ……」副長は走り出した。
「もう着かえているかも知れません」
班長は通用口の横の非常電話をはずした。

2

もうかえりかけていた整備員たちをよびかえして、もう一度精密検査をしたが、エンジンにも、脚にも、これといった異常はなかった。——警備員がハンガーの周囲をさがしたが、何も見つからなかった。
気になるままに、一応運航本部と、その日一番で飛ぶ搭乗員（クルー）、それに出発前に点検する地上整備員（メカ）に申し送りしておいて、一行はひきあげた。

そんなごたごたがあって、その日の朝一番のフライトは、約十分のおくれで、搭乗をはじめた。

——乗客は次々にゲートから、タラップをのぼってのりこんで行った。快晴で、連休をひかえ、シートはわずか三席をあますだけでほとんど満席だった。

二百人をこえる乗客が搭乗をつづける終わりの方に、一人だけおかしな乗客がいた。キョロリとした顔つきの、やせた男で、肩からエアバッグをさげたまま、妙におちつかない風にキョトキョトしていたが、タラップにさしかかる手前で、突然ふらふらと列をはなれ、エンジンの傍に近よった。

「もしもし、お客さん……」

地上員があわてて声をかけた時、男はエンジンの入口に手をさしこんだ。

「あ、困ります」

地上員は、かけよって肩に手をあげた。

「エンジンにさわらないでください。危険ですから」

男はびくっとしたようにエンジンからはなれ、そそくさと機に乗りこんだ。

全員搭乗がすみ、そろそろドアがしまろうとするころ、男は突然席から立ち上がると入口に突進し、ころげるようにタラップをかけおりた。

「どうなさったんです？　お忘れものですか？」

地上員がひきとめてきいた。

「そ、そうだ。忘れものを思い出した」

「でも、もう出発しますよ」

「かまわん。出発してくれ」

男は手をふりながらいった。

「次の便にのる。この便はあきらめるよ」

何だか様子が変だな、と思いつつも、地上員は、管制塔からの離陸許可にせかされて、ドアの閉鎖を指示した。その間も、ゲートからころげるように走り去って行く男の後ろ姿を目で追っていた。

ドアがロックされ、タラップが後退し、地上誘導員は両手を上げ、右手の指を一本つき出して、第一エンジンの始動を指示した。圧縮空気がタービンに吹きこまれ、第一エンジンがまわり出した。つづいて、第二、第三、第四エンジンと順調に始動し、整備員たちは敏速に走りまわって送気車のエアパイプと、地上電源を切りはなした。つづいて車輪止めがはずされ、誘導員はスタートの合図をおくった。パイロットは、エンジンの回転をあげ、百五十トンの機体は、ごとりと動きはじめた。

そのまま、順調にタクシイングにはいっていくと思われた時、突然、機長（キャプテン）と副操縦士（コパイロット）の耳に、あわただしい誘導員の声がとびこんできた。

「エンジン停止！　エンジン停止！　第二エンジンに異常発生！」

機長はいそいでスロットルをしぼり、まず第二エンジンを切り、つづいて全エンジンを停止した。

地上では、整備員たちが脱兎のようにかけよって来た。車輪どめがタイヤの下にほうり出され、管制塔、地上、機内をむすんで、あわただしい会話がみだれとんだ。——乗客は不安そうに顔を見あわせ、窓から地上を見おろした。

タクシイングにはいろうと、回転をあげた第二エンジンのノズルから、もうもうとまっ黒な煙が吹き出していた。

あわただしい動きの中に、のりこむ乗客を誘導した地上員は、ゲートの所でじっとこちらを見ている、さっきの挙動不審の男の顔を見つけてハッとした。

「お客さん！」と勤務員は叫んだ。

「ちょっとお待ちください、お客さん！」

その客は、ゲートの所に立っている、グラウンド・ホステスをつきとばすように逃げ出した。

「その人をとめてくれ！」

地上員は走りながらホステスにさけんだ。

「待合室の警官に連絡してくれ！　早く！」

ホステスはとびつくようにして電話をとり上げた。

地上員が、長いフィンガーを走ってわたって行ってみると、そのあやしい男は、乗組客待合室

の入口で警官につかまって、身体検査をされていた。

「この男か？」

と警官はきいた。

「そうです。この人です……」

地上員はぜいぜい息を切らせながらいった。

「私が何をしたというんです？」

男はキョロキョロしながら口をとがらせた。

「とにかくいそいでいるんだ。早くはなしてください」

「いま、一番機の第二エンジンに異常があって、黒煙を吹き出したんです」

と地上員は説明した。

「そして、この人は、のりこむ前に、第二エンジンにさわっていました」

「ジェットエンジンが珍しかったので、見ていただけだ」

「一たん乗ってから、あわてて降りてしまったんです」

「言ったろう。忘れ物をしたのを思い出したんだ」

「じゃ、なぜ、行かないで、飛行機が地上滑走をする所を見ていたんです？」

「滑走をはじめたら、突然黒い煙が吹き出したので、どうしたんだろう、と思ったんだ」

「じゃ、なぜ、私が声をかけたら、逃げ出したんですか？」

「さっきいったじゃないか。急いで忘れものをとりにかえらないと、次の便に間にあわないからだ」

「でも、私が待ってください、といったのにあわてて逃げ出した」

「事故が起こったらしいので、ちょっと見てたんだが、大した事がなさそうなので、また走り出したんだ」

「うそだ。私の声をきいて逃げた」

「エンジンの音で、あんたの声なんか聞えるもんか」

「まあまあ……」人だかりがしかけたので、警官が二人の間に割ってはいった。

「とにかく、あなた、ちょっと取調べ室へ来てください」

男は、急いでいるんだ、とわめきながら、警備本部へひっぱって行かれた。

スチュワーデス、グラウンド・ホステス、地上整備員もよばれて、取調べがはじまった。——警備本部では、事故発生が、昨夜、整備員の方から報告のあった問題の機の、問題の第二エンジンである事がわかって、一瞬色めきたった。

しかし、男はあくまでも知らぬ存ぜぬといいはった。

男の身もとは、四十歳で独身というのがかわっているだけで、別におかしい所はなかった。勤め先に問いあわせても、まともなセールスマンというだけだった。持ち物も不審な点はなく、出張先とその用件、忘れたという書類も筋が通っていた。空港から男の自宅への往復時間も、ちょ

うどぎりぎり次の便に間にあうくらいだった。

グラウンド・ホステスも、事故の方に気をとられていて、男がゲートの所で見ていたのか、途中まで行って、事故でひきかえして来たのか、はっきりおぼえていなかった。

「私が何をしたというんだ?」

男はわめいた。

「もし、エンジンに何かやったというなら、とうの昔に逃げてるよ。何もひきかえしてわざわざ見つかるような事はしない」

それも考えようによっては一理あった。——エンジン・トラブルも、検査の結果、何か可燃物の塊りのようなものを吸いこんだらしいというだけで、エンジンそのものは、あのまま飛行をつづけても、大した支障がない程度だった。

昨夜の今日であり、たしかに、怪しい事はきわめて怪しかったが、といってその男がエンジンに、何かした、というきめ手はなく、警備本部では、一応男にひきとってもらわざるを得なかった。

「たしかに、私も軽率でした」

と男は、次の便にもおくれてしまったのに、別に腹もたてずに、ペコペコ頭をさげた。

「何しろ私は、ひどいオッチョコチョイなので、ついつい人に怪しまれるような事をしてしまうんです」

取調べ室を出て行く男を見送って、地上員は口惜しそうにつぶやいた。
「おかしい。あいつたしかに、何かをやったにちがいないんだ」
「まあ、身もとはたしかだからいいじゃないか。いつでも呼び出しに応じるように釘をさしておいたし……」
と警官はいった。
「だけど……」地上員は、なお残念そうに何かいいかけた。
「だけど……」と同じ部屋によばれていたスチュワーデスが指さした。
「あれをごらんなさい。あんなそそっかしい人が、犯罪なんてできるかしら?」
指さした方を見ると、戸口の所で、半びらきのドアから急いで出ようとして、ドアの縁にもろにぶつかっておたおたしている男の姿があった。

3

それからしばらくたって、その地上員は勤め先をかえた。——かえてから半年ほどたって、彼は、とある飲み屋で、その男にあった。
「やあ……」一人で飲んでいる男の背後に近よって、彼は肩をたたいた。
「あなたでしたか——私をおぼえていますか?」
男は口にふくんだ酒をプッとふき出して、キョロキョロと彼の顔を見上げた。

「ああ……あんたは……いつか空港で私を追いかけて来た……」
「もう空港にはいません。航空会社はやめて、今はある商社につとめています」
「それはそれは……」と男はいった。
「私もあれからしばらくして、仕事をかえたんです」
「その後、警察からよび出しは来ませんか?」
もと地上員は、皮肉な調子でいった。「私はしかし、今でも、あなたが何かをやった、と思っています」
男はだまってニヤリと笑って、盃をふくんだ。
「ね、そうでしょう?」
酔いも手つだって、彼は少ししつこくからんだ。
「何かやったんでしょう? 教えてください。——ぼくはもう航空会社をやめたんだし、本当の事いったって大丈夫ですよ。会社に報告する義務はないし……」
「あちらへうつりませんか?」
男はカウンターのむこうの、小さなテーブルをさした。
「ゆっくり飲みましょう」
男のキョトキョトした、そそっかしそうな所は消えて、にわかに鋭い、ぬけ目のなさそうな表情が、その下からあらわれ、彼はちょっととまどった。

「たしかに……」二人さしむかいになると男はうすく笑っていった。
「あの時エンジンにいれましたよ。誰にも気づかれないようにね。私は手品もうまいんですよ。セミプロ級の腕があります」
「何をいれたんです？」
「ジェリー状ガソリンです」
男は肩をすくめた。
「そいつをある特殊な、うすい可燃性フィルムの袋にいれてね。――ファンの隙間からうまくほうりこみました。袖の中にいれていたんです」
「何だってそんな事をしたんです？」彼はおどろいていった。
「いたずらですか？」
「とんでもない。いい年をしてそんなバカないたずらをするもんですか。もちろん、ビジネスです。たのまれてやったんです」
「誰に？」
「あなたのつとめていたエアラインの重役に……」
「えっ？」彼は息をのんだ。「ど、どうしてそんな……」
「もう私もやめたんだし、あなたもやめたからいいでしょう。実は私は〝かつがれ屋〟の組織にはいっていたんです」

「〝かつがれ屋〟？」彼は目をまるくした。
「なんです、それは……」
「おかしな話です――」男はフッと鼻先で笑った。
「この近代的な、合理的な、とりわけきびしい合理主義につらぬかれている企業社会に、やっぱり非合理的な不安感――迷信や、ジンクスというものが、どうしてものこってしまうんですな。特に最近のように、統計や確率計算が進んでくると、統計的迷信ともいうものが出てくる。そういう企業の中の、表立たない〝かつぎ屋〟にたのまれて仕事をするので〝かつがれ屋〟というんです。〝事故屋〟〝放火屋〟など犯罪組織とはちがいます。――まあ、ちょっと似た所もありますが……」
「会社にたのまれて――事故を起こすんですか？」
「決して大惨事にならない程度のものをね」
男は銚子の酒を盃についだ。
「あなたのいた航空会社は、もう何十万時間無事故がつづいていましたね。ZD運動、無事故運動が徹底して、小さなトラブルさえ起こさずに何年もやってきた。もちろん世界記録だ。――それが、重役の中の、あるかつぎ屋に心配のもとだった。統計では世界平均で二十五万ないし三十万時間に一回の割りで事故が起こる。しかしあのエアラインは、もうじき無事故百万時間になろうとしている」

「それで……あなたにたのんで……」

彼は呆然とした。

「何という馬鹿な話だ？」

「だが、羽田空港には鳥居がのこり、超高層ビルの地鎮祭、進水式には神主がくる……」

男は首をふった。

「そういった事よりも、もう少し現実的、合理的な理由もあるんです。つまり、大難は小難って奴でね。無事故がつづくのはいい。だが、あまり無事故がつづくと、いくら厳密にやっていても、次第に感覚が硬化し、気のくばり方が形式化し、それが思いがけない盲点をつくり出して、大事故を起こさないともかぎらない。感覚のリフレッシュ——そのためにも、致命的な事にならない、ちょっとした事故は、全システムに対して、いい刺激になる……」

「演習ですね？」

「それとはちがう。演習は、どっちにしろ最後には、演習である事がばれるから、効果がうすれるんです。あくまで、本ものらしく見せなくてはならん。そこで——プロが必要になるんです」

「ほかの所でもやったんですか？」

「ええ、他の航空会社……鉄道、船、工場……一度もばれた事はありません。先日やめるまではね……」

そういって男は立ち上がりかけた。

「じゃ、さようなら。ばらさない方がいいが、しらべたって、尻尾をつかめやしませんよ」

「待ってください——」

彼は思わず男の腕に手をかけた。

「一度もばれた事がないって——この前はどうしてあんな、わざとあやしまれるような……」

「仕事のなりたつ原理を、自分の仕事にも適用しただけです」男は破顔した。

「何年もやって、一度もばれた事はなかった。あまりそれがつづくと、ついつい気がゆるみますからね」

人の波

ラッシュの混雑は日ごろ慣れっこだったが、その朝の混雑ぶりはなんだか異常だった。電車が駅について、はちきれそうにふくらんだドアがあくと、どうっ、と泥水がふき出すように人の波が吐き出され、熱気と湿気でどろどろになった空気がプラットホームに渦を巻く。——そこでふだんなら、ほっと吐息をつき、満員電車の中で女のハイヒールの踵にふまれた足の指先をもぞもぞやり、前の女の子の髪の毛にひっかかった万年筆をとりかえし、どさくさにまぎれてさわった後ろのOLのお臀の感触を掌の中で反芻しながら、さて改札口へむかって歩きはじめるのだが……。

その朝は何となく様子がちがった。

どうちがうのか、という事は、最初はなかなかわからなかった。どうもおかしい、今朝は何となく歩きにくい——と彼は人ごみにもまれながら、ぼんやり考えた。一生懸命、前へ進もうとするのだが、ふと気がつくと、ほとんど進んでいないのだ。次の電車がホームについたのに、彼はまだホームの端の階段にも達していなかった。

次の電車のドアがあき、ホームにまたどっと人波が押し出されてきた。

その時になって、彼はやっと気がついた。

「今日はいやに人が多いですな」

彼は前と後ろを人間にはさまれて、よちよち歩きながら、隣にならんだ初老の男に話しかけた。

「ラッシュの時は、いつもこんなものですよ」

と、ちょびひげをはやした男は、ぶっきらぼうにいった。

「でも、いつもよりずっと混雑しているようですよ」

と、彼はまわりにむかって顎をしゃくった。

「まるきり歩けやしない」

「故障かなにかで、ダイヤがおくれたんでしょう」

と、初老の男はいった。——いったとたんに男の姿はぐいとひきこまれるように、人波にのみこまれた。ホームの反対側にまた電車がついて、新たな乗客が吐き出され、彼も背後から押してくる人間の圧力によろけそうになった。

「危険ですからおさないでください。どうかおさないで……」

ホームのスピーカーが叫び、駅員も声をからして叫んだ。

電車はなおも次から次へと到着した。

ようやく改札口から外へ出たが、駅の構内はあふれかえる人々で、かきわけて進むのも容易でない。出勤時刻におくれそうなので、何とか急いで、地下鉄にのろうと焦ったが、やっとの思いで、地下鉄の入口にたどりついたものの、地下へ降りるのは絶望的だとひと目でわかった。地下鉄の入口から外へむかって、おどろくべき数の群集が地上へ地上へと吐き出されてくるのである。

その人の流れにさからって、地下へもぐりこむのはほとんど不可能にちかい。

そのうち人波に押されて、地下鉄の入口からはるか遠くに押しながされてしまい、彼は地下鉄に乗るのを断念した。——どうせ遅刻だ。まあいいや。

それにしても、街路にあふれ出た、この膨大な群集はいったい何事だろう!——彼は、背のびしながら、前の男の肩ごしに、前方をながめた。とにかく、人、人、人だ。駅前の通路にあふれ、道路にあふれ、見わたすかぎり人の頭と肩がつづいている。

「いったい今朝はどうしたんですかね?」

彼はうす気味悪くなって、すぐ横の男にきいた。

「さあ、私もよくわからないんですが、いったい何があったんでしょう?」

男は首をひねっていった。

「焦ってもしかたがありませんよ」と、別の中年男が、ふりかえって、悟ったような口調でいった。

「まあ、ゆっくり順番を待つんですな。そのうち何とかなるでしょう」

「順番を待つって……なんの順番をです？」
彼はおどろいて、その中年男にたずねた。
「なんの順番って——あなた、この列にならんでるんでしょう？」
と中年男はいった。
「列？——これが列ですか？」
彼はおどろいてまわりを見まわした。そういえばぞろぞろ流れていく群衆の中で、そこだけ縦二、三列に、人が動かない所ができていて、彼もその動かない行列の中にいた。
「いったいこれはなんの列ですか？」
「さあ——実をいうと私もよく知らないんですがね」と中年男はいった。
「しかし、まあ、ならんでいれば、そのうち何だかわかるでしょう」
ずいぶんのん気な人だな、と彼は思った。
「あの——この列は、バス停の列じゃないんですか？」
背後から、ＯＬらしい娘がきいた。
「いや、ちがうよ。タクシーの列だろ」
と前の方から声がかかった。
「冗談じゃない。バスだのタクシーなんて、動いちゃいないよ」
と、別の声がかえってきた。

たしかに、ついさっきまで、やけくそにクラクションをならしていたタクシーやバスは、もう人波にのみこまれて、動かないまま路上に放置されていた。
「しかし、まあ、日本人も気が長くなったものですな」と、中年男はしたり顔でいった。
「これだけ人が混んで、こんなに長い行列をつくっても、別に焦りもさわぎもせず、おとなしく待つようになったんですからな。——これもＧＮＰが上がったためですかな。気持ちにゆとりができたんでしょう」
なんだか、万国博できいたようなせりふだなと思うと、おかしくなって、彼は一人でクスクス笑った。
「もう、今日は会社だめね」とＯＬの一人が時計を見て連れにいった。
「しようがないわね。一ン日ぐらい休んだってどうってことはないわ」と連れの娘もいった。
「こうなったら、おちついて、のんびりかまえましょうよ」
「ええ、ジュース、冷たいジュース！」
雑踏の中を、自転車を押しながら、ジュース売りがやってきた。
「おい、ビールはないか？」
と列の中から声がかかった。
「ビールはあとからきます。へい、ありがとう。へい、どうも——二十円のお釣り」
「アイスクリームある？」

「ありますよ。さあジュースにアイスクリーム！」
「あなた、アイスクリームいりませんか？」
と、前の中年男が、二つ買ったクリームの一つをさし出した。
「いや、けっこう……」と彼は手をあげた。
「そうですか。——じゃ、そちらのお嬢さん、いかがです？」
「ええ、どうもありがとう……」
彼の背後のＯＬは、悪びれずに手を出した。
「それにしても、これはいったい、どうなるんでしょうねえ……」
彼はますますふくれ上がってくる群衆をながめながら、また同じことをつぶやいた。
「さあねえ、そのうちわかるでしょう」
と中年男はアイスクリームをなめながらのんびりと答えた。
その時、行列がやっと少しずつ動きはじめた。のろのろとした動き方だったが、それでも動き出すと、期待が湧いた。——さあ、もうじきこの行列の先に何があるかわかるぞ。そうするとこの大群集が、いったい何だって集まってきたのか、わかるかもしれない。
列は少しずつ、少しずつ動いた。その間も、まわりをぎっしり埋めた群衆は、あちらへゆれこちらへゆれ、ぞろぞろと、あてどなく流れていた。
行列は道路を横切り、むかいの歩道へ上った。そのころになると、先頭が、何か店屋らしいも

のの中にはいりこんでいるのが見えてきた。
なんだ。何かの売り出しかな、と彼は思った。——ずいぶんつまらない列にならんじゃったもんだ。
だが、いよいよその店がちかづくと、別に売り出しでも何でもない事がわかった。彼は人に押されて、いつの間にか、カフェテリヤの食券売り場の前に立っていた。
「お次、何になさいます？」
と鼻の頭に汗をいっぱいかいた娘が、忙しそうに彼にきいた。
「あ、あの……冷たいコーヒー」
娘の勢いにおされて、彼はついいってしまった。
「百二十円いただきます。——はい、次の方は？」
彼は食券をもって、あいまいな気持ちで、料理渡し口の方へおされていった。——おれは別に、冷たいコーヒーなど、ちっとものみたくないんだが、と思いながら、彼は氷のういた茶色の液体のコップをもって、うろうろと席をさがした。やっと一つ見つけて、腰をおろすと、そこはテレビの前だった。
「……午前十時になって、群衆の数はますますふえており……」
とテレビ・アナウンサーは、ヘリコプターからうつしているらしい画面を流しながら、しゃべっていた。

「警視庁の予測では、正午までに百万を突破するのではないか、という事です……」
「いったい、みんな、何をしに集まっているんでしょうね？」
彼の前にすわっていた、痩せた男がきいた。
「さあ、それを私も知りたいと思っているんですが……」
「お客さん、すみませんが、おすみになったら席をあけていただけません？　次の方が大勢待っておられますので……」
ウエートレスが、彼の前から、まだ少しのこったコーヒーのコップをとりあげながらいった。
「ああ、お出口は反対側です。そちらから出てください」
彼と痩せた男は、追いたてられるように外へ出て、出たとたんに、またそこにできている行列に、がっちりとくわえこまれてしまった。——行列はのろのろとすすみながら、今度はむかいのビルの中にはいって行った。警官だか、ガードマンだかが、声をからして誘導していた。
列は入口いっぱいになり、エレベーターホールの中は人であふれていた。彼は、押され押されて、別に乗りたくもないエレベーターにぎゅうぎゅうにつめこまれた。
エレベーターがとまってドアがあくと、そこは何の変哲もない、オフィスビルの中だった。エレベーターからは、ひっきりなしに人が吐き出され、押しあい、へしあい、そこら中のドアから、部屋の中へはいって行く。
「さあ、立ちどまらないでください。どんどん歩いてください」

オフィスらしい部屋の中で、ＯＬや、ビジネスマンらしい男が、汗みずくになって叫んでいる。
「あら、課長」
と痩せた男を見て、ＯＬが眼をまるくした。
「これはいったいどうしたわけだね？」
痩せた男は、眼をしょぼしょぼさせて部屋の中を見まわした。
「なぜ、この会社に、こんなに人がはいってくるんだ？」
「なぜだかわからないけど、はいってきちゃうんです。いろんなものをこわされないようにするのがやっとですわ」と、そのＯＬは手の甲で汗をふきながらいった。
「さあ、課長も立ちどまらないで、どんどん行ってください」
部屋のもう一つのドアから外へ出ると、また群衆と合流して、今度は別のエレベーターにのって一階へおり、外へ吐き出された。
——どうなってるんだ、これは……と彼はぼやきながら、また街路へ出た。
街路の様子は少しかわっていた。あちこちに群衆の隙間ができ、歩道の脇には、屋台の物売りがならんでいた。——乳母車を押した、夫婦連れの姿も見えた。
「どういうわけで……」と、彼はその夫婦者にきいた。
「正午前から、こんな所に、金魚すくいや、バナナのたたき売りが出るんですか？」
「あら、歩行者天国でしょ？」と、女の方は夫の顔を見た。

「私たち、てっきりそうだと思って出てきたんですけど……」
突然むこうの方で、ギターの音と、コーラスがひびきはじめた。——そちらの方へ行ってみると、いつの間に集まってきたのか、若い連中が大勢むらがって、フォークソングを歌い出していた。
「ははあ……」と彼はつぶやいた。「なるほどフォーク集会か」
「あんなの、いかさないよ」
と、彼の横で、垢のにおいをプンプンさせたインディアン・スタイルの娘が、ぺちゃんこの顔に口をとがらせた。
「ウッドストックだよ。ニューロックだよ。——あんな皮かむりの連中なんかと、あたいたちはちがうよ」
こちらで、ギャーッというような声が起こったかと思うと、きちがいじみたボリュームで、スピーカーから、のどのいがらっぽくなるような歌がきこえ出した。ワァッと歓声があがり、髪の毛を長くのばし、ちぢらせた若者たちが、くるったようにゴーゴーをおどりはじめた。電気ギターと、ドラムと、トランペットがひびき、おどりながら、男も女も、ポンポン衣装をぬぎはじめた。
「いいぞ、いいぞ！」
と群衆の中から、声がかかった。

「もっとぬげ。ねえちゃんがんばれ」
そのうち、裸の娘の一人が、腹をおさえてかがみこんだ。
「誰か、早く！　救急車だ」と金切り声があがった。
「この娘、産気づいちゃった」
「いかす！　ウッドストック、ウッドストック！」
と、ものまね好きの若い連中が喜んで手をたたいた。
救急車のサイレンがひびいたが、群衆にはばまれて、なかなかちかづいてこなかった。そのうち、裸の男女の人垣の間から、オギャア！　と赤ン坊の泣き声がきこえた。
「われわれはァ……われわれのォ……われわれにィ……われわれがァ……」
と、おなじみの全学連ブシが遠くからきこえてきた。——色とりどりのヘルメットに、覆面、ゲバ棒の集団が、オウッ！　と雄たけびをあげると、ワッショイワッショイとジグザグデモがはじまった。
「こちらは、アラ平連——〝アラビアに平和を市民文化人連合〟です。——みなさん、デモに参加しましょう」と、別の声が叫んでいた。「毎日デモをしましょう。食前食後にデモをしましょう。おやすみ前の五分間、欠かさずデモを……」
「反共ユニオンです。世界反共運動にご署名ねがいます」
と、小娘が紙とボールペンをさし出した。

「北方領土返還……アンポ反対！……再軍備賛成……値上げ反対！……」

と、いろいろな声が、あちこちでまじりあってきこえ出した。

「パパ！」

と雑踏の中から、突然彼の二人の子供がとび出してきて、とびついた。

「あら、パパ……」

と、女房が汗をかきかきちかづいてくる。

「なんだ、お前たち——なんだってこんな所へきた？」

「でも、テレビで見ていると、何だか人が大勢集まって、おもしろそうなんですもの。——チビさんたちが、どうしても連れて行けってきかないの」

「ねえ、パパ、なにがあるの？　またバンパク？」と、下のチビがきく。

「ちがうよ。サーカスか何かくるんだね」と上のチビ。

「ねえ、パパ、アイスクリーム買ってえ。プラモデル買ってえ」

「あら、どこかのパレードがくるわ」

と女房がいった。

たしかにバンドの音がひびいて、バトンガールを先頭に、にぎにぎしくパレードがやってくる。

「いったい何のパレードなの？——ここで、何があるの？」

「知るもんか」彼は汗をぬぐいながらつぶやいた。

「それがわかってりゃ、苦労はしないさ」

たそがれの街にネオンがまたたきはじめたが、群衆の数は一向に減ろうとしなかった。えらいやっちゃ、えらいやっちゃ、ヨイヨイヨイとかけ声がきこえて、臨時編成の阿波踊りの一隊が、明るい街燈に照らされた道路を練り歩きはじめるころ、彼はすっかりクタクタになってしまった。

そのころになって、一日中群衆整理に声をからしていた、警察の車の中から、音楽がきこえてきた。——警察の中にも、知恵者がいたと見えて、「螢の光」をボリュームいっぱいに流しはじめたのである。妙な習性で、それをきくとさすがの大群衆も、三々五々、かえりはじめた。まもなくタクシーやバスも動きはじめ、地下鉄や電車も帰る人々をはこびはじめた。

背中でぐっすりねこんだチビどもに、押しつぶされそうになりながら、彼と女房は、やっとの事で、わが家へたどりついた。——かえってみると、家の中には明りがつき、近所に住んでいる彼の老母が上がりこんでいた。

「おかえり……」と、老母は、ちょっととげをふくんだ調子でいった。

「大変だったね。面白かったかい？」

「面白いどころじゃありませんよ」彼は汗だらけになったシャツをぬぎながらいった。

「ただもう、えらい人で……」

「おばあちゃん、いついらっしたの？」と女房がきいた。

「テレビ見ててね。なんだか、あまり面白そうだったから、連れて行ってもらおうと思ってこ

こへ来たら、もう出かけたあとだったよ。——ずいぶん面白そうだったね。いったい何があったの？」

「何もありませんよ」と彼は畳の上にひっくりかえりながらいった。

「ただ、どういうわけか知らないが、やたらに人が出て……」

「何もないのに、あんなに人が集まるわけがないだろ」と老母はひざを進めた。

「いったい何があったのさ。教えておくれよ」

「本当に、何もなかったのよ」

と女房は冷たい飲物をつくりながらいった。

「私たちも、テレビで見ていて、何かあるのかと思って行ったんだけど、ただ人が、気がくるったみたいに、ワァワァ集まってるだけで……」

「なぜ、さそってくれないんだい？」と老母はすすり上げた。

「私だって、何か面白い事があったら行ってみたいよ。——でも、こんな年寄りが、あんな人ごみに一人で行けるわけがないし……老い先短い年寄りは、冥土のみやげに、いろんなものを見ておきたいものだよ。それを、お前たちだけ、面白いめをして……」

また、おばあちゃんがはじまった、と女房が台所から眉をしかめてみせた。

「そんな面白いものなんて、何もなかったんですよ。本当ですよ」

彼は、ぐずぐずいい出した老母に背をむけて、テレビをつけた。

「ただもう、朝早くから、やたらに人が集まっちゃって……何が何だかわからないし、何も起こらないのに、晩おそくまで人がいた。——ただそれだけの話ですよ。ほんとです」

「それだって……あんなに大勢の人が行くのに……ご近所の人だって、午から、家をしめて家族中で出かけて行くのに……みんなが行くのに私だけのこされて……とにかく、人が大勢出てる所だけだって、見てみたいじゃないか……こんな事、そうそうあるわけじゃないし……」

「いや、そのうちきっとまたありますよ」と彼はいった。

「警視庁の予想では……」とテレビのニュースアナがいった。

「明日の人出は、今日を上まわり、百五十万を突破するものと……」

「ほら、ね」と、彼はいった。

幸福にも不幸にもならない手紙

「幸福の手紙」をひねったような「不幸の手紙」が、ひとしきり世間をさわがせたあと、またおかしな匿名の手紙がはやりだした。

「なんだい、こりゃ……」

彼はその差し出し人の書いてない葉書をとりあげてつぶやいた。

葉書には行のゆがんだ乱雑な字で、こんな文章がしたためられてあった。

「これは、幸福にも不幸にもならない手紙です。

誰がはじめたのかわかりません。

この手紙をうけとった人は、これと同じ文面の手紙を書いても書かなくてもかまいません。——書いた手紙を、数日以内に、五十人の人に出してもよし、別に出さなくてもかまいません。出した所であなたが幸福になるわけでもなく、出さない所で別に不幸にもなりません。

アメリカの西部のある人は、この手紙をうけとって、ほうっておきましたが、別にどうにもな

りませんでした。——またカナダの女性は、すぐさま五十通を友人に出しましたが、別に幸福がまいこんだというわけでもないそうです」

文章の意味が、わかったようでわからないので、彼はもう一度ゆっくり読みかえしたが、なんだかばかばかしくなって、テーブルの上にぽいとほうり出した。

「どうしたの？」

むかいにすわって編物をしていた妻が顔をあげた。

「別に——またくだらんいたずら手紙さ」

「まあ、どんな？」

「読みたきゃ読んでみろよ」

妻は編物をわきにおいて、葉書に手をのばした。

葉書を読む時、妻は眉をひそめ、ちょっと葉書を遠くへはなすようにした。——まだそんな年でもないはずなのに、ひょっとすると老眼がかかってきたかな、と、彼はふと思った。その事を言いかけたが、妻を傷つける事になりそうなので、だまって湯呑みをとりあげた。

「あらやだ！」と妻は、文面をひと目みてつぶやいた。

「また〝不幸の手紙〟？」

「そうじゃないよ。よく読んでみろ」

妻は文章の意味がよくのみこめない時のくせで、口の中で小さくつぶやきながら読んだ。——彼と同様、一回で意味がよくわからなかったらしく、途中であともどりして、少し声高に読みかえした。

「えーと……書いた手紙を、数日以内に五十人の人に出してもよし、別に出さなくてもかまいません……。出した所であなたが幸福になるわけでもなく、出さない所で別に不幸にも……なあに、これ！——わけがわかンないわ」

「世の中ひまになると、バカな事を考えるやつが出てくるよ」と、彼は新聞に眼をとおしながらつぶやいた。

「よくそんな、アホらしい手紙を、自筆で書くやつがいるもんだ」

「変な手紙ねえ……」

と妻は、手紙をテーブルの上において、もう一度ながめながらつぶやいた。

「出しても出さなくてもいいし、出した所で幸福になるわけでもなく、出さないからといって不幸になるわけでもない——じゃいったい、この手紙を書いた人は、どんなつもりで書いたんでしょう？」

「知らんな、ひまだったんだろう……」と、彼は興味がなさそうにいった。「ほっとけよ。——ばかばかしい……」

「でも——ほんとに変な文章……」

妻はまだ、文面にこだわりながらつぶやいた。

「これを読んでると——なんだか、しらけてくるわね」

その言葉が、新聞を見ている彼の意識の底をなんとなくざらつかせた。新聞をひろげたまま、横眼でもう一度テーブルの上の葉書の文面をながめた。

たしかに、意識の底がしらけてくるような、なんとなく、いやな感じのする文章だった。

彼はその葉書の事をすぐ忘れ、妻はすててしまった。

しかし、同じ文章の葉書は、二、三日たってまた舞いこんだ。今度は女文字でかなりな達筆だった。朝刊をとりにいった時、足もとにおちたのを、何の気なしにひろい上げると、彼はまたその文章とむかいあっていた。——舌うちしたいような気持ちで、彼はすぐその葉書をまるめて投げすてた。

一時、新聞でも話題になった「不幸の手紙」というのは、彼の家にも二、三通配達されてきた。差し出し人の名前はなく、例によって、「二十九人の人々に同じ文面の手紙を出さないと、不幸が訪れます」とか、「沖縄にいたカナダ人からはじまったそうです」とか、いいかげんな文句が書いてあった。彼は腹がたって、一枚目をひきやぶいた。しかし、二枚目は妻が見つけ、神経の太い女なのに、気にやんだかして、同じ文面で、五、六通は出したらしい。——彼の、昔もらった名刺からでたらめにひきぬいて宛先を書いているのを、かえってきた彼が見つけ、どなりつけた。

「だって、これ、特に親しいお知り合いってわけじゃないでしょ」

妻はひさしぶりにどなりつけられて、ちょっと鼻白んでいった。

「この名刺、おととしぐらいのよ。あなたもいちいちおぼえてないから、抽き出しの底に、つっこんでたんでしょう」

「ばか！」と、彼は居丈高になって叫んだ。

「親しくなかろうが、親しかろうが、男同士が一度名刺を交換したら、それは知り合いってもんだ——お前、どう思ってるんだ。お前の親友や、親しい人に、こんな不愉快な手紙を送りつけて、相手にいやな感じを起こさせて、何とも思わないのか？」

それがいやだから、昔の名刺からえらんだのだ、といったような事を、妻はむこうをむいてぐずぐずいった。——もう五、六通出してしまった、ときいて、さらにどなりつけると、半べそをかいた。

「じゃ、私たちに、こんな不幸をおくりつけようとしたのは、どこの誰なのよ！」

と妻は書いた葉書をやぶりすてながら、泣き声でいった。

「くやしい！　差し出し人がわかったらどなりこんでやるのに！」

そのいいぐさをきいて、彼は何となくと胸をつかれた。——筆跡はどれもこれも見知らぬものだし、差し出し人の判定のしようがない。しかし、どこかに、誰か、彼の事を知っている人間がいて、それがその手紙をうけとった時、何か心の底に、気味悪いものを感じて、ちょうどトラン

プのババぬきのジョーカーを誰かにおっつけるように、大急ぎで知りあいに、その「不幸」をおっつけてしまおうとしたのだ。

それは、存外、彼と日ごろ親しい人間かも知れなかった。——あるいは、彼自身の事は、もう顔も、あった時の記憶もなくしてしまっているが、彼の名刺か何かをもっていて、どこの誰ともはっきりしない人間に、その小さな「災厄」をおしつけ、自分は厄をのがれようとしたのかも知れない。——ちょうど妻がやろうとしていたように……。

親しい人間か、ずっと前にあったきりの人間かわからなかった。——しかし、どちらにしろ、「匿名」であるという事が、彼をいらいらさせた。自分のまわりの人間、あるいは、善良そうな顔をしている群衆の中に、無数の、冷酷で臆病な「加害者」がおり、彼に対して、表面づらからはは かり知れない、一種冷淡な意志を陰でもっているように感じられて、彼は何とはなしに、背筋がぞっとさむくなるような感じがした。字体からみてそういう社会的配慮がまるでたりない「女子供」という感じがしたが、こういう事をやる連中の、どうしようもない愚鈍さと、その愚鈍さからくる臆病さ、冷酷さが、「社会」というものの一つの断面をあらわしているようで、悪寒が走ったのだった。

彼は、戦後一時はやった「幸福の手紙」というのも、うけとった事があった。——あれは、「この手紙は幸福の手紙です」と、おためごかしにいいながら、「これをほかの人に出さないと不幸がきます」といっている所、やっぱりいやらしい脅迫だった。それにくらべれば、「不幸の

手紙」は、もっとむき出しに、相手を脅迫してかかっている所、はっきりしているだけいいともいえようが、「世間一般」というものが、もう「他人の不愉快」という事に関して、ここまで無神経に、愚鈍になってしまっているのか、と思うと、何か冷え冷えとしたものが感じられた。——沖縄の、ベトナムの、カナダ人のと、何か意味ありげな事をちらつかせている所など、まったく吐き気がしそうだった。そこには、「情報過剰時代」がつくり出した、「トピック」というもののあつかい方の、根本的な卑しさのようなものが感じられたのである。

「不幸の手紙」は、それからもう一通来ただけで終わってしまった。——しかし、「幸福にも不幸にもならない手紙」は、どういうわけか、陸続とまいこみはじめた。

ずいぶんおかしな現象だな、と思いながら、彼は別に気にもとめなかった。

ある日、会社の昼休みに、同僚の一人が、自分の所に来た葉書をふりまわしながら、声高に話している所を通りかかった。

「このごろはやってる、おかしな手紙を知っているかい？」

「〝幸福にも不幸にもならない手紙〟？——なんだいこりゃ……」

もう一人の同僚が、その文面を読んでプッとふき出した。

「〝幸福の手紙〟や〝不幸の手紙〟のバリエーションだな。——それにしても、ずいぶんふざけてるね」

「だけど、なかなかしゃれてるじゃないか。——別に何もしなくてもかまいません、出しても出さなくても、幸福にも不幸にもなりません、なんて、今まであったこのテの手紙の中じゃ、一番ふるってるよ。この手紙を考えたやつは、なかなかセンスがあるな」

「センスがあるかどうか知らないが、内容はまるでナンセンスじゃないか」

「そこがいいんだよ。——現代じゃ、ナンセンスこそ、最高のセンスがいるんだ。こういう無意味なものこそ、センスの反映さ」

「えらくお気に召したようだが、という事は、あんたもこいつを出したのかい?」

「ああ出したさ。——むろん匿名でな」

「おれん所になんか出しゃしないだろうな」

と三番目の同僚が、席から声をかけた。

「さあ、わからんぞ。——そいつはおれだけの秘密だからな」

そういうと、その同僚は、傍にたたずんでいる彼の方をふりかえっていった。

「おい、君ン所へも行くかも知れんぞ。——ショックをうけるなよ」

背後に、どっとあがる笑い声をききながら、彼は同僚のそばをはなれた。——なるほど、あの手紙は、ああいう風なうけとられ方をしているのか、と思うと、苦笑がうかんできた。

彼の家へくる郵便物の中で、その手紙は、あいかわらず一向にへる事なく、少ない時で二日、

三日に一回、多い時には日に二、三通も舞いこみつづけた。——会社の彼の席にまで、とどけられるようになった。中には、ガリ版刷りや、タイプ印刷のものまでまじり出した。

——五十通も出すとなると、大変な手間だからな、と、彼は思った。

そのうち、毎年自宅へ年賀状の注文をとりにきた近所の印刷屋のおやじに、何の気なしにひょいといってしまった。

「おい、この葉書と同じ文面のもの、五十枚ばかり印刷してくれんか?」

「お宅もですかい?」

印刷屋のおやじは、やれやれというような顔をして笑った。

「お宅も——という事は、ほかにも、文面を印刷して出しているやつがいるのかい?」

「この所、やたらにその手紙の印刷をたのまれるんでさあ。——中にゃ五十枚じゃなくて、百枚、二百枚とたのむ人もいます。おかげでこっちは、機械をあそばせずにすみますがね。そのかわり、このうえ年賀状の注文をうけたら、どうさばいたらいいか、ちょっと頭がいたいですよ」

「ふうむ……」と、彼は考えこんだ。「という事は——ひょっとすると、このおかしな手紙は、街の印刷屋の陰謀じゃないか?」

「めっそうもない!」

おやじは、片手でうすい頭をおさえ、片手を前におよがして大仰に否定のそぶりを見せた。

「こんな気のきいた事、われわれに考えつけるものですか!——おまけに、情報時代とやらで

私どものような街の印刷屋でも、けっこう常日ごろいそがしくてね。こんな仕事は、いわばお得意さまに対するサービスですよ」

それだって、同じ文面なら、組んでおいて回転させればいいんだから、結構もうかるはずだ、と彼は思った。

まったく、どういうつもりで、自分もこんなものを出す気になったのか、さっぱりわからなかった。——前の「不幸の手紙」の時に、妻をどなりつけた手前、彼は自室でこっそり宛名を書き、会社で出そうとしたが、書いている所を妻に見つかってしまった。

「おや、いつから〝信念〟をかえたの？」

と、妻はすかさず、昔の仇をとった。——こんな時、女は絶対に見のがすはずはない。

「別にどうってことはないんだ……」

と、彼は宛名を書きつづけながらいった。

「ずいぶんはやってるようね」

と、妻は紅茶をデスクの上におきながらいった。

「私の所にもずいぶん来てるわ。中には封書もあるわよ」

「お前も、自分で出したのか？」

「四、五十通ほど……」と妻はいった。

「でも、また出そうかと思ってるの。今度はちょっとかわったデザインで印刷して……」

きれいな美術印刷や、凝った筆墨体の手紙がぼつぼつ来はじめた。——相かわらず差し出し人不明で、同じ文面で……。文句は同じなので、今度は衣裳で人目をひき、読ませようとしているらしかった。

これじゃ賀状と似たようなものだ——と、彼はこのごろでは、毎日、どさりと投げこまれるようになった葉書の束を見てぼんやり思った。——賀正だの謹賀新年だの、文句は同じで、衣裳がちがう。ただ、一方は、差し出し人不明だ、という事だけだった。

もううんざりだ、と思うのに、葉書はまだ来つづけた。全国的にひろまって、そのあとおさまるだろうと予想されたのに、まだ続いた。テレビ、ラジオ、新聞がとり上げ、郵政省が、他の郵便物を圧迫しかねない、といって注意を発したのに、まだ「幸福にも不幸にもならない手紙」の循環はやまなかった。——なぜこんなにはやるのか、と、彼は時々その飽き飽きするような文面を見て考えた。——きっと、これが、何だか意味ありげでいながら何の意味もなく、何事も強制していないから、出す方が気楽なのだろう、その時は思った。手紙は、もう来ても見もせずに屑籠へほうりこむようになった。それでもまだくると、衣裳や書体だけをながめるようになった。そして、時々は、あまりのしつこさに、カッとなって、見えない大勢に対する復讐にもえ、こちらから何十枚と発送するのだった。くるものの中に、彼の住所氏名が、定期購読物のように、ガリ版で印刷してあるものさえあらわれた。

そのころから、彼は、自分の気分が、何となくダルで、無感動になってきた事を漠然と感じだ

した。——国もとで、母が急死しても、別に悲しくも何ともなかった。子供が奇禍を得て、重傷で入院し、退院してもかるいびっこをひくかも知れない、ときかされても、別に怒りや悲しみに燃えたり、不愍になったりもしなかった。しかたのない事だ、という感じだった。一方、会社で異例の人事で昇進がきまり、競馬で大穴をあて、宝くじの二等があたった時も、別にうれしくもなんともなかった。——ああ、そう、という感じだった。

体の調子がおかしいのかな、とも思ったが、検診の結果は、しごく健康との事だった。——それに、彼一人ではなく、会社の同僚たちも同じように、あまり笑いも怒りもしなくなっていた。

この「無感動症」ともいうべき症状が、ひょっとすると、あの手紙の大流行と関係があるのではないか、とふと思いついて、彼はまわりにいっぱいちらばっているその手紙の、あきれるほど読んだ文面をもう一度読みかえした。たしかに何の意味もない。

だが、その「無意味さ」は、意味というものの、日常化、硬直化をひっくりかえし、さまざまな常識的な意味と現実との間の、いきいきとした透明な関係を恢復させるような、あのエスプリと健康にみちた「ナンセンス」ではなくて、何か、人間の意識にやすりをかけるような、底に不透明な、どろんと白濁したものをよどませた、文字通りの「無・意味（ノン・センス）」だった。

別に、何もこちらにしろ、と命じていないのに、わざわざ「通信」をおくってくる無意味さ、出しても出さなくても、どういう事はないというのに、わざわざ「五十人」とか「アメリカ人」とかいった言葉をつかっている神経、出して幸福になり、出さなければ不幸になるというわけで

はない、とことわっておきながら、わざわざ葉書を書いてくる無駄——どうして、人々は、こんな「無意味な事」に足をつっこみ、しかもやめようとしないのだろう？　まったく無意味な情報が、次第にふくれ上りながら、社会の中を還流しはじめている。

最初は、たしかに、かすかなエスプリやユーモア、腹だたしいようなおかしいような「ナンセンス」も感じられた。——だが、同じジョークを、はてしなくくりかえせば、ユーモアでも何でもないのに、それを飽きもせずくりかえす社会の、おそろしい「無神経さ」は、いったいどうなっているのだろう？　いや、ひょっとしたら、このおかしなものに足をふみこむ事によって、われわれの神経は、「社会的に」やすりにかけられてしまったのかも知れない。そのため、社会の中に、何を見ても、感動したり、怒ったり、泣いたり、笑ったりしなくなるような、おそるべき白濁した「無感動さ」が形成されつつあるような気がする。

ホワイト・ノイズだ！

と、彼はかすかに戦慄をおぼえながらつぶやいた。——情報があまりに過多に、無方向にあふれすぎると、各波長の光の出たらめな氾濫が、ついに白色光をつくり出してしまうみたいに、相互にその特色をうちけしあって、全体としての何の意味もない状態をつくり出す。個々の情報は意味をもっているのに、それが、全体として、何のパータンも構成せず、全体系内の情報が増せば増すほど、全体として白濁現象が起こってくる。——回路があり、その中をたしかに情報は流れているのだが、人々はそこから何の「意味」もくみとれず、ただ、ざアざアと「騒音（ノイズ）」があふ

れ、ますます高まり行くのをきくのみだ。——そして、「騒音公害」のそれのように、人々はノイズによって、次第に無反応になって行く。——こういう事は、すでに前から起こりつつあったのだ。たとえば賀状がそうだ。あるいは、グリーティング・カードが、いや氾濫するテレビ、ラジオ、印刷物がそうだ。——グリーティング・カードのユーモアやジョークは、それ自体はうけとる側にとって、何の役にもたたない情報だが、それが「意味ある」現実の中で、稀に「意味のない」なものとして、送られてくればこそ、ユーモアであり、ナンセンスであり得た。——だが、それが送られてくる通信の五〇パーセント以上にもなったら……。

そして、情報においても、ひょっとしたらグレシャムの法則が働き、全体としての情報量がふえればふえるほど、個々の情報は、「無意味情報」へと収斂され、全体系は「白濁」の座を増して行くのではないか？——してみれば、この手紙の流行を通じて、人間が次第に無感動になって行くのも、一つの「適応」かも……。

「このごろ、何だかちっとも面白い事ないわね」

と、妻は編物をしながら、無感動な声でいった。

「ねえあなた、〝幸福にも不幸にもなれない状態〟というのは、結局〝不幸〟なんじゃないかしら？　だって、人間っていうのは、幸福もあり、不幸もあればこそ、生きる感動が……」

「さあな……」彼は鼻毛をむしりながら、気のない声でいった。

「〝幸福でも不幸でもない状態〟ってのは——つまり、どっちでもないんだろう？」

知恵の木の実

1

「タロウ！」

金切り声の叱責が、教壇からとんだ。

タロウは、机のかげでくみたてていた木の枝をぴくっとかくした。

「何をしていた！　また勉強をさぼっているな！」

教師はひらりと教卓をとびこすと、タロウの机のそばにかけよった。——机の下にかくした手から、細い木の枝でつくった、籠のようなものをとり上げると、教師はそれを鼻の先でひねくりまわし、やにわに床にたたきつけて、ふみつぶした。

「こんなものをつくってあそんでいて！」

と教師はまたヒステリックな金切り声を出した。

「お前はどうしてそう、いつもいつも、勉強中に別の事をやるんだ！　いま、しっかり勉強し

ておかなければ、大きくなって、世の中の役に立つものにはなれないぞ！　世の中の役に立たない連中が、どんな事になるか、お前だって知っているだろう？」

毎度おなじ説教だ。——だが、今度は説教だけではすまない事は、タロウにもクラスのものにもわかっていた。しん、と水をうったような教室の中に、恐怖がみなぎっていた。

「さあ立て。立って、前へこい。何度いってもわからないから、今日は少し身にしむようにしてやる」

タロウは、机の上の、教育機械（ティーチング・マシーン）の端末器のスイッチをきると、ふるえながら教壇の前へ進み出た。

「なにをしとるか！——早くこい」

教師は体罰用の棒をとり上げて叫んだ。

「後ろをむけ！——四つんばいになれ！」

学校からかえってくると、母親は台所で芋をあらっていた。——タロウは、そっと中にはいると、部屋の隅へ壁の方をむいてすわった。

「タロウかい？」

母親は声をかけた。

「うん……」と太郎は口の中で答えた。

「かえったなら、かえったとおいい」母親はチャプチャプと水音をさせながらいった。

「お芋がふけているよ。食べるかい？」

「うん……」

母親は、ぬれた手をふり、体にこすりつけながら台所から出てきた。

「どうしたの？——また学校でぶたれたんだね」

「うん……」

タロウは部屋の隅で、ひざをかかえながらうなずいた。——棒が折れるまでぶたれた腰の痛みといっしょに、悲しみがどっと胸にこみあげてきた。

「ひどくかい？」

母親はタロウの横にすわって、心配そうにのぞきこんだ。

とたんにタロウはこらえきれなくなって、わっと母親のひざにとびのり、首にしがみついた。

「おっ母さん！——ぼく、学校きらいだ。学校へ行くの、いやだよ」

タロウは母親の肩でなきながらいった。

「ぼく、学校へ行っても、いろんな事おぼえられないよ。一生懸命、ティーチング・マシンを見ようとするんだけれど、どうしても長い事見ていられないんだ。あんな退屈な事、いやなんだ。どうしても、別の事やってしまうんだ。そして、先生にぶたれるんだ。ぼく、勉強なんておぼえられないんだ。どうして学校なんか行かなきゃならないの？　ねえ、どうして、あんないやな事、頭がいたくなる事、いっぱいいっぱいおぼえなきゃならないの？」

「先生からもきいたろう？　お母さんも教えてあげたろう？——今、学校へ行ってしっかりおぼえる事をおぼえておかないと、大きくなって、世の中の役に立つようになれないんだよ」

「どうして世の中の役に立たなきゃならないの？——ねえ、どうしてなの？」タロウはなきじゃくりながらくりかえした。「世の中の役に立つって——ぼくたち、大きくなったら、農場で働くだけじゃないか」

「世の中の役に立たないものはね——大きくなっても、役に立たないとね、そんな連中は、どこか遠くへ、おそろしい所へ、連れて行かれてしまうんだよ」

母親はタロウを抱きしめながら、ゆっくりゆっくりゆさぶり、あやすようにいった。

「おそろしい所って——どこへ？　誰がつれて行くの！　大男が？」

「大男じゃないよ。——大きい連中はね……これはおぼえておおき——あの連中は、見かけは恐ろしいけど、とてもやさしいんだよ」

「じゃ、誰さ。——〝黒い連中〟？」

母親の体が、びくっと動いたような気がした。——タロウも、気配を察して泣きやんだ。母親は、そっとタロウの腕を首からはずすと、両手で子供の顔をはさむようにして、眼をのぞきこんだ。

「こんなに大きくなったんだから、いつまでもききわけのない事をいっちゃ困るよ」と母親は、そっと涙のたまった息子の頬に接吻しながらいった。「さ、大きいんだから、もうだっこなんか

だめよ。重い重い、おりておくれ」

母のひざからおりる時、タロウは母親の胸の、しなびた乳房をちょっとひねった。——母のあたたかい胸にだかれ、ひざにのっていると、幸せだった赤ン坊時代の事が思い出されて、また泣きたくなり、しかし、感情は安らいできた。

「さ、お芋でも食べて、きげんをなおしてあそんでおいで。——いつかも話してあげたでしょう。このお芋だって、むかしむかしは、私たちにはとても食べられなかったんだよ。学校へ行って、しっかり勉強して、役に立つ人になって働いてくれなけりゃ、私たちみんなが、食べられなくなってしまうんだよ」

いたいたしく血のにじんだ子供の臀に、膏薬をすりこんでやりながら、母親は自分にいいきかせるようにいった。

2

おやつの芋を食べて、腹はくちくなったが、気分はまだ沈んだままだった。——農場で働いている連中の夕食のために、母親が共同炊事に出かけたあと、タロウは一人で裏山に出かけていった。

うららと日が照り、青い雲がうかんで、あたたかい、天気のいい午後だった。風がさわさわと笹をゆすってわたって行き、森ではひよどりが鳴いていた。

いつもなら、のぼっただけですぐ気がせいせいし、はねたり走ったり、虫をつかまえたり、一人で気げんよくあそぶのだが、その日は学校であまりぶたれたので、かけすが岩の上にとまって、きょとんとしたような眼つきでこちらを見ているのを見ても、でかい青虫がせっせと道を横切ろうとしているのを見つけても、ちっとも気が晴れなかった。大きなヤマカガシの胴体が、ぬめぬめと光りながら笹と笹との間を動いているのを見つけた時も、いつもなら大さわぎしてとびのくのだが、その日は一瞥をあたえただけで、その上をまたぎこして行った。

裏山の頂きには、赤松がまばらにはえていた。——しばらくその下の岩の上に腰をおろしていたが、風がびょうびょうと枝を鳴らして吹き、笹の葉裏がちろちろとひるがえるのを見ていると、また悲しくなって来そうなので、そばの赤松の下枝にえいっとばかりにとびつくと、身がるく頂きへむかってのぼりはじめた。

本当をいうと、木のぼりは学校で禁じられていた。——危険だから、というよりは、もう学校へあがるようになったのだから、そんなみっともない事をしてはいけない、というのが、校長が何度もくりかえして訓示するポイントだった。学校——それは、タロウにとって、そしてタロウたちの年齢のものたちの大部分にとって、ありとあらゆる「禁止」と「強制」が発せられる、もっともものろわしい神殿だった。学校へあがったのだから——喧嘩をしてはいけない。学校へあがったのだから——しっかり勉強しなくてはいけない。学校へあがったのだから——幼い時とちがって、退屈でも、おとなや先生たちのいう事をしっかりきかなくてはならない……。

学校ないんか！——タロウは枝から枝へ、えいっとよじのぼりながら、胸の中でののしり、のろった——学校ないんか……やけちまえ！　先生なんか、みんな死んじまえ！——あんなティーチング・マシンなんか、みんなみんなぶっこわれちまえ！「役に立つおとな」なんかに、なりたくなんかないや。……えいっ！

高い松の、てっぺんちかくまでのぼって、枝に腰をおろすと、頭のすぐ上に、まっさおな空がひろがっていた。体を動かしたので、少しばかり気が晴れた。梢ちかくは、風でゆらゆらゆれていたが、タロウは上手に幹をつかんで枝にのっていた。

その高さまでのぼると、裏山のむこう側の農場が見えた。タロウの村の連中が大ぜい働いていた。トラクターを動かし、芋や野菜をうえつけ——トラクターを運転しているのは、「中くらいの連中」の一人だったが、そのあとから一列にならんで芋を植えているのは、タロウと同じ「ちび」の仲間だった。そのむこうでは、小麦畑の手入れをし、果樹をとりいれているものたちが見えた。

ぼくも大きくなったら、あの農場へ行って働くんだな、とタロウはぼんやりと思った。朝早く家を出て、一日農場で働いて、そして——娘たちの間から相手を見つけ、子供をつくって、そして——死んで行く……。子供たちが大きくなると、またタロウのように学校へ上り、ティーチング・マシンの前にすわらされ、退屈してよそみをしたり、できが悪いと、鞭や棒で打たれ、そして——「役に立つ」おとなになると、また農場へ出かけ、一日働き、子供をつくり、そしてまた

死んで行く。……なんてバカげた事だろう！　いったい、ぼくたちは、何のためにうまれてくるんだろう？　学校へ行って、やりたくない事をむりやりやらされ、おぼえたくないものをむりやりおぼえさせられ、鞭でうたれ、農場で働き、死んで行くために生まれてくるのか？

タロウの鼻先を、一羽の大きなカミナリ蝶がひらひらとかすめて行った。——下の笹原でも、モンシロチョウが、追いかけあっていた。しげみをざざっとならして、一羽の山鳥が、何におどろいたか、翅をキチキチキチと鳴らして舞い上り、羽毛を二つ三つ宙にまわすと、斜面をぬうように、谷間へすべりおりて行った。森ではカケスがやかましく鳴き、トントンと幹をうつアオゲラの嘴の音もきこえてくる。

チョウはいいな——と、からみあうようにとんでいるモンシロチョウを見ながら、タロウは考えた。——鳥はいいな。あんなに自由に、誰にも強制されず、日のあたる間中、ああやってのびのびととびつづけ、さえずりつづけている。ぼくたちだけ——どうして、学校なんか行かなくちゃならないんだ？　どうして、あんな苦しい目をして、おぼえたくない事をおぼえなきゃならないんだ？　どうして大きくなったら、一日中農場で働かなきゃならないんだ？　働くのがいやだといったら——あるいはみんなといっしょに働けなかったら、どうして「役に立たない」といわれて、誰も知らない「遠い所」へ連れて行かれてしまうんだ？　どうしてなんだ？——ぼくたち、つらい目、苦しい目をするために、やりたくない事を、むりにやらされるために、うまれてきたのか？　どうして、鳥や、チョウや、シャクトリムシや、魚や、バッタみたいにあそびたい時にあそび、日の光や風をたのしみながらのんきに生きられないんだ！——どうしてなんだ！　どうしてぼくたちだけ……

感情が激し、いらだってきて、タロウはつかまっている幹を、力いっぱいゆさぶりながら、空へ、陽へ、風へ、野や山や森へむかって叫びつづけた。——どうしてなんだ！　どうしてなんだ！……

「タロウ！」

教壇の上から、教師は金切り声で叫んで、地団駄ふんだ。

「この前、あれほど注意したのに、きさま、またなまけてるな。——今日という今日は、ちょっとやそっとではゆるさんぞ！」

教師はいつものくせで、教卓をひらりととびこえると、まっしぐらにタロウへむかって突進した。手にはこの前折れたためにとりかえた、ま新しい棒を持っていた。——ティーチング・マシンの応答ボタンを押すのをさぼって、手いたずらをしていたタロウは、悲鳴をあげて肱で顔をかくした。教師は、今度はタロウのつくったものを見もせず、遮二無二棒をふりおろした。タロウは何とか教師の気持ちをやわらげようと思って、必死になって、四つんばいになり、臀をむけた。だが、怒りくるった教師の棒は、臀となく、背中となく、頭となく、めちゃくちゃにふりそそいだ。とうとうタロウは、床にはいつくばってしまった。

「待ちなさい……」

その時、太い、大きな声がした。——クラスの連中は、ぎょっとして戸口を見た。戸口いっぱいにひろがった、巨大な体があった。

教師は、なお三、四回、その声がきこえないように棒をうちおろした。声の主は、巨体をゆっくりはこんでくると、その腕を上からおさえた。

「打つのをやめるんだ……」

と声の主は強くいった。

その時になって、教師はやっと声の主に気がついた。興奮と怒りと狼狽が、いっしょくたになって、その顔をおそった。

「し、しかし、こいつは……こいつは……いつも怠けて……」

「ほどほどにしたらどうだ。こんな小さい子を……死んでしまうぞ」

声の主は、「大きな連中」の仲間だった。教師よりも、首二つ分も背が高く、胸幅、肩幅にいたっては、山のようだった。彼は教師の手から棒をとり上げ、まるで苧殻のように三つ四つにへし折ってしまった。——それから、床に身をかがめて、うちふしているタロウの腕をとって立たせた。しゃがむと、その巨大な、突出した頭の頂部にある、銀白の毛の一むらがはっきり見えた。タロウを立たせる時、床におちている何かを見つけ、眉をひそめ、もう一度かがみこんで、太い指でひろい上げた。

「こいつは……いつも、授業中に……レッスンをさぼって、そんなものをつくっているんです」教師は息をはずませていった。「毎度毎度です。いくらいっても……」

「この子が？——これをつくった？」

巨体の主は、かすかなおどろきを見せて、細い、まっすぐな枝をくみあわせたものを見ていた。

「このクラスは何年だね？」

「二年です……」

「二年？——この子はずいぶん大きいな」

と、巨体の主は、血だらけになり、泣きながら立っているタロウを見おろした。

「体ばっかり大きくて……ちっとも……ちっとも勉強をまじめにやらないんです」

「この子を、医務室へ連れていって、手当てしてやってくれ」

と巨体の主は、ついてきた教頭をふりかえっていった。

「そのあとで、私がききたい事がある。そうだ。私がつれていってやろう。おいで」

おびえてあとじさりするタロウを、ひょいと抱き上げて、巨木のような肱の上に腰をかけさせると、巨体はのっしのっしと戸口へむかって歩き出した。

その時になって、事のなりゆきをポカンと見ていた教師は、やっと我にかえって一しょについてきていた教務主任にきいた。

「あれは——いったい誰なんです？　視学ですか？」

「いやもっとえらい——とてもえらい学者だ。……バンブウジさんだよ」
「バンブウジ？——じゃあれが？」
教師は首をすくめるようにしてつぶやいた。
「先生、バンブウジさんって誰ですか？」
と、生徒がそっときいた。
「お前たちにいってもわからんだろう。——雲の上の存在だから、お前たちには関係ないよ。とてもえらい哲学者だ……」教師は信じられない、というように首をふると、また金切り声でわめいた。「さあ、勉強だ、勉強だ。ポカンとするな！　またタロウみたいなめにあわせるぞ！」

3

教員室の隣の、校長室兼応接室へかえってくると、バンブウジは、巨体をどっかり椅子におろし、大きな掌に包みこんでいた木の枝細工を机の上にそっとおいて、じっと見つめた。
「何かありましたかな？」
校長は、机のむこうから、老眼鏡をずらして声をかけた。
「あるクラスで、生徒がひどくうたれていた……」とバンブウジは机の上から眼をはなさずにいった。「あまり無茶な懲罰をくわえないように、注意すべきですな」
「低学年の生徒の中には、ひどく注意散漫なのや、ひどく反抗的なのがおりましてね」と校長

は、頬をぼりぼりかきながらいった。
「きびしくやってやらんと——何よりも勉強は本人のためですからな。初等コースだけでもなんとかおえないままに大人になったら——あの〝小さい連中〟の中の〝役たたず〟の運命は、よく御存知でしょう？」
校長は眼鏡をもどすと、またグラフ雑誌に眼をおとした。——校長は、「赤い連中」の一人で、もうかなりな年だった。だだっぴろい、ひらべったい顔のまわりを、ふわふわした赤毛がとりまき、それをしょっ中ぼりぼりかいていた。グラフ雑誌をつまらなそうに二、三ページめくってなげ出すと、校長はバンブウジの見つめている机の上をすかしてみた。
「何ですかな、それは？」
「これが何だかわかりますか？」
バンブウジは、太い指で、それを机の上からつまみ上げて示した。
「何です、それは？——子供の手いたずらみたいですな」
「それにはちがいないのですが——これが、何を意味しているか、わかりますか？」
「そんなもの、何かの意味がありますか？　子供がいたずらでこしらえたものなんか……」
「あんたには、無理かも知れませんな。——〝黒い連中〟なら、知っているものがいるかも知れない……」
その時、教頭と教務主任が包帯だらけのタロウを連れてはいってきた。——教員は、ほとんど

〝中くらいの連中〟だったが、教頭だけは〝黒い連中〟の仲間だった。まだ若く、エリート階級らしく、こんな辺境の〝小さい連中〟のための初等学校などに、長くいるタイプではない事はすぐわかった。

「連れて来ましたが……」と、教務主任は、上の階級に属する世界的に有名な相手に対して、あからさまなへつらいの身ぶりを示しながら、タロウを前へ押し出した。

「この子に何か……」

「うん……」

バンブウジは考えこみながら、またタロウのいたずらをつまみ上げた。

「君たち、これは何だかわかるかね？」

バンブウジは、教務主任の鼻先に、それをつきつけた。

教務主任は、おずおずと赤ら顔をふった。

「君は……」とバンブウジは教頭にきいた。

「さて、何でしょう――」

教頭は、バンブウジの半分ぐらいしかない、細長い指をのばして、それをつまみあげた。――直線状の枝がいくつもくみあわせられて、糸でしばられ、四角と三角のくみあわさった、一種の図形のようなものをつくっている。

「ああ……待ってくださいよ。これと同じような形を、たしか大学院で一度見た事があります

よ。いや、理学部の研究所だったかな……」

「それで？」

「いや――私には、それ以上わかりません。何しろ、私は教育学の方ですから……」

バンブウジは、包帯だらけで、教務主任の後ろにかくれようとしているタロウの方にむきなおった。

「おいで……」と、バンブウジはやさしい、よくひびく声でいった。「これは、本当に君がつくったのかね？」

「ごめんなさい！　ごめんなさい！　もう授業中に、いたずらなんかしません」

自分より何層倍も大きいバンブウジを正面に見ておびえ上ったタロウは、ふるえながらやっといった。――また泣き出しそうだった。

「こわがる事はない。しかっているわけじゃないんだから……」バンブウジは微笑した。微笑すると、いっそう恐ろしい顔つきになったが、ギョロリとした眼には、あたたかみがひろがった。

「さあ答えなさい。これは君がつくったのかね？」

「え、ええ……」

「はい、といいなさい！　はい、と……」

教務主任はどなった。――バンブウジは、ギョロっと非難の視線を主任にむけ、主任は首をすくめた。

「これを君は、誰かに教わってつくったか？」
「そんなものは学校では教えていませんよ。工作実習は五年からですし、あの学年は、読む事と数の数え方です」
と、今度は教頭が口をはさんだ。
「すると、これは、君が自分で考えてつくったのか……」
「ええ……はい」
「君は今まで〝黒い連中〟の誰かと話をした事があるかね？　教頭先生をのぞいて、だ」
「いいえ……ぼくたちは、傍へも寄れません。遠くから見た事がありますが……車にのって、走っていました」
「ではきくが……」バンブウジは、そのいたずらを机の上におくと、手まねきした。
「こわがらないで、こっちへおいで。――君は、この図形の意味が、自分でこしらえてわかっているか？」
「さあ、バンブウジさんの傍へ行きなさい」
教務主任は、タロウを前へおし出した。
「意味って……どういう事ですか？」
タロウは、ふるえながら机の傍へ立った。
「これは、どういう事をあらわしているんだ？　説明しておくれ。さあ……」

みんなの視線は、その小さな木の枝細工にそそがれた。中央に三角形が一つできており、その三角形のそれぞれの辺をもとにして、大小三つの正方形ができている。そして三角形と正方形の枠の中にも、いくつか直線上の枝がとりつけられている。
「ええ、あの――」タロウは、やっと元気を出して、小さな指でその図形をさしながらいった。「この三角形をかこんでいる三つの四角のうち、小さな四角と中くらいの四角のひろさをあわせると、一番大きな四角のひろさと同じになります」
「どうしてそれがわかった？」
「あの――最初はわからなかったんです。でも、この中の方の木の枝をいろいろおいているうちに、突然わかったんです」
うむ、とバンブウジはうなった。
「どうしたんです？」と教頭が眉をしかめてきいた。「この子のいってる事は本当ですか？」
「ほんとうだ、まったく正しい……」バンブウジは、体をのり出した。「もう一つきくが――この三角形は、どんな三角形でもいいのかな？」
「いいえ――三角形のこの角が、まっすぐな――ええと、何ていったらいいのかな……まっすぐな棒を十文字にくみあわせるでしょう。そして、二つの棒をくみあわさった所の四つの角のひらき方が、みんなおなじになるようにできますね。あのひらき方になってないとだめなんです」
「この子は、いったい何をいってるんです？」教務主任は、呆れ顔でいった。「なにをごたご

た、わけのわからん事をいってるんですか？」

「君らは知らんだろう。それに君らには、ちょっとやそっとでわからんだろう」バンブウジは、大きく肩で息をして、椅子の背に体をたおした。巨体の下で、椅子がメキメキなった。「これは——ピタゴラスの定理というんだ」

「なんです、それは？」

「いってもわかるまい。昔々、とてもかしこいものが見つけた定理だ。〝三平方の定理〟ともいう……それをこの子が——授業中、いたずらをしながら見つけてしまった、自分で……しかも〝小さな連中〟の子供が……」

「まぐれですよ……」校長が、机のむこうで、老眼鏡を拭きながらいった。「偶然ですよ。子供はいたずらやってるうちに、いろんな事を見つけますよ。いつかも、四年の生徒が、私のこわれた眼鏡のかけらをいじっていて、太陽でやけどして大さわぎしましたよ」

「それで——その子は、そのあとどうした？」

「それにこりて、二度と眼鏡に近よらなくなりましたよ。いたずらした時、私が眼鏡をつきつけてやると、悲鳴をあげて逃げるんです」

「それがふつうだ——」バンブウジはタロウをじっと見た。「だが、この子はちがう。自分の見つけたことが、どういうことかちゃんとわかっている。——この子は……信じられん事だが……〝天才〟だ」

「天才？」教頭が唇をとがらせた。「何ですか？　それは……」

「この子を私にあずけてもらいたい……」バンブウジは立ち上った。立ち上ると、身長だけでもタロウの五倍はありそうだった。「街へ——私の所へ連れて行って、精密に知能検査をしてみる。もっとほかの、能力テストもだ」

「むだだと思いますよ。この子の成績は、クラスの中でも、とびぬけて悪いんですよ。怠けもので——その上阿呆ですよ」と教務主任はいった。

「ああいうやり方で、成績をつければな……」

とバンブウジは、軽蔑したようにいった。

「どうやったって——このままでは、かわいそうだが、この子は将来〝役たたず〟の仲間入りですよ。私は長年教師をやってますからね。そんな事はカンでわかるんです。——この子をひっぱたいてでも、なんとか教えこんで、なんとか将来、脱落者にならないようにしてやるのが——これが慈悲ってもんですよ。これが教育愛だと思いますがね」

「その子を街へ連れて行くのは、その子のためにならんでしょうな——」校長は、だだっぴろい、ばん台面のおでこをぴしゃぴしゃたたきながら、気がなさそうにいった。「この子にとって不幸な事になりますよ。やっぱり、ここでみっちりいろんな事をたたきこんで、将来なんとか、不器用でも農場でみんなといっしょに働けるだけの能力は身につけておいてやらないと——〝小さい連中〟は、それが本人たちにとって、一番いいんです。それが連中にとっての〝幸せ〟って

もんです」

「私もそう思いますな……」教頭は、ふくむ所あるような侮蔑の眼ざしをタロウになげた。

「こんな子を——しかも〝小さい連中〟の子供を、街へつれて行って……あなたたち〝大きい連中〟や、その他のエリートがいる間に連れこんだりしたら、かえってかわいそうですよ。〝小さい連中〟には、どうしようもない能力の限界がありますからね。〝中くらいの連中〟のできる事だって、どうやってもできないんですからね。この哀れな連中には、その能力相応の生活と、生活の場が、結局一番幸福なんです」

「この子にきめさせよう」バンブウジは、まわりの反対など意にも介さないように、ゆっくりと、足もとのタロウを見おろした。「どうする？　私とくるかね？——お母さんには私がたのんであげるが……」

4

母親が、〝大きい連中〟は、見かけはおそろしいけど、本当は一番心がやさしいんだよ、といった事が、タロウの頭にこびりついていた。——そして、実際にバンブウジの小山のような大きな体、黒光りするしわだらけの顔の中でやさしくまばたきしている大きな眼、ぶあつい胸の奥からひびいてくる、太い声などをきいているうちに、バンブウジさんとなら、という気になってきた。街へ行く事はおろか、村を出る事さえ、生れてはじめてだったが、タロウは決心した。——

バンブウジさんならきっと……悪いようにはしないだろう。ぼくをひどい眼にあわせたりしないだろう。とタロウは思った。そして、その瞬間から、街というものに対するはげしい好奇心と、もっと別の何か——それが何であるかわからなかったが、何か新しいこと、今まで思っても見なかった新しい世界に対する期待とがふくれ上るのを感じた。

母親の涙と、村人たちの声と、級友たちのキョトンとした顔、そして教師たちの意地悪いしかめ面に見送られながら、タロウはバンブウジの車で村を出た。車というものにのったのは、むろんうまれてはじめてだった。——駅者は〝中くらいの連中〟の老人だった。

村を出ると、荒れはてた丘や森がつづき、その間に、ぽつん、ぽつんと、タロウの村にそっくりな村があり、〝小さい連中〟が農場で働いていた。——やがて〝小さい連中〟の村がなくなり、かわって〝中くらいの連中〟が、鍛冶屋をやったり、機械をつくったりしている工場地帯にはいった。それもすぎると、突然、地平線に、奇怪な岩山のようなシルエットがうかび上り、それが街だった。

そこらあたりまでくると、もうタロウのような〝小さい連中〟の姿は、ほとんど見かけなくなった。街の中で、車を動かし、下町で働き、店でものを売っているのはすべて〝中くらいの連中〟であり、あとはタロウの母親が「旦那衆」とよんでいた、体の大きなエリートたち……〝黒い連中〟〝赤い連中〟〝大きな連中〟だった。「旦那衆」は、いかにもこの街の主人らしく、堂々と、また活潑に動きまわっていた。きれいな身なり、傲然たる眼ざし、給仕やドアマンをしてい

る〝中くらいの連中〟をどなりつける威厳のある態度……そういったものを見ると、タロウは圧倒されてしまって、身のちぢむ思いがした。その連中は、小さいものでも、タロウの倍はあった。うまれたての、よちよち歩きの子供でさえ、タロウより背が高かったのである。そして、よく見ると、圧倒的に多いのは〝黒い連中〟であり、〝大きい連中〟や〝赤い連中〟は、ほんのちらりほらりとしか見かけなかった。

バンブウジの肩につかまって、タロウはどこかに自分の仲間の〝小さい連中〟がいないかとキョロキョロ探した。——たまにいると、駄菓子の売子とか掃除人とか、靴みがきだった。彼らはみんな顔色も悪く、やせこけて垢じみており、おどおどして、ひどく不幸そうだった。ある街角で、〝中くらいの連中〟のやくざらしいのが、そういった〝小さい連中〟のごみ集めを蹴りたおし、ぶんなぐり、ののしっているのを見かけた。

「この〝役立たず〟め！」と、下種ばった顔のやくざものは、口汚なくわめいた。

〝役立たず〟という言葉をきいて、タロウはびくっとしてそちらをふりむいた。——さんざんにうたれ、ちらばったごみの中にはいつくばって、声も立てられず、血を流しているごみ集めを、さらに蹴上げて、やくざものはどなった。

「すじだらけの痩せっぽめ！　おまえなんざ、シチューにもなりやしねえや！」

まわりの〝中くらいの連中〟はどっと笑った。「旦那衆」は、そんな情景をふりむきもしなかった。——タロウはたまらなくなって顔をおおった。バンブウジはちらと横目で見て、気むずか

しげに、ぴくりと耳を動かしただけだった。

宏壮だが、地味なバンブウジの邸には、〝大きい連中〟の執事と、思いきり醜い顔をした家政婦と、それに〝黒い連中〟の秘書がいた。

「ほう、先生。なんです、そのチビは？」

と黒縁の大きな眼鏡をかけた秘書は、煙草をふかしながら、タロウをじろじろみた。

「実験ですか？　ペットですか？——それとも台所の方へ……」

「この子の知能検査をするんだ」バンブウジはぴしゃんとたたきつけるようにいった。

「いっておくが、この子は〝天才〟だ。〝小さい連中〟だからといって、馬鹿にするな。——君たちの仲間の知らない事を、自分で発見したんだぞ」

へえ、このチビが……生意気なやつだ、という風に、秘書はタロウを見おろした。秘書は腹がつき出ており、タロウの二倍半ぐらいの大きさがあった。

「いくつだね？」と秘書はきいた。

「二歳です……」

「すると初等科二年か——ずいぶん大きいな」秘書はタロウの体をさぐるように見まわした。

「その子は、いろんな面で、ひどくかわっているんだ。——精密にしらべる必要がある」とバンブウジはいって手まねきした。「おいで。——字がよめるかね？」

「すこしなら……」とタロウはバンブウジの書斎に、一緒にはいって行きながら答えた。

「じゃ、あのテープの背の文字は何とか読めるだろう。自分で、いくらきいてもいい。プレイヤーのつかい方を教えてあげる。どんどんきいて、質問があったら、どしどし私にききなさい」

タロウは、壁いっぱいにならんだテープにすっかり圧倒されてしまった。——テープ棚のはずれに、頑丈な鍵のかかった本棚があったが、その事はバンブウジは一言もふれなかった。

哲学者バンブウジの邸で、タロウの生活がはじまった。午前中は研究所で、時には大学で、主として〝黒い連中〟の研究員からさまざまのテストをうけ、午後はバンブウジの書斎で、ずっとテープをきいた。——もちろん全部理解できるわけではなかった。だが、タロウにとって、何か不思議な世界がひらけつつあった。一つきく度に、新しい疑問が湧いてきて、次から次へとテープをききつづけた。

質問があったらききなさい、といっていたが、バンブウジはタロウが来てすぐ、病院に入院した。何か持病があるらしく、しばらくしてかえってきても、寝室に安静で寝ており、タロウが近づく事は許されなかった。しばらく家にいて、また病院へ行き、またかえってくる、といった調子がずっとつづいた。

邸の中の生活は平穏だった。執事も家政婦も、恐ろしい顔つきをしていたが、タロウにはやさしかった。この二人は物しずかで、何時間でもだまっており、しゃべる時も低い声で言葉すくなくしゃべり、気がふさいでいるのかと思うほどだったが、秘書だけが一人騒々しかった。家の中をぴょんぴょんはねるように走りまわり、大声でわめき、鼻歌をうたい、タロウをからかい、時には何かにじれて書類を天井いっぱいにまきちらして、大声で毒づいた。

たまに出かけて行く街の風景も、タロウにはめずらしいものばかりだった。タロウの村では、めったに見かけない「旦那衆」——とりわけ体の小ぶりな〝黒い連中〟が、こんなに沢山集って住んでいる、などとは思っても見なかった。村一番の杉の木よりはるかに高く太い建物が無数にあり、村に一台しかない「車」が無数に行きかい——そして、電燈も、電話も、ミュージカルも、この街へ来てはじめて見るものだった。

テストのない日、気まぐれな秘書が、自分の車の性能を誇示するために街の外へ連れ出してくれた。そんな時、一面の赤茶けた砂漠の中や、とげだらけのいじけた丈低い草しかはえていない所に、時々彼らの住む街と同じくらい大きい——時にはもっと大きい、無人の街が横たわっているのを見かけた。秘書は絶対にその街にはいろうとしなかったし、もうずいぶん長い間、誰も住まずにうちすてられているように見えるが、なぜ住まないのか、ときいても、

「何でも彼でも、やたらにききたがるもんじゃないぞ、チビ」

と一言のもとにはねつけられるのだった。——秘書自身も、その街がどうしてそうなったか、はっきりした事は知らないのだ、とタロウは感じた。

月日がたち、検査は長々とつづけられ、その間にタロウはめきめき大きくなって行った。もう

秘書と首一つしかちがわないほど、わずかの間に大きくなり、しかもその背の高さは、〝小さい連中〟のおとなの平均身長をぬいていた。

「お前は、お前たちの仲間のうちではよほど変ってるな、どこまで大きくなるんだ！」

と秘書は呆れ顔につぶやいた。——もうチビとはよばなくなっていた。

書斎にあるテープは、もうあらかた聞いてしまい、それとともにタロウの中で、バンブウジにきいてみるよりしかたがない疑問が、巨大なものにふくれ上った。——そして一方、長い間かかった検査の方も、そろそろ終りに近づいた事が感じられた。何も彼もが、一つの限界、一つの巨大な壁にぶつかりはじめたようだった。タロウの中に、何か焦りや絶望に似たものが出現していた。それは、自分自身の知力、理解力が、これ以上及ばない地点へさしかかりつつあるのではないか、という事だった。

ある晩、バンブウジが病院からかえってきた。——苦しげな目つきをし、足もとはよろめき、ひどく具合が悪そうだった。それでもタロウを見て、眼で笑いかけ、

「検査は終ったらしいな」

と、かすれた声でいった。

その夜更け、タロウは邸の中で、恐ろしいものを見た。

夜半、バンブウジの容体が気になって眠れず、そっと起き出して様子を見に行った。——すると、バンブウジの寝室のドアが少しあき、中からバンブウジの弱々しい話し声がきこえた。カーテンの影になって話し相手は見えなかったが、来客らしかった。低い、ひどく投げやりで、しかも傲岸な調子で客は話していた。

タロウは廊下をひきかえしかけた。その時背後で寝室のドアのあく音がした。夜中にうろつきまわっているのを客に見られたくない気がして、タロウは反射的にものかげにかくれた。——バンブウジの寝室から、背の高い、影のようなものがすうっとあらわれて、音もなく廊下を近よってきた。

近くまで来た時、うす暗い明りの中でそいつの姿を見て、タロウは冷水をぶっかけられたような気がした。——黒いマントのようなもので、すっぽり全身を包んだそいつは、背はバンブウジと同じぐらい高いくせに、信じられないくらい、ひょろ長く、痩せていて、まるで巨大な蜘蛛のような感じがした。おまけにそいつの顔ときたら……青白くて、つるつるで、骨ばって、眼がくぼみ、鼻がとんがって、しかもてらてら光る巨大な、まんまるい頭には、毛が一本もなかった！

その幽鬼のような、宙にうく髑髏のような顔を見た時、タロウは舌がかわき、動けなくなってしまった。——うまれてはじめて見る、どうにも胸の悪くなるような薄気味悪い顔で、ひどい病気にかかっているのではないかと思われた。「旦那衆」にも、〝中くらいの連中〟や〝小さな連中〟にも、どれにも似ていなかった。ふるえ上ってしまって、タロウは、柱の影に完全にかくれる事も忘れて、立ちすくんでいた。そいつはすうっと近よりながら、膜のかかったような、かがやきのない眼でタロウを見た。たしかに見たにもかかわらず、そいつの眼は何もみとめていなか

った。ふるえているタロウを、まるで壁のしみか、床のちりのように、存在をみとめもせず、すうっと通りすぎていった。その視線は、これまで見た、どんなまなざしよりも冷たく、傲岸で、自分自身以外のあらゆるものを無視しているようだった。その眼を見たとたん、タロウは心臓を氷のような手でぎゅっとつかまれたような気がした。

ベッドにかけかえっても、悪寒とふるえはやまず、タロウはその夜、少しもどした。

5

翌日、タロウは書斎の隣の、バンブウジの寝室へよばれた。

「大きくなったな……」とバンブウジは、弱々しい微笑をうかべていった。「質問に答えてやるといいながら、とうとうチャンスがなかった。——急に悪くなり、今もひどく悪いんだよ。私たち、〝大きい連中〟は、どうやらほろびゆく種族らしい。数はどんどんへっている。〝赤い連中〟もだ。最後に〝黒い連中〟だけが生きのこるだろう」

「元気になってください、バンブウジさん……」タロウは、なつかしさと悲しさで胸がいっぱいになり、ベッドの横にひざまずいた。

「あなたはそんなに大きくて強そうなんですから、きっとよくなります」

「その大きくなりすぎたのが、私たちの命とりなんだよ……」とバンブウジは、太い指でタロウの頭をそっとなでた。「体のあちこちに具合の悪い所が出てくるのだ。気分もめいる。——まあいい、今日は気分がいいから、たまっている質問に答えてあげよう。テープをあんなにきいて、何か質問が出てきたかね？」

いっぱいあります……とタロウは胸の中でつぶやいた。何からきいていいのか混乱し、頭の中が急にあつくなり、いつも考えつづけていた「最初の質問」とは、全然別の事をたずねてしまった。

「ゆうべ、この寝室の前で、恐ろしいものを見ました……」とタロウはどもりながらいった。「青白くて……頭に毛が一本もなくて……化物みたいな——あなたの部屋から出てきました……あれは何ですか？」

「見たのかね……」バンブウジはギョロッと眼を光らせた。「その質問に対する答は、あとまわしにしよう。ほかには？」

タロウの胸の中にはあついものが渦まきはじめ、頭に血がのぼって、眼の前が赤くなった。タロウはあまりにも長い間、いろんな事をあたためすぎた。——あまりにもいろんな話をテープからきき、その間タロウ自身の体が内部からかわってしまった。そういった状態の中で、質問の何も彼もが、いっぺんに噴出しそうで、頭が混乱し、舌がもつれた。混乱の中で、タロウがまだ小さなかった日——あのぶたれた日、裏山の松の木の上で抱いた遠い疑問までがうかんできてしまった。なぜ、自分たちは、ぶたれながら、あんないやな事をおぼえなきゃならないんだ？　なぜ、蝶々や鳥のように気楽に、のびやかに、誰にも強制されずに日々の暮しをたのしめないんだ？

「あ、あのテープの中に……私たちはみんな同じ仲間だ、という事がくりかえし証明されていました」とタロウは体をよじりながら、つかえつかえいった。「たしかにそうだと思います。私たちはみんな……顔つきや大きさのちがいはあれ、同じような形をしています。同じ言葉をしゃべり……いろいろ協同して働きます。イヌや鳥にくらべたら、私たちはお互いに似かよっています。だけど、なぜ——私たちの中に、〝旦那衆〟とそうでない連中……〝中くらいの連中〟と〝小さい連中〟があるんでしょう？　体の大きさも、こんなにまでかけはなれ……〝小さい連中〟はなぜ、農場で働き、〝中くらいの連中〟は工場で働き、〝旦那衆〟はなぜ、街に住んでいて……むずかしい事を考え、いばっているんでしょう？　小さいものはうまれつき小さく、決して大きくならず、能力のある大きなものは、うまれつき大きく能力があるのでしょう？……不公平ではありませんか？」

バンブウジは、眼をつぶってきいていた。——そして枕の下をさぐると鍵をとり出した。

「この鍵で、書斎の隅の書棚をあけなさい。——上の段の一番右端にある、大きな本をもって来るのだ。重いが、もてるかな」

タロウは鍵をうけとり、頑丈な書棚をあけた。中にはタロウの見た事もない字を書いた本がぎっしりつまっていた。一番右端の大きな本は、両手にかかえてやっともてるくらいだった。——それをバンブウジの枕元におくと、バンブウジは眼をつぶったままいった。

「六十ページをあけてごらん……」

「先生には、この字が読めるんですか？」とページをめくりながらタロウはきいた。「こんな字は見た事がありません」

「古代文字だ……」とバンブウジは苦しそうにいった。「ずっと昔、つくられた本だ。——読めるものはすくない」

いわれたページを開いた時、タロウは小さな叫びをあげた。そこには、タロウが見た事もないような、美しい色ずりの写真があった。うつっているのは、タロウたちと同じ〝小さい連中〟だった。だが……

「そこから順番にページをくってごらん」

とバンブウジがいった。——次のページには〝中くらいの連中〟がうつっていた。そして「旦那衆」とよばれる連中の写真も、次々にあらわれた。

「みんな——裸ですね」とタロウは顔がほてるのを感じながらいった。

「昔、私たちはみんなそうだった。——昔といってもそんな昔じゃない。私たちはみんな裸で……それにほとんど言葉もしゃべれなかった。わずかな言葉はあったらしいが、今のように、みんな同じ言葉をしゃべるようにはなっていなかった」

「じゃどうやって、同じ言葉をしゃべれるようになったんですか？」

「自然にそうなったのではない。そういう風にさせられたのだ……」

「誰にです？」タロウはきいた。「誰に——させられたんですか？」

「次のページを見てごらん……」

ページをめくったとたん、タロウは悲鳴に近い叫びをあげた。

「こいつです！」青白いツルツルの顔をさしてタロウは叫んだ。「こいつです！　ゆうべ先生の部屋から出てきたのは……こいつが——こいつらが……ぼくらに同じ言葉を教えたんですか？　こいつらは何ですか？　どこに住んでいるんです？」

「お待ち——」バンブウジは苦しそうにせきこんだ。「その前に……私たちは……自分たちの事を何とよんでいる？　みんなをひっくるめて、だ……」

「さあ——〝仲間〟とか……〝連中〟とか……」

「そう……それは、私たちのいい方だ。だが、私たちが……〝大きい連中〟〝黒い連中〟〝赤い連中〟それに〝中くらいの連中〟や〝小さい連中〟が、同じ言葉を持っていなかったころ……私たちはみんなひっくるめて……サルとよばれていた。〝ヒトニザル〟と——」

「サル……」タロウは呆然としてつぶやいた。「きいた事もありません。誰にそうよばれていたんです？」

「私たち全部を……同じ言葉がしゃべれるようにし、はなればなれで、裸でくらしていた連中を、もっとかしこくし、〝一つの世界の仲間〟をつくれるようにした連中によってだ。——連中の言葉で、私……〝大きい連中〟はゴリラ、〝黒い連中〟はチンパンジー、〝赤い連中〟はオランウータン、そして〝中くらいの連中〟はヒヒとよばれていた……」

「私たちは？」タロウはせきこんできいた。

「〝小さい連中〟は？」

「お前たちは……マカクザルの中の、ただ一種生きのこった仲間で……すんでいた場所の名前をとって、ニホンザルとよばれていた……」

「で、この連中は？」タロウはうす気味悪い、本のおくから見つめている顔——冷笑をうかべているような、傲慢なその顔から眼をそらせながらきいた。「この連中は、何とよばれていたんです？——これも、私たちの〝仲間〟だったんですか？」

「そう——ずっと昔に、私たちとわかれて進化し、知恵と残虐性でもって、かつてこの世界の一切の支配者にのし上ったグループだ。今の私たちの多くの〝仲間〟をほろぼし、私たちをもほろぼしかけ、私たちをも支配し、次いで私たちを改造して、共通の言葉を教え、知恵を高め…」

「そいつらは今、どこにいるんです？——何というんです？」

「かつて支配者だった彼らは……今はあの、廃墟になった街のいくつかに住んでいる。無気力になり……何か、私たちにもわからない、神秘なものをまもって……」バンブウジは、大きく、苦しげにあえいだ。「彼らの名は——私たちのうちのわずかなものが知っているが……私たちの呼び名で……ケナシザルという。連中自身の呼び名は……ヒト……だ」

バンブウジ——人為進化させられた新種の「進化型ゴリラ」の黒光りする顔は苦痛にゆがみ、大きくひらいた鼻孔はひくひくと痙攣した。すでに四十歳をこす、このゴリラの哲学者の頭部か

ら背へかけて、老境へはいったこの種の巨大オスの「シルヴァーバック」の特徴ある銀色にかわった体毛におおわれていた。だが、その頭部と顔面を、もし、かつてのケナシザルの学者がしらべてみたら、そこに原種の野生種ゴリラとはっきりちがった特徴を見出したろう。眼窩上窩隆は低くなり、前頭葉は大きく発達し、成熟から老年へかけてあらわれてくる、頭蓋のまん中をたてに走る、頑丈なヘルメットの飾りのような骨の隆起は、ずっと小さくなっていた。

ケナシザル！

そのかつて、地球上にあらわれた、最強、最獰猛の霊長類の一族の事について、老いたる哲学者ゴリラは、苦しい息の下から語りつづけた。——だが、いかに「人為進化」させられ、知能を開発された新種のゴリラであっても、バンブウジの理解には限界があり、まして「旦那衆」——類人猿より一段低い段階から人為進化させられた、小型のサル、ニホンザルの進化型でしかないタロウには、いかに天才型突然変異種であったにしても、理解を絶するところがあった。

かつて——数千万年前に、タロウやバンブウジの〝種〟と同じ根幹から進化しはじめた、この毛のない、ひょろ長い、霊長類の幼児形質を多分にのこした成長遅滞型、未熟児型の新種のサルは、やがて直立二足歩行から前肢の利用、道具の使用と進み、猛獣のように捕食性でもないのに他の小型動物を殺して食べはじめ、それと平行して、その知能を比類ない——まがまがしい段階にまで、発達させはじめた。その知能でもって、彼らは「自然の試練」をたえて生きのび、やがて「自然の制限」を突破してふえはじめ——食料の管理生産をはじめた時から、その数は爆発的に

ふえはじめて、もう自然の中の何ものも彼らをとどめる事ができないようになり出した。彼らはアンバランスに発達した知能のために、しょっ中いらいらし、次から次へと仲間に、周辺に対して改善をつづけ、増加する個体数の圧力からのがれようと、次から次へと奇妙なものを「発明」し、発明する事によってまたその数がふえ、また内部のストレスと周辺に対する改善を増大するという悪循環の段階へ、やがて突入していった。——地球上で、もう彼らにかなう存在はなかった。最大の哺乳類のクジラでも、牙をもった攻撃機械ライオンやトラでも、巨大なゾウでも、また微生物さえも彼らはあらゆる生物を殺す手段を手に入れ、あらゆる自然を彼らの支配下において行った。

個体数二十五億を突破した時、彼らは全地球上の生物を一瞬に破壊する手段を手にいれた。三十億の時、地球の外へとび出した。そしてなおふくれ行く人口により、とうとう彼ら自身の集団を彼ら自身でコントロールする事ができなくなってきた。——そして、そのころから、あらゆる地域で「環境破壊」が進行しはじめた。

その時までに、すでに何千種という生物が、彼らの発展につれて絶滅させられていた。自然は有限であり、ある種だけが、制限をこえて増加すると、その分だけ他の種の環境が侵され、食料が圧迫され、数がへらざるを得ない。自然はかなりの余裕をもっていたが、ケナシザルたちは、その余裕も食いつぶして行き、アメリカ野牛（バイソン）のように、組織的殺りくによって滅亡させられる事もすくなくなかった。——彼らはついに、地下から物質をほり出し、加工し、大気、土中、水中

に毒のある廃棄物をまきちらしてはためて行き、地球表面を「化学的」にかえはじめた。

もはや地球は、かつてのあるがままの地球ではなかった。それは「ケナシザルの星」ともいうべきものになってしまった。ケナシザルによって支配され、ケナシザルだけが君臨するようにつくりかえられた地球だった。多くの動物がその支配体制の拡大にともなって直接殺され、圧迫されて滅亡し、ケナシザルの世界に「寄生」するか、ケナシザルに「食われる」ために養われふやされるか、ケナシザルに「服従」したものしかのこらなかった。

こういう状況の中にも、少しはそのやり方を反省する連中——ほんの一つまみの連中がいた。彼らはケナシザルの世界の発展にともなって他の生物がほろんで行くのを憂い、まだあちこちにわずかにのこっていた「自然」と「野生種生物」に「保護」をくわえようとした。だが、自然と野生動物ののこっている所は、それまでケナシザルの世界にくりいれられていなかった、連中にとっての「最後のフロンティア」であり、もっともあらあらしい「建設」——つまり「破壊」と「人口増加」がそこに集中した。もはや、どう手をくわえても「もとの自然」は保護できない、という事を知った彼ら「保護論者」は、むしろもっとも「保護設備」のととのった「街」の中に生物をうつして保護するしかない、と思いはじめた。

多くの動植物が、密度の濃い「人工環境」に適応した。だが、一番むずかしいのは、ケナシザルにもっとも近い、したがって野生種の中でもっとも知能の高い、ヒトニザルの仲間だった。高い知能は「都市」のめちゃくちゃな過剰「情報刺戟」に敏感に反応し、檻の中のサルたちは、自

然の中にいた時のような「適度の刺戟」は得られず、「のぞまぬ刺戟」ばかりあたえられ、ストレスがたまり、一方では過食、過保護のため生体のバランスをくずされ、ノイローゼのために数がへって行った。——すでにそれまでに、毎年何十万頭というサルが、ケナシザルの実験用に殺され、またかなりの数が「食われ」ていたが、都市の動物園の檻の中でも保護しきれないとわかると、ケナシザルたちは、イヌやネコのように、サルを「ケナシザルの世界」に適応させるように改良するしかない、と感じはじめた。だが犬、猫より知能の高いサルは、その知能を高める事によって「適応」させるのが一番いいと……。

すでにケナシザル紀元一九七〇年代に、動物園のゴリラのノイローゼをなおすために、カラーテレビや、グラフ雑誌を見せる事がはじめられた。音楽や玩具もあたえられた。そして二十一世紀になって「遺伝工学」が実用化すると、ヒトニザルの知能発展型の「品種改良」が大々的に進められ、「進化型」のサルの知能指数は二百倍になり、体型は直立二足歩行型にあらためられ、音声言語がつかえるようになり、字を読み、考えるようになった。そして、その「進化」を達成し得た種類だけが「ケナシザル時代」に適応して生きのこった。

「それで？」タロウは肩をあえがせながらきいた。「それから、ケナシザルはどうなったんです？　いま、彼らは何をしているんです」

「彼らは——数がふえすぎて大量に殺しあいをはじめ……数が三分の一にへったあと、もうもとのような文明をきずく事ができず、のこったものは彼らのつくった世界の秩序と支配を、彼ら

がつくり出した〝神〟にまかせ、外の世界にほとんど関心をもたなくなり自分たちの内部にのめりこみながら、次第にほろんでいった……」バンブウジの声は、すでにとぎれとぎれだった。「今では、ほんのわずかの生きのこりが――廃墟になった街の中に、〝神〟をまもりながら住んでいる。だが、やがては彼らも死にたえ、……〝神〟だけが……」

「〝神〟って何です？――どんなものです？」

「わからない。――そればかりは、私たちの理解をこえたものだ。ケナシザルの中でも、もっともすぐれた連中が、長年かかってつくり上げたものだから――とにかくそれは、われわれの住んでいる地域をのぞいて破壊しつくされた〝母なる自然〟にかわって、この社会の秩序を維持し、見えない力で支配しているものだと思う……」

「それならその〝神〟が、こういった不公平をつくり出したのですか？」タロウは低い声でたずねた。「〝小さい連中〟は農場に……〝旦那衆〟は街に……〝小さい連中〟はぶたれ、しぼりとられ……」

「いや――もともと、ちがった場所で生きるよう〝自然〟によってつくられた私たちを、同じ一つの文明社会をつくるように、むりやり一緒にさせたところに、ケナシザルたちのまちがいがあったのだ。お前たちは、ニホンという小さな島で私たちはアフリカという大陸の奥の巨大なジャングルで、くらすようにつくられていた……」バンブウジは熱にうるんだ眼をあげて、いとしそうにタロウを見た。「かわいそうに――そのニホンザルの中でも、お前は突然変異といって…

…特別知能が高く、特別体が大きい……お前はふつうのニホンザルのもたないような疑問を抱いてしまい、お前たちの仲間が考えないような事を考えてしまった。もう、お前は仲間の所へかえっても満足して幸せにくらせまい。といって……検査の結果では、お前の知能は私たちよりかなり低い所に限界がある。――お前はときれない疑問を抱いてしまった。……お前たちの仲間からはみ出し、私たちの仲間にははいれない、中途半端な存在としてうまれついてしまったのだ。――かわいそうにな、これからどうやって生きて行くのだ？――私たち……哲学的な種としてのゴリラのように、ほろびて行く事も、またいい事だ、といった〝悟り〟も、お前にはひらけまい……かわいそうな――チビ……」

「先生！　バンブウジさん！」がくりと頭をおとしてしまった老ゴリラの、肩をゆさぶりながら、タロウは気ちがいのようになって叫んだ。「最後にもう一つだけ、教えてください。これだけ教えてください。私たちの仲間の〝役立たず〟たちは――いったいどこへ連れて行かれるのですか？　彼らにつれて行かれる〝遠い所〟って、いったいどんな所ですか？」

「それは私が教えてやろう……」不意に背後で声がした。――チンパンジーの秘書が、歯をむき出して笑っていた。「〝役たたず〟たちは屠殺所におくられて、食われるのさ。ステーキや、フライにされてな。――〝大きい連中〟は、野生のころから菜食主義者だったから食わないが、私たち〝黒い連中〟は、アフリカの草原にいるころから、お前たちのような〝小さい連中〟の仲間を、ちょいちょい殺して食べていた。――ケナシザルだって、進化しはじめた時、最初に道具を

つかって殺して食べ出したのは、〝中くらいの連中〟の祖先だったというぜ。その後もずっと、ケナシザルの中のある地方の連中は、同じ仲間のサルを食べていた。——バンブウジと同じ、ゴリラだって、昔、アフリカじゃケナシザルどもに大量に殺され、ステーキにされていたんだぜ」

「そんな——」タロウは怒りとショックに混乱しふるえながら叫んだ。「そんな事が、許されていいのか！——〝仲間〟が〝仲間〟を食べるなんて！」

「その〝仲間〟の中にも、いつも食う側にまわる奴と、食われる側にまわる奴の二種類あるのさ。知能が高く、体の大きい、力のつよい連中は、いつも食う側にまわるんだ……」秘書は残忍な笑いをうかべた。「ところで——お前はくだらん質問でバンブウジの最後の時間をつぶしてしまったな。彼にはとうとう私をよぶ時間もなかった。よんでいりゃ、この書類にサインし、お前も救われたろうに——だがサインがなけりゃ、かわいそうに、お前は〝中途半端なはみ出しもの〟として、〝役たたず〟の烙印をおされるのだ」

「何を！」タロウの中に怒りが爆発した。

「ぼくはただの〝役たたず〟じゃないぞ。食われてたまるか！」

「同じ事だよ。——うすのろで、みんなと同じように働けないやつも、へたに知恵があって、いろんな事を考えて、はみ出してしまって、おとなしくみんなと一緒にやれない奴も、どちらもこの世界の秩序にとっては〝役立たず〟さ。お前のおいぼれのおふくろも、もうじき体がきかなくなって、食われるんだ。——さあ、おとなしくこいよ。お前は、特別に私が食べてやるよ。あ

りがたく思え……」

タロウは怒りをこめて秘書に突進した。ひっかき、かみつき、秘書を押したおしてドアから逃げようとしたが、秘書がいつの間にかとりあげた鞭にうちのめされ、とうとうつかまってしまった。——だが、つかまったと思ったとたん、秘書は宙にうき上った。

「逃げなさい……」とバンブウジの執事は、秘書を巨大な腕でつり上げながらいった。「逃げて村へかえって、どこかへかくれるのだ。私は先生の考えを知っている」

「はなせ！　こんな事をしていいのか！」秘書はしめ上げられてぎゃあぎゃあわめいた。「畜生！　いくらそんな事したって、お前たち〝大きい連中〟はいずれ……」

タロウはドアの外へ走り出した。

だが彼は、村へはかえらなかった。——怒りに燃え、この世の〝秩序〟に対するやる方ない憤懣にかられ、逆上した彼は、廃墟の街から街をめぐり、ケナシザルども——この地上を荒すだけ荒し、何万種という生物をまきぞえにしてほろんでいった、驕慢で残忍なかつての支配者たちがつくったという〝神〟をさがしもとめた。タロウの、進化型ニホンザルにしてはずばぬけてすぐれてはいるが、しかし、単純で、逆上した頭の中では、かつてこの地上に君臨したケナシザルどもの支配の遺構であり、ケナシザルがほろんだあとも、なおこの地上を支配しつづけているという〝神〟が、この一切の不公平な「秩序」、〝小さい連中〟にあたえられた残酷な運命の原因だ、と一途に思いつめてしまっていた。〝神〟をやっつけてやるのだ。そうしたら、一切の不公平は

なくなる、と……。

もっとも巨大な廃墟の街で、とうとう後は、生きのこりの、ほんのわずかなケナシザルたちを見つけた。——青白くて、全身に毛のない、ツルツルの顔と頭をした、ぞっとするほど気持ちの悪い、けものとしては畸型の一種としか思えない彼らは、今は栄養補給器から栄養をとりながら、麻薬、麻薬的幻想を起させる気ちがいじみた電気刺戟、あるいは瞑想の中で、うつらうつらとしているだけだった。彼らの視線は、荒涼たる外部の世界の何ものもうつさず、ただひたすら内部の世界、内部の宇宙を見つめ、ただよっていた。

「〝神〟はどこだ！」追われ、飢え、狼のようにたけだけしくなったタロウは、連中にむかって叫んだ。「お前たちのつくった〝神〟はどこにいる！　おれはそいつをやっつけてやる」

ケナシザルたちは、石ころのような眼をものうくあげ、タロウのいっている事がわかった連中は、あるかなきかの冷笑をうかべた。だが、その視線の動きから何かを感づいたタロウは、廃墟の街の中心部へと走った。——中心部にそそりたつ巨大な窓のない摩天楼の中へ、どこからかふみこんだタロウは、手に鉄棒をもって、彼の理解を絶した、巨大な錯綜したパターンとむかいあっていた。それが〝神〟だという事は、彼には直感的にわかった。彼の中には、いま、途方もなく巨大で複雑なものとむかいあっている、という恐怖がまき起ってきた。だが、彼は勇気をふるい、それにむかって鉄棒をふりあげた。

「お前をやっつけてやるぞ！」タロウは歯をむいてわめいた。「ケナシザルどもの、支配体制

の幽霊を、やっつけてやるんだ！　貴様がいるかぎりおれたちの仲間は永遠に不幸なんだ」

鉄棒がふりおろされ、火花がちり、煙をあげてタロウはたおれた。

配電盤をこわされ、長らく手がふれられた事のないメインスイッチをこわされた巨大な、半永久的な耐久性をもつコンピューターは沈黙した。自己修復装置も今は働かず、わずかに緊急補助回路が働いていたが、とても今までの仕事をまかないきれず、まもなく焼ききれるだろう。

一見したところ、〝神〟が死んでも、何も起らなかった。——しかし、今、一つの地域全体、荒廃した惑星上で、たった数箇所生きのこっていた地域の一つが、ゆっくりと滅亡にむかっていた。地下と太陽熱からとられていたエネルギーの供給もやがてとまり、さまざまの教育機械も沈黙するだろう。一地域全体の「秩序」を、破壊された自然にかわってささえていた人工の〝神〟の死は、近い将来の進化したサル——いや、むりやり進化させられたサルたちの「社会」の滅亡を意味していた。あらゆるものの不足からくる混乱と闘争が、やがてまきおこるだろう。そして、そういった場合にどうしたら解決できるか、という「知恵」を、もうサルたちは、〝神〟から得る事ができないだろう。さまざまの種類のサルたちを、それぞれの役割りに応じて、「教育」するシステムは消滅し、彼らはやがて、「食料の管理生産」の維持もできなくなって行くだろう……。一方、彼らの社会の外には、もはや野生にかえった彼らを養うような食物は、どこにもはえていない。——それほどケナシザルたちは自然を荒廃させてしまっていた。

まっさきにそれを食べたケナシザルたちによって、むりやり知恵の木の実を食べさせられたサルたちは、もはやその木の実を食べつづけ、前代からうけついだ「人工環境」を維持しつづける事によってしか生きられなくなっていた。——だが、今その「知恵の木の実」の大もとの木が枯れたのだ。彼らの滅亡も、そう遠い日ではあるまい。

（「毛のある人人の物語」より）

怨霊の国

昭和47年5月30日　初版発行
昭和53年4月20日　9版発行

著　者　小松左京

発行者　角川春樹

発行所　株式会社 角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3　郵便番号102
電話（東京）(265)7111(大代表) 振替東京③-195208

暁印刷・宮田製本

©Printed in Japan

0093-872114-0946(1)

〈収録作品発表誌〉

霧が晴れた時	別冊小説新潮	昭和46年夏季特別号
保護鳥	小説新潮	昭和46年6月号
安置所の碁打ち	小説新潮	〃　11月号
怨霊の国	小説宝石	〃　5月号
写真の女	小説サンデー毎日	昭和44年6月号
女の手	小説現代	昭和44年6月号
失神時代	週刊新潮	昭和44年12月
大混線	書き下し	
笹の花	月刊エコノミスト	昭和46年4月
靴屋の小人	〃	〃　6月
かつがれ屋	〃	〃　8月
人の波	〃	〃　11月
幸福にも不幸にもならない手紙	〃	〃　1月号
知恵の木の実	問題小説	〃　5月号

闇の中の系図

半村　良

嘘つきの名人宏一が加入を勧められた秘密組織、それは天平の昔、正倉院の秘宝と朝廷の権威を守った嘘部一族の末裔たちを会員とする、〈黒虹会〉と名乗るグループだった。嘘の研修ののち、宏一たちに与えられた使命とは？　鬼才の長編力作。

四六判・二六六頁

闇の中の黄金

半村　良

（近刊）

邪馬台国を取材した津野田は、隠された歴史の黒い接点に気づく。黄金境ジパングは実在したか？　日中開戦の地マルコ・ポーロ・ブリッジ（蘆溝橋）の秘密…。邪馬台の謎と国際金市場が生み出す黄金の夢を追って暗躍する。「嘘部」シリーズ第二弾。

四六判・二八二頁

夢の底から来た男

半村　良

得体の知れぬ恐怖の夢！　その夢に出てくる男の手は常に血にまみれていた。家庭を愛する平凡なサラリーマンを襲った夢の正体は？　そして今夜、あなたも同じ夢に魘されるかも知れない…。気鋭の直木賞作家が贈るサスペンス・スリラー五編。

四六判・三〇〇頁

都市の仮面

半村　良

うだつの上がらぬ営業マンが突如、一流商社に引き抜かれた。大金と美女にかしずかれ、ただ遊ぶのが仕事という優雅な生活。彼は遊び放題に遊んだが……。ひょんなことから、つかのまに一生を使い果してしまう男を描いた傑作。他五編。

四六判・二八四頁

飢餓列島

福島正実・眉村　卓

飢餓パニックが列島を襲う。食糧自給のできない日本、そこへ決定的な寒期が訪れたら、日本人口の約半数、五千万人は確実に餓死――と、コンピューターは告げた。その時、あなたは生き残れるか？　本邦初の共同執筆による近未来小説の決定版。

四六判・三一八頁

人間の証明

第三回角川小説賞受賞

森村誠一

ホテル最上階行きエレベーターの扉が開く。と、胸にナイフを突刺され、西条八十の詩集を携えた若い黒人の死体が…。非情都市ニューヨークから山峡の温泉宿へ、事件の謎は深まる。十年の作家生活の成果を存分に発揮した著者の代表作推理長編。

四六判・三七八頁

青春の証明

森村誠一

デート中、暴漢に襲われた笠岡は、危機を救ってくれた警官を見殺しにした。「卑怯者」と呼ばれ、恋人に去られた彼は、一生の重荷を負って生きてゆく。失った青春を償うため、孤独な捜査に賭ける老刑事の執念を通して描く著者会心の推理巨篇。

四六判・三六六頁

野性の証明

森村誠一

東北の寒村で起きた戦慄すべき大量虐殺事件！　容疑者として追いつめられた男が、封じ込んでいた野性を爆発させて証明しようとしたものは何か？　作者自ら「魂に斧を打ち込んだような手応えを感じた」と語る意欲作。「証明シリーズ」完結篇。

四六判・四一四頁

恐ろしき四月馬鹿（エイプリル・フール）

横溝正史

本格推理小説一筋に五十余年、今ここに文庫二千万部突破の金字塔を打ちたて不死鳥のごとく蘇った横溝文学の原点を探る。処女作「恐ろしき四月馬鹿（エイプリル・フール）」のほか、未収録作品多数を含む珠玉の二八篇を収録。おどろおどろしき怪奇ロマンの傑作短篇集。

四六判・三四四頁

横溝正史読本

小林信彦・編

名探偵金田一耕助のモデル、主要作品のトリックの着想など、執筆の舞台裏を語る。さらに「新青年」編集長時代の思い出、乱歩・クリスティ・カーらの作品論、〈対談四部作〉、新発掘エッセイと未発表の日記等、巨匠の全貌と秘密を初めて明かす書。

四六判・二七四頁

オイディプスの刃（やいば）

赤江　瀑

第一回角川小説賞受賞

四六判・二六〇頁

惨劇は明るい夏の午後に起った…。赤いハンモックに睡む刀研師の若い肉体に振下ろされた刀。その刃で胸を突いた母と父の割腹死。母を慕い、妖刀備中次吉とラベンダーの芳潤な香りに魅かれて運命を狂わす三人の兄弟。妖美華麗なロマンの世界！

美神たちの黄泉（よみ）

赤江　瀑

四六判・二六八頁

男性ヌードモデル健裕の胸に、七年前の夏の記憶が甦った。―大学演劇の地方公演に訪れた山奥の村で、朽ちかけた芝居小屋の花道のセリに残された血痕の謎と、熱く灼けつくような男の視線…。美神を求める肉体の妖しい陥穽を描く異才の秀作集。

金環食（きんかんしょく）の影飾り

赤江　瀑

四六判・二八四頁

母の愛人であった伯父と関係し、妹の男友達を奪って京都へ出奔した姉姚子。西陣でのその自殺と、遺品の一つであった脚本「大内御所花闇菱」の秘密。妹曙子の胸に姉への深い哀惜と疑惑が生まれた……。古典と現代ロマンを見事に結合した長編。

友よ、また逢おう

―ビリー・ザ・キッドの伝説―

片岡義男

四六判・二四二頁

十六歳のとき、ビリーは初めて人を殺した。その日から、荒野をさすらう彼の孤独な旅がはじまる。二十一歳でその短く激しかった人生を終えたアウト・ローの傷だらけの青春と人間像を、アメリカ西部の大自然の中に描破した俊英初の長編問題作。

スローなブギにしてくれ

片岡義男

第二回野性時代新人文学賞受賞

四六判・二四七頁

タイヤが軋む。凄じい爆音。ハイウェイの両側の風景がふっ飛んでゆく。「ほっといてくれよ。俺は俺はちゃんとやりたいんだ！」ゴローと、小猫に奇妙な優しさを示す少女の出会い。アウトサイダーの若者の一群をみつめる新しい感性派の傑作集。

冬の花火

渡辺淳一

四六判・三一〇頁

北国の野に街に、死の迫る癌病棟に、短く激しい生命の火を燃やした、夭折の女流歌人の華麗な愛の遍歴と薄幸の生涯。戦後歌壇に突如彗星のように登場し、ひときわ妖しく鮮烈な光芒を曳いて消えた「乳房喪失」の歌人・中城ふみ子の伝記的小説。

母胎流転（ぼたいるてん）

渡辺淳一

四六判・二二六頁

廃鉱跡の雑草の中に咲いた赤いコスモスを見て、有津は思いだした…。大手術の血の海から奇跡的に甦った凄じい生への執着力と、女の性の哀しさ恐ろしさを描破した表題作、他三編。気鋭の作家が冷徹な眼で人間の生と死、男女の業を抉った作品集。

恐怖はゆるやかに

渡辺淳一

四六判・二四八頁

日常生活の底にひそむ悲劇を推理的手法で抉り、現代社会のテーマに挑戦したサスペンスにみちた傑作集。交通事故によって無残に砕かれたマイホーム一家の夢を描いた表題作、学閥の実態を暴いた「閥の壁」、領土問題の黒い霧を衝く「北方領海」。

石ころのうた

三浦綾子

四六判・三二〇頁

国家が軍国主義に染まり戦争という大きな歴史の波にもまれている時、女学校を卒業し、教師となった平凡な少女は、悩み、模索し、懸命に生き、そして挫折する…。人の生きざまを描いて一流の著者が、多感な青春期をふり返って綴る自伝的小説。

あさっての風

―あなたと共に考える人生論―

三浦綾子

四六判・二九二頁

自らの愛と信仰に根ざした作品で、若い人々の間に共感を呼び続ける著者が、新聞や雑誌に発表したエッセイを一冊に収録。「信と望みと愛と」「美しい結婚」他数章の文章は、若いかけがえのない日々をいかに生きるかを読者とともに考える人生論。

城のなかの人

星　新一

四六判・二七二頁

関白教育の対象として、短い生涯を城中に過ごした豊臣秀頼は叫ぶ。「大坂城が愛してくれたのは、わたしだけだ。あの城はわたしだ。滅びゆく名城の中で、人々の旗印として、人形のように生きた秀頼の若い人生を描く表題作等時代小説四編を収録。

明日の明日の夢の果て

小松左京

四六判・二六八頁

誰もいない林の中で、ひとりの老人が息をひきとろうとしていた。それが、老人にとってたった一つ残された「夢」。明日の良い社会を信じて、見果てぬ夢を追い続けた人間を待っていたのは？　笑いとユーモアの中に現代を告発するSF傑作集。

怨霊（おんりょう）の国

小松左京

四六判・三三四頁

ポルターガイスト（騒霊）にとりつかれ超能力を発揮する美しい女患者に魅かれた精神科医は、「あの世」と「この世」の区別を失い、女を助けるために殺人を犯す。そして彼もまた「この世」を去るが……。SFタッチの新しい怪奇小説集。

農協月へ行く

筒井康隆

四六判・二九八頁

あつかましいバイタリティで外国語の辞書にも載った〝ノーキョーさん〟が月へ行く。無重力の宇宙船の中でドンチャン騒ぎ。無人のはずの月面で好奇心旺盛な彼らが不思議な光景を目撃、そのニュースが伝わるや地球上は大混乱に……。他七編。

タイムスリップ大戦争

豊田有恒

四六判・二六六頁

震源地不明の不思議な地震が日本列島を襲った途端、現代ニッポンは太平洋戦争のまっただ中に飛び込んだ。ミサイルやジェット機を装備した日本軍の出現に、世界中が大混乱…。奇抜なアイデアと痛烈な風刺で描く、豊田有恒の痛快SF長編。